旺文社文庫

三四郎

（他）落第

夏目漱石著

に連載。完結後、南画風の水彩画に熱中した。
（大正三）四七歳。一月、『行人』を大倉書店から刊行。四月から八月まで、「こころ」を「朝日新聞」に連載した。九月中旬、四度目の胃潰瘍のため約一か月病臥。十月、『こころ』を岩波書店から刊行。一一月二五日、学習院で「私の個人主義」と題して講演した。この年から翌年にかけて、良寛の書に傾倒した。
（大正四）四八歳。一月から二月まで、「硝子戸の中」を「朝日新聞」に連載。三月、京都に旅行したが、胃病が悪化し寝込んだ。六月から九月まで、「道草」を「朝日新聞」に連載。一〇月、『道草』を岩波書店から刊行。一二月、林原耕三の紹介で、芥川龍之介、久米正雄が門下生になった。
六（大正五）四九歳。一月一八日から二月一六日まで、リューマチ療養のため、湯河原の天野屋に転地。四月、糖尿病と診断され、約三か月間、真鍋嘉一郎の治療をうけた。五月中旬、胃のぐあいが悪く寝込んだ。同二六日から「明暗」を「朝日新聞」に連載。かたわら、書画をかき、漢詩を作った。一一月二二日、胃潰瘍の病状が悪化。二八日、大内出血。一二月二日、再度の大内出血で絶対安静、面会謝絶となった。九日、午後六時四五分、死去。一〇日、東京帝国大学医科大学で、長与又郎執刀のもとに解剖された。一二日、青山斎場で葬儀。導師は釈宗演。戒名は文献院古道漱石居士。二八日、雑司ケ谷墓地に埋葬された。「明暗」は一四日まで連載され、未完に終わったが、翌年一月、岩波書店から漱石遺著として刊行された。

の詩進出

一九一四　第一次世界大戦おこる、日本ドイツに宣戦布告　「道程」高村光太郎　「三太郎の日記」阿部次郎　人格主義・教養主義唱道さる

一九一五　中国に対し二一カ条要求　株式暴騰・戦争景気はじまる　「山椒大夫」森鷗外　「その妹」武者小路実篤　「宣言」有島武郎　情話文学流行

一九一六　タゴール来朝　「渋江抽斎」「高瀬舟」「寒山拾得」森鷗外　「鼻」「芋粥」芥川龍之介　「善心悪心」里見弴　「腕くらべ」永井荷風　「貧しき人々の群」宮本百合子　「出家とその弟子」倉田百三　歴史小説流行　芥川ら、新現実主義文学出現　文学に宗教的傾向現われる　上田敏死去

旺文社文庫

三　四　郎

（他）落　第

夏目漱石著

旺文社

目次

挿絵 賀茂牛之

原文は新かなづかいに改めたほか、原文の表現をそこなわない範囲で現代表記法にもとづいて漢字を削減した。
また、難解な語句や事項には、小活字で傍注を加えた。

（編集部）

三四郎

一

うとうととして眼がさめると女はいつの間にか、隣の爺さんと話を始めている。この爺さんはたしかに前の前の駅から乗った田舎者である。発車間ぎわに頓狂な声を出して、駆け込んで来て、いきなり肌を抜いだと思ったら背中にお灸の痕がいっぱいあったので、三四郎の記憶に残っている。爺さんが汗をふいて、肌を入れて、女の隣に腰をかけたまでよく注意して見ていたくらいである。

女とは京都からの相乗りである。乗った時から三四郎の眼についた。第一色が黒い。三四郎は九州から山陽線に移って、だんだん京大阪へ近づいてくるうちに、女の色が次第に白くなるのでいつの間にか故郷を遠のくような憐れを感じていた。それでこの女が車室にはいって来た時は、なんとなく異性の味方を得た心持ちがした。この女の色は実際九州色であった。

三輪田のお光さんと同じ色である。国を立つ間ぎわまでは、お光さんは、うるさい女であった。そばを離れるのが大いにありがたかった。けれども、こうしてみると、お光さんのようなのも決して悪くはない。

ただ顔立ちから言うと、この女のほうがよほど上等である。口に締りがある。眼がはっきりしている。額がお光さんのようにだだっ広くない。なんとなくいい心持ちにでき上がっている。それで三四郎は五分に一度ぐらいは眼を上げて女のほうを見ていた。時々は女と自分の眼が行きあたるこ

ともあった。爺さんが女の隣へ腰をかけた時などは、もっとも注意して、できるだけ長いあいだ、女の様子を見ていた。その時女はにこりと笑って、さあおかけと言って爺さんに席を譲っていた。それからしばらくして、三四郎は眠くなって寝てしまったのである。

その寝ているあいだに女と爺さんは懇意になって話を始めたものとみえる。眼をあけた三四郎は黙って二人の話を聞いていた。女はこんなことを言う。――

小供の玩具はやっぱり広島より京都のほうが安くっていいものがある。京都でちょっと用があって下りたついでに、蛸薬師(1)のそばで玩具を買って来た。久しぶりで国へ帰って小供にあうのはうれしい。しかし夫の仕送りがとぎれて、しかたなしに親の里へ帰るのだから心配だ。夫は呉(2)にいてながらく海軍の職工をしていたが戦争中は旅順(3)のほうに行っていた。戦争がすんでからいったん帰って来た。間もなくあっちのほうが金が儲かると言って、また大連(4)へ出稼ぎに行った。始めのうちは音信もあり、月々のものも几帳面と送って来たからよかったが、この半歳ばかり前から手紙も金もまるで来なくなってしまった。不実な性質ではないから、大丈夫だけれども、いつまでも遊んで食べているわけには行かないので、安否のわかるまではしかたがないから、里へ帰って待っているつもりだ。

爺さんは蛸薬師も知らず、玩具にも興味がないと見えて、始めのうちはただはいはいと返事だけ

(1) 京都の新京極にある薬師如来を祭った堂。(2) 広島県西南部の都市。もと、軍港があった。(3) 中国の遼東半島南端にある港市。日露戦争で日本の軍港となった。(4) 遼東半島先端の南岸にある港。現在は旅大市に含まれる。日露戦争後、清から租借し、日本の統治下にあった。

旅の女
三四郎

していたが、旅順以後急に同情を催して、それは大いに気の毒だと言い出した。自分の子も戦争中兵隊にとられて、とうとう彼地で死んでしまった。いったい戦争はなんのためにするものだかわからない。あとで景気でもよくなればだが、大事な子は殺される、物価(1)は高くなる。こんな馬鹿げたものはない。世のいい時分に出稼ぎなどというものはなかった。みんな戦争のおかげだ。なにしろ信心が大切だ。生きて働いているにちがいない。もう少し待っていればきっと帰って来る。——爺さんはこんなことを言って、しきりに女を慰めていた。やがて汽車が止まったら、では大事にと、女に挨拶をして元気よく出て行った。

爺さんに続いて下りたものが四人ほどあったが、入れかわって、乗ったのはたった一人しかない。もとから込み合った客車でもなかったのが、急に淋しくなった。日の暮れたせいかもしれない。駅夫が屋根をどしどし踏んで、上から灯のついた洋燈を挿し込んでゆく。三四郎は思い出したように前の停車場で買った弁当を食い出した。

車が動き出して二分もたったろうと思うころ例の女はすうと立って三四郎の横を通り越して車室の外へ出て行った。この時女の帯の色がはじめて三四郎の眼にはいった。三四郎は鮎の煮浸し(2)の頭をくわえたまま女の後姿を見送っていた。便所に行ったんだなと思いながらしきりに食っている。

女はやがて帰って来た。今度は正面が見えた。三四郎の弁当はもう仕舞掛(3)である。下を向いて一生懸命に箸を突ッ込んで二口三口頬張ったが、女は、どうもまだ元の席へ帰らないらしい。もしやと思って、ひょいと眼をあげて見るとやっぱり正面に立っていた。しかし三四郎が眼をあげると同

(1) いろいろの品。転じて、物価。 (2) 焼いてから、醤油・味醂で柔らかく煮たもの。 (3) 終わりに近いこと。

時に女は動き出した。ただ三四郎の横を通って、自分の座へ帰るべきところを、すぐと前へ来て、からだを横へ向けて、窓から首を出して、静かに外をながめ出した。風が強くあたって、鬢(びん)がふわふわするところが三四郎の眼にはいった。この時三四郎はからになった弁当の折を力いっぱいに窓からほうり出した。女の窓と三四郎の窓は一軒おきの隣であった。風に逆らって投げた折の蓋(ふた)が白く舞いもどったように見えた時、三四郎はとんだことをしたのかと気がついて、ふと女の顔を見た。顔はあいにく列車の外に出ていた。けれども女は静かに首を引っ込めて更紗(さらさ)の手帛(ハンケチ)で顔のところを丁寧(ていねい)にふき始めた。三四郎はともかくもあやまるほうが安全だと考えた。

「ごめんなさい」と言った。

女は「いいえ」と答えた。まだ顔をふいている。三四郎はしかたなしに黙ってしまった。女も黙ってしまった。そうしてまた首を窓から出した。三、四人の乗客(じょうかく)は暗い洋燈(ランプ)の下で、みんな寝ぼけた顔をしている。口をきいているものはだれもない。汽車だけがすさまじい音をたてて行く。三四郎は眼をつぶった。

しばらくすると「名古屋はもうじきでしょうか」と言う女の声がした。見るといつの間(ま)にか向き直って、及(およ)び腰(ごし)[1]になって、顔を三四郎のそばまで持って来ている。三四郎は驚いた。

「そうですね」と言ったが、はじめて東京へ行くんだからいっこう要領を得ない。

「このぶんでは遅れますでしょうか」

「遅れるでしょう」

(1) 中腰になって、体をかがめること。

「あんたも名古屋へお下りで……」
「はあ、下ります」
この汽車は名古屋どまりであった。会話はすこぶる平凡であった。ただ女が三四郎の筋向こうに腰をかけたばかりである。それで、しばらくのあいだはまた汽車の音だけになってしまう。
次の駅で汽車がとまった時、女はようやく三四郎に名古屋へ着いたら迷惑でも宿屋へ案内してくれと言いだした。一人では気味が悪いからと言って、しきりに頼む。三四郎ももっともだと思った。けれども、そう快く引き受ける気にもならなかった。なにしろ知らない女なんだから、すこぶる躊躇したにはしたが、だんぜん断わる勇気も出なかったので、まあいいかげんな生返事をしていた。そのうち汽車は名古屋へ着いた。
大きな行李は新橋まで預けてあるから心配はない。三四郎は手ごろなズックの革鞄と傘だけ持って改札場を出た。頭には高等学校の夏帽[1]をかぶっている。しかし卒業したしるしに徽章だけはもぎ取ってしまった。昼間見るとそこだけ色が新しい。うしろから女がついて来る。三四郎はこの帽子に対して少々きまりが悪かった。けれどもついて来るのだからしかたがない。女のほうでは、この帽子をむろんただのきたない帽子と思っている。
九時半に着くべき汽車が四十分ほど遅れたのだから、もう十時はまわっている。けれども暑い時分だから町はまだ宵の口のようににぎやかだ。宿屋も眼の前に二、三軒ある。ただ三四郎にはちと立派すぎるように思われた。そこで電気燈のついている三階作りの前をすまして通り越して、ぶら

(1) 熊本の第五高等学校の白いカバーをつけた学帽。

ぶら歩いて行った。むろん不案内の土地だからどこへ出るかわからない。ただ暗いほうへ行った。女はなんとも言わずについて来る。すると比較的淋しい横町の角から二軒目に御宿という看板が見えた。これは三四郎にも女にも相応なきたない看板であった。三四郎はちょっと振り返って、一口女にどうですと相談したが、女は結構だというんで、思いきってずっとはいった。上がり口で二人連れではないと断わるはずのところを、いらっしゃい、――どうぞお上がり――御案内――梅の四番などとのべつにしゃべられたので、やむをえず無言のまま二人とも梅の四番へ通されてしまった。

下女が茶を持ってくるあいだ二人はぼんやり向かい合ってすわっていた。下女が茶を持って来て、お風呂をと言った時は、もうこの婦人は自分の連れではないと断わるだけの勇気が出なかった。そこで手拭をぶら下げて、お先へと挨拶をして、風呂場へ出て行った。風呂場は廊下の突き当たりで便所の隣にあった。薄暗くって、だいぶ不潔のようである。三四郎は着物を脱いで、風呂桶の中へ飛び込んで、少し考えた。こいつは厄介だとじゃぶじゃぶやっていると、廊下に足音がする。だれか便所へはいった様子である。やがて出て来た。手を洗う。それがすんだら、ぎいと風呂場の戸を半分あけた。例の女が入口から、「ちいと流しましょうか」と聞いた。三四郎は大きな声で、「いえたくさんです」と断わった。しかし女は出て行かない。かえってはいって来た。そうして帯を解き出した。三四郎といっしょに湯を使う気とみえる。別に恥ずかしい様子も見えない。三四郎はたちまち湯槽を飛び出した。そこそこにからだをふいて座敷へ帰って、座蒲団の上にすわって、少なからず驚いていると、下女が宿帳を持って来た。

三四郎は宿帳を取り上げて、福岡県京都郡真崎村小川三四郎二十三年学生と正直に書いたが、女

のところへいってまったく困ってしまった。湯から出るまで待っていればよかったと思ったが、しかたがない。下女がちゃんと控えている。やむをえず同県同郡同村同姓花(はな)二十三年とでたらめを書いて渡した。そうしてしきりに団扇(うちわ)を使っていた。

　やがて女は帰って来た。「どうも、失礼いたしました」と言っている。三四郎は「いいや」と答えた。

　三四郎は革鞄(かばん)の中から帳面を取り出して日記をつけ出した。書くこともなにもない。女がいなければ書くことがたくさんあるように思われた。すると女は「ちょいと出て参ります」と言って部屋(へや)を出て行った。三四郎はますます日記が書けなくなった。どこへ行ったんだろうと考え出した。

　そこへ下女が床(とこ)をのべに来る。広い蒲団(ふとん)を一枚しか持って来ないから、床は二つ敷かなくてはいけないと言うと、部屋が狭いとか、蚊帳(かや)が狭いとか言ってらちがあかない。めんどうがるようにもみえる。しまいにはただいま番頭がちょっと出ましたから、帰ったら聞いて持って参りましょうと言って、頑固(がんこ)に一枚の蒲団を蚊帳いっぱいに敷いて出て行った。

　それから、しばらくすると女が帰って来た。どうもおそくなりましてと言う。蚊帳のかげでなにかしているうちに、がらんがらんという音がした。小供(こども)にみやげの玩具(おもちゃ)が鳴ったにちがいない。女はやがて風呂敷包みを元のとおりに結んだとみえる。蚊帳の向こうで「お先へ」と言う声がした。三四郎はただ「はあ」と答えたままで、敷居に尻(しり)を乗せて、団扇を使っていた。いっそこのままで夜を明かしてしまおうかとも思った。けれども蚊(か)がぶんぶん来る。外ではとてもしのぎきれない。三四郎はついと立って、革鞄(かばん)の中から、キャラコの襯衣(シャツ)と洋袴下(ズボンした)を出して、それを素肌(すはだ)へ着けて、

その上から紺の兵児帯を締めた。それから西洋手拭を二筋持ったまま蚊帳の中へはいった。女は蒲団の向こうのすみでまだ団扇を動かしている。

「失礼ですが、私は癇性(1)で他人の蒲団に寝るのが嫌だから……少し蚤除けのくふうをやるからごめんなさい」

三四郎はこんなことを言って、あらかじめ、敷いてある敷布の余っている端を女の寝ているほうへ向けてぐるぐる捲き出した。そうして蒲団のまん中に白い長い仕切りをこしらえた。女は向こうへ寝返りを打った。三四郎は西洋手拭を広げて、これを自分の領分に二枚続きに長く敷いて、その上に細長く寝た。その晩は三四郎の手も足もこの幅の狭い西洋手拭の外には一寸も出なかった。女とは一言も口をきかなかった。女も壁を向いたままじっとして動かなかった。

夜はようよう明けた。顔を洗って膳に向かった時、女はにこりと笑って、「ゆうべは蚤は出ませんでしたか」と聞いた。三四郎は「ええ、ありがとう、おかげさまで」というようなことをまじめに答えながら、下を向いて、お猪口(2)の葡萄豆(3)をしきりに突ッつき出した。

勘定をして宿を出て、停車場へ着いた時、女ははじめて関西線で四日市のほうへ行くのだということを三四郎に話した。三四郎の汽車は間もなく来た。時間の都合で女は少し待ち合わせることとなった。改札場の際まで送って来た女は、

「いろいろご厄介になりまして、……ではごきげんよう」

と丁寧にお辞儀をした。三四郎は革鞄と傘を片手に持ったまま、あいた手で例の古帽子を取って、

(1) 激しやすい性質。　(2) ここでは、つまみを入れる小さい皿。　(3) えんどう豆。

ただ一言、

「さよなら」と言った。女はその顔をじっとながめていた、が、やがて落ちついた調子で、

「あなたはよっぽど度胸のない方ですね」と言って、にやりと笑った。三四郎はプラット・フォームの上へはじき出されたような心持ちがした。車の中へはいったら両方の耳がいっそうほてり出した。しばらくはじっと小さくなっていた。やがて車掌の鳴らす口笛が長い列車の果てから果てまで響き渡った。列車は動き出す。三四郎はそっと窓から首を出した。女はとくの昔にどこかへ行ってしまった。大きな時計ばかりが眼についた。三四郎はまたそっと自分の席に帰った。乗合はだいぶいる。けれども三四郎の挙動に注意するようなものは一人もない。ただ筋向こうにすわった男が、自分の席に帰る三四郎をちょっと見た。

三四郎はこの男に見られた時、なんとなくきまりが悪かった。本でも読んで気をまぎらかそうと思って、革鞄をあけてみると、ゆうべの西洋手拭が、上のところにぎっしり詰まっている。そいつをわきへかき寄せて、底のほうから、手にさわったやつをなんでもかまわず引き出すと、読んでもわからないベーコン(1)の論文集が出た。ベーコンには気の毒なくらい薄っぺらな仮綴(2)である。元来汽車の中で読む了見もないものを、大きな行李に入れ損なったから、片づけるついでに提革鞄の底へ、ほかの二、三冊といっしょにほうり込んでおいたのが、運悪く当選したのである。三四郎はベーコンの二十三頁を開いた。ほかの本でも読めそうにはない。ましてベーコンなどはむろん読む

(1) 一五六一〜一六二六、イギリスの哲学者・政治家。科学的方法と経験論をとなえ、デカルトとともに近代哲学の祖。
(2) 表紙に厚紙をつけない、簡単な製本。

気にならない。けれども三四郎はうやうやしく二十三頁を開いて、万遍なく頁全体を見回していた。三四郎は二十三頁の前で一応ゆうべのおさらいをする気である。(1)

元来あの女はなんだろう。あんな女が世の中にいるものだろうか。女というものは、ああ落ちついて平気でいられるものだろうか。無教育なのだろうか、大胆なのだろうか。それとも無邪気なのだろうか。要するにいけるところまでいってみなかったから、見当がつかない。思いきってもう少しいってみるとよかった。けれども恐ろしい。別れぎわにあなたは度胸のない方だと言われた時には、びっくりした。二十三年の弱点が一度に露見したような心持ちであった。親でもああうまく言いあてるものではない。……

三四郎はここまで来て、さらにしょげてしまった。どこの馬の骨(2)だかわからないものに、頭のあがらないくらいどやされたような気がした。ベーコンの二十三頁に対してもはなはだ申しわけがないくらいに感じた。

どうも、ああ狼狽しちゃだめだ。学問も大学生もあったものじゃない。はなはだ人格に関係してくる。もう少しはしようがあったろう。けれども相手がいつでもああ出るとすると、教育を受けた自分には、あれよりほかに受けようがないとも思われる。するとむやみに女に近づいてはならないというわけになる。なんだか意気地がない。非常に窮屈だ。まるで不具にでも生まれたようなものである。けれども……

(1) ゆうべのことをもう一度じっくり考えてみるつもりである。　(2) 素性の知れない、つまらない人間をののしって言う語。

三四郎は急に気をかえて、別の世界のことを思い出した。——これから東京に行く。大学にはいる。有名な学者に接触する。趣味品性のそなわった学生と交際する。図書館で研究をする。著作をやる。世間で喝采する。母がうれしがる。というような未来をだらしなく考えて、大いに元気を回復してみると、別に二十三頁の中に顔を埋めている必要がなくなった。そこでひょいと頭をあげた。すると筋向こうにいたさっきの男がまた三四郎のほうを見ていた。今度は三四郎のほうでもこの男を見返した。

髭を濃くはやしている。面長の瘠せぎすの、どことなく神主じみた男であった。ただ鼻筋がまっすぐに通っているところだけが西洋らしい。学校教育を受けつつある三四郎は、こんな男を見るときっと教師にしてしまう。男は白地の絣[1]の下に、丁重に白い襦袢を重ねて、紺足袋をはいていた。この服装から推して、三四郎は先方を中学校の教師と鑑定した。大きな未来を控えている自分から見ると、なんだかくだらなく感ぜられる。男はもう四十だろう。これより先もう発展しそうにもない。

男はしきりに煙草をふかしている。長い煙を鼻の穴から吹き出して、腕組みをしたところは大変悠長に見える。そうかと思うとむやみに便所かなにかに立つ。立つ時にうんと伸びをすることがある。さも退屈そうである。隣に乗り合わせた人が、新聞の読みがら[2]をそばに置くのに借りてみる気も出さない。三四郎はおのずから妙になって、ベーコンの論文集を伏せてしまった。ほかの小説でも出して、本気に読んでみようとも考えたがめんどうだから、やめにした。それよりは前にいる人

（1） かすったようにところどころに小さな模様のある織物。　（2） 読み終わった新聞。

の新聞を借りたくなった。あいにく前の人はぐうぐう寝ている。三四郎は手を伸ばして新聞に手をかけながら、わざと「おあきですか」と髭のある男に聞いた。男は平気な顔で「あいてるでしょう。お読みなさい」と言った。新聞を手に取った三四郎のほうはかえって平気でなかった。

あけてみると新聞には別に見るほどのことも載っていない。一、二分で通読してしまった。律義にたたんでもとの場所へ返しながら、ちょっと会釈すると、向こうでも軽く挨拶をして、

「君は高等学校の生徒ですか」と聞いた。

三四郎は、かぶっている古帽子の徽章のあとが、この男の眼に映ったのをうれしく感じた。

「ええ」と答えた。

「東京の？」と聞き返した時、はじめて、

「いえ、熊本です。……しかし……」と言ったなり黙ってしまった。大学生だと言いたかったけれども、言うほどの必要がないからと思って遠慮した。相手も「はあ、そう」と言ったなり煙草をふかしている。なぜ熊本の生徒が今ごろ東京へ行くんだともなんとも聞いてくれない。熊本の生徒には興味がないらしい。この時三四郎の前に寝ていた男が「うん、なるほど」と言った。それでいてたしかに寝ている。ひとりごとでもなんでもない。髭のある人は三四郎を見てにやにやと笑った。三四郎はそれを機会に、

「あなたはどちらへ」と聞いた。

「東京」とゆっくり言ったぎりである。なんだか中学校の先生らしくなくなってきた。けれども三等へ乗っているくらいだからたいしたものでないことは明らかである。三四郎はそれで談話を切

りあげた。髭のある男は腕組みをしたまま、ときどき下駄の前歯で、拍子を取って、床を鳴らしたりしている。よほど退屈にみえる。しかしこの男の退屈は話したがらない退屈である。

汽車が豊橋へ着いた時、寝ていた男がむっくり起きて眼をこすりながら下りて行った。よくあんなに都合よく眼をさますことができるものだと思った。ことによると寝ぼけて停車場を間違えたんだろうと気づかいながら、窓からながめていると、決してそうでない。無事に改札場を通過して、正気の人間のように出て行った。三四郎は安心して席を向こう側へ移した。これで髭のある人と隣り合わせになった。髭のある人は入れかわって、窓から首を出して、水蜜桃を買っている。

やがて二人のあいだに果物を置いて、

「食べませんか」と言った。

三四郎は礼を言って、一つ食べた。髭のある人は好きとみえて、むやみに食べた。三四郎にもっと食べろと言う。三四郎はまた一つ食べた。二人が水蜜桃を食べているうちにだいぶ親密になっていろいろな話を始めた。

その男の説によると、桃は果物のうちでいちばん仙人めいている。なんだか馬鹿みたような味がする。第一核子の恰好が無器用だ。かつ穴だらけで大変おもしろくできあがっていると言う。三四郎ははじめて聞く説だが、ずいぶんつまらないことを言う人だと思った。

次にその男がこんなことを言い出した。子規(1)は果物が大変好きだった。かついくらでも食える男だった。ある時大きな樽柿を十六食ったことがある。それでなんともなかった。自分などはとても

(1) 正岡子規。一八六七〜一九〇二、俳人・歌人。漱石の親友。

子規の真似はできない。――三四郎は笑って聞いていた。けれども子規の話だけには興味があるような気がした。もう少し子規のことでも話そうかと思っていると、

「どうも好きなものには自然と手が出るものでね。しかたがない。豚などは手が出ないかわりに鼻が出る。豚をね、縛って動けないようにしておいて、その鼻の先へ、ご馳走を並べておくと、動けないものだから、鼻の先がだんだんのびてくるそうだ。ご馳走に届くまではのびるそうです。どうも一念ほど恐ろしいものはない」と言って、にやにや笑っている。まじめだか冗談だか、判然と区別しにくいような話し方である。

「まあお互いに豚でなくってしあわせだ。そうほしいもののほうへむやみに鼻がのびて行ったら、今ごろは汽車にも乗れないくらい長くなって困るにちがいない」

三四郎は吹き出した。けれども相手は存外静かである。

「実際あぶない。レオナルド・ダ・ヴィンチという人は桃の幹に砒石を注射してね、(1)その実へも毒が回るものだろうか、どうだろうかという試験をしたことがある。ところがその桃を食って死んだ人がある。あぶない。気をつけないとあぶない」と言いながら、さんざん食い散らした水蜜桃の核子やら皮やらを、ひとまとめに新聞にくるんで、窓の外へ投げ出した。

こんどは三四郎も笑う気が起こらなかった。レオナルド・ダ・ヴィンチという名を聞いて少しく辟易したうえに、なんだかゆうべの女のことを考え出して、妙に不愉快になったから、謹んで黙ってしまった。けれども相手はそんなことにいっこう気がつかないらしい。やがて、

(1) ダ・ヴィンチの伝記小説、メレジェコフスキーの「神々の復活」第三編「毒の木の実」にある。

「東京はどこへ」と聞き出した。
「実ははじめてで様子がよくわからんのですが……さしあたり国の寄宿舎へでも行こうかと思っています」と言う。
「じゃ熊本はもう……」
「今度卒業したのです」
「はあ、そりゃ」と言ったがおめでたいとも結構だともつけなかった。ただ「するとこれから大学へはいるのですね」といかにも平凡であるかのごとくに聞いた。
三四郎はいささかもの足りなかった。そのかわり、
「ええ」という二字で挨拶を片づけた。
「科は？」とまた聞かれる。
「一部です」
「法科ですか」
「いいえ文科です」
「はあ、そりゃ」とまた言った。三四郎はこのはあ、そりゃを聞くたびに妙になる。向こうが大いに偉いか、大いに人を踏み倒しているか[1]、そうでなければ大学にまったく縁故も同情もない男にちがいない。しかしそのうちのどっちだか見当がつかないのでこの男に対する態度もきわめて不明瞭であった。

(1) 軽蔑している。

浜松で二人とも申し合わせたように弁当を食った。食ってしまっても汽車は容易に出ない。窓から見ると、西洋人が四、五人列車の前を往ったり来たりしている。そのうちの一組は夫婦とみえて、暑いのに手を組み合わせている。女は上下ともまっ白な着物で、大変美しい。三四郎は生まれてから今日に至るまで西洋人というものを五、六人しか見たことがない。そのうちの二人は熊本の高等学校の教師で、その二人のうちの一人は運悪く背虫であった。女では宣教師を一人知っている。ずいぶんとんがった顔で、鱚または魳に類していた。(1)だから、こういう派手なきれいな西洋人は珍らしいばかりではない。すこぶる上等に見える。三四郎は一生懸命にみとれていた。これではいばるのももっともだと思った。自分が西洋へ行って、こんな人のなかにはいったらさだめし肩身の狭いことだろうとまで考えた。窓の前を通る時二人の話を熱心に聞いてみたがちっともわからない。熊本の教師とはまるで発音が違うようだ。

ところへ例の男が首をうしろから出して、

「まだ出そうもないのですかね」と言いながら、今行きすぎた、西洋の夫婦をちょいと見て、

「ああ美しい」と小声で言って、すぐに生あくびをした。三四郎は自分がいかにも田舎ものらしいのに気がついて、さっそく首を引き込めて、着座した。男もつづいて席に返った。そうして、

「どうも西洋人は美しいですね」と言った。

三四郎は別段の答えも出ないのでただはあと受けて笑っていた。すると髭の男は、

「お互いは憐れだなあ」と言い出した。「こんな顔をして、こんなに弱っていては、いくら日露戦

(1) 似かよっていた。

争に勝って、一等国[1]になってもだめですね。もっとも建物を見ても、庭園を見ても、いずれも顔相応のところだが、——あなたは東京がはじめてなら、まだ富士山を見たことがないでしょう。今に見えるからごらんなさい。あれが日本一の名物だ。あれよりほかに自慢するものはなにもない。ところがその富士山は天然自然に昔からあったものなんだからしかたがない。我々がこしらえたものじゃない」と言ってまたにやにや笑っている。三四郎は日露戦争以後こんな人間に出会うとは思いもよらなかった。どうも日本人じゃないような気がする。

「しかしこれからは日本もだんだん発展するでしょう」と弁護した。すると、かの男は、すましたもので、

「亡(ほろ)びるね」と言った。——熊本でこんなことを口に出せば、すぐなぐられる。わるくすると国賊取り扱い[2]にされる。三四郎は頭の中のどこのすみにもこういう思想を入れる余裕はないような空気のうちで生長(せいちょう)した。だからことによると自分の年の若いのに乗じて、ひとを愚弄(ぐろう)するのではなかろうかとも考えた。男は例のごとくにやにや笑っている。そのくせ言葉つきはどこまでも落ちついている。どうも見当がつかないから、相手になるのをやめて黙ってしまった。すると男が、こう言った。

「熊本より東京は広い。東京より日本は広い。日本より……」でちょっと切ったが、三四郎の顔を見ると耳を傾けている。

「日本より頭の中のほうが広いでしょう」と言った。「とらわれちゃだめだ。いくら日本のためを

(1) 国際上もっとも優勢な諸国。 (2) 国に害ある者としてあつかわれる。

思ったって贔屓の引き倒し[1]になるばかりだ」

この言葉を聞いた時、三四郎は真実に熊本を出たような心持ちがした。同時に熊本にいた時の自分は非常に卑怯であったと悟った。

その晩三四郎は東京に着いた。髭の男は別れる時まで名前を明かさなかった。三四郎は東京へ着きさえすれば、このくらいの男は至るところにいるものと信じて、別に姓名を尋ねようともしなかった。

二

三四郎が東京で驚いたものはたくさんある。第一電車のちんちん鳴るので驚いた。それからそのちんちん鳴るあいだに、非常に多くの人間が乗ったり降りたりするので驚いた。次に丸の内で驚いた。もっとも驚いたのは、どこまで行っても東京がなくならないということであった。しかもどこをどう歩いても、材木がほうり出してある、石が積んである、新しい家が往来から二、三間引っ込んでいる、古い蔵が半分とりくずされて心細く前のほうに残っている。すべての物が破壊されつつあるようにみえる。そうしてすべての物がまた同時に建設されつつあるようにみえる。大変な動き方である。

三四郎はまったく驚いた。要するに普通の田舎者がはじめて都のまん中に立って驚くと同じ程度

(1) ひいきをしてかえってその人(もの)を不利にすること。

に、また同じ性質において大いに驚いてしまった。今までの学問はこの驚きを予防する上において、売薬ほどの効能[1]もなかった。三四郎の自信はこの驚きとともに四割がた減却した。不愉快でたまらない。

この劇烈な活動そのものがとりもなおさず現実世界だとすると、自分が今日までの生活は現実世界に毫も接触していないことになる。洞が峠で昼寝[2]をしたと同然である。それでは今日かぎり昼寝をやめて、活動の割り前が払えるかというと、それは困難である。自分は今活動の中心に立っている。けれども自分はただ自分の左右前後に起こる活動を見なければならない地位に置きかえられたというまでで、学生としての生活は以前と変わるわけはない。世界はかように動揺する。自分はこの動揺を見ている。けれどもそれに加わることはできない。自分の世界と、現実の世界は一つ平面に並んでおりながら、どこも接触していない。そうして現実の世界は、かように動揺して、自分を置き去りにして行ってしまう。はなはだ不安である。

三四郎は東京のまん中に立って電車と、汽車と、白い着物を着た人と、黒い着物を着た人との活動を見て、こう感じた。けれども学生生活の裏面に横たわる思想界の活動には毫も気がつかなかった。――明治の思想は西洋の歴史にあらわれた三百年の活動を四十年でくり返している。[3]

三四郎が動く東京のまん中に閉じ込められて、一人でふさぎ込んでいるうちに、国もとの母から

(1) 薬ほどのききめ。(2) 洞が峠は、京都府八幡町の男山の南にあり、山城から河内に通ずる所。一五八二年(天正一〇)、山崎の戦いの時、大和の筒井順慶がここに陣して、豊臣秀吉と明智光秀のどちらにつこうか、形勢をうかがったことをおもしろく表現した。(3) 日本の近代化を、西洋の近代と比較していったもの。西洋の近代の起源はいろいろあるが、ここでは、約二七〇年前のピューリタン(清教徒)革命(一六四二〜六〇)から近代化の始まったイギリスをいっている。

手紙が来た。東京で受け取った最初のものである。見るといろいろ書いてある。まず今年は豊作でめでたいというところから始まって、からだを大事にしなくってはいけないという注意があって、東京のものはみんな利口で人が悪いから用心しろと書いて、学資は毎月月末に届くようにするから安心しろとあって、勝田の政さんの従弟に当たる人が大学校を卒業して、理科大学[1]とかに出ているそうだから、尋ねて行って、万事よろしく頼むがいいで結んである。肝心の名前を忘れたとみえて、欄外というようなところに野々宮宗八どのと書いてあった。この欄外にはそのほか二、三件ある。作の青馬が急病で死んだんで、作は大弱りである。三輪田のお光さんが鮎をくれたけれども東京へ送ると途中で腐ってしまうから、家内で食べてしまった。等である。

三四郎はこの手紙を見て、なんだか古ぼけた昔から届いたような気がした。母にはすまないが、こんなものを読んでいるひまはないとまで考えた。それにもかかわらずくり返して二へん読んだ。要するに自分がもし現実世界と接触しているならば、今のところ母よりほかにないのだろう。その母は古い人で古い田舎におる。そのほかには汽車の中で乗り合わした女がいる。あれは現実世界の稲妻である。接触したというには、あまりに短くってかつあまりに鋭すぎた。――三四郎は母の言いつけどおり野々宮宗八を尋ねることにした。

あくる日は平生よりも暑い日であった。休暇中だから理科大学を尋ねても野々宮君はおるまいと思ったが、母が宿所を知らせてこないから、聞き合わせかたがた行ってみようという気になって、午後四時ごろ、高等学校の横を通って弥生町の門からはいった。往来は埃が二寸も積っていて、そ

(1) 東大理学部の前身。

の上に下駄の歯や、靴の底や、草鞋の裏がきれいにできあがってる。車の輪と自転車の痕は幾筋だかわからない。むっとするほどたまらない道だったが、構内へはいるとさすがに樹の多いだけに気分が晴々した。取っつきの戸をあたってみたら錠が下りている。裏へ回ってもだめであった。しまいに横へ出た。念のためと思って押してみたら、うまいぐあいにあいた。廊下の四つ角に小使が一人居眠りをしていた。来意を通じると、しばらくのあいだは、正気を回復するために、上野の森をながめていたが、突然「おいでかもしれません」と言って奥へはいって行った。すこぶる閑静である。やがてまた出て来た。

「おいでやす。おはいんなさい」と友だちみたように言う。小使にくっついて行くと四つ角を曲がって和土の廊下[1]を下へ降りた。世界が急に暗くなる。炎天で眼がくらんだ時のようであったがしばらくすると瞳がようやく落ちついて、四辺が見えるようになった。穴倉だから比較的涼しい。左のほうに戸があって、その戸があけ放してある。そこから顔が出た。額の広い眼の大きな仏教に縁のある相である。縮み[2]の襯衣の上へ背広を着ているが、背広はところどころにしみがある。背はすこぶる高い。やせているところが暑さに釣り合っている。頭と背中を一直線に前のほうへ延ばしてお辞儀をした。

「こっちへ」と言ったまま、顔を室の中へ入れてしまった。三四郎は戸の前まで来て室の中をのぞいた。すると野々宮君はもう椅子へ腰をかけている。もういっぺん「こっちへ」と言った。こっちへというところに台がある。四角な棒を四本立てて、その上を板で張ったものである。三四郎は

(1) コンクリートの廊下。 (2) 横糸にやや強いより糸を使って織り、練ってしわを寄せた織物。

台の上へ腰をかけて初対面の挨拶をする。それからなにぶんよろしく願いますと言った。野々宮君はただはあ、はあと言って聞いている。その様子がいくぶんか汽車の中で水蜜桃を食った男に似ている。ひととおり口上を述べた三四郎はもうなにも言うことがなくなってしまった。野々宮君もはあ、はあ言わなくなった。

部屋の中を見回すとまん中に大きな長い樫の机が置いてある。その上にはなんだか込み入った、太い針線だらけの器械が乗っかって、そのわきに大きな硝子の鉢に水が入れてある。そのほかにやすりと小刀と襟飾り(1)が一つ落ちている。最後に向こうのすみを見ると、三尺ぐらいの花崗岩の台の上に、福神漬の罐ほどな複雑な器械が乗せてある。三四郎はこの罐の横っ腹にあいている二つの穴に眼をつけた。穴が蟒蛇(2)の眼玉のように光っている。野々宮君は笑いながら光るでしょうと言った。そうして、こういう説明をしてくれた。

「昼間のうちに、あんな準備をしておいて、夜になって、交通その他の活動が鈍くなるころに、この静かな暗い穴倉で望遠鏡の中から、あの眼玉のようなものをのぞくのです。そうして光線の圧力を試験する。ことしの正月ごろからとりかかったが、装置がなかなかめんどうなのでまだ思うような結果が出てきません。夏は比較的こらえやすいが、寒夜になると、大変しのぎにくい。外套を着て襟巻をしても冷たくてやりきれない。……」

三四郎は大いに驚いた。驚くとともに光線にどんな圧力があって、その圧力がどんな役に立つんだか、まったく要領を得るに苦しんだ。

(1) ネクタイ。 (2) ニシキへびのような大きなへび。

その時野々宮君は三四郎に、「のぞいてごらんなさい」と勧めた。三四郎はおもしろ半分、石の台の二、三間手前にある望遠鏡のそばへ行って右の眼をあてがったが、なにも見えない。野々宮君は「どうです、見えますか」と聞く。「いっこう見えません」と答えると、「うんまだ蓋が取らずにあった」と言いながら、椅子を立って望遠鏡の先にかぶせてあるものをのけてくれた。

見ると、ただ輪廓のぼんやりした明るいなかに、物差の度盛がある。下に2の字が出た。野々宮君がまた「どうです」と聞いた。「2の字が見えます」と言うと、「今に動きます」と言いながら向こうへまわってなにかしているようであった。

やがて度盛が明るい中で動き出した。2が消えた。あとから3が出る。そのあとから4が出る。5が出る。とうとう10まで出た。すると度盛がまた逆に動き出した。10が消え、9が消え、8から7、7から6と順々に1まで来てとまった。野々宮君はまた「どうです」と言う。三四郎は驚いて、望遠鏡から眼を放してしまった。度盛の意味を聞く気にもならない。

丁寧に礼を述べて穴倉を上がって、人の通るところへ出てみると世の中はまだかんかんしている[1]。暑いけれども深い呼息をした。西のほうへ傾いた日が斜めに広い坂を照らして、坂の上の両側にある工科の建築の硝子窓が燃えるように輝いている。空は深く澄んで、澄んだなかに、西の果てから焼ける火の焰が、薄赤く吹き返して来て、三四郎の頭の上までほてっているように思われた。横に照りつける日を半分背中に受けて、三四郎は左の森の中へはいった。その森も同じ夕日を半分背中に受けている。黒ずんだ蒼い葉と葉のあいだは染めたように赤い。太い欅の幹で日暮しが鳴い

(1) かんかんと太陽が照っている。

三四郎は池の端にしやがみながら

ている。三四郎は池[1]のそばへ来てしゃがんだ。

非常に静かである。電車の音もしない。赤門[2]の前を通るはずの電車は、大学の抗議で小石川を回ることになったと国にいる時分新聞で見たことがある。三四郎は池の端にしゃがみながら、ふとこの事件を思い出した。電車さえ通さないという大学はよほど社会と離れている。

たまたまその中にはいってみると、穴倉の下で半年余りも光線の圧力の試験をしている野々宮君のような人もいる。野々宮君はすこぶる質素な服装をして、外で会えば電燈会社の技手ぐらいな格である。それで穴倉の底を根拠地として欣然[3]とたゆまずに研究を専念にやっている[4]から偉い。しかし望遠鏡のなかの度盛がいくら動いたって現実世界と交渉のないのは明らかである。野々宮君は生涯現実世界と接触する気がないのかもしれない。要するにこの静かな空気を呼吸するから、おのずからああいう気分にもなれるのだろう。自分もいっそのこと気を散らさずに、活きた世の中と関係のない生涯を送ってみようかしらん。

三四郎がじっとして池の面を見つめていると、大きな木が、幾本となく水の底に映って、そのまた底に青い空が見える。三四郎はこの時電車よりも、東京よりも、日本よりも、遠くかつはるかな心持ちがした。しかししばらくすると、その心持ちのうちに薄雲のような淋しさが一面に広がってきた。そうして、野々宮君の穴倉にはいって、たった一人ですわっているかと思われるほどな寂寞

(1) 東京大学の構内の池。東京大学の敷地であった加賀の前田侯邸内の育徳園にあったもので、この作で有名になり、三四郎池の俗称が生まれた。(2) 東京大学正門の南の朱塗りの門。もと前田家上屋敷の正門。(3) よろこぶさま。(4) 普通は、研究に専念している、というところ。

を覚えた。[1] 熊本の高等学校にいる時分もこれより静かな龍田山[2]に上ったり、月見草ばかり生えている運動場に寝たりして、まったく世の中を忘れた気になったことは幾度となくある、けれどもこの孤独の感じは今はじめて起こった。

活動の激しい東京を見たためだろうか。あるいは――三四郎はこの時赤くなった。汽車で乗り合わした女のことを思い出したからである。――現実世界はどうも自分に必要らしい。けれども現実世界はあぶなくて近寄れない気がする。三四郎は早く下宿に帰って母に手紙を書いてやろうと思った。

ふと眼を上げると、左手の岡の上に女が二人立っている。女のすぐ下が池で、池の向こう側が高い崖の木立で、そのうしろが派手な赤煉瓦のゴシック[3]ふうの建築である。そうして落ちかかった日が、すべての向こうから横に光を透してくる。女はこの夕日に向いて立っていた。三四郎のしゃがんでいる低い陰から見ると岡の上は大変明るい。女の一人はまぼしい[4]と見えて、団扇を額のところにかざしている。顔はよくわからない。けれども着物の色、帯の色はあざやかにわかった。白い足袋の色も眼についた。鼻緒の色はとにかく草履をはいていることもわかった。もう一人はまっ白である。これは団扇もなにも持っていない。ただ額に少し皺を寄せて、対岸から生いかぶさりそうに、高く池の面に枝を伸ばした古木の奥をながめていた。団扇を持った女は少し前へ出ている。白いほうは一歩土堤の縁からさがっている。三四郎が見ると、二人の姿が筋かいに見える。

この時三四郎の受けた感じはただきれいな色彩だということであった。けれども田舎者だから、

(1) ものさびしさを感じた。 (2) 熊本市の東北にある山。 (3) 十二世紀に起こった、垂直な線のとがった西洋建築形式。 (4) まぶしい、のなまり。

この色彩がどういうふうにきれいなのだか、口にも言えず、筆にも書けない。ただ白いほうが看護婦だと思ったばかりである。
三四郎はまたみとれていた。すると白いほうが動き出した。用事のあるような動き方ではなかった。自分の足がいつの間にか動いたというふうであった。見ると団扇を持った女もいつの間にかまた動いている。二人は申し合わせたように用のない歩き方をして、坂を下りて来る。三四郎はやっぱり見ていた。
坂の下に石橋がある。渡らなければまっすぐに理科大学のほうへ出る。渡れば水ぎわを伝ってこっちへ来る。二人は石橋を渡った。
団扇はもうかざしていない。左の手に白い小さな花を持って、それをかぎながら来る。かぎながら、鼻の下にあてがった花を見ながら、歩くので、眼は伏せている。それで三四郎から一間ばかりのところへ来てひょいととまった。
「これはなんでしょう」と言って、仰向いた。頭の上には大きな椎の木が、日の目のもらないほど厚い葉を茂らして、丸い形に、水ぎわまで張り出していた。
「これは椎」と看護婦が言った。まるで子供に物を教えるようであった。
「そう。実はなっていないの」と言いながら、仰向いた顔を元へもどす、その拍子に三四郎を一目見た。三四郎はたしかに女の黒眼の動く刹那を意識した。その時色彩の感じはことごとく消えて、なんとも言えぬあるものに出会った。そのあるものは汽車の女に「あなたは度胸のない方ですね」と言われた時の感じとどこか似かよっている。三四郎は恐ろしくなった。

二人の女は三四郎の前を通り過ぎる。若いほうが今までかいでいた白い花を三四郎の前へ落として行った。三四郎は二人の後姿をじっと見つめていた。看護婦は先へ行く。若いほうがあとから行く。はなやかな色の中に、白い薄を染め抜いた帯が見える。頭にもまっ白な薔薇を一つさしている。その薔薇が椎の木蔭の下の、黒い髪の中できわだって光っていた。

三四郎はぼんやりしていた。やがて、小さな声で「矛盾だ」と言った。大学の空気とあの女が矛盾なのだか、あの色彩とあの眼つきが矛盾なのだか、あの女を見て、汽車の女を思い出したのが矛盾なのだか、それとも未来に対する自分の方針が二途に矛盾しているのか、または非常にうれしいものに対して恐れをいだくところが矛盾しているのか、――この田舎出の青年には、すべてわからなかった。ただなんだか矛盾であった。

三四郎は女の落としていった花を拾った。そうしてかいでみた。けれども別段のにおいもなかった。三四郎はこの花を池の中へ投げ込んだ。花は浮いている。すると突然向こうで自分の名を呼んだものがある。

三四郎は花から眼を放した。見ると野々宮君が石橋の向こうに長く立っている。

「君まだいたんですか」と言う。三四郎は答えをする前に、立ってのそのそ歩いて行った。石橋の上まで来て、

「ええ」と言った。なんとなく間が抜けている。けれども野々宮君は、少しも驚かない。

「涼しいですか」と聞いた。三四郎はまた、

「ええ」と言った。

野々宮君はしばらく池の水をながめていたが、右の手を隠袋へ入れてなにか探し出した。隠袋から半分封筒がはみ出している。その上に書いてある字が女の手蹟(1)らしい。野々宮君は思う物を探しあてなかったとみえて、もとのとおりの手を出してぶらりと下げた。そうして、こう言った。

「今日は少し装置が狂ったので晩の実験はやめだ。これから本郷のほうを散歩して帰ろうと思うが、君どうですいっしょにあるきませんか」

三四郎は快く応じた。二人で坂を上がって、岡の上へ出た。野々宮君はさっき女の立っていたあたりでちょっととまって、向こうの青い木立のあいだから見える赤い建物と、崖の高いわりに、水の落ちた池を一面に見渡して、

「ちょっといい景色でしょう。あの建築の角度のところだけが少し出ている。木のあいだから。ね。いいでしょう。君気がついていますか。あの建物はなかなかうまくできていますよ。工科もよくできてるがこのほうがうまいですね」

三四郎は野々宮君の鑑賞力に少々驚いた。実をいうと自分にはどっちがいいかまるでわからないのである。そこで今度は三四郎のほうが、はあ、はあと言い出した。

「それから、この木と水の感じがね。――たいしたものじゃないが、なにしろ東京のまん中にあるんだから――静かでしょう。こういうところでないと学問をやるにはいけませんね。近ごろは東京があまりやかましくなりすぎて困る。これが御殿(2)」とあるき出しながら、左手の建物をさして見せる。「教授会をやるところです。うむなに、僕なんか出ないでいいのです。僕は穴倉生活をやっ

(1) 筆跡。書いた文字。 (2) 山上御殿ともいい、池を見下ろす高台にあった前田家の址。現在山上会議所のある所。

ていればすむのです。近ごろの学問は非常な勢いで動いているので、少し油断すると、すぐ取り残されてしまう。人が見ると穴倉のなかで冗談をしているようだが、これでもやっている当人の頭の中は劇烈に働いているんですよ。電車よりよっぽど激しく働いているかもしれない。だから夏でも旅行をするのが惜しくってね」と言いながら仰向いて大きな空を見た。空にはもう日の光が乏しい。青い空の静まり返った、上皮に、白い薄雲が刷毛先でかき払ったあとのように、筋かいに長く浮いている。

「あれを知ってますか」と言う。三四郎は仰いで半透明の雲を見た。

「あれは、みんな雪の粉ですよ。こうやって下から見ると、ちっとも動いていない。しかしあれで地上に起こる颶風[1]以上の速力で動いているんですよ。――君ラスキン[2]を読みましたか」

三四郎は憮然として読まないと答えた。野々宮君はただ

「そうですか」と言ったばかりである。しばらくしてから、

「この空を写生したらおもしろいですね。――原口にでも話してやろうかしら」と言った。三四郎はむろん原口という画工の名前を知らなかった。

二人はベルツ[3]の銅像の前から枳殻寺[4]の横を電車の通りへ出た。銅像の前で、この銅像はどうですかと聞かれて三四郎はまた弱った。表は大変にぎやかである。電車がしきりなしに通る。

「君電車はうるさくはないですか」とまた聞かれた。三四郎はうるさいよりすさまじいくらいで

(1) 強烈な風。台風。(2) 一八一九～一九〇〇、イギリスの芸術批評家・社会思想家。ターナーを愛して「近代画家論」を書いた。(3) 東京大学の鉄門を入ってまもなくの銅像の一つ。ベルツはドイツの内科医で、東大医学部で森鷗外らを教えた人。(4) 文京区龍岡町にある麟祥院の俗称。

ある。しかしただ「ええ」と答えておいた。すると野々宮君は「僕もうるさい」と言った。しかしいっこううるさいようにもみえなかった。

「僕は車掌に教わらないと、一人で乗換えが自由にできない。この二、三年来むやみにふえたのでね。便利になってかえって困る。僕の学問と同じことだ」と言って笑った。

学期の始まりぎわなので新しい高等学校の帽子をかぶった生徒がだいぶ通る。野々宮君は愉快そうに、この連中を見ている。

「だいぶ新しいのが来ましたね」と言う。「若い人は活気があっていい。時に君はいくつですか」と聞いた。三四郎は宿帳へ書いたとおりを答えた。すると、

「それじゃ僕より七つばかり若い。七年もあると、人間はたいていのことができる。しかし月日はたちやすいものでね。七年ぐらいじきですよ」と言う。どっちが本当なんだか、三四郎にはわからなかった。

四つ角近くへ来ると左右に本屋と雑誌屋がたくさんある。そのうちの二、三軒には人が黒山のようにたかっている、そうして雑誌を読んでいる。そうして買わずに行ってしまう。野々宮君は、

「みんなずるいなあ」と言って笑っている。もっとも当人もちょいと太陽(1)をあけて見た。

四つ角へ出ると、左手のこちら側に西洋小間物屋(2)があって、向こう側に日本小間物屋(3)がある。そのあいだを電車がぐるっと曲がって、非常な勢いで通る。ベルがちんちんちんちん言う。渡りにく

(1) 明治二十八年一月、博文館から創刊された総合雑誌。 (2) 「兼安」の筋向かいにあった「長島」という洋品店。
(3) 「兼安」をさす。婦人の結髪・装身・化粧用具を売る店。

いほど雑沓する。野々宮君は、向こうの小間物屋をさして、
「あすこでちょいと買物をしますからね」と言って、ちりんちりんと鳴るあいだを駆け抜けた。三四郎もくっついて、向こうへ渡った。野々宮君はさっそく店へはいった。表に待っていた三四郎が、気がついてみると、店先の硝子張りの棚に櫛だの花簪だのが並べてある。三四郎は妙に思った。野々宮君がなにを買っているのかしらと、不審を起こして、店の中へはいってみると、蟬の羽根のようなリボンをぶら下げて、
「どうですか」と聞かれた。三四郎はこの時自分もなにか買って、鮎のお礼に三輪田のお光さんに送ってやろうかと思った。けれどもお光さんが、それを貰って、鮎のお礼と思わずに、きっとなんだかんだと手前勝手の理屈をつけるにちがいないと考えたからやめにした。
それから真砂町で野々宮君に西洋料理のごちそうになった。野々宮君の話では本郷でいちばんうまい家だそうだ。けれども三四郎にはただ西洋料理の味がするだけであった。しかし食べることはみんな食べた。
西洋料理屋の前で野々宮君に別れて、追分に帰るところを丁寧にもとの四つ角まで出て、左へ折れた。下駄を買おうと思って、下駄屋をのぞき込んだら、白熱瓦斯[1]の下に、まっ白に塗り立てた娘が、石膏の化物のようにすわっていたので、急にいやになってやめた。それからうちへ帰るあいだ、大学の池の縁で会った女の、顔の色ばかり考えていた。――その色は薄く餅を焦したような狐色であった。そうして肌理が非常に細かであった。三四郎は、女の色は、どうしてもあれでなく

(1) 明るさを増すために、白熱套を使って白熱光にしたガス灯。

ってはだめだと断定した。

三

学年は九月十一日に始まった。三四郎は正直に午前十時半ごろ学校へ行ってみたが、玄関前の掲示場に講義の時間割があるばかりで学生は一人もいない。自分の聞くべき分だけを手帳に書きとめて、それから事務室へ寄ったら、さすがに事務員だけは出ていた。講義はいつから始まりますかと聞くと、九月十一日から始まると言っている。すましたものである。でも、どの部屋を見ても講義がないようですがと尋ねると、それは先生がいないからだと答えた。三四郎はなるほどと思って事務室を出た。裏へ回って、大きな欅の下から高い空をのぞいたら、普通の空よりも明らかに見えた。熊笹の中を水ぎわへおりて、例の椎の木のところまで来て、またしゃがんだ。あの女がもう一ぺん通ればいいくらいに考えて、たびたび岡の上をながめたが、岡の上には人影もしなかった。三四郎はそれが当然だと考えた。けれどもやはりしゃがんでいた。すると午砲[1]が鳴ったんで驚いて下宿へ帰った。

翌日は正八時に学校へ行った。正門をはいると、取っつきの大通りの左右に植えてある銀杏の並木が眼についた。銀杏が向こうのほうで尽きるあたりから、だらだら坂に下がって、正門のきわに立った三四郎から見ると、坂の向こうにある理科大学は二階の一部しか出ていない。その屋根のう

(1) 正午を知らせるための空砲。

しろに朝日を受けた上野の森が遠く輝いている。日は正面にある。三四郎はこの奥行きのある景色を愉快に感じた。
銀杏の並木がこちら側で尽きる右手には法文科大学がある。左手には少しさがって博物の教室がある。建築は双方ともに同じで、細長い窓の上に、三角にとがった屋根が突き出している。その三角の縁に当たる赤煉瓦と黒い屋根のつぎめのところが細い石の直線でできている。そうしてその石の色が少し蒼味を帯びて、すぐ下にくる派手な赤煉瓦に一種の趣を添えている。そうしてこの長い窓と、高い三角が横にいくつも続いている。三四郎はこのあいだ野々宮君の説を聞いてから以来、急にこの建物をありがたく思っていたが、けさは、この意見が野々宮君の意見でなくって、初手から[1]自分の持説であるような気がしだした。ことに博物室が法文科と一直線に並んでいないで、少し奥へ引っ込んでいるところが不規則で妙だと思った。こんど野々宮君に会ったら自分の発明としてこの説を持ち出そうと考えた。
法文科の右のはずれから半町ほど前へつき出している図書館にも感服した。よくわからないがなんでも同じ建築だろうと考えられる。その赤い壁につけて、大きな棕櫚の木を五、六本植えたところが大いにいい。左手のずっと奥にある工科大学は封建時代の西洋のお城から割り出したように見えた。まっ四角にできあがっている。窓も四角である。ただ四隅と入口が丸い。これは櫓を形取ったんだろう。お城だけにしっかりしている。法文科みたように倒れそうでない。なんだか背の低い相撲取りに似ている。

（1）最初から。将棋・碁から出た語。

三四郎は見渡すかぎり見渡して、このほかにもまだ眼に入らない建物がたくさんあることを勘定に入れて、どことなく雄大な感じを起こした。「学問の府はこうなくってはならない。こういう構えがあればこそ研究もできる。えらいものだ」――三四郎は大学者になったような心持ちがした。けれども教室へはいってみたら、鐘は鳴っても先生は来なかった。そのかわり学生もでてこない。次の時間もそのとおりであった。三四郎は疳癪を起こして教場を出た。そうして念のために池の周囲を二へんばかり回って下宿へ帰った。

それから約十日ばかりたってから、ようやく講義が始まった。三四郎がはじめて教室へはいって、ほかの学生といっしょに先生の来るのを待っていた時の心持ちは実に殊勝なものであった。神主が装束を着けて、これから祭典でも行なおうとする間ぎわには、こういう気分がするだろうと、三四郎は自分で自分の了見を推定した。実際学問の威厳に打たれたにちがいない。それのみならず先生が号鐘が鳴って十五分たっても出て来ないので、ますます予期から生ずる敬畏の念を増した。そのうち人品のいいお爺さんの西洋人が戸をあけてはいって来て、流暢な英語で講義を始めた。三四郎はその時 answer という字はアングロ・サクソン語の and-swaru から出たんだということを覚えた。それからスコット(1)の通った小学校の村の名を覚えた。いずれも大切に筆記帳にしるしておいた。その次には文学論の講義に出た。この先生は教室にはいって、ちょっと黒板をながめていたが、黒板の上に書いてある Geschehen(2) という字と Nachbild(3) という字を見て、はあ独逸語かと言

(1) 一七七一～一八三二、イギリスのロマン派の詩人・小説家。「アイヴァンホー」など。(2) ドイツ語。起こったこと。事件。(3) ドイツ語。模写。写本。

って、笑いながらさっさと消してしまった。三四郎はこれがために独逸語に対する敬意を少し失ったように感じた。先生は、それから古来文学者が文学に対して下した定義をおよそ二十ばかり並べた。三四郎はこれも大事に手帳に筆記しておいた。午後は大教室に出た。その教室には約七、八十人ほどの聴講者がいた。したがって先生も演説口調であった。砲声一発浦賀の夢を破って[1]という冒頭であったから、三四郎はおもしろがって聞いていると、しまいには独逸の哲学者の名がたくさん出て来てはなはだ解しにくくなった。机の上を見ると、落第という字がみごとに彫ってある。よほど暇にまかせて仕上げたものと見えて、堅い樫の板をきれいに切りこんだ手ぎわは素人とは思われない。深刻のできである。隣の男は感心に根気よく筆記をつづけている。のぞいて見ると筆記ではない。遠くから先生の似顔をポンチ[2]に書いていたのである。三四郎がのぞくやいなや隣の男は帳面を三四郎のほうに出して見せた。絵はうまくできているが、そばに久方の雲井の空の子規[3]と書いてあるのは、なんのことだか判じかねた。

　講義が終わってから、三四郎はなんとなく疲労したような気味で、二階の窓から頬杖を突いて、正門内の庭を見おろしていた。ただ大きな松や桜を植えてそのあいだに砂利を敷いた広い道をつけたばかりであるが、手を入れすぎていないだけに、見ていて心持ちがいい。野々宮君の話によるとここは昔はこうきれいではなかった。野々宮君の先生のなんとかいう人が、学生の時分馬に乗って、ここを乗り回すうちに、馬が言うことを聞かないで、意地を悪くわざと木の下を通るので、帽子が

（1）黒船来航を言ったもの。東洋哲学の先覚者、井上哲次郎（一八五五～一九四四）の講義。（2）漫画。（3）森鷗外の「安井夫人」で有名な、幕末の儒者安井息軒が、若い頃座右の銘にしたという「今は音を忍ぶが岡のほととぎすいつか雲居のよそに名のらむ」（今に偉くなってみせるという抱負を述べたもの）によっている。

松の枝に引っかかる。下駄の歯が鐙[1]に挟まる。先生は大変困っていると、正門前の喜多床という髪結床の職人がおおぜい出て来て、おもしろがって笑っていたそうである。その時分には有志のものが醵金して構内に廐をこしらえて、三頭の馬と、馬の先生とを飼っておいた。ところが先生が大変な酒飲みで、とうとう三頭のうちのいちばんいい白い馬を売って飲んでしまった。それはナポレオン三世[2]時代の老馬であったそうだ。まさかナポレオン三世時代でもなかろう。しかしのんきな時代もあったものだと考えていると、さっきポンチ絵をかいた男が来て、

「大学の講義はつまらんなあ」と言った。三四郎はいいかげんな返事をした。実はつまるかつまらないか、三四郎にはちっとも判断ができないのである。しかしこの時からこの男と口をきくようになった。

その日はなんとなく気が鬱して、おもしろくなかったので、池の周囲を回ることは見合わせて家へ帰った。晩食後筆記をくり返して読んでみたが、別に愉快にも不愉快にもならなかった。母に言文一致[3]の手紙をかいた。――学校は始まった。これから毎日出る。学校は大変広いいい場所で、建物も大変美しい。まん中に池がある。池の周囲を散歩するのが楽しみだ。電車には近ごろようやく乗り馴れた。なにか買ってあげたいが、なにがいいかわからないから、買ってあげない。欲しければそっちから言ってきてくれ。今年の米は今に価が出るから、売らずにおくほうが得だろう。三

（1）くらの両わきにさげて足をかけるもの。（2）一八〇八～七三、ナポレオン一世の姪の子。一八五二～七〇年までフランス皇帝の位につき、独裁権を行使したが、ドイツのビスマルクとの普仏戦争（一八七〇～一、プロシヤを主とするドイツ諸国とフランスとの間に起こった戦争）に敗れ、イギリスに逃れた。（3）口語文。文章には文語を用いてきたのを明治初期、二葉亭四迷・山田美妙・尾崎紅葉などが、話し言葉どおりの文章を作品に試みて、それが一般にも用いられるようになった。

輪田のお光さんにはあまり愛想(あいそ)をよくしないほうがよかろう。東京へきてみると人はいくらでもいる。男も多いが女も多い。というようなことをごたごた並べたものであった。

手紙を書いて、英語の本を六、七頁(ページ)読んだらいやになった。こんな本を一冊ぐらい読んでもだめだと思いだした。床を取って寝ることにしたが、寝つかれない。不眠症になったら早く病院に行って見てもらおうなどと考えているうちに寝てしまった。

あくる日も例刻に学校へ行って講義を聞いた。講義のあいだに今年の卒業生がどこそこへいくらで売れたという話を耳にした。だれとだれがまだ残っていて、それがある官立学校の地位を競争している噂(うわさ)だなどと話しているものがあった。三四郎は漠然と、未来が遠くから眼前に押し寄せるような鈍い圧迫を感じたが、それはすぐ忘れてしまった。むしろ昇之助(しょうのすけ)(1)がなんとかしたというほうの話がおもしろかった。そこで廊下で熊本出の同級生をつかまえて、昇之助とはなんだと聞いたら、寄席(よせ)へ出る娘義太夫(むすめぎだゆう)(2)だと教えてくれた。それから寄席の看板(かんばん)はこんなもので、本郷のどこにあるということまで言って聞かせたうえ、今度の土曜にいっしょに行こうと誘ってくれた。よく知ってると思ったら、この男はゆうべはじめて、寄席へはいったのだそうだ。三四郎はなんだか寄席へ行って昇之助が見たくなった。

昼飯を食いに下宿へ帰ろうと思ったら、きのうポンチ絵をかいた男がきて、おいおいと言いながら、本郷の通りの淀見軒(よどみけん)というところに引っ張って行って、ライスカレーを食わした。淀見軒というところは店で果物を売っている。新しい普請(ふしん)であった。ポンチ絵をかいた男はこの建築の表を指

（1）当時人気のあった娘義太夫。（2）明治後半期に全盛をうたわれた、年若い女の語る義太夫。

さして、これがヌーボー式[1]だと教えた。三四郎は建築にもヌーボー式があるものとはじめて悟った。帰り道に青木堂も教わった。やはり大学生のよく行くところだそうである。赤門をはいって、二人で池の周囲を散歩した。その時ポンチ絵の男は、死んだ小泉八雲[2]先生は教員控室へはいるのが嫌いで講義がすむといつでもこの周囲をぐるぐる回ってあるいたんだと、あたかも小泉先生に教わったようなことを言った。なぜ控室へはいらなかったのだろうかと三四郎が尋ねたら、

「そりゃ当たり前ださ。第一彼らの講義を聞いてもわかるじゃないか。話せるものは一人もいやしない」と手ひどいことを平気で言ったには三四郎も驚いた。この男は佐々木与次郎と言って、専門学校を卒業して、ことしまた選科へはいったのだそうだ。東片町の五番地の広田といううちにいるから、遊びに来いと言う。下宿かと聞くと、なに高等学校の先生の家だと答えた。

それから当分のあいだ三四郎は毎日学校へ通って、律義に講義を聞いた。必修課目以外のものへもときどき出席してみた。それでも、まだもの足りない。そこでついには専攻課目にまるで縁故のないものまでへもおりおりは顔を出した。しかしたいていは二度か三度でやめてしまった。一か月と続いたのは少しもなかった。それでも平均一週に約四十時間ほどになる。いかな勤勉な三四郎にも四十時間はちと多すぎる。三四郎はたえず一種の圧迫を感じていた。しかるにもの足りない。三四郎は楽しまなくなった。

ある日佐々木与次郎に会ってその話をすると、与次郎は四十時間と聞いて、眼を丸くして、「馬

（1）二十世紀の初めに、フランス・ドイツなどに興った新芸術派の図案様式。ヌーボーは、新しいの意。（2）一八五〇〜一九〇四。文学者。本名ラフカディオ・ハーン。漱石の前任者として、東大で英文学を講義した。

鹿馬鹿」と言ったが、「下宿屋のまずい飯を一日に十ぺん食ったらもの足りるようになるか考えてみろ」といきなり警句でもって三四郎をどやしつけた。(1) 三四郎はすぐさま恐れ入って、

「どうしたらよかろう」と相談をかけた。

「電車に乗るがいい」と与次郎が言った。三四郎はなにか寓意でもあることと思って、しばらく考えてみたが、別にこれという思案も浮かばないので、

「本当の電車か」と聞き直した。その時与次郎はげらげら笑って、

「電車に乗って、東京を十五、六ぺん乗り回しているうちにはおのずからもの足りるようになるさ」と言う。

「なぜ」

「なぜって、そう、活きてる頭を、死んだ講義で封じ込めちゃ、助からない。外へ出て風を入れるさ。その上にもの足りる工夫はいくらでもあるが、まあ電車が一番の初歩でかつもっとも軽便だ」

その日の夕方、与次郎は三四郎を拉して、四丁目から電車に乗って、新橋へ行って、新橋からまた引き返して、日本橋へ来て、そこで降りて、

「どうだ」と聞いた。

次に大通りから細い横町へ曲がって、平の家という看板のある料理屋へ上がって、晩飯を食って酒を飲んだ。そこの下女はみんな京都弁を使う。はなはだ纏綿している。(2) 表へ出た与次郎は赤い顔をして、また、

(1) 短い中に物の真理や奇抜な考えを含んだ言葉で三四郎をどなりつけた。　(2) 非常に情緒が深い。

「どうだ」と聞いた。
次に本場の寄席へ連れて行ってやると言って、また細い横町へはいって、木原店という寄席へ上がった。ここで小さん(1)という落語家を聞いた。十時すぎ通りへ出た与次郎は、また、
「どうだ」と聞いた。
三四郎はもの足りたとは答えなかった。しかしまんざらもの足りない心持ちもしなかった。すると与次郎は大いに小さん論を始めた。
小さんは天才である。あんな芸術家はめったに出るものじゃない。いつでも聞けると思うから安っぽい感じがして、はなはだ気の毒だ。実は彼と時を同じゅうして生きている我々は大変なしあわせである。今から少し前に生まれても小さんは聞けない。少しおくれても同様だ。——円遊(2)もうまい。しかし小さんとは趣が違っている。円遊の扮した太鼓持(3)は、太鼓持になった円遊だからおもしろいので、小さんのやる太鼓持は、小さんを離れた太鼓持だからおもしろい。円遊の演ずる人物から円遊を隠せば、人物がまるで消滅してしまう、小さんの演ずる人物から、いくら小さんを隠したって、人物は活発発地(4)に躍動するばかりだ。そこがえらい。
与次郎はこんなことを言って、また、
「どうだ」と聞いた。実をいうと三四郎には小さんの味わいがよくわからなかった。そのうえ円遊なるものはいまだかつて聞いたことがない。したがって与次郎の説の当否は判定しにくい。しか

(1) 一八五七〜一九三〇、三代目柳家小さん。現在は五代目。 (2) 三遊亭を名乗った落語家。大きな鼻で、鼻の円遊といわれた。 (3) 酒の席に出て、客のきげんを取り、座をにぎわせる男。 (4) 気力がみちみちて活動してやまぬさま。

大通りから
細い横町へ曲がって

しその比較のほとんど文学的といいうるほどに要領を得たには感服した。

高等学校の前で別れる時、三四郎は、

「ありがとう、大いにもの足りた」と礼を述べた。すると与次郎は、

「これから先は図書館でなくっちゃもの足りない」と言って片町のほうへ曲がってしまった。この一言で三四郎ははじめて図書館にはいることを知った。

その翌日から三四郎は四十時間の講義をほとんど半分に減らしてしまった。そうして図書館にはいった。広く、長く、天井が高く、左右に窓のたくさんある建物であった。書庫は入口しか見えない。こっちの正面からのぞくと奥には、書物がいくらでも備えつけてあるように思われる。立って見ていると、書庫の中から、厚い本を二、三冊抱えて、出口へ来て左へ折れて行くものがある。職員閲覧室へ行く人である。中には必要の本を書棚からとりおろして、胸いっぱいにひろげて、立ちながら調べている人もある。三四郎はうらやましくなった。奥まで行って二階へ上がって、それから三階へ上がって、本郷より高いところで、生きたものを近づけずに、紙のにおいをかぎながら、——読んでみたい。けれどもなにを読むかにいたっては、別に判然した考えがない。読んでみなければわからないが、なにかあの奥にたくさんありそうに思う。

三四郎は一年生だから書庫へはいる権利がない。しかたなしに、大きな箱入りの札目録を、ここんで(1)一枚一枚調べていくと、いくらめくってもあとから新しい本の名が出てくる。しまいに肩が痛くなった。顔を上げて、中休みに、館内を見回すと、さすがに図書館だけあって静かなものである。

(1) かがんで。

しかも人がたくさんいる。そうして向こうのはずれにいる人の頭が黒く見える。眼口は判然しない。高い窓の外からところどころに木が見える。空も少し見える。遠くから町の音がする。三四郎は立ちながら、学者の生活は静かで深いものだと考えた。それでその日はそのまま帰った。

次の日は空想はやめて、はいるとさっそく本を借りた。しかし借り損なったので、すぐ返した。あとから借りた本はむずかしすぎて読めなかったからまた返した。三四郎はこういうふうにして毎日本を八、九冊ずつは必ず借りた。もっともたまには少し読んだのもある。三四郎が驚いたのは、どんな本を借りても、きっとだれか一度は眼を通しているという事実を発見した時であった。それは書中ここかしこに見える鉛筆のあとでたしかである。ある時三四郎は念のため、アフラ・ベーン(1)という作家の小説を借りてみた。あけるまでは、よもやと思ったが、見るとやはり鉛筆で丁寧にしるしがつけてあった。この時三四郎はこれはとうていやりきれないと思った。ところへ窓の外を楽隊が通ったんで、つい散歩に出る気になって、通りへ出て、とうとう青木堂へはいった。

はいってみると客が二組あって、いずれも学生であったが、向こうのすみにたった一人離れて茶を飲んでいた男がある。三四郎がふとその横顔を見ると、どうも上京の節汽車の中で水蜜桃をたくさん食った人のようである。向こうは気がつかない。茶を一口飲んでは煙草を一吸いすって、大変ゆっくり構えている。今日は白地の浴衣をやめて、背広を着ている。しかし決して立派なものじゃない。光線の圧力の野々宮君より白襯衣だけがましなくらいなものである。三四郎は様子を見ているうちにたしかに水蜜桃だと物色(2)した。大学の講義を聞いてから以来、汽車の中でこの男の話した

(1) 一六四〇～八九、イギリスの女流劇作家・小説家。 (2) 間違いなく水蜜桃を食べていた人だと様子をうかがった。

ことがなんだか急に意義のあるように思われだしたところなので、三四郎はそばへ行って挨拶をしようかと思った。けれども先方は正面を見たなり、茶を飲んでは、煙草をふかし、煙草をふかしては茶を飲んでいる。手の出しようがない。

三四郎はじっとその横顔をながめていたが、突然手杯にある葡萄酒を飲み干して、表へ飛び出した。そうして図書館に帰った。

その日は葡萄酒の景気と、一種の精神作用とで、例になくおもしろい勉強ができたので、三四郎は大いにうれしく思った。二時間ほど読書三昧(1)に入った後、ようやく気がついて、そろそろ帰るしたくをしながら、いっしょに借りた書物のうち、まだあけてみなかった、最後の一冊をなにげなく引っぺがしてみると、本の見返しのあいたところに、乱暴にも、鉛筆でいっぱいなにか書いてある。

「ヘーゲル(2)の伯林大学に哲学を講じたる時、ヘーゲルに毫も哲学を売るの意なし。彼の講義は真を説くの講義にあらず、真を体せる人(3)の講義なり。舌の講義にあらず、心の講義なり。真と人と合して醇化一致(4)せる時、その説くところ、言うところは、講義のための講義にあらずして、道のための講義となる。哲学の講義はここに至ってはじめて聞くべし。いたずらに真を舌頭に転ずるものは、死したる墨をもって、死したる紙の上に、むなしき筆記を残すにすぎず。何の意義かこれあらん。……余今試験のため、すなわち麵麭のために、恨みをのみ涙をのんでこの書を読む。岑々たる頭(5)をおさえて未来永劫に試験制度を呪詛(6)することを記憶せよ」

(1) 読書にふけること。 (2) 一七七〇～一八三一、ドイツの哲学者。「弁証法」を考え出した。 (3) 真理を体得した人。
(4) まじりけのない、純粋なものになること。 (5) 頭の痛むさま。 (6) のろう。

とある。署名はむろんない。三四郎は覚えず微笑した。けれどもどこか啓発されたような気がした。哲学ばかりじゃない、文学もこのとおりだろうと考えながら、頁をはぐると、まだある。「ヘーゲルの……」よほどヘーゲルの好きな男と見える。

「ヘーゲルの講義を聞かんとして、四方より伯林に集まれる学生は、この講義を衣食の資に利用せんとの野心をもって集まれるにあらず。ただ哲人ヘーゲルなるものありて、講壇の上に、無上普遍の真[1]を伝うると聞いて、向上求道の念に切なるがため、壇下に、わが不穏底[2]の疑義を解釈せんと欲したる清浄心の発現にほかならず。このゆえに彼らはヘーゲルを聞いて、彼らの未来を決定し得たり。自己の運命を改造し得たり。のっぺらぼうに講義を聴いて、のっぺらぼうに卒業し去る[3]公ら日本の大学生と同じことと思うは、天下の己惚なり。公らはタイプ・ライターにすぎず。しかも欲張ったるタイプ・ライターなり。公らのなすところ、思うところ、言うところ、ついに切実なる社会の活気運[4]に関せず。死に至るまでのっぺらぼうなるかな。死に至るまでのっぺらぼうなるかな」と、のっぺらぼうを二へんくり返している。三四郎は黙然として考え込んでいた。すると、うしろからちょいと肩をたたいたものがある。例の与次郎であった。与次郎を図書館で見かけるのは珍らしい。彼は講義はだめだが、図書館は大切だと主張する男である。けれども主張どおりにはいることも少ない男である。

「おい、野々宮宗八さんが、君を探していた」と言う。与次郎が野々宮君を知ろうとは思いがけ

(1) 最高の、すべてのものにあてはまる真理。(2) 道理にかなわない。(3) ただぼんやりと講義を聴いて、漫然と卒業する。(4) いきいきとした動き。

なかったから、念のため理科大学の野々宮さんかと聞き直すと、うんという答えを得た。さっそく本を置いて入口の新聞を閲覧するところまで出て行ったが、野々宮君がいない。玄関まで出てみたがやっぱりいない。石段を下りて、首を延ばしてその辺を見回したが影も形も見えない。やむをえず引き返した。もとの席へ来てみると、与次郎が、例のヘーゲル論をさして、小さな声で、
「だいぶふるってる。昔の卒業生にちがいない。昔のやつは乱暴だが、どこかおもしろいところがある。実際このとおりだ」とにやにやしている。だいぶ気に入ったらしい。三四郎は、
「野々宮さんはおらんぜ」と言う。
「さっき入口にいたがな」
「なにか用があるようだったか」
「あるようでもあった」
二人はいっしょに図書館を出た。その時与次郎が話した。——野々宮君は自分の寄寓している広田先生の、もとの弟子でよく来る。大変な学問好きで、研究もだいぶある。その道の人なら、西洋人でもみんな野々宮君の名を知っている。
三四郎はまた、野々宮君の先生で、むかし正門内で馬に苦しめられた人の話を思いだして、あるいはそれが広田先生ではなかろうかと考え出した。与次郎にそのことを話すと、与次郎は、ことによると、家の先生だ、そんなことをやりかねない人だと言って笑っていた。
その翌日はちょうど日曜なので、学校では野々宮君に会うわけにいかない。しかしきのう自分を探していたことが気がかりになる。幸いまだ新宅を訪問したことがないからこっちから行って用事

を聞いて来よう(1)という気になった。

思い立ったのは朝であったが、新聞を読んでぐずぐずしているうちに昼になる。午飯を食べたから、出かけようとすると久しぶりに熊本出の友人が来る。ようやくそれを帰したのはかれこれ四時すぎである。ちと遅くなったが、予定のとおり出た。

野々宮の家はすこぶる遠い。四、五日前大久保へ越した。しかし電車を利用すれば、すぐに行かれる。なんでも停車場の近辺と聞いているから、探すに不便はない。実を言うと三四郎はかの平野家行き(2)以来飛んだ失敗をしている。神田の高等商業学校へ行くつもりで、本郷四丁目から乗ったところが、乗り越して九段まで来て、ついでに飯田橋まで持って行かれて、そこでようやく外濠線(3)へ乗り換えて、御茶の水から、神田橋へ出て、まだ悟らずに鎌倉河岸を数寄屋橋のほうへ向いて急いで行ったことがある。それより以来電車はとかく物騒な感じがしてならないのだが、甲武線(4)は一筋だと、かねて聞いているから安心して乗った。

大久保の停車場を降りて、仲百人の通りを戸山学校のほうへ行かずに、踏切りからすぐ横へ折れると、ほとんど三尺ばかりの細い路になる。それを爪先上がりにだらだらと上ると、まばらな孟宗藪がある。その藪の手前と先に一軒ずつ人が住んでいる。野々宮の家はその手前の分であった。小さな門が道の向きにまるで関係のないような位置に筋かいに立っていた。はいると、家がまた見当

(1) こよう、のなまり。(2)「電車に乗るがいい」と言って、与次郎が日本橋の料理屋、平の家へ三四郎をつれて行ったこと。(3) 東京の外濠を一周して敷かれた市内電車。(4) 東京・八王子間に設けられた、もと甲武鉄道株式会社経営の私鉄。明治三十九年、国鉄となった。

ちがいのところにあった。門も入口もまったくあとからつけたものらしい。
台所のわきに立派な生垣があって、庭のほうにはかえって仕切りもなにもない。ただ大きな萩が人の背より高くのびて、座敷の縁側を少し隠しているばかりである。野々宮君はこの縁側に椅子をもち出して、それへ腰をかけて西洋の雑誌を読んでいた。三四郎のはいって来たのを見て、
「こっちへ」と言った。まるで理科大学の穴倉の中と同じ挨拶である。庭からはいるべきのか、玄関から回るべきのか、三四郎は少しく躊躇していた。するとまた、「こっちへ」とさいそくするので、思いきって庭から上がることにした。座敷はすなわち書斎で、広さは八畳で、わりあいに西洋の書物がたくさんある。野々宮君は椅子を離れてすわった。三四郎は閑静なところだとか、わりあいに御茶の水まで早く出られるとか、望遠鏡の試験はどうなりましたとか、――しまりのない当座の話をやったあと、
「きのう私を探しておいでだったそうですが、なにかご用ですか」と聞いた。すると野々宮君は、少し気の毒そうな顔をして、
「なに実はなんでもないですよ」と言った。三四郎はただ「はあ」と言った。
「それでわざわざ来てくれたんですか」
「なに、そういうわけでもありません」
「実はお国のおっかさんがね、せがれがいろいろお世話になるからと言って、結構なものを送ってくださったから、ちょっとあなたにもお礼を言おうと思って……」
「はあ、そうですか。なにか送って来ましたか」

「ええ赤い魚の粕漬なんですがね」
「じゃひめいちでしょう」
三四郎はつまらんものを送ったものだと思った。しかし野々宮君はかのひめいちについていろいろなことを質問した。三四郎は特に食う時の心得を説明した。粕ごと焼いて、いざ皿へうつすという時に、粕を取らないと味が抜けると言って教えてやった。
二人がひめいちについて問答をしているうちに、日が暮れた。三四郎はもう帰ろうと思って挨拶をしかけるところへ、どこからか電報が来た。野々宮君は封を切って、電報を読んだが、口のうちで、「困ったな」と言った。
三四郎はすましているわけにもゆかず、と言ってむやみに立ち入ったことを聞く気にもならなかったので、ただ、
「なにかできましたか」と棒のように聞いた。すると野々宮君は、
「なにたいしたことでもないのです」と言って、手に持った電報を、三四郎に見せてくれた。すぐ来てくれとある。
「どこかへおいでになるのですか」
「ええ、妹がこのあいだから病気をして、大学の病院にはいっているんですが、そいつがすぐ来てくれと言うんです」といっこう騒ぐ気色もない。三四郎のほうはかえって驚いた。野々宮君の妹と、妹の病気と、大学の病院をいっしょにまとめて、それに池の周囲で会った女を加えて、それを

(1) ひめじ、の方言。 (2) 無関心なように。

いちどきに掻き回して、驚いている。
「じゃよほどお悪いんですな」
「なにそうじゃないんでしょう。実は母が看病に行ってるんですが、――もし病気のためなら、電車へ乗って駆けて来たほうが早いわけですからね。――なに妹の悪戯でしょう。馬鹿だから、よくこんな真似をします。ここへ越してからまだいっぺんも行かないものだから、今日の日曜には来ると思って待ってでもいたのでしょう、それで」と言って首を横に曲げて考えた。
「しかしおいでになったほうがいいでしょう。もし悪いといけません」
「さよう。四五日行かないうちにそう急に変わるわけもなさそうですが、まあ行ってみるか」
「おいでになるに若くはないでしょう」
野々宮は行くことにした。行くときめたについては、三四郎に頼みがあると言い出した。万一病気のための電報とすると、今夜は帰れない。すると留守が下女一人になる。下女が非常に憶病で、近所がことのほか物騒である。来合わせたのがちょうど幸いだから、明日の課業にさしつかえがなければ泊まってくれまいか、もっともただの電報ならばすぐ帰ってくる。前からわかっていれば、例の佐々木でも頼むはずだったが、今からではとても間に合わない。たった一晩のことではあるし、病院へ泊まるか、泊まらないか、まだわからない先から、関係もない人に、迷惑をかけるのはわがまますぎて、しいてとは言いかねるが、――むろん野々宮はこう流暢には頼まなかったが、相手の三四郎が、そう流暢に頼まれる必要のない男だから、すぐ承知してしまった。
下女が御飯はと言うのを、「食わない」と言ったまま、三四郎に「失敬だが、君一人で、あとで

食ってください」と夕飯まで置き去りにして、出て行った。行ったと思ったら暗い萩のあいだから大きな声を出して、

「僕の書斎にある本はなんでも読んでいいです。別におもしろいものもないが、なにかごらんなさい。小説も少しはある」

と言ったまま消えてなくなった。縁側まで見送って三四郎が礼を述べた時は、三坪ほどな孟宗藪の竹が、まばらなだけに一本ずつまだ見えた。

間もなく三四郎は八畳敷きの書斎のまん中で小さい膳を控えて、晩飯を食った。膳の上を見ると、主人の言葉にたがわず、かのひめいちがついている。久しぶりで故郷のにおいをかいだようでうれしかったが、飯はそのわりにうまくなかった。お給仕に出た下女の顔を見ると、これも主人の言ったとおり、臆病にできた眼鼻であった。

飯がすむと下女は台所へ下がる。三四郎は一人になる。一人になって落ちつくと、野々宮君の妹のことが急に心配になって来た。危篤なような気がする。野々宮君の駆けつけ方が遅いような気がする。そうして妹がこのあいだ見た女のような気がしてたまらない。三四郎はもういっぺん女の顔つきと眼つきと、服装とを、あの時あのままに、くり返して、それを病院の寝台の上に乗せて、そのそばに野々宮君を立たして、二、三の会話をさせたが、兄ではもの足らないので、いつの間にか、自分が代理になって、いろいろ親切に介抱していた。ところへ汽車が轟と鳴って孟宗藪のすぐ下を通った。根太[1]のぐあいか、土質のせいか座敷が少し震えるようである。

(1) 床板をささえるため、床の下に渡す横木。

三四郎は看病をやめて、座敷を見回した。いかさま[1]古い建物と思われて、柱に寂がある。そのかわり唐紙の立てつけが悪い。天井はまっ黒だ。洋燈ばかりが当世に光っている。野々宮君のような新式な学者が、ものずきにこんな家を借りて、封建時代の孟宗藪を見て暮らすのと同格である。ものずきならば当人の随意だが、もし必要にせまられて、郊外にみずからを放逐したとすると、はなはだ気の毒である。聞くところによると、あれだけの学者で、月にたった五十五円しか、大学からもらっていないそうだ。だからやむをえず私立学校へ教えに行くのだろう。それで妹に入院されてはたまるまい。大久保へ越したのも、あるいはそんな経済上の都合かもしれない。……

宵の口ではあるが、場所が場所だけにしんとしている。庭の先で虫の音がする。ひとりですわっていると、淋しい秋の初めである。その時遠いところでだれか、

「ああああ、もう少しのあいだだ」

という声がした。方角は家の裏手のようにも思えるが、遠いのでしっかりとはわからなかった。また方角を聞きわける暇もないうちにすんでしまった。けれども三四郎の耳には明らかにこの一句が、すべてに捨てられた人の、すべてから返事を予期しない、真実の独白と聞こえた。三四郎は気味が悪くなった。ところへまた汽車が遠くから響いて来た。その音が次第に近づいて孟宗藪の下を通るときには、前の列車より倍も高い音をたてて過ぎ去った。座敷の微震がやむまでは茫然としていた三四郎は、石火のごとく、さっきの嘆声と今の列車の響きとを、一種の因果[2]で結びつけた。そうして、ぎくんと飛び上がった。その因果は恐るべきものである。

(1) なるほど。いかにも。 (2) 原因と結果。

三四郎はこの時じっと座に着いていることのきわめて困難なのを発見した。背筋から足の裏までが疑懼(ぎぐ)の刺激でむずむずする。立って便所に行った。窓から外をのぞくと、一面の星月夜(ほしづきよ)(1)で、土手(どて)下の汽車道は死んだように静かである。それでも竹格子(たけごうし)のあいだから鼻を出すくらいにして、暗いところをながめていた。

すると停車場(ステーション)のほうから提灯(ちょうちん)をつけた男が鉄軌(レール)の上を伝ってこっちへ来る。話し声で判じると、三、四人らしい。提灯の影は踏切りから土手下へ隠れて、孟宗藪の下を通る時は、話し声だけになった。けれども、その言葉は手に取るように聞こえた。

「もう少し先だ」

足音は向こうへ遠のいて行く。三四郎は庭先へ回って下駄(げた)を突っかけたまま孟宗藪のところから、一間余の土手を這(は)い降りて、提灯のあとを追っかけて行った。

五、六間行くか行かないうちに、また一人土手から飛び降りたものがある。――

「轢死(れきし)じゃないですか」

三四郎はなにか答えようとしたがちょっと声が出なかった。そのうち黒い男は行きすぎた。これは野々宮君の奥に住んでいる家の主人(あるじ)だろうと、あとをつけながら考えた。半町ほどくると提灯がとまっている。人もとまっている。人は灯(ひ)をかざしたまま黙っている。三四郎は無言で灯の下を見た。下には死骸が半分ある。汽車は右の肩から乳の下を腰の上までみごとに引きちぎって、斜掛(はすか)けの胴を置き去りにして行ったのである。顔は無傷(むきず)である。若い女だ。

(1) 星が輝いて、月夜のように明るい夜。

三四郎はその時の心持ちをいまだに覚えている。すぐ帰ろうとして、踵をめぐらしかけたが、足がすくんでほとんど動けなかった。土手を這い上がって、座敷へもどったら、動悸が打ち出した。水をもらおうと思って、下女を呼ぶと、下女は幸いになんにも知らないらしい。しばらくすると、奥の家で、なんだか騒ぎ出した。三四郎は主人が帰ったんだなとさとった。やがて土手の下ががやがやする。それがすむとまた静かになる。ほとんどたえがたいほどの静かさであった。

三四郎の眼の前には、ありありとさっきの女の顔が見える。その顔と「ああああ……」と言った力のない声と、その二つの奥に潜んでいるべきはずの無残な運命とを、継ぎ合わして考えてみると、人生という丈夫そうな命の根が、知らぬ間に、ゆるんで、いつでも暗闇へ浮き出して行きそうに思われる。三四郎は欲も得もいらないほどこわかった。ただ轟という一瞬間である。その前まではたしかに生きていたにちがいない。

三四郎はこの時ふと汽車で水蜜桃をくれた男が、あぶないあぶない、気をつけないとあぶない、と言ったことを思い出した。あぶないあぶないと言いながら、あの男はいやに落ちついていた。つまりあぶないあぶないと言いうるほどに、自分はあぶなくない地位に立っていれば、あんな男にもなれるだろう。世の中にいて、世の中を傍観している人はここにおもしろみがあるかもしれない。どうもあの水蜜桃の食いぐあいから、青木堂で茶をのんでは煙草を吸い、煙草を吸っては茶をのんで、じっと正面を見ていた様子は、まさにこの種の人物である。――批評家である。――三四郎は妙な意味に批評家という字を使ってみた。使ってみて自分でうまいと感心した。のみならず自分も批評家として、未来に存在しようかとまで考え出した。あのすごい死顔を見るとこんな気も起

こる。

三四郎は室(へや)の隅(すみ)にある洋机(テーブル)と、洋机の前にある椅子(いす)と、椅子の横にある本箱と、その本箱の中に行儀(ぎょうぎ)よく並べてある洋書を見回して、この静かな書斎の主人(あるじ)は、あの批評家と同じく無事で幸福であると思った。――光線の圧力を研究するために、女を轢死(れきし)させることはあるまい。主人(あるじ)の妹は病気である。けれども兄の作った病気ではない。みずからかかった病気である。などとそれからそれへと頭が移ってゆくうちに、十一時になった。中野行きの電車はもう来ない。あるいは病気がわるいので帰らないのかしらと、また心配になる。ところへ野々宮から電報が来た。妹無事、あす朝帰るとあった。

安心して床にはいったが、三四郎の夢はすこぶる危険であった。――轢死をくわだてた女は、野々宮に関係のある女で、野々宮はそれと知って家へ帰って来ない。ただ三四郎を安心させるために電報だけかけた。妹無事とあるのは偽りで、今夜轢死のあった時刻に妹も死んでしまった。そうしてその妹はすなわち三四郎が池の端(はた)で会った女である。

三四郎はあくる日例になく早く起きた。

寝つけないところに寝た床のあとをながめて、煙草を一本のんだが、ゆうべのことは、すべて夢のようである。縁側へ出て、低い廂(ひさし)の外にある空を仰ぐと、今日はいい天気だ。世界が今朗らかになったばかりの色をしている。飯をすまして茶を飲んで、縁側に椅子を持ち出して新聞を読んでいると、約束どおり野々宮君が帰って来た。

「ゆうべ、そこに轢死があったそうですね」と言う。停車場(ステーション)かなにかで聞いたものらしい。三四

郎は自分の経験を残らず話した。
「それは珍らしい。めったに会えないことだ。僕も家におればよかった。死骸はもう片づけたろうな。行っても見られないだろうな」
「もうだめでしょう」と一口答えたが野々宮君ののんきなのには驚いた。三四郎はこの無神経をまったく夜と昼の差別から起こるものと断定した。光線の圧力を試験する人の性癖が、こういう場合にも、同じ態度であらわれてくるのだとはまるで気がつかなかった。年が若いからだろう。
三四郎は話を転じて、病人のことを尋ねた。野々宮君の返事によると、はたして自分の推測どおり病人に異状はなかった。ただ五六日以来行ってやらなかったものだから、それをもの足りなく思って、退屈まぎれに兄を釣り寄せたのである。今日は日曜だのに来てくれないのはひどいと言って怒っていたそうである。それで野々宮君は妹を馬鹿だと言っている。本当に馬鹿だと思っているらしい。この忙しいものに大切な時間を浪費させるのは愚だというのである。けれども三四郎にはその意味がほとんどわからなかった。わざわざ電報をかけてまで会いたがる妹なら、日曜の一晩や二晩をつぶしたって惜しくはないはずである。そういう人に会って過ごす時間が、本当の時間で、穴倉で光線の試験をして暮らす月日はむしろ人生に遠い閑生涯というべきものである。自分が野々宮君であったならば、この妹のために勉強の妨害をされるのをかえってうれしく思うだろう。くらいに感じたが、そのときは轢死のことを忘れていた。
野々宮君はゆうべよく寝られなかったものだからぼんやりしていけないと言い出した。今日は幸い昼から早稲田の学校へ行く日で、大学のほうは休みだから、それまで寝ようと言っている。「だ

いぶ遅くまで起きていたんですか」と三四郎が聞くと、実は偶然高等学校で教わった、もとの先生の広田という人が妹の見舞に来てくれて、みんなで話をしているうちに、電車の時間におくれて、つい泊まることにした。広田のうちへ泊まるべきのを、また妹がだだをこねて、ぜひ病院に泊まれと言って聞かないから、やむをえず狭いところへ寝たら、なんだか苦しくって寝つかれなかった。どうも妹は愚物だ。とまた妹を攻撃する。三四郎はおかしくなった。少し妹のために弁護しようかと思ったが、なんだか言いにくいのでやめにした。

そのかわり広田さんのことを聞いた。三四郎は広田さんの名前をこれで三、四へん耳にしている。そうして、水蜜桃の先生と青木堂の先生に、ひそかに広田さんの名をつけている。それから正門内で意地の悪い馬に苦しめられて、喜多床の職人に笑われたのもやはり広田先生にしてある。ところが今うけたまわってみると、馬の件ははたして広田先生であった。それで水蜜桃も必ず同先生にちがいないときめた。考えると、少し無理のようでもある。

帰るときに、ついでだから、午前中に届けてもらいたいと言って、袷(1)を一枚病院まで頼まれた。三四郎は大いにうれしかった。

三四郎は新しい四角な帽子をかぶっている。この帽子をかぶって病院に行けるのがちょっと得意である。さえざえしい顔をして野々宮君の家を出た。

御茶の水で電車を降りて、すぐ俥に乗った。いつもの三四郎に似合わぬ所作(2)である。威勢よく赤門を引き込ませた時、法文科の号鐘が鳴り出した。いつもなら手帳と印気壺を持って、八番の教室

(1) 裏つきの着物。(2) 動作。行動。

にはいる時分である。一、二時間の講義ぐらい聞き損なってもかまわないという気でまっすぐに青山内科(1)の玄関まで乗りつけた。
上がり口を奥へ、二つ目の角を右へ切れて、突き当たりを左へ曲がると東側の部屋だと教わったとおり歩いて行くと、はたしてあった。黒塗りの札に野々宮よし子と仮名でかいて、戸口にかけてある。三四郎はこの名前を読んだまま、しばらく戸口のところでたたずんでいた。田舎者だから敲するなぞという気のきいたことはやらない。「この中にいる人が、野々宮君の妹で、よし子という女である」
三四郎はこう思って立っていた。戸をあけて顔が見たくもあるし、見て失望するのがいやでもある。自分の頭の中に往来する女の顔は、どうも野々宮宗八さんに似ていないのだから困る。
うしろから看護婦が草履の音を立てて近づいて来た。三四郎は思いきって戸を半分ほどあけた。そうして中にいる女と顔を見合わせた。(片手に握りを把ったまま)
眼の大きな、鼻の細い、唇の薄い、鉢が開いた(2)と思うくらいに、額が広くって顎がこけた女であった。造作はそれだけである。けれども三四郎は、こういう顔だちから出る、この時にひらめいたとっさの表情を生まれてはじめて見た。蒼白い額のうしろに、自然のままにたれた濃い髪が、肩まで見える。それへ東窓をもれる朝日の光が、うしろからさすので、髪と日光の触れ合う境のところが菫色に燃えて、活きた暈(3)を背負ってる。それでいて、顔も額もはなはだ暗い。暗くて蒼白い。

(1) 東大教授で内科学の大家、青山胤通の病院。(2) 頭蓋骨が開いた。鉢は頭の横まわり。(3) 暈は太陽または月のまわりに見える光であるから、生きた人間にできた暈をこう言ったもの。

その中に遠い心持ちのする眼がある。高い雲が空の奥にいて容易に動かない。けれども動かずにもいられない。ただなだれるように動く。女が三四郎を見た時は、こういう眼つきであった。

三四郎はこの表情のうちにものうい憂鬱と、隠さざる快活との統一を見出した。その統一の感じは三四郎にとって、最も尊き人生の一片である。そうして一大発見である。三四郎は握りを把ったまま、——顔を戸のかげから半分部屋の中に差し出したままこの刹那の感にみずからを放下し去った(1)。

「おはいりなさい」

女は三四郎を待ち設けたように言う。その調子には初対面の女には見出すことのできない、安らかな音色があった。純粋の子供か、あらゆる男児に接しつくした婦人でなければ、こうは出られない。なれなれしいのとは違う。初めから古い知り合いなのである。同時に女は肉の豊かでない頰を動かしてにこりと笑った。蒼白いうちに、なつかしい暖かい味ができた。三四郎の足は自然と部屋のうちへはいった。その時青年の頭のうちには遠い故郷にある母の影がひらめいた。

戸のうしろへ回って、はじめて正面に向いた時五十あまりの婦人が三四郎に挨拶をした。この婦人は三四郎のからだがまだ扉のかげを出ない前から席を立って待っていたものとみえる。

「小川さんですか」と向こうから尋ねてくれた。顔は野々宮君に似ている。娘にも似ている。しかしただ似ているというだけである。頼まれた風呂敷包みを出すと、受け取って、礼を述べて、「どうぞ」と言いながら椅子をすすめたまま、自分は寝台の向こう側へ回った。

(1) みずからを忘れた。ぼうぜんとなった。

寝台の上に敷いた蒲団を見るとまっ白である。上へかけるものもまっ白である。それを半分ほど斜にはぐって、裾のほうが厚く見えるところを、よけるように、女は窓を背にして腰をかけた。足は床にとどかない。手に編針を持っている。毛糸のたまが寝台の下に転がった。女の手から長い赤い糸が筋を引いている。三四郎は寝台の下から、毛糸のたまを取り出してやろうかと思った、けれども、女が毛糸にはまるで無頓着でいるので控えた。

おっかさんが向こう側から、しきりにゆうべの礼を述べる。お忙しいところをなどと言う。三四郎は、いいえ、どうせ遊んでいますからと言う。二人が話をしているあいだ、よし子は黙っていた。二人の話が切れた時、突然、

「ゆうべの轢死をごらんになって」と聞いた。見ると部屋のすみに新聞がある。三四郎が、

「ええ」と言う。

「こわかったでしょう」と言いながら、少し首を横に曲げて、三四郎を見た。兄に似て頸の長い女である。三四郎はこわいともこわくないとも答えずに、女の頸の曲がりぐあいをながめていた。半分は質問があまり単純なので、答えに窮したのである。半分は答えるのを忘れたのである。女は気がついたとみえて、すぐ首をまっすぐにした。そうして蒼白い頸の奥を少し赤くした。三四郎はもう帰るべき時間だと考えた。

挨拶をして、部屋を出て、玄関正面へ来て、向こうを見ると、長い廊下のはずれが四角に切れて、ぱっと明るく、表の緑が映る上がり口に、池の女が立っている。はっと驚いた三四郎の足は、早速の歩調に狂いができた。その時透明な空気の画布の中に暗く描かれた女の影は一歩前へ動い

た。三四郎も誘われたように前へ動いた。二人は一筋道の廊下のどこかですれ違わねばならぬ運命をもって互いに近づいて来た。すると女が振り返った。明るい表の空気のなかには、初秋の緑が浮いているばかりである。振り返った女の眼に応じて、四角のなかに、現われたものもなければ、これを待ち受けていたものもない。三四郎はそのあいだに女の姿勢と服装を頭のなかへ入れた。

着物の色はなんという名かわからない。大学の池の水へ、曇った常磐木の影が映る時のようである。それをあざやかな縞が、上から下へ貫いている。そうしてその縞が貫きながら波を打って、互いに寄ったり離れたり、重なって太くなったり、割れて二筋になったりする。不規則だけれども乱れない上から三分の一のところを、広い帯で横に仕切った。帯の感じには暖かみがある。黄を含んでいるためだろう。

うしろを振り向いた時、右の肩が、あとへ引けて、左の手が腰に添ったまま前へ出た。半帛を持っている。その半帛の指に余ったところが、さらりと開いている。絹のためだろう。――腰から下は正しい姿勢にある。

女はやがてもとのとおりに向き直った。眼を伏せて二足ばかり三四郎に近づいた時、突然首を少しうしろに引いて、まともに男を見た。二重瞼の切長の落ちついたかっこうである。目立って黒い眉毛の下にいきている。同時にきれいな歯があらわれた。この歯とこの顔色とは三四郎にとって忘るべからざる対照であった。

今日は白いものを薄く塗っている。けれども本来の地を隠すほどに無趣味ではなかった。こまやかな肉が、ほどよく色づいて、強い日光に負げないように見える上を、きわめて薄く粉が吹いてい

る。てらてら照る顔ではない。
肉は頬といわず顎といわずきちりと締っている。骨の上に余ったものは沢山ないくらいである。それでいて、顔全体が柔らかい。肉が柔らかいのではない骨そのものが柔らかいように思われる。奥行きの長い感じを起こさせる顔である。
女は腰を曲めた。三四郎は知らぬ人に礼をされて驚いたというよりも、むしろ礼のしかたの巧みなのに驚いた。腰から上が、風に乗る紙のようにふわりと前に落ちた。しかも早い。それで、ある角度まで来て苦もなくはっきりととまった。むろん習って覚えたものではない。
「ちょっと伺いますが……」と言う声が白い歯のあいだから出た。きりりとしている。しかし鷹揚である。ただ夏のさかりに椎の実がなっているかと人に聞きそうには思われなかった。三四郎はそんなことに気のつく余裕はない。
「はあ」と言って立ちどまった。
「十五号室はどの辺になりましょう」
十五号は三四郎が今出て来た室である。
「野々宮さんの室ですか」
今度は女のほうが「はあ」と言う。
「野々宮さんの部屋はね、その角を曲がって突き当たって、また左へ曲がって、二番目の右側です」
「その角を……」と言いながら女は細い指を前へ出した。

「ええ、ついその先の角です」
「どうもありがとう」
女は行きすぎた。三四郎は立ったまま、女の後姿を見守っている。女は角へ来た。曲がろうとするとたんに振り返った。三四郎は赤面するばかりに狼狽した。女はにこりと笑って、この角ですかというような合図を顔でした。三四郎は思わずうなずいた。女の影は右へ切れて白い壁の中へ隠れた。
三四郎はぶらりと玄関を出た。医科大学生と間違えて室の番号を聞いたのかしらんと思って、五、六歩あるいたが、急に気がついた。女に十五号を聞かれた時、もういっぺんよし子の室へあともどりをして、案内すればよかった。残念なことをした。
三四郎は今さらとって帰す勇気は出なかった。やむをえずまた五、六歩あるいたが、今度はぴたりととまった。三四郎の頭の中に、女の結んでいたリボンの色が映った。そのリボンの色も質も、たしかに野々宮君が兼安(1)で買ったものと同じであると考え出した時、三四郎は急に足が重くなった。図書館の横をのたくるように正門のほうへ出ると、どこから来たか与次郎が突然声をかけた。
「おいなぜ休んだ。今日は伊太利人がマカロニー(2)をいかにして食うかという講義を聞いた」と言いながら、そばへ寄って来て三四郎の肩をたたいた。
二人は少しいっしょにあるいた。正門のそばへ来た時、三四郎は、
「君、今ごろでも薄いリボンをかけるものかな。あれは極暑に限るんじゃないか」と聞いた。与次郎はアハハハと笑って、

(1) 本郷三丁目角にある小間物屋。江戸時代からの老舗。 (2) 西洋ふうの麺類。イタリア産が有名。

「○○教授に聞くがいい。なんでも知ってる男だから」と言って取り合わなかった。

正門のところで三四郎はぐあいが悪いから今日は学校を休むと言い出した。与次郎はいっしょについて来て損をしたと言わぬばかりに教室のほうへ帰って行った。

四

三四郎の魂がふわつき出した。講義を聞いていると、遠方に聞こえる。わるくすると肝要なことを書き落とす。はなはだしい時は他人(ひと)の耳を損料で借りているような気がする。(1) 三四郎は馬鹿馬鹿(ばかばか)しくてたまらない。しかたなしに、与次郎に向かって、どうも近ごろは講義がおもしろくないと言い出した。与次郎の答えはいつも同じことであった。——

「講義がおもしろいわけがない。君は田舎者(いなかもの)だから、今に偉いことになると思って、今日(こんにち)まで辛抱(しんぼう)して聞いていたんだろう。愚(ぐ)のいたりだ。彼らの講義は開闢(かいびゃく)(2) 以来こんなものだ。いまさら失望したってしかたがないや」

「そういうわけでもないが……」と三四郎は弁解する。与次郎のへらへら調と、三四郎の重苦しい口のききようが、不釣合(ふつりあ)いではなはだおかしい。

こういう問答を二、三度くり返しているうちに、いつの間(ま)にか半月ばかりたった。三四郎の耳は漸々(ぜんぜん)(3) 借りものでないようになってきた。すると今度は与次郎のほうから、三四郎に向かって、

(1) 貸し料金をはらって借りた、他人の耳のような。 (2) 天地が始まった時から。初めから。 (3) しだいに。

「どうも妙な顔だな。いかにも生活に疲れているような顔だ。世紀末[1]の顔だ」と批評しだした。
三四郎は、この批評に対しても依然として、
「そういうわけでもないが……」をくり返していた。三四郎は世紀末などという言葉を聞いてうれしがるほどに、まだ人工的の空気に触れていなかった。またこれを興味ある玩具として使用しうるほどに、ある社会の消息に通じていなかった。ただ生活に疲れているという句が少し気に入った。なるほど疲れだしたようでもある。三四郎は下痢のためばかりとは思わなかった。けれども大いに疲れた顔を標榜[2]するほど、人生観のハイカラでもなかった。それでこの会話はそれぎり発展しずにすんだ。

そのうち秋は高くなる。食欲は進む。二十三の青年がとうてい人生に疲れていることができない時節が来た。三四郎はよく出る。大学の池の周囲もだいぶん回ってみたが、別段の変もない。病院の前もなんべんとなく往復したが普通の人間に会うばかりである。また理科大学の穴倉へ行って野々宮君に聞いてみたら、妹はもう病院を出たと言う。玄関で会った女のことを話そうと思ったが、先方が忙しそうなので、つい遠慮してやめてしまった。今度大久保へ行ってゆっくり話せば、名前も素性も大抵はわかることだから、せかずに引き取った。そうして、ふわふわしてほうぼう歩いている。田端だの、道灌山だの、染井の墓地だの、巣鴨の監獄だの、護国寺だの、——三四郎は新井の薬師までも行った。新井の薬師の帰りに、大久保へ出て野々宮君の家へ回ろうと思ったら、落合

(1) 十九世紀後半、ヨーロッパを支配したなにものをも信じようとしない懐疑的・絶望的な考え方。ボー、ボードレール、ワイルドなどの考えに多くみられる。(2) はっきり示す。

の火葬場の辺で道を間違えて、高田へ出たので、目白から汽車へ乗って帰った。汽車の中でみやげに買った栗を一人でさんざん食った。その余りはあくる日与次郎が来て、みんな平らげた。

三四郎はふわふわすればするほど愉快になってきた。初めのうちはあまり講義に念を入れすぎたので、耳が遠くなって筆記に困ったが、近ごろはたいていに聞いているからなんともない。講義中にいろいろなことを考える。少しぐらい落としても惜しい気も起こらない。よく観察してみると与次郎始めみんな同じことである。三四郎はこれくらいでいいものだろうと思い出した。

三四郎がいろいろ考えるうちに、ときどき例のリボンが出て来る。そうすると気がかりになる。はなはだ不愉快になる。すぐ大久保へ出かけてみたくなる。しかし想像の連鎖やら、外界の刺激やらで、しばらくするとまぎれてしまう。だからだいたいはのんきである。それで夢を見ている。大久保へはなかなか行かない。

ある日の午後三四郎は例のごとくぶらついて、団子坂の上から、左へ折れて千駄木林町の広い通りへ出た。秋晴れといって、このごろは東京の空も田舎のように深く見える。こういう空の下に生きていると思うだけでも頭ははっきりする。その上、野へ出れば申し分はない。気がのびのびして魂が大空ほどの大きさになる。それでいてからだ総体がしまってくる。だらしのない春ののどかさとは違う。三四郎は左右の生垣をながめながら、生まれてはじめての東京の秋をかぎつつやって来た。

坂下では菊人形が二、三日前開業したばかりである。坂を曲がる時は幟さえ見えた。今はただ声だけ聞こえる、どんちゃんどんちゃん遠くからはやしている。そのはやしの音が、下のほうから次第に浮き上がって来て、澄みきった秋の空気のなかへ広がりつくすと、ついにはきわめて稀薄な波に

なる。そのまた余波が三四郎の鼓膜のそばまで来て自然にとまる。騒がしいというよりはかえっていい心持ちである。

時に突然左の横町から二人あらわれた。その一人が三四郎を見て、「おい」と言う。

与次郎の声はきょうに限って、几帳面である。そのかわり連れがある。三四郎はその連れを見たとき、はたして日ごろの推察どおり、青木堂で茶を飲んでいた人が、広田さんであるということを悟った。この人とは水蜜桃以来妙な関係がある。ことに青木堂で茶を飲んで煙草をのんで、自分を図書館に走らしてよりこのかた、いっそうよく記憶にしみている。いつ見ても神主のような顔に西洋人の鼻をつけている。今日もこのあいだの夏服で、べつだん寒そうな様子もない。

三四郎はなんとか言って、挨拶をしようと思ったが、あまり時間がたっているので、どう口をきいていいかわからない。ただ帽子を取って礼をした。与次郎に対しては、あまり丁寧すぎる。広田に対しては、少し簡略すぎる。三四郎はどっちつかずの中間に出た。すると与次郎が、すぐ、

「この男は私の同級生です。熊本の高等学校からはじめて東京へ出て来た――」と聞かれもしない先から田舎ものを吹聴しておいて、それから三四郎のほうを向いて、

「これが広田先生。高等学校の……」とわけもなく双方を紹介してしまった。

この時広田先生は「知ってる、知ってる」と二へんくり返して言ったので、与次郎は妙な顔をしている。しかしなぜ知ってるんですかなどとめんどうなことは聞かなかった。ただちに、

「君、この辺に貸家はないか。広くて、きれいな、書生部屋のある」と尋ねだした。

「貸家はと……ある」

「どの辺だ。きたなくっちゃいけないぜ」
「いやきれいなのがある。大きな石の門が立っているのがある」
「そりゃうまい。どこだ。先生、石の門はいいですな。ぜひそれにしようじゃありませんか」と与次郎は大いに進んでいる。
「石の門はいかん」と先生が言う。
「いかん？　そりゃ困る。なぜいかんです」
「なぜでもいかん」
「石の門はいいがな。新しい男爵のようでいいじゃないですか、先生」
与次郎はまじめである。広田先生はにやにや笑っている。とうとうまじめのほうが勝って、ともかくも見ることに相談ができて、三四郎が案内をした。
横町をあとへ引き返して、裏通りへ出ると、半町ばかり北へ来たところに、突き当たりと思われるような小路がある。その小路の中へ三四郎は二人を連れ込んだ。まっすぐに行くと植木屋の庭へ出てしまう。三人は入口の五、六間手前でとまった。右手にかなり大きな御影の柱が二本立っている。扉は鉄である。三四郎がこれだと言う。なるほど貸家札がついている。
「こりゃ恐ろしいもんだ」と言いながら、与次郎は鉄の扉をうんと押したが、錠がおりている。
「ちょっとお待ちなさい聞いてくる」と言うやいなや、与次郎は植木屋の奥のほうへ駆け込んで行った。広田と三四郎は取り残されたようなものである。二人で話を始めた。
「東京はどうです」

三四郎
廣田先生
与次郎

「ええ……」
「広いばかりできたないところでしょう」
「ええ……」
「富士山に比較するようなものはなにもないでしょう」
三四郎は富士山のことをまるで忘れていた。広田先生の注意によって、汽車の窓からはじめてながめた富士は、考え出すと、なるほど崇高なものである。ただいま自分の頭の中にごたごたしている世相とは、とても比較にならない。三四郎はあの時の印象をいつの間にか取り落としていたのを恥ずかしく思った。すると、
「君、不二山を翻訳してみたことがありますか」と意外な質問を放たれた。
「翻訳とは……」
「自然を翻訳すると、みんな人間に化けてしまうからおもしろい。崇高だとか、偉大だとか、雄壮だとか」
三四郎は翻訳の意味を了した。
「みんな人格上の言葉になる。人格上の言葉に翻訳することのできないものには、自然が毫も人格上の感化を与えていない」
三四郎はまだあとがあるかと思って、黙って聞いていた。ところが広田さんはそれでやめてしまった。植木屋の奥のほうをのぞいて、
「佐々木はなにをしているのかしら。遅いな」ひとりごとのように言う。

「見て来ましょうか」と三四郎が聞いた。
「なに、見に行ったって、それで出て来るような男じゃない。それよりここに待ってるほうが手(て)間(ま)がかからないでいい」と言って枳殻(からたち)の垣根の下にしゃがんで、小石を拾って、土の上へなにかかき出した。のんきなことである。与次郎ののんきとは方角が反対で、程度がほぼ相似ている。
ところへ植込みの松の向こうから、与次郎が大きな声を出した。
「先生先生」
先生は依然として、なにか描いている。どうも燈明台(とうみょうだい)のようである。返事をしないので、与次郎はしかたなしに出て来た。
「先生ちょっと見てごらんなさい。いい家だ。この植木屋で持ってるんです。門をあけさせてもいいが、裏から回ったほうが早い」
三人は裏から回った。雨戸をあけて、一間(ひとま)一間見て歩いた。中流の人が住んで恥ずかしくないようにできている。家賃が四十円で、敷金が三か月分だと言う。三人はまた表へ出た。
「なんで、あんな立派(りっぱ)な家を見るのだ」と広田さんが言う。
「なんで見るって、ただ見るだけだからいいじゃありませんか」と与次郎は言う。
「借りもしないのに……」
「なに借りるつもりでいたんです。ところが家賃をどうしても二十五円にしようと言わない……」
広田先生は「当たり前さ」と言ったぎりである。すると与次郎が石の門の歴史を話し出した。このあいだまである出入りの屋敷の入口にあったのを、改築のときもらって来て、すぐあすこへ立て

たのだと言う。与次郎だけに妙なことを研究して来た。
それから三人はもとの大通りへ出て、動坂から田端の谷へ降りたが、降りた時分には三人ともただ歩いている。貸家のことはみんな忘れてしまった。ひとり与次郎がときどき石の門のことを言う。麹町からあれを千駄木まで引いてくるのに、手間が五円ほどかかったなどと言う。あの植木屋はだいぶ金持ちらしいなどとも言う。あすこへ四十円の貸家を建てて、全体だれが借りるだろうなどとよけいなことまで言う。ついには、今に借り手がなくってきっと家賃を下げるにちがいないから、その時もういっぺん判談してぜひ借りようじゃありませんかという結論であった。広田先生は別に、そういう料簡もないとみえて、こう言った。
「君が、あんまりよけいな話ばかりしているものだから、時間がかかってしかたがない。いいかげんにして出て来るものだ」
「よほど長くかかりましたか。なにか絵をかいていましたね。先生もずいぶんのんきだな」
「どっちがのんきかわかりゃしない」
「ありゃなんの絵です」
先生はだまっている。その時三四郎がまじめな顔をして、
「燈台じゃないですか」と聞いた。画手と与次郎は笑い出した。
「燈台は奇抜だな。じゃ野々宮宗八さんをかいていらしったんですね」
「なぜ」
「野々宮さんは外国じゃ光ってるが、日本じゃまっ暗だから。——だれもまるで知らない。それ

でわずかばかりの月給をもらって、穴倉へ立てこもって、――実に割に合わない商売だ。野々宮さんの顔を見るたびに気の毒になってたまらない」
「君なぞは自分のすわっている周囲方二尺ぐらいのところをぼんやり照らすだけだから、丸行燈のようなものだ」
丸行燈に比較された与次郎は、突然三四郎のほうを向いて、
「小川君、君は明治何年生まれかな」と聞いた。三四郎は単簡に、
「僕は二十三だ」と答えた。
「そんなものだろう。――先生僕は、丸行燈だの、雁首だのっていうものが、どうもきらいですがね。明治十五年以後に生まれたせいかもしれないが、なんだか旧式でいやな心持ちがする。君はどうだ」とまた三四郎のほうを向く。三四郎は、
「僕は別段きらいでもない」と言った。
「もっとも君は九州の田舎から出たばかりだから、明治元年ぐらいの頭と同じなんだろう」
三四郎も広田もこれに対して別段の挨拶をしなかった。少し行くと古い寺の隣の杉林を切り倒して、きれいに地平をしたうえに、青ペンキ塗りの西洋館を建てている。広田先生は寺とペンキ塗りを等分に見ていた。
「時代錯誤だ。日本の物質界も精神界もこのとおりだ。君、九段の燈明台を知っているだろう」と

（1）行燈の紙をはるわくを円筒状にしたもの。（2）時代を取り違えること。時代の傾向にあわないこと。（3）明治四年、九段坂上に設けられ、東京湾を出入りする漁船の目標とされた。現存。

また燈明台が出た。「あれは古いもので、江戸名所図会[1]に出ている」
「先生冗談言っちゃいけません。なんぼ九段の燈明台が古いたって、江戸名所図会に出ちゃ大変だ」
広田先生は笑い出した。実は東京名所という錦絵の間違いだということがわかった。先生の説によると、こんなに古い燈台が、まだ残っているそばに、偕行社[2]という新式の煉瓦作りができた。二つ並べてみると実に馬鹿げている。けれどもだれも気がつかない、平気でいる。これが日本の社会を代表しているんだと言う。
与次郎も三四郎もなるほどと言ったまま、お寺の前を通り越して、五、六町来ると、大きな黒い門がある。与次郎が、ここを抜けて道灌山へ出ようと言い出した。抜けてもいいのかと念を押すと、なにこれは佐竹の下屋敷[3]で、だれでも通れるんだからかまわないと主張するので、二人ともその気になって門をくぐって、藪の下を通って古い池のそばまで来ると、番人が出て来て、大変に三人をしかりつけた。その時与次郎はへいへいと言って番人にあやまった。
それから谷中へ出て、根津を回って、夕方に本郷の下宿へ帰った。三四郎は近来にない気楽な半日を暮らしたように感じた。
翌日学校へ出てみると与次郎がいない。昼から来るかと思ったが来ない。図書館へもはいったがやっぱり見当たらなかった。五時から六時まで純文科共通の講義がある。三四郎はこれへ出た。筆

（1）天保七年に出版された江戸の地誌。（2）陸軍将校などが親睦をはかる目的で建てた建物。（3）今の文京区駒込の道灌山下付近にあった。今はその跡が小公園になっている。

記をするには暗すぎる。電燈がつくには早すぎる。細長い窓の外に見える大きな欅の枝の奥が、次第に黒くなる時分だから、室の中は講師の顔も聴講生の顔も等しくぼんやりしている。したがって暗闇で饅頭を食うように、なんとなく神秘的である。三四郎は講義がわからないところが妙だと思った。頬杖を突いて聞いていると、神経が鈍くなって、気が遠くなる。これでこそ講義の価値があるような心持ちがする。ところへ電燈がぱっとついて、万事がやや明瞭になった。すると急に下宿へ帰って飯が食いたくなった。先生もみんなの心を察して、いいかげんに講義をきりあげてくれた。三四郎は早足で追分まで帰ってくる。

着物を脱ぎ換えて膳に向かうと、膳の上に、茶碗蒸しといっしょに手紙が一本載せてある。その上封を見たとき、三四郎はすぐ母から来たものだと悟った。すまんことだがこの半月あまり母のことはまるで忘れていた。きのうから今日へかけては時代錯誤だの、不二山の人格だの、神秘的な講義だので、例の女の影もいっこう頭の中へ出てこなかった。三四郎はそれで満足である。母の手紙はあとでゆっくり見ることとして、とりあえず食事をすまして、煙草をふかした。その煙を見るとさっきの講義を思い出す。

そこへ与次郎がふらりと現われた。どうして学校を休んだかと聞くと、貸家探しで学校どころじゃないそうである。

「そんなに急いで越すのかい」と三四郎が聞くと、

「急ぐって先月中に越すはずのところをあさっての天長節[1]まで待たしたんだから、どうしたって

(1) 当時は明治天皇の誕生日で、十一月三日。

明日中に探さなければならない。どこか心当たりはないか」と言う。

こんなに忙しがるくせに、きのうは散歩だか、貸家探しだかわからないようにぶらぶらつぶしていた。三四郎にはほとんど合点がいかない。与次郎はこれを解釈して、それは先生がいっしょだからさと言った。「元来先生が家を探すなんて間違っている。決して探したことのない男なんだが、きのうはどうかしていたにちがいない。おかげで佐竹の邸でひどい目にしかられていい面の皮だ。——君どこかないか」と急に催促する。与次郎が来たのはまったくそれが目的らしい。よくよく原因を聞いてみると、今の持ち主が高利貸で、家賃をむやみに上げるのが、業腹だというので、与次郎がこっちから立退きを宣告したのだそうだ。それでは与次郎に責任があるわけだ。

「今日は大久保まで行ってみたが、やっぱりない。——大久保といえば、ついでに宗八さんのところに寄って、よし子さんに会って来た。かわいそうにまだ色光沢が悪い。——辣薑性の美人——おっかさんが君によろしく言ってくれってことだ。しかしその後はあの辺もおだやかなようだ。轢死もあれぎりないそうだ」

与次郎の話はそれから、それへと飛んでいく。平生からしまりのないうえに、今日は家探しで少しせき込んでいる。話が一段落つくと、相の手のように、どこかないかどこかないかと聞く。しまいには三四郎も笑い出した。

そのうち与次郎の尻が次第に落ちついて来て、燈火親しむべし(1)などという漢語さえ借用してうれしがるようになった。話題は端なく広田先生の上に落ちた。

(1) 初秋の季節になって、灯火のそばで読書するに適当である。韓愈の「符読㆓書城南㆒詩」にある。

「君のところの先生の名はなんと言うのか」
「名は萇」と指で書いてみせて、「艸冠がよけいだ。字引にあるかしらん。妙な名をつけたものだね」と言う。
「高等学校の先生か」
「昔から今日に至るまで高等学校の先生。えらいものだ。十年一日のごとしと言うが、もう十二、三年になるだろう」
「子供はおるのか」
「子供どころか、まだ独身だ」
三四郎は少し驚いた。あの年まで一人でいられるものかとも疑った。
「なぜ奥さんをもらわないのだろう」
「そこが先生の先生たるところで、あれで大変な理論家なんだ。細君をもらってみない先から、細君はいかんものと理論できまっているんだそうだ。愚だよ。だから始終矛盾ばかりしている。先生、東京ほどきたないところはないように言う。それで石の門を見ると恐れをなして、いかんいかんとか、立派すぎるとかいうだろう」
「じゃ細君も試みに持ってみたらよかろう」
「大いに佳しとかなんとか言うかもしれない」
「先生は東京がきたないとか、日本人が醜いとか言うが、洋行でもしたことがあるのか」
「なにするものか。ああいう人なんだ。万事頭のほうが事実より発達しているんだからああなる

んだね。そのかわり西洋は写真で研究している。巴里の凱旋門だの、倫敦の議事堂だのたくさん持っている。あの写真で日本を律するんだからたまらない。きたないわけさ。それで自分の住んでるところは、いくらきたなくっても存外平気だから不思議だ」

「三等汽車へ乗っておったぞ」

「きたないきたないって不平を言やしないか」

「いや別に不平も言わなかった」

「しかし先生は哲学者だね」

「学校で哲学でも教えているのか」

「いや学校じゃ英語だけしか受け持っていないがね、あの人間が、おのずから哲学にできあがっているからおもしろい」

「著述でもあるのか」

「なにもない。ときどき論文を書くことはあるが、ちっとも反響がない。あれじゃだめだ。まるで世間が知らないんだからしようがない。先生、僕のことを丸行燈だといったが、夫子(1)自身は偉大な暗闇だ」

「どうかして、世の中へ出たらよさそうなものだな」

「出たらよさそうなものだって、——先生、自分じゃなんにもやらない人だからね。第一僕がいなけりゃ三度の飯さえ食えない人なんだ」

（1）長者・先生などに対する尊称。

三四郎はまさかと言わぬばかりに笑い出した。
「嘘じゃない。気の毒なほどなんにもやらないんでね。なんでも、僕が下女に命じて、先生の気に入るようにしまつをつけるんだが――そんな瑣末なことはとにかく、これから大いに活動して、先生を一つ大学教授にしてやろうと思う」
与次郎はまじめである。三四郎はその大言に驚いた。驚いてもかまわない。驚いたままに進行して、しまいに、「引越しをする時はぜひ手伝いに来てくれ」と頼んだ。まるで約束のできた家がとうからあるごとき口吻である。
与次郎の帰ったのはかれこれ十時近くである。一人ですわっていると、どことなく肌寒の感じがする。ふと気がついたら、机の前の窓がまだたてずにあった。障子をあけると月夜だ。目に触れるたびに不愉快な檜に、蒼い光がさして、黒い影の縁が少しけむって見える。檜に秋が来たのは珍らしいと思いながら、雨戸をたてた。
三四郎はすぐ床へはいった。三四郎は勉強家というよりむしろ彽徊家(1)なので、わりあい書物を読まない。そのかわりある掬すべき情景(2)に会うと、なんべんもこれを頭の中で新たにして喜んでいる。そのほうが命に奥行きがあるような気がする。今日も、いつもなら、神秘的講義の最中に、ぱっと電燈がつくところなどをくり返してうれしがるはずだが、母の手紙があるので、まず、それから片づけ始めた。

(1) あらゆる事物を左から眺めたり右から眺めたり、次々と連想の興味を起こして去りがたいというような趣味の人。
(2) あじわうべき趣のある情景。

手紙には新蔵が蜂蜜をくれたから、焼酎を混ぜて、毎晩盃に一杯ずつ飲んでいるとある。新蔵は家の小作人で、毎年冬になると年貢米を二十俵ずつ持ってくる。いたって正直なものだが、疳癪が強いので、ときどき女房を薪でなぐることがある。——三四郎は床の中で新蔵が蜂を飼い出した昔のことまで思い浮かべた。それは五年ほど前である。裏の椎の木に蜜蜂が二、三百匹ぶら下がっていたのを見つけてすぐ籾漏斗(1)に酒を吹きかけて、ことごとく生捕りにした。それからこれを箱へ入れて、出入りのできるような穴をあけて、日当たりのいい石の上に据えてやった。すると蜂がだんだんふえて来る。箱が一つでは足りなくなる。二つにする。また足りなくなる。三つにする。というふうにふやしていった結果、今ではなんでも六箱か七箱ある。そのうちの一箱を年に一度ずつ石からおろして蜂のために蜜を切り取ると言っていた。毎年夏休みに帰るたびに蜜をあげましょうと言わないことはないが、ついに持って来たためしがなかった。が今年は物覚えが急によくなって、年来の約束を履行したものであろう。

平太郎が親爺の石塔を建てたから見に来てくれろと頼みにきたとある。行ってみると、木も草も生えていない庭の赤土のまん中に、御影石でできていたそうである。平太郎はその御影石が自慢なのだと書いてある。山から切り出すのに幾日とかかって、それから石屋に頼んだら十円取られた。百姓やなにかにはわからないが、あなたのとこの若旦那は大学校へはいっているくらいだから、石の善悪はきっとわかる。今度手紙のついでに聞いてみてくれ、そうして十円もかけて親爺のためにこしらえてやった石塔を賞めてもらってくれと言うんだそうだ。——三四郎はひとりでくすくす笑

(1) 籾を俵や袋に入れるのにもちいる大形の漏斗。

い出した。千駄木の石門よりよほど激しい。

大学の制服を着た写真をよこせとある。三四郎はいつか撮ってやろうと思いながら、次へ移ると、案のごとく三輪田のお光さんが出て来た。——このあいだお光さんのおっかさんが来て、三四郎さんも近々大学を卒業なさることだが、卒業したら宅の娘をもらってくれまいかという相談であった。お光さんは器量もよし気質も優しいし、家に田地もだいぶあるし、そのうえ家と家との今までの関係もあることだから、そうしたら双方とも都合がいいだろうと書いて、そのあとへ但し書がつけてある。——お光さんもうれしがるだろう。——東京のものは気心が知れないから私はいやじゃ。

三四郎は手紙を巻き返して、封に入れて、枕もとへ置いたまま眼を眠った。鼠が急に天井で暴れ出したが、やがて静まった。

三四郎には三つの世界ができた。一つは遠くにある。与次郎のいわゆる明治十五年前の香がする。すべてが平穏であるかわりにすべてが寝ぼけている。もっとも帰るに世話はいらない。もどろうとすれば、すぐにもどれる。ただいざとならない以上はもどる気がしない。言わば立退場のようなものである。三四郎は脱ぎ棄てた過去を、この立退場の中へ封じ込めた。なつかしい母さえここに葬ったかと思うと、急にもったいなくなる。そこで手紙が来た時だけは、しばらくこの世界に低徊して旧歓を温める。

第二の世界のうちには、苔の生えた煉瓦造りがある。片すみから片すみを見渡すと、向こうの人の顔がよくわからないほどに広い閲覧室がある。梯子をかけなければ、手の届きかねるまで高く積み重ねた書物がある。手擦れ、指の垢、で黒くなっている。金文字で光っている。羊皮、牛皮、二

百年前の紙、それからすべての上に積った塵がある。この塵は二、三十年かかってようやく積った貴い塵である。静かな月日にうち勝つほどの静かな塵である。

第二の世界に動く人の影を見ると、たいてい不精な髭をはやしている。あるものは空を見て歩いている。あるものは俯向いて歩いている。服装は必ずきたない。生計はきっと貧乏である。そうして晏如[1]としている。電車に取り巻かれながら、太平の空気を、通天に呼吸[2]してはばからない。このなかに入るものは、現世を知らないから不幸で、火宅をのがれる[3]から幸いである。広田先生はこのうちにいる。野々宮君もこのうちにいる。三四郎はこのうちの空気をほぼ解しえたところにいる。出れば出られる。しかしせっかく解しかけた趣味を思いきって捨てるのも残念だ。

第三の世界は燦として春のごとくうごいている。電燈がある。銀匙がある。歓声がある。笑語がある。泡立つ三鞭の盃がある。そうしてすべての上の冠として美しい女性がある。三四郎はその女性の一人に口をきいた。一人を二へん見た。この世界は三四郎にとって最も深厚な世界である。この世界は鼻の先にある。ただ近づきがたい。近づきがたい点において、天外の稲妻と一般である。三四郎は遠くからこの世界をながめて、不思議に思う。自分がこの世界のどこかへはいらなければ、その世界のどこかに欠陥ができるような気がする。自分はこの世界のどこかの主人公であるべき資格を有しているらしい。それにもかかわらず、円満の発達をこいねがうべきはずのこの世界がかえってみずからを束縛して、自分が自由に出入すべき通路をふさいでいる。三四郎にはこれが

(1) 落ちついているさま。　(2) 大空に向かって息をして。　(3) この世をのがれる。この世は煩悩が盛んで安らかでないため、あたかも燃える家のようであるという仏教思想による語。

不思議であった。

三四郎は床のなかで、この三つの世界を並べて、互いに比較してみた。次にこの三つの世界をかき混ぜて、その中から一つの結果を得た。――要するに、国から母を呼び寄せて、美しい細君を迎えて、そうして身を学問にゆだねるに越したことはない。

結果はすこぶる平凡である。けれどもこの結果に到着する前にいろいろ考えたのだから、思索の労力を打算して、結論の価値を上下（しょうか）しやすい思索家自身からみると、それほど平凡ではなかった。

ただこうすると広い第三の世界を眇（びょう）たる一個の細君で代表させることになる。美しい女性（にょしょう）はたくさんある。美しい女性を翻訳するといろいろになる。――三四郎は広田先生にならって、翻訳という字を使ってみた。――いやしくも人格上の言葉に翻訳のできるかぎりは、その翻訳から生ずる感化の範囲を広くして、自己の個性を完（まった）からしむるために、なるべく多くの美しい女性に接触しなければならない。細君一人を知って甘んずるのは、進んで自己の発達を不完全にするようなものである。

三四郎は論理をここまで延長してみて、少し広田さんにかぶれたなと思った。実際のところは、これほど痛切に不足を感じていなかったからである。

翌日学校へ出ると講義は例によってつまらないが、室内の空気は依然として俗を離れているので、午後三時までのあいだに、すっかり第二の世界の人となりおおせて、さも偉人のような態度をもって、追分（おいわけ）の交番の前まで来ると、ばったり与次郎に出会った。

「アハハハ。アハハハハ」

偉人の態度はこれがためにまったくくずれた。交番の巡査さえ薄笑いをしている。

「なんだ」
「なんだもないものだ。もう少し普通の人間らしく歩くがいい。まるで浪漫的(ロマンチック)アイロニー[1]だ」
三四郎にはこの洋語の意味がよくわからなかった。しかたがないから、
「家はあったか」と聞いた。
「そのことで今君のところへ行ったんだ——あすいよいよ引っ越す。手伝いに来てくれ」
「どこへ越す」
「西片町(にしかたまち)十番地への三号。九時までに向こうへ行って掃除をしてね。待っててくれ。あとから行くから。いいか、九時までだぜ。への三号だよ。失敬」
与次郎は急いで行きすぎた。三四郎も急いで下宿へ帰った。その晩取って返して、図書館で浪漫的(ロマンチック)アイロニーという句を調べてみたら、独逸(ドイツ)のシュレーゲル[2]が唱え出した言葉で、なんでも天才というものは、目的も努力もなく、終日ぶらぶらぶらついていなくってはだめだという説だと書いてあった。三四郎はようやく安心して、下宿へ帰って、すぐ寝た。
あくる日は約束だから、天長節にもかかわらず、例刻に起きて、学校へ行くつもりで西片町十番地へはいって、への三号を調べてみると、妙に細い通りの中ほどにある。古い家だ。
玄関のかわりに西洋間が一つ突き出していて、それと鉤(かぎ)の手(て)に座敷がある。座敷のうしろが茶の間で、茶の間の向こうが勝手、下女部屋と順に並んでいる。ほかに二階がある。ただし何畳だかわ

(1) ドイツの文学史上の用語。いっさいのものを離れ乗りこえて高所に立った精神的自由をいうもの。(2) フリードリッヒ・シュレーゲル。一七七二～一八二九、ドイツの文芸批評家。兄のアウグストと共にドイツ浪漫派の理論的代表者。その著「文学対話」は浪漫主義文芸論の頂点である。

からない。

三四郎は掃除を頼まれたのだが、別に掃除をする必要もないと認めた。むろんきれいじゃない。しかしなにといって、取って捨てるべきものも見当たらない。しいて捨てれば畳建具ぐらいなものだと考えながら、雨戸だけをあけて、座敷の縁側へ腰をかけて庭をながめていた。

大きな百日紅がある。しかしこれは根が隣にあるので、幹の半分以上が横に杉垣から、こっちの領分をおかしているだけである。大きな桜がある。これはたしかに垣根の中にはえている。そのかわり枝が半分往来へ逃げ出して、もう少しすると電話の妨害になる。菊が一株ある。けれども寒菊とみえて、いっこう咲いていない。このほかにはなにもない。気の毒なような庭である。ただ土だけは平らで、きめが細かではなはだ美しい。三四郎は土を見ていた。実際土を見るようにできた庭である。

そのうち高等学校で天長節の式の始まる号鐘が鳴り出した。三四郎は号鐘を聞きながら九時が来たんだろうと考えた。なにもしないでいても悪いから、桜の枯葉でも掃こうかしらんとようやく気がついた時、また箒がないということを考え出した。また縁側へ腰をかけた。かけて二分もしたかと思うと、庭木戸がすうとあいた。そうして思いも寄らぬ池の女が庭の中にあらわれた。

二方は生垣で仕切ってある。四角な庭は十坪に足りない。三四郎はこの狭い囲いの中に立った池の女を見るやいなや、たちまち悟った。――花は必ず剪って、瓶裏にながむ(1)べきものである。

この時三四郎の腰は縁側を離れた。女は折戸(2)を離れた。

(1) 花瓶の中でながめる。狭い庭でながめる女が非常に美しいことをいっている。　(2) 庭先の開き戸。

「失礼でございますが……」

女はこの句を冒頭において会釈した。腰から上を例のとおり前へ浮かしたが、顔は決して下げない。会釈しながら三四郎を見つめている。女の咽喉が正面から見ると長く延びた。同時にその眼が三四郎の眸に映った。

二、三日前三四郎は美学の教師からグルーズ(1)の絵を見せてもらった。その時美学の教師が、この人のかいた女の肖像はことごとくヴォラプチュアス(2)な表情に富んでいると説明した。ヴォラプチュアス！　池の女のこの時の眼つきを形容するにはこれよりほかに言葉がない。なにか訴えている。艶なるあるものを訴えている。そうしてまさしく官能に訴えている。けれども官能の骨をとおして髄に徹する訴え方である。甘いものにたえうる程度をこえて、激しい刺激と変ずる訴え方である。甘いと言わんよりは苦痛である。卑しく媚びるのとはむろん違う。見られるもののほうがぜひ媚びたくなるほどに残酷な眼つきである。しかもこの女にグルーズの絵と似たところは一つもない。眼はグルーズのより半分も小さい。

「広田さんのお移転になるのは、こちらでございましょうか」

「はあ、ここです」

女の声と調子にくらべると、三四郎の答えはすこぶるぶっきら棒である。三四郎も気がついている。けれどもほかに言いようがなかった。

「まだお移りにならないんでございますか」女の言葉ははっきりしている。普通のようにあとを

(1) 一七二五〜一八〇五、フランスの画家。好んで庶民の生活を描いた。　(2) 肉感的。あだっぽい。

風が　女を包んだ
女は　秋の中に立っている

濁さない。
「まだ来ません。もう来るでしょう」
女はしばしためらった。手に大きな籃をさげている。女の着物は例によって、わからない。ただいつものように光らないだけが眼についた。地がなんだかぶつぶつしている。それに縞だか模様だかある。その模様がいかにもでたらめである。
上から桜の葉がときどき落ちて来る。その一つが籃の蓋の上に乗った。乗ったと思ううちに吹かれて行った。風が女を包んだ。女は秋の中に立っている。
「あなたは……」
風が隣へ越した時分、女が三四郎に聞いた。
「掃除に頼まれて来たのです」と言ったが、現に腰をかけてぽかんとしていたところを見られたのだから、三四郎は自分でもおかしくなった。
「じゃ私も少しお待ち申しましょうか」と言った。すると女も笑いながら、
その言い方が三四郎に許諾を求めるように聞こえたので、三四郎は大いに愉快であった。そこで「ああ」と答えた。三四郎の料簡では、「ああ、お待ちなさい」を略したつもりである。女はそれでもまだ立っている。三四郎はしかたがないから、
「あなたは……」と向こうで聞いたようなことをこっちからも聞いた。すると、女は籃を縁の上へ置いて、帯のあいだから、一枚の名刺を出して、三四郎にくれた。
名刺には里見美禰子とあった。本郷真砂町だから谷を越すとすぐ向こうである。三四郎がこの名刺をながめているあいだに、女は縁に腰をおろした。

「あなたにはお目にかかりましたな」と名刺を袂へ入れた三四郎が顔をあげた。
「はあ。いつか病院で……」と言って女もこっちを向いた。
「まだある」
「それから池の端で……」と女はすぐ言った。よく覚えている。三四郎はそれで言うことがなくなった。女は最後に、
「どうも失礼いたしました」と句切りをつけたので、三四郎は、
「いいえ」と答えた。すこぶる簡潔である。両人は桜の枝を見ていた。梢に虫の食ったような葉がわずかばかり残っている。引っ越しの荷物はなかなかやって来ない。
「なにか先生にご用なんですか」
三四郎は突然こう聞いた。高い桜の枯枝を余念なくながめていた女は、急に三四郎のほうをふり向く。あらびっくりした、ひどいわ、という顔つきであった。しかし答えは尋常である。
「わたくしもお手伝いに頼まれました」
三四郎はこの時はじめて気がついて見ると、女の腰をかけている縁に砂がいっぱいたまっている。
「砂でたいへんだ。着物がよごれます」
「ええ」と左右をながめたぎりである。腰を上げない。しばらく縁を見回した眼を、三四郎に移すやいなや、
「掃除はもうなすったんですか」と聞いた。笑っている。三四郎はその笑いの中になれやすいあるものを認めた。

「まだやらんです」
「お手伝いをして、いっしょに始めましょうか」
三四郎はすぐに立った。女は動かない。腰をかけたまま、箒（ほうき）やハタキのありかを聞く。三四郎は、ただてぶらで来たのだから、どこにもない、なんなら通りへ行って買って来ようかと聞くと、それはむだだから、隣で借りるほうがよかろうと言う。三四郎はすぐ隣へ行った。さっそく箒とハタキと、それから馬尻（ばけつ）(1)と雑巾（ぞうきん）まで借りて急いで帰ってくると、女は依然としてもとのところへ腰をかけて、高い桜の枝をながめていた。
「あって……」と一口言っただけである。
三四郎は箒を肩へかついで、馬尻を右の手へぶら下げて「ええありました」と当たり前のことを答えた。
女は白足袋（しろたび）のまま砂だらけの縁側へ上がった。あるくと細い足のあとができる。袂から白い前垂（まえだれ）を出して帯の上から締めた。その前垂の縁（ふち）がレースのようにかがってある。掃除をするにはもったいないほどきれいな色である。女は箒を取った。
「いったん掃き出しましょう」と言いながら、袖の裏から右の手を出して、ぶらつく袂を肩の上へかついだ。きれいな手が二の腕まで出た。かついだ袂の端（はじ）からは美しい襦袢（じゅばん）の袖が見える。茫然（ぼうぜん）として立っていた三四郎は、突然馬尻を鳴らして勝手口へ回った。
美禰子が掃くあとを、三四郎が雑巾をかける。三四郎が畳をたたくあいだに、美禰子が障子をは

(1) 漱石特有のあて字。

たく。どうかこうか掃除がひととおりすんだ時は二人ともだいぶ親しくなった。
三四郎が馬尻の水を取り換えに台所へ行ったあとで、美禰子がハタキと箒を持って二階へ上った。
「ちょっと来てください」と上から三四郎を呼ぶ。
「なんですか」と馬尻をさげた三四郎が梯子段の下から言う。女は暗いところに立っている。前垂だけがまっ白だ。三四郎は馬尻をさげたまま二、三段上った。女はじっとしている。三四郎はまた二段上った。薄暗いところで美禰子の顔と三四郎の顔が一尺ばかりの距離に来た。
「なんですか」
「なんだか暗くってわからないの」
「なぜ」
「なぜでも」
三四郎は追究する気がなくなった。美禰子のそばをすり抜けて上へ出た。馬尻を暗い縁側へ置いて戸をあける。なるほど桟のぐあいがよくわからない。そのうち美禰子も上がって来た。
「まだあからなくって」
美禰子は反対のがわへ行った。
「こっちです」
三四郎はだまって、美禰子のほうへ近寄った。もう少しで美禰子の手に自分の手が触れるところで、馬尻に蹴つまずいた。大きな音がする。ようやくのことで戸を一枚あけると、強い日がまとも

に射し込んだ。眩しいくらいである。二人は顔を見合わせて思わず笑い出した。

裏の窓もあける。窓には竹の格子がついている。家主の庭が見える。鶏を飼っている。美禰子は例のごとく掃き出した。三四郎は四つ這いになって、あとから拭き出した。美禰子は箒を両手で持ったまま、三四郎の姿を見て、

「まあ」と言った。

やがて、箒を畳の上へなげ出して、裏の窓のところへ行って、立ったまま外面をながめている。そのうち三四郎も拭き終わった。ぬれ雑巾を馬尻の中へぼちゃんとたたき込んで、美禰子のそばへ来て並んだ。

「なにを見ているんです」

「あててごらんなさい」

「鶏ですか」

「いいえ」

「あの大きな木ですか」

「いいえ」

「じゃなにを見ているんです。僕にはわからない」

「わたくしさっきからあの白い雲を見ておりますの」

なるほど白い雲が大きな空を渡っている。空は限りなく晴れて、どこまでも青く澄んでいる上を、綿の光ったような濃い雲がしきりに飛んで行く。風の力がはげしいとみえて、雲の端が吹き散

らされると、青い地が透いて見えるほどに薄くなる。あるいは吹き散らされながら、塊まって、白く柔らかな針を集めたように、ささくれ立つ。美禰子はその塊を指さして言った。

「駝鳥の襟巻に似ているでしょう」

三四郎はボーアという言葉を知らなかった。それで知らないと言った。美禰子はまた、

「まあ」と言ったが、すぐ丁寧にボーアを説明してくれた。その時三四郎は、

「うん、あれなら知っとる」と言った。そうして、あの白い雲はみんな雪の粉で、下から見てあのくらいに動く以上は、颶風以上の速度でなくてはならないと、このあいだ野々宮さんから聞いたとおりを教えた。美禰子は、

「あらそう」と言いながら三四郎を見たが、

「雪じゃつまらないわね」と否定を許さぬような調子であった。

「なぜです」

「なぜでも、雲は雲でなくっちゃいけないわ。こうして遠くからながめているかいがないじゃありませんか」

「そうですか」

「そうですかって、あなたは雪でもかまわなくって」

「あなたは高いところを見るのが好きのようですな」

「ええ」

美禰子は竹の格子の中から、まだ空をながめている。白い雲はあとから、あとから、飛んで来る。

ところへ遠くから荷車の音が聞こえる。今静かな横町を曲がって、こっちへ近づいて来るのが地響きでよくわかる。三四郎は「来た」と言った。美禰子は「早いのね」と言ったままじっとしている。車の音の動くのが、白い雲の動くのに関係でもあるように耳をすましている。車は落ちついた秋の中を容赦なく近づいて来る。やがて門の前へ来てとまった。

三四郎は美禰子を捨てて二階をかけ降りた。三四郎が玄関へ出るのと、与次郎が門をはいるのとが同時同刻であった。

「早いな」と与次郎がまず声をかけた。

「遅いな」と三四郎がこたえた。美禰子とは反対である。

「遅いって、荷物を一度に出したんだからしかたがない。それに僕一人だから。あとは下女と車屋ばかりでどうすることもできない」

「先生は」

「先生は学校」

二人が話を始めているうちに、車屋が荷物をおろし始めた。下女もはいって来た。台所のほうを下女と車屋に頼んで、与次郎と三四郎は書物を西洋間へ入れる。書物がたくさんある。並べるのは一仕事だ。

「里見のお嬢さんは、まだ来ていないか」

「来ている」

「どこに」

「二階にいる」
「二階になにをしている」
「なにをしているか、二階にいる」
「冗談じゃない」
与次郎は本を一冊持ったまま、廊下伝いに階子段の下まで行って、例のとおりの声で、「里見さん、里見さん。書物を片づけるから、ちょっと手伝ってください」と言う。
「ただいま参ります」
箒とハタキを持って、美禰子は静かに降りて来た。
「なにをしていたんです」と下から与次郎がせき立てるように聞く。
「二階のお掃除」と上から返事があった。
降りるのを待ちかねて、与次郎は美禰子を西洋間の戸口のところへ連れて来た。車力(1)のおろした書物がいっぱい積んである。三四郎がその中へ、向こうむきにしゃがんで、しきりになにか読み始めている。
「まあ大変ね。これをどうするの」と美禰子が言った時、三四郎はしゃがみながら振り返った。にやにや笑っている。
「大変もなにもありゃしない。これを室の中へ入れて、片づけるんです。今に先生も帰って来て手伝うはずだからわけはない。――君、しゃがんで本なんぞ読み出しちゃ困る。あとで借りていっ

(1) 大八車などをひいて、荷物運搬を業とする人。

てゆっくり読むがいい」と与次郎が小言を言う。

美禰子と三四郎が戸口で本をそろえると、それを与次郎が受け取って室の中の書棚へ並べるという役割ができた。

「そう乱暴に、出しちゃ困る。まだこの続きが一冊あるはずだ」と与次郎が青い平たい本を振り回す。

「だってないんですもの」

「なにないことがあるものか」

「あった、あった」と三四郎が言う。

「どら、拝見」と美禰子が顔を寄せて来る。「ヒストリー・オフ・インテレクチュアル・デヴェロップメント[1]。あらあったのね」

「あらあったもないもんだ。早くお出しなさい」

三人は約三十分ばかり根気に働いた。しまいにはさすがの与次郎もあまりせっつかなくなった。見ると書棚のほうを向いてあぐらをかいて黙っている。美禰子は三四郎の肩をちょっと突っついた。三四郎は笑いながら、

「おいどうした」と聞く。

「うん。先生もまあ、こんなにいりもしない本を集めてどうする気かなあ。まったく人泣かせだ。今これを売って株でも買っておくともうかるんだが、しかたがない」と嘆息したまま、やはり壁を

(1)「知的発展の歴史」。漱石の蔵書中にジョン・ビーティー・クロージャー(一八四九～一九二一)の同名の著書がある。

向いてあぐらをかいている。
三四郎と美禰子は顔を見合わせて笑った。肝心の主脳が動かないので、二人とも書物をそろえるのを控えている。三四郎は詩の本をひねくり出した。美禰子は大きな画帖を膝の上に開いた。勝手のほうでは臨時雇いの車夫と下女がしきりに論判している。大変騒々しい。
「ちょっとごらんなさい」と美禰子が小さな声で言う。三四郎は及び腰になって、画帖の上へ顔を出した。美禰子の髪で香水の匂いがする。
絵はマーメイドの図である。裸体の女の腰から下が魚になって、魚の胴が、ぐるりと腰を回って、向こう側に尾だけ出ている。女は長い髪を櫛ですきながら、すき余ったのを手に受けながら、こっちを向いている。背景は広い海である。
「人魚」
「人魚」
頭をすりつけた二人は同じことをささやいた。この時あぐらをかいていた与次郎がなんと思ったか、
「なんだ、なにを見ているんだ」と言いながら廊下へ出て来た。三人は首をあつめて画帖を一枚ごとに繰って行った。いろいろな批評が出る。みんないいかげんである。
ところへ広田先生がフロックコートで天長節の式から帰って来た。三人は挨拶をするときに画帖を伏せてしまった。先生が書物だけ早く片づけようというので、三人がまた根気にやり始めた。今度は主人公がいるので、そう油を売ることもできなかったとみえて、一時間後には、どうか、こう

か廊下の書物が書棚の中へ詰まってしまった。四人は立ち並んできれいに片づいた書物を一応ながめた。

「あとの整理はあしただ」と与次郎が言った。これでがまんなさいと言わぬばかりである。

「だいぶお集めになりましたね」と美禰子が言う。

「先生これだけみんなお読みになったですか」と最後に三四郎が聞いた。三四郎は実際参考のため、この事実を確かめておく必要があったとみえる。

「みんな読めるものか、佐々木なら読むかもしれないが」

与次郎は頭をかいている。三四郎はまじめになって、実はこのあいだから大学の図書館で、少しずつ本を借りて読むが、どんな本を借りても、必ずだれか目を通している。ためしにアフラ・ベーンという人の小説を借りてみたが、やっぱりだれか読んだあとがあるので、読書範囲の際限が知りたくなったから聞いてみたと言う。

「アフラ・ベーンなら僕も読んだ」

広田先生のこの一言には三四郎も驚いた。

「驚いたな。先生はなんでも人の読まないものを読む癖(くせ)がある」と与次郎が言った。

広田は笑って座敷のほうへ行く。着物を着換えるためだろう。美禰子もついて出た。あとで与次郎が三四郎にこう言った。

「あれだから偉大な暗闇(くらやみ)だ。なんでも読んでいる。けれどもちっとも光らない。もう少し流行(はや)るものを読んでもう少し出しゃばってくれるといいがな」

与次郎の言葉は決して冷評ではなかった。三四郎は黙って本箱をながめていた。すると座敷から美禰子の声が聞こえた。

「ご馳走を上げるからお二人ともいらっしゃい」

二人が書斎から廊下伝いに、座敷へ来てみると、座敷のまん中に美禰子の持ってきた籃（バスケット）が据えてある。蓋（ふた）が取ってある。中にサンドウィッチがたくさんはいっている。美禰子はそのそばにすわって、籃（かご）の中のものを小皿へ取り分けている。与次郎と美禰子の問答が始まった。

「よく忘れずに持って来ましたね」

「だって、わざわざご注文ですもの」

「その籃（かご）も買って来たんですか」

「いいえ」

「家にあったんですか」

「ええ」

「大変大きなものですね。車夫でも連れて来たんですか。ついでに、少しのあいだ置いて働かせればいいのに」

「車夫は今日は使いに出ました。女だってこのくらいなものは持てますわ」

「あなただから持つんです。ほかのお嬢さんなら、まあやめますね」

「そうでしょうか。それなら私もやめればよかった」

美禰子は食い物を小皿へ取りながら、与次郎と応対している。言葉に少しもよどみがない。しか

もゆっくり落ちついている。ほとんど与次郎の顔を見ないくらいである。三四郎は敬服した。

台所から下女が茶を持ってくる。籃を取り巻いた連中は、サンドウィッチを食い出した。少しのあいだは静かであったが、思い出したように与次郎がまた広田先生に話しかけた。

「先生、ついでだからちょっと聞いておきますがさっきのなんとかベーンですね」

「アフラ・ベーンか」

「全体なんです、そのアフラ・ベーンというのは」

「英国の閨秀作家(1)だ。十七世紀の」

「十七世紀は古すぎる。雑誌の材料にゃなりませんね」

「古い。しかし職業として小説に従事したはじめての女だから、それで有名だ」

「有名じゃ困るな。もう少し伺っておこう。どんなものを書いたんですか」

「僕はオルノーコ(2)という小説を読んだだけだが、小川さん、そういう名の小説が全集のうちにあったでしょう」

三四郎はきれいに忘れている。先生にその梗概を聞いてみると、オルノーコという黒ん坊の王族が英国の船長にだまされて、奴隷に売られて、非常に難儀をすることが書いてあるのだそうだ。しかもこれは作家の実見譚だとして後世に信ぜられているという話である。

「おもしろいな。里見さん、どうです、一つオルノーコでも書いちゃあ」と与次郎はまた美禰子のほうへ向かった。

(1) 女流作家。 (2) 一六八八年に書かれた小説。

「書いてもよござんすけれども、わたくしにはそんな実見譚がないんですもの」
「黒ん坊の主人公が必要なら、その小川君でもいいじゃありませんか。九州の男で色が黒いから」
「口の悪い」と美禰子は三四郎を弁護するように言ったが、すぐあとから三四郎のほうを向いて、
「書いてもよくって」と聞いた。その眼を見た時に、三四郎はけさ籃をさげて、折戸からあらわれた瞬間の女を思い出した。おのずから酔った心地である。けれども酔ってすくんだ心地である。どうぞ願いますなどとはむろん言いえなかった。

広田先生は例によって煙草をのみ出した。与次郎はこれを評して鼻から哲学の煙を吐くと言った。なるほど煙の出方が少し違う。悠然として太くたくましい棒が二本穴を抜けて来る。与次郎はその煙柱をながめて、半分背を唐紙に持たしたまま黙っている。三四郎の眼はぼんやり庭の上にある。引っ越しではない。まるで小集のていに見える。談話もしたがって気楽なものである。ただ美禰子だけが広田先生の陰で、先生がさっき脱ぎ棄てた洋服をたたみ始めた。先生に和服を着せたのも美禰子の所為とみえる。
「今のオルノーコの話だが、君はそそっかしいから間違えるといけないからついでに言うがね」と先生の煙がちょっととぎれた。
「へえ、伺っておきます」と与次郎が几帳面に言う。
「あの小説が出てから、サザーン(1)という人がその話を脚本に仕組んだのが別にある。やはり同じ名でね。それをいっしょにしちゃいけない」

(1) 一六六〇～一七四六、イギリスの劇作家。一六九六年、ベーンのオルノーコを戯曲化して発表した。

「へえ、いっしょにしやしません」

洋服をたたんでいた美禰子はちょっと与次郎の顔を見た。

「その脚本のなかに有名な句がある。Pity's akin to love という句だが……」それだけでまた哲学の煙をさかんにふきだした。

「日本にもありそうな句ですな」と今度は三四郎が言った。ほかのものも、みんなありそうだと言い出した。けれどもだれにも思い出せない。では一つ訳してみたらよかろうということになって、四人がいろいろに試みたがいっこうにまとまらない。しまいに与次郎が、

「これは、どうしても俗謡でゆかなくっちゃだめですよ。句の趣が俗謡だもの」と与次郎らしい意見を提出した。

そこで三人がぜんぜん翻訳権を与次郎に委任することにした。与次郎はしばらく考えていたが、

「少し無理ですがね、こういうなどうでしょう。可哀想だた惚れたってことよ」

「いかん、いかん、下劣の極だ」と先生がたちまち苦い顔をした。その言い方がいかにも下劣らしいので、三四郎と美禰子は一度に笑い出した。この笑い声がまだやまないうちに、庭の木戸がぎいとあいて、野々宮さんがはいって来た。

「もうたいてい片づいたんですか」と言いながら、野々宮さんは縁側の正面のところまで来て、部屋のなかにいる四人をのぞくように見渡した。

「まだ片づきませんよ」と与次郎がさっそく言う。

「少し手伝っていただきましょうか」と美禰子が与次郎に調子を合わせた。野々宮さんはにやに

や笑いながら、

「だいぶにぎやかなようですね。なにかおもしろいことがありますか」と言って、ぐるりとうしろ向きに縁側へ腰をかけた。

「今僕が翻訳をして先生にしかられたところです」

「翻訳を？　どんな翻訳ですか」

「なにつまらない——可哀想だた惚れたってことよというんです」

「へえ」と言った野々宮君は縁側で筋かいに向き直った。「いったいそりゃなんですか。僕にゃ意味がわからない」

「だれにだってわからんさ」と今度は先生が言った。

「いや、少し言葉をつめすぎたから——当たり前に延ばすと、こうです。可哀想だとはほれたということよ」

「アハハハ。そうしてその原文はなんというのです」

「Pity's akin to love」と美禰子がくり返した。美しいきれいな発音であった。

野々宮さんは、縁側から立って、二、三歩庭のほうへ歩き出したが、やがてまたぐるりと向き直って、部屋を正面にとまった。

「なるほどうまい訳だ」

三四郎は野々宮君の態度と視線とを注意せずにはいられなかった。

美禰子は台所へ立った。茶碗を洗って、新しい茶をついで、縁側の端まで持って出る。

「お茶を」と言ったまま、そこへすわった。「よし子さんは、どうなすって」と聞く。
「ええ、からだのほうはもう回復しましたが」とまた腰をかけて茶を飲む。それから、少し先生のほうへ向いた。
「先生、せっかく大久保へ越したが、またこっちのほうへ出なければならないようになりそうです」
「なぜ」
「妹が学校へ行き帰りに、戸山の原を通るのがいやだといい出しましてね。それに僕が夜実験をやるものですから、遅くまで待っているのが淋しくっていけないんだそうです。もっとも今のうちは母がいるからかまいませんが、もう少しして、母が国へ帰ると、あとは下女だけになるものですからね。臆病もの二人ではとうていしんぼうしきれないのでしょう。――実にやっかいだな」と冗談半分の嘆声をもらしたが、「どうです里見さん、あなたのところへでも食客に置いてくれませんか」と美禰子の顔を見た。
「いつでも置いてあげますわ」
「どっちです。宗八さんのほうをですか、よし子さんのほうをですか」と与次郎が口を出した。
「どちらでも」
三四郎だけ黙っていた。広田先生は少しまじめになって、
「そうして君はどうする気なんだ」
「妹のしまつさえつけば、当分下宿してもいいです。それでなければ、またどこかへ引っ越さな

ければならない。いっそ学校の寄宿舎へでも入れようかと思うんですがね。なにしろ子供だから、僕が始終行けるか、向こうが始終来られるところでないと困るんです」

「それじゃ里見さんのところにかぎる」と与次郎がまた注意を与えた。広田さんは与次郎を相手にしない様子で、

「僕のところの二階へ置いてやってもいいが、なにしろ佐々木のようなものがいるから」と言う。

「先生、二階へぜひ佐々木を置いてやってください」と与次郎自身が依頼した。野々宮君は笑いながら、

「まあ、どうかしましょう。――身長ばかり大きくって馬鹿だから実に弱る。あれで団子坂の菊人形[1]が見たいから、連れて行けなんて言うんだから」

「連れて行ってお上げなさればいいのに。わたくしだって見たいわ」

「じゃいっしょに行きましょうか」

「ええぜひ。小川さんもいらっしゃい」

「ええ行きましょう」

「佐々木さんも」

「菊人形はごめんだ。菊人形を見るくらいなら活動写真を見に行きます」

「菊人形はいいよ」と今度は広田先生が言い出した。「あれほどに人工的なものはおそらく外国にもないだろう。人工的によくこんなものをこしらえたというところを見ておく必要がある。あれが

(1) 団子坂は文京区駒込千駄木町から谷中・上野に通じる坂。明治末年まで狭い坂で、秋の菊人形は東京風物詩をなした。

普通の人間にできていたら、おそらく団子坂へ行くものは一人もあるまい。普通の人間なら、どこの家でも四、五人は必ずいる。団子坂へ出かけるには当たらない」
「先生一流の論理だ」と与次郎が評した。
「昔教場で教わる時にも、よく、あれでやられたものだ」と野々宮君が言った。
「じゃ先生もいらっしゃい」と美禰子が最後に言う。先生は黙っている。みんな笑い出した。
台所から婆さんが「どなたかちょいと」と言う。与次郎は「おい」とすぐ立った。三四郎はやはりすわっていた。
「どれ僕も失礼しようか」と野々宮さんが腰を上げる。
「あらもうお帰り。ずいぶんね」と美禰子が言う。
「このあいだのものはもう少し待ってくれたまえ」と広田先生が言うのを、「ええ、ようござんす」と受けて、野々宮さんが庭から出て行った。その影が折戸の外へ隠れると、美禰子は急に思い出したように「そうそう」と言いながら、庭先に脱いであった下駄をはいて、野々宮のあとを追いかけた。表でなにか話している。
三四郎は黙ってすわっていた。

五

門をはいると、このあいだの萩が、人の丈より高く茂って、株の根に黒い影ができている。この

黒い影が地の上をはって、奥のほうへ行くと、見えなくなる。葉と葉の重なる裏まで上って来るようにも思われる。それほど表には濃い日が当たっている。手洗い水のそばに南天がある。これも普通よりは背が高い。三本寄ってひょろひょろしている。葉は便所の窓の上にある。

萩と南天のあいだに縁側が少し見える。縁側は南天を基点として斜に向こうへ走っている。萩のかげになったところは、一番遠いはずれになる。それで萩は一番手前にある。よし子はこの萩のかげにいた。縁側に腰をかけて。

三四郎は萩とすれすれに立った。よし子は縁から腰を上げた。足は平たい石の上にある。三四郎はいまさらその背の高いのに驚いた。

「おはいりなさい」

依然として三四郎を待ち設けたような言葉づかいである。三四郎は病院の当時を思い出した。萩を通り越して縁鼻(1)まで来た。

「おかけなさい」

三四郎は靴をはいている。命のごとく腰をかけた。よし子は座布団を取って来た。

「お敷きなさい」

三四郎は布団を敷いた。門をはいってから、三四郎はまだ一言も口を開かない。この単純な少女はただ自分の思うとおりを三四郎に言うが、三四郎からは毫も返事を求めていないように思われる。三四郎は無邪気なる女王の前に出た心持ちがした。命を聞くだけである。お世辞を使う必要が

(1) 縁側のはし。普通「縁端」と書く。

ない。一言でも先方の意を迎えるようなことをいえば、急に卑しくなる。啞の奴隷のごとく、さきの言うがままにふるまっていれば愉快である。三四郎は子供のようなよし子から子供扱いにされながら、少しもわが自尊心を傷つけたとは感じえなかった。

「兄ですか」とよし子はその次に聞いた。

野々宮を尋ねて来たわけでもない。尋ねないわけでもない。なんで来たか三四郎にも実はわからないのである。

「野々宮さんはまだ学校ですか」

「ええ、いつでも夜遅くでなくっちゃ帰りません」

これは三四郎も知ってることである。三四郎は挨拶に窮した。見ると縁側に絵の具箱がある。かきかけた水彩がある。

「絵をお習いですか」

「ええ、好きだから描きます」

「先生はだれですか」

「先生に習うほど上手じゃないの」

「ちょっと拝見」

「これ？　これまだできていないの」と描きかけを三四郎のほうへ出す。なるほど自分のうちの庭が描きかけてある。空と、前の家の柿の木と、はいり口の萩だけができている。中にも柿の木ははなはだ赤くできている。

「なかなかうまい」と三四郎が絵を

「なかなかうまい」と三四郎が絵をながめながら言う。

「これが?」とよし子は少し驚いた。本当に驚いたのである。三四郎のようなわざとらしい調子は少しもなかった。

三四郎はいまさら自分の言葉を冗談にすることもできず、またまじめにすることもできなくなった。どっちにしても、よし子から軽蔑されそうである。三四郎は絵をながめながら、腹のなかで赤面した。

縁側から座敷を見回すと、しんと静かである。茶の間はむろん、台所にも人はいないようである。

「おっかさんはもうお国へお帰りになったんですか」

「まだ帰りません。近いうちに立つはずですけれど」

「今、いらっしゃるんですか」

「今ちょっと買物に出ました」

「あなたが里見さんのところへお移りになるというのは本当ですか」

「どうして」

「どうしてって――このあいだ広田先生のところでそんな話がありましたから」

「まだきまりません。ことによると、そうなるかもしれませんけれど」

三四郎は少しく要領を得た。

「野々宮さんはもとから里見さんとご懇意なんですか」

「ええ。お友だちなの」

男と女の友だちという意味かしらと思ったが、なんだかおかしい。けれども三四郎はそれ以上を聞きえなかった。

「広田先生は野々宮さんのもとの先生だそうですね」

「ええ」

話は「ええ」でつかえた。

「あなたは里見さんのところへいらっしゃるほうがいいんですか」

「わたくし？　そうね。でも美禰子さんのお兄いさんにお気の毒ですから」

「美禰子さんの兄さんがあるんですか」

「ええ。宅の兄と同年の卒業なんです」

「やっぱり理学士ですか」

「いいえ、科は違います。法学士です。そのまた上の兄さんが広田先生のお友だちだったのですけれども、早くお亡くなりになって、今では恭助さんだけなんです」

「お父さんやおっかさんは」

よし子は少し笑いながら、

「ないわ」と言った。美禰子の父母の存在を想像するのはこっけいであると言わぬばかりである。よほど早く死んだものと見える。よし子の記憶にはまるでないのだろう。

「そういう関係で美禰子さんは広田先生のうちへ出入りをなさるんですね」

「ええ。死んだ兄さんが広田先生とは大変仲よしだったそうです。それに美禰子さんは英語がす

きだから、ときどき英語を習いにいらっしゃるんでしょう」
「こちらへも来ますか」
よし子はいつの間にか、水彩画の続きを描き始めた。三四郎がそばにいるのがまるで苦になっていない。それでいて、よく返事をする。
「美禰子さん？」と聞きながら、柿の木の下にある藁葺き屋根に影をつけたが、
「少し黒すぎますね」と絵を三四郎の前へ出した。三四郎は今度は正直に、
「ええ、少し黒すぎます」と答えた。すると、よし子は絵筆に水を含ませて、黒いところを洗いながら、
「いらっしゃいますわ」とようやく三四郎に返事をした。
「たびたび？」
「ええたびたび」とよし子は依然として画紙に向かっている。三四郎は、よし子が絵のつづきを描き出してから、問答が大変楽になった。
しばらく無言のまま、絵の中をのぞいていると、よし子は丹念に藁葺き屋根の黒い影を洗っていたが、あまり水が多すぎたのと、筆の使い方がなかなか不慣れなので、黒いものがかってに四方へ浮き出して、せっかく赤くできた柿が、陰干しの渋柿のような色になった。よし子は絵筆の手を休めて、両手を伸ばして、首をあとへ引いて、ワットマン(1)をなるべく遠くからながめていたが、しまいに、小さな声で、

（1）ワットマン紙。イギリス製の純白で厚地の水彩画用紙。

「もうだめね」と言う。実際だめなのだから、しかたがない。三四郎は気の毒になった。

「もうおよしなさい。そうして、また新しくお描きなさい」

よし子は顔を絵に向けたまま、しり眼に三四郎を見た。大きなうるおいのある眼である。三四郎はますます気の毒になった。すると女が急に笑い出した。

「馬鹿(ばか)ね。二時間ばかり損をして」と言いながら、せっかく描いた水彩の上へ、横縦に二、三本太い棒を引いて、絵の具箱の蓋(ふた)をぱたりと伏せた。

「もうよしましょう。座敷へおはいりなさい。お茶をあげますから」と言いながら、自分は上へあがった。三四郎は靴を脱ぐのがめんどうなので、やはり縁側に腰をかけていた。腹の中では、今になって、茶をやるという女を非常におもしろいと思っていた。三四郎に度(ど)はずれの女をおもしろがるつもりは少しもないのだが、突然お茶をあげますと言われた時には、一種の愉快を感ぜぬわけにいかなかったのである。その感じは、どうしても異性に近づいて得られる感じではなかった。

茶の間で話し声がする。下女はいたにちがいない。やがて襖(ふすま)を開いて、茶器を持って、よし子があらわれた。その顔を正面から見たときに、三四郎はまた、女性中のもっとも女性的な顔であると思った。

よし子は茶を汲んで縁側へ出して、自分は座敷の畳の上へすわった。三四郎はもう帰ろうと思っていたが、この女のそばにいると、帰らないでもかまわないような気がする。病院ではかつてこの女の顔をながめすぎて、少し赤面させたために、さっそく引き取ったが、今日はなんともない。茶を出したのを幸いに縁側と座敷でまた談話を始めた。いろいろ話しているうちに、よし子は三四郎

に妙なことを聞き出した。それは、自分の兄の野々宮が好きかいやかという質問であった。ちょっと聞くとまるでがんぜない子供の言いそうなことであるが、よし子の意味はもう少し深いところにあった。研究心の強い学問好きの人は、万事を研究する気で見るから、情愛が薄くなるわけである。人情で物をみると、すべてが好き嫌いの二つになる。研究する気なぞが起こるものではない。自分の兄は理学者だものだから、自分を研究していけない。自分を研究すればするほど、自分をかわいがる度は減るのだから、妹に対して不親切になる。けれども、あのくらい研究好きの兄が、このくらい自分をかわいがってくれるのだから、それを思うと、兄は日本中で一番いい人にちがいないという結論であった。

三四郎はこの説を聞いて、大いにもっともなような、またどこか抜けているような気がしたが、さてどこが抜けているんだか、頭がぼんやりして、ちょっとわからなかった。それで表向きこの説に対しては別段の批評を加えなかった。ただ腹の中で、これしきの女の言うことを、明瞭に批評しえないのは、男児としてふがいないことだと、いたく赤面した。同時に、東京の女学生は決して馬鹿にできないものだということを悟った。

三四郎はよし子に対する敬愛の念をいだいて下宿へ帰った。はがきが来ている。「明日午後一時ごろから菊人形を見に参りますから、広田先生のうちまでいらっしゃい。美禰子」

その字が、野々宮さんの隠袋から半分はみ出していた封筒の上書に似ているので、三四郎はなんべんも読み直してみた。

翌日は日曜である。三四郎は昼飯をすましてすぐ西片町へ来た。新調の制服を着て、光った靴を

はいている。静かな横町を広田先生の前まで来ると、人声がする。

先生の家は門をはいると、左手がすぐ庭で、木戸をあければ玄関へかからずに、座敷の縁へ出られる。三四郎は要目垣(かなめがき)(1)のあいだに見える桟(さん)をはずそうとして、ふと、庭のなかの話し声を耳にした。話は野々宮と美禰子のあいだに起こりつつある。

「そんなことをすれば、地面の上へ落ちて死ぬばかりだ」これは男の声である。

「死んでも、そのほうがいいと思います」これは女の答えである。

「もっともそんな無謀な人間は、高いところから落ちて死ぬだけの価値は十分ある」

「残酷(ざんこく)なことをおっしゃる」

三四郎はここで木戸をあけた。庭のまん中に立っていた会話の主(ぬし)は二人ともこっちを見た。野々宮はただ「やあ」と平凡に言って、頭をうなずかせただけである。頭に新しい茶の中折帽(なかおれぼう)(2)をかぶっている。美禰子は、すぐ、

「はがきはいつごろ着きましたか」と聞いた。二人の今までやっていた会話はこれで中絶した。

縁側には主人が洋服を着て腰をかけて、相変わらず哲学をふいている。これは西洋の雑誌を手にしていた。そばによし子がいる。両手をうしろへ突いて、からだを空(くう)に持たせながら、伸ばした足にはいた厚い草履(ぞうり)をながめていた。——三四郎はみんなから待ち受けられていたとみえる。

主人は雑誌をなげ出した。

「では行くかな。とうとう引っ張り出された」

(1) かなめもちを植えた垣根。(2) 頂きの中央部が折れくぼんだ、つばのある帽子。ソフト。

「ご苦労さま」と野々宮さんが言った。女は二人で顔を見合わせて、ひとに知れないような笑いをもらした。庭を出るとき、女が二人つづいた。
「背が高いのね」と美禰子があとから言った。
「のっぽ」とよし子が一言答えた。門のわきで並んだ時、「だから、なりたけ草履をはくの」と弁解をした。三四郎もつづいて庭を出ようとすると、二階の障子ががらりとあいた。与次郎が手欄のところまで出て来た。
「行くのか」と聞く。
「うん、君は」
「行かない。菊細工なんぞ見てなんになるものか。馬鹿だな」
「いっしょに行こう。家にいたってしようがないじゃないか」
「今論文を書いている。大論文を書いている。なかなかそれどころじゃない」
三四郎はあきれ返ったような笑い方をして、四人のあとを追いかけた。四人は細い横町を三分の二ほど広い通りのほうへ遠ざかったところである。この一団の影を高い空気の下に認めた時、三四郎は自分の今の生活が熊本当時のそれよりも、ずっと意味の深いものになりつつあると感じた。かつて考えた三個の世界のうちで、第二、第三の世界はまさにこの一団の影で代表されている。影の半分は薄黒い。半分は花野のごとく明らかである。そうして三四郎の頭のなかではこの両方が渾然として調和されている。のみならず、自分もいつの間にか、自然とこの経緯のなかに織り込まれている。ただそのうちのどこかに落ちつかないところがある。それが不安である。歩きながら考える

と、今さき庭のうちで、野々宮と美禰子が話していた談柄(だんぺい)(1)が近因である。三四郎はこの不安の念を駆(か)るために、二人の談柄をふたたびほじくり出してみたい気がした。

四人はすでに曲がり角へ来た。四人とも足をとめて、振り返った。美禰子は額(ひたい)に手をかざしている。

三四郎は一分かからぬうちに追いついた。追いついてもだれもなんとも言わない。ただ歩き出しただけである。しばらくすると、美禰子が、

「野々宮さんは、理学者だから、なおそんなことをおっしゃるんでしょう」と言い出した。話の続きらしい。

「なに理学をやらなくっても同じことです。高く飛ぼうというには、飛べるだけの装置を考えたうえでなければできないにきまっている。頭のほうが先に要(い)るにちがいないじゃありませんか」

「そんなに高く飛びたくない人は、それでがまんするかもしれません」

「がまんしなければ、死ぬばかりですもの」

「そうすると安全で地面の上に立っているのがいちばんいいことになりますね。なんだかつまらないようだ」

野々宮さんは返事をやめて、広田先生のほうを向いたが、「女には詩人が多いですね」と笑いながら言った。すると広田先生が、

「男子の弊(へい)はかえって純粋の詩人になりきれないところにあるだろう」と妙な挨拶(あいさつ)をした。野々

(1) はなしのたね。話題。

宮さんはそれで黙った。よし子と美禰子はなにかお互いの話を始める。三四郎はようやく質問の機会を得た。

「今のはなんのお話なんですか」

「なに空中飛行器のことです」と野々宮さんがむぞうさに言った。三四郎は落語のおちを聞くような気がした。

それからは別段の会話も出なかった。また長い会話ができかねるほど、人がぞろぞろ歩くところへ来た。大観音[1]の前に乞食がいる。額を地にすりつけて、大きな声をのべつに出して、哀願をたくましゅうしている。ときどき顔を上げると、額のところだけが砂で白くなっている。だれも顧みるものがない。五人も平気で行きすぎた。五、六間も来た時に、広田先生が急に振り向いて三四郎に聞いた。

「君あの乞食に銭をやりましたか」

「いいえ」と三四郎があとを見ると、例の乞食は、白い額の下で両手を合わせて、相変わらず大きな声を出している。

「やる気にならないわね」とよし子がすぐに言った。

「なぜ」とよし子の兄は妹を見た。たしなめるほどに強い言葉でもなかった。野々宮の顔つきはむしろ冷静である。

「ああ始終せっついていちゃ、せっつきばえがしないからだめですよ」と美禰子が評した。

(1) 一丈六尺の十一面観音がある、駒込蓬来寺町の光源寺の俗称。

「いえ場所が悪いからだ」と今度は広田先生が言った。「あまり人通りが多すぎるからいけない。山の上の淋しいところで、ああいう男に会ったら、だれでもやる気になるんだよ」

「そのかわり一日待っていても、だれも通らないかもしれない」と野々宮はくすくす笑い出した。

三四郎は四人の乞食に対する批評を聞いて、自分が今日まで養成した徳義上の観念をいくぶんか傷つけられるような気がした。けれども自分が乞食の前を通るとき、一銭でも投げてやる料簡が起こらなかったのみならず、実を言えば、むしろ不愉快な感じがつのった事実を反省してみると、自分よりもこれら四人のほうがかえっておのれに誠であると思いついた。また彼らはおのれに誠でありうるほど広い天地の下に呼吸する都会人種であるということを悟った。

行くにしたがって人が多くなる。しばらくすると一人の迷子に出会った。七つばかりの女の子である。泣きながら、人の袖の下を右へ行ったり、左へ行ったりうろうろしている。お婆さん、お婆さんとむやみに言う。これには往来の人もみんな心を動かしているようにみえる。立ちどまるものもある。かわいそうだというものもある。しかしだれも手をつけない。子供はすべての人の注意と同情を惹きつつ、しきりに泣きさけんでお婆さんを探している。不可思議の現象である。

「これも場所が悪いせいじゃないか」と野々宮君が子供の影を見送りながら言った。

「今に巡査がしまつをつけるにきまっているから、みんな責任をのがれるんだね」と広田先生が説明した。

「わたくしのそばまで来れば交番まで送ってやるわ」とよし子が言う。

「じゃ、追っかけて行って、連れて行くがいい」と兄が注意した。

「追っかけるのはいや」
「なぜ」
「なぜって――こんなに大勢(おおぜい)人がいるんですもの。わたくしに限ったことはないわ」
「やっぱり責任をのがれるんだ」と広田がいう。
「やっぱり場所が悪いんだ」と野々宮がいう。男は二人で笑った。団子坂(だんござか)の上まで来ると、交番の前へ人が黒山のようにたかっている。迷子はとうとう巡査の手に渡ったのである。
「もう安心大丈夫です」と美禰子が、よし子を顧みて言った。よし子は「まあよかった」という。
坂の上から見ると、坂は曲がっている。刀の切先(きっさき)のようである。幅はむろん狭い。右側の二階建が左側の高い小屋の前を半分さえぎっている。そのうしろにはまた高い幟(のぼり)が何本となく立ててある。人は急に谷底へ落ち込むように思われる。その落ち込むものが、はい上がるものと入り乱れて、道いっぱいにふさがっているから、谷の底にあたるところは幅をつくして異様に動く。見ていると眼が疲れるほど不規則にうごめいている。広田先生はこの坂の上に立って、「これは大変だ」と、さも帰りたそうである。四人はあとから先生を押すようにして、谷へはいった。その谷が途中からだらだらと向こうへ回り込むところに、右にも左にも、大きな葭簀(よしず)掛けの小屋(1)を、狭い両側から高くかまえたので、空さえぞんがい窮屈に見える。往来は暗くなるまで込み合っている。その中で木戸番ができるだけ大きな声を出す。「人間から出る声じゃない。菊人形から出る声だ」と広田先生が評した。それほど彼らの声は尋常を離れている。

(1) よしを編んだすだれでかこった簡単な小屋。

一行は左の小屋へはいった。曽我の討入り（1）がある。五郎も十郎も頼朝もみな平等に菊の着物を着ている。ただし顔や手はことごとく木彫である。その次は雪が降っている。若い女が癪（2）を起こしている。これも人形の心に、菊を一面にはわせて、花と葉が平らにすき間なく衣裳の恰好となるように作ったものである。

よし子は余念なくながめている。広田先生と野々宮はしきりに話を始めた。菊の培養法が違うとかなんとかいうところで、三四郎は、ほかの見物に隔てられて、一間ばかり離れた。美禰子はもう三四郎より先にいる。見物は概して町家のものである。教育のありそうなものはきわめて少ない。美禰子はそのあいだに立って、振り返った。首を延ばして、野々宮のいるほうを見た。野々宮は右の手を竹の手欄から出して、菊の根を指しながら、なにか熱心に説明している。美禰子はまた向こうをむいた。見物に押されて、さっさと出口のほうへ行く。三四郎は群集を押し分けながら、三人を棄てて、美禰子のあとを追って行った。

ようやくのことで、美禰子のそばまで来て、

「里見さん」と呼んだ時に、美禰子は青竹の手欄に手を突いて、心持ち首をもどして三四郎を見た。なんとも言わない。手欄のなかは養老の滝（3）である。丸い顔の、腰に斧をさした男が、瓢箪を持って、滝壺のそばにかがんでいる。三四郎が美禰子の顔を見た時には、青竹のなかになにがあるかほとんど気がつかなかった。

（1）曽我十郎祐成・五郎時致の兄弟が、工藤祐経に殺された父の仇を富士のすそ野の狩場で討ったこと。（2）胸や腹に突然に起こる激痛。普通は胃けいれん。（3）岐阜県養老町にある、老を養う霊泉が出たという滝。

「どうかしましたか」と思わず言った。美禰子はまだなんとも答えない。黒い眼をさものの憂そうに三四郎の額の上に据えた。その時三四郎は美禰子の二重瞼に不可思議なある意味を認めた。その意味のうちには、霊の疲れがある。肉の弛みがある。苦痛に近き訴えがある。三四郎は、美禰子の答えを予期しつつある今の場合を忘れて、この眸とこの瞼のあいだにすべてを遺却した。すると、美禰子は言った。

「もう出ましょう」

眸と瞼の距離が次第に近づくように見えた。近づくにしたがって三四郎の心には女のために出なければすまない気がきざして来た。それが頂点に達したころ、女は首を投げるように向こうをむいた。手を青竹の手欄から離して、出口のほうへ歩いて行く。三四郎はすぐあとからついて出た。

二人が表で並んだ時、美禰子はうつむいて右の手を額に当てた。周囲は人が渦をまいている。三四郎は女の耳へ口を寄せた。

「どうかしましたか」

女は人込みの中を谷中のほうへ歩き出した。三四郎もむろんいっしょに歩き出した。半町ばかり来た時、女は人の中でとまった。

「ここはどこでしょう」

「こっちへ行くと谷中の天王寺のほうへ出てしまいます。帰り道とはまるで反対です」

「そう。わたくし心持ちが悪くって……」

三四郎は往来のまん中でたすけなき苦痛を感じた。立って考えていた。

「どこか静かなところはないでしょうか」と女が聞いた。

谷中と千駄木が谷で出会うと、いちばん低いところに小川が流れている。この小川を沿うて、町を左へ切れるとすぐ野に出る。河はまっすぐに北へ通っている。三四郎は東京へ来てからなんべんこの小川の向こう側を歩いて、なんべんこっち側を歩いたかよく覚えている。美禰子の立っているところは、この小川が、ちょうど谷中の町を横切って根津へ抜ける石橋のそばである。

「もう一町ばかり歩けますか」と美禰子に聞いてみた。

「歩きます」

二人はすぐ石橋を渡って、左へ折れた。人の家の路次のようなところを十間ほど行きつくして、門の手前から板橋をこちら側へ渡り返して、しばらく河の縁を上ると、もう人は通らない。広い野である。

三四郎はこの静かな秋のなかへ出たら、急にしゃべり出した。

「どうですぐあいは。頭痛でもしますか。あんまり人が大勢いたせいでしょう。あの人形を見ている連中のうちにはずいぶん下等なのがいたようだから——なにか失礼でもしましたか」

女は黙っている。やがて河の流れから、眼を上げて、三四郎を見た。二重瞼にはっきりと張りがあった。三四郎はその眼つきで半ば安心した。

「ありがとう。だいぶよくなりました」と言う。

「休みましょうか」

「ええ」

「もう少し歩けますか」

「ええ」

「歩ければ、もう少しお歩きなさい。ここはきたない。あすこまで行くとちょうど休むにいい場所があるから」

「ええ」

一丁ばかり来た。また橋がある。一尺に足らない古板を造作なく渡した上を、三四郎は大股に歩いた。女もつづいて通った。待ち合わせた三四郎の眼には、女の足が常の大地を踏むと同じように軽く見えた。この女は素直な足をまっすぐに前へ運ぶ。わざと女らしく甘えた歩き方をしない。したがってむやみにこっちから手を貸すわけにいかない。

向こうに藁屋根がある。屋根の下がいちめんに赤い。近寄って見ると、唐辛子を干したのであった。女はこの赤いものが、唐辛子であると見分けのつくところまで来てとまった。

「美しいこと」と言いながら、草の上に腰をおろした。草は小川の縁にわずかな幅を生えているのみである。それすら夏の半ばのように青くはない。美禰子は派手な着物のよごれるのをまるで苦にしていない。

「もう少し歩けませんか」と三四郎は立ちながら、うながすように言ってみた。

「ありがとう。これでたくさん」

「やっぱり心持ちが悪いですか」

「あんまり疲れたから」

三四郎もとうとうきたない草の上にすわった。美禰子と三四郎のあいだは四尺ばかり離れている。二人の足の下には小さな河が流れている。秋になって水が落ちたから浅い。角の出た石の上に鶺鴒が一羽とまったくらいである。三四郎は水の中をながめていた。水がしだいに濁って来る。見ると河上で百姓が大根を洗っていた。美禰子の視線は遠くの向こうにある。向こうは広い畠で、畠の先が森で森の上が空になる。空の色がだんだん変わって来る。

ただ単調に澄んでいたもののうちに、色がいくとおりもできてきた。透きとおる藍の地が消えるようにしだいに薄くなる。その上に白い雲が鈍く重なりかかる。重なったものが溶けて流れ出す。どこで地が尽きて、どこで雲が始まるかわからないほどにものうい上を、心持ち黄な色がふうと一面にかかっている。

「空の色が濁りました」と美禰子が言った。

三四郎は流れから眼を放して、上を見た。こういう空の模様を見たのははじめてではない。けれども空が濁ったという言葉を聞いたのはこの時がはじめてである。気がついてみると、濁ったと形容するほかに形容のしかたのない色であった。三四郎がなにか答えようとする前に、女はまた言った。

「重いこと。大理石のように見えます」

美禰子は二重瞼を細くして高いところをながめていた。それから、その細くなったままの眼を静かに三四郎のほうに向けた。そうして、

「大理石のように見えるでしょう」と聞いた。三四郎は、

「ええ、大理石(マーブル)のように見えます」と答えるよりほかはなかった。女はそれで黙った。しばらくしてから、今度は三四郎が言った。
「こういう空の下にいると、心が重くなるが気は軽くなる」
「どういうわけですか」と美禰子が問い返した。
三四郎には、どういうわけもなかった。返事はせずに、またこう言った。
「安心して夢を見ているような空模様だ」
「動くようで、なかなか動きませんね」と美禰子はまた遠くの雲をながめ出した。
菊人形で客を呼ぶ声が、おりおり二人のすわっているところまで聞こえる。
「ずいぶん大きな声ね」
「朝から晩までああいう声を出しているんでしょうか。えらいもんだな」と言ったが、三四郎は急に置き去りにした三人のことを思い出した。なにか言おうとしているうちに、美禰子は答えた。
「商売ですもの、ちょうど大観音(おおかんのん)の乞食(こじき)と同じことなんですよ」
「場所が悪くはないですか」
三四郎は珍らしく冗談(じょうだん)を言って、そうして一人でおもしろそうに笑った。乞食について下(くだ)した広田の言葉をよほどおかしく受けたからである。
「広田先生は、よく、ああいうことをおっしゃる方なんですよ」ときわめて軽くひとりごとのように言ったあとで、急に調子をかえて、
「こういうところに、こうしてすわっていたら、大丈夫及第よ」と比較的活発に付け加えた。そ

うして、今度は自分のほうでおもしろそうに笑った。
「なるほど野々宮さんの言ったとおり、いつまで待っていてもだれも通りそうもありませんね」
「ちょうどいいじゃありませんか」と早口に言ったが、あとで「おもらいをしない乞食なんだから」と結んだ。これは前句の解釈のためにつけたように聞こえた。
ところへ知らん人が突然あらわれた。唐辛子の干してある家のかげから出て、いつの間にか河を向こうへ渡ったものとみえる。二人のすわっているほうへだんだん近づいて来る。洋服を着て髯をはやして、年輩からいうと広田先生くらいな男である。この男が二人の前へ来た時、顔をぐるりと向けなおして、正面から三四郎と美禰子をにらみつけた。その眼のうちには明らかに憎悪の色がある。三四郎はじっとすわっていにくいほどな束縛を感じた。男はやがて行きすぎた。そのうしろ影を見送りながら、三四郎は、
「広田先生や野々宮さんはさぞあとで僕らを探したでしょう」とはじめて気がついたように言った。美禰子はむしろ冷やかである。
「なに大丈夫よ。大きな迷子ですもの」
「迷子だから探したでしょう」と三四郎はやはり前説を主張した。すると美禰子は、なお冷やかな調子で、
「責任をのがれたがる人だから、ちょうどいいでしょう」
「だれが？　広田先生がですか」
美禰子は答えなかった。

「野々宮さんがですか」

美禰子はやっぱり答えなかった。

「もう気分はよくなりましたか。よくなったら、そろそろ帰りましょうか」

美禰子は三四郎を見た。三四郎は上げかけた腰をまた草の上におろした。その時三四郎はこの女にはとてもかなわないような気がどこかでした。同時に自分の腹を見抜かれたという自覚に伴う一種の屈辱(くつじょく)をかすかに感じた。

「迷子」

女は三四郎を見たままでこの一言(ひとこと)をくり返した。三四郎は答えなかった。

「迷子の英訳を知っていらしって」

三四郎は知るとも、知らぬとも言いえぬほどに、この問いを予期していなかった。

「教えてあげましょうか」

「ええ」

「迷える子(ストレイ シープ)(1)――わかって?」

三四郎はこういう場合になると挨拶(あいさつ)に困る男である。とっさの機が過ぎて、頭が冷やかに働き出した時、過去を顧みて、ああ言えばよかった、こうすればよかったと後悔する。と言って、この後悔を予期して、無理に応急の返事を、さも自然らしく得意に吐(は)き散らすほどに軽薄ではなかった。だからただ黙っている。そうして黙っていることがいかにも半間(はんま)(2)であると自覚している。

(1) フィールデングの「トム・ジョーンズ」に使われている語。 (2) 気がきかないこと。

「迷える（ストレイ）子（シープ）」と美禰子が口のうちで

迷える子という言葉はわかったようでもある。またわからないようでもある。わかるわからないはこの言葉の意味よりも、むしろこの言葉を使った女の意味である。三四郎はいたずらに女の顔をながめて黙っていた。すると女は急にまじめになった。

「わたくしそんなに生意気に見えますか」

その調子には弁解の心持ちがある。三四郎は意外の感に打たれた。今までは霧の中にいた。霧が晴れればいいと思っていた。この言葉で霧が晴れた。明瞭な女が出て来た。晴れたのが恨めしい気がする。

三四郎は美禰子の態度をもとのような、――二人の頭の上に広がっている、澄むとも濁るとも片づかない空のような、――意味のあるものにしたかった。けれども、それは女の機嫌を取るための挨拶ぐらいでもどせるものではないと思った。女は卒然として、

「じゃ、もう帰りましょう」と言った。厭味のある言い方ではなかった。ただ三四郎にとって自分は興味のないものとあきらめるように静かな口調であった。

空はまた変わって来た。風が遠くから吹いてくる。広い畠の上には日が限って、見ていると、寒いほど淋しい。草からあがる地意気(1)でからだは冷えていた。気がつけば、こんなところに、よく今までべっとりすわっていられたものだと思う。自分一人なら、とうにどこかへ行ってしまったにちがいない。美禰子も――美禰子はこんなところへすわる女かもしれない。

「少し寒くなったようですから、とにかく立ちましょう。冷えると毒だ。しかし気分はもうすっ

(1) 地面から蒸発する水気。普通、「地息」という。

かり直りましたか」
「ええ、すっかり直りました」と明らかに答えたが、にわかに立ち上がった。立ち上がる時、小さな声で、ひとりごとのように、
「迷える子(ストレイシープ)」と長く引っ張って言った。三四郎はむろん答えなかった。
美禰子は、さっき洋服を着た男の出て来た方角をさして、道があるなら、あの唐辛子(とうがらし)のそばを通って行きたいという。二人は、その見当(けんとう)へ歩いて行った。藁葺(わらぶ)きのうしろにはたして細い三尺ほどの道があった。その道を半分ほど来たところで三四郎は聞いた。
「よし子さんは、あなたのところへ来ることにきまったんですか」
女は片頬で笑った。そうして問い返した。
「なぜお聞きになるの」
三四郎がなにか言おうとすると、足の前にぬかるみがあった。四尺ばかりのところ、土がへこんで水がぴたぴたにたまっている。そのまん中に足がかりのために手ごろな石を置いたものがある。三四郎は石のたすけをからずに、すぐに向こうへ飛んだ。そうして美禰子を振り返って見た。美禰子は右の足をぬかるみのまん中にある石の上へ乗せた。石のすわりがあまりよくない。足へ力を入れて、肩をゆすって調子を取っている。三四郎はこちら側から手を出した。
「おつかまりなさい」
「いえ大丈夫」と女は笑っている。手を出しているあいだは、調子をとるだけで渡らない。三四郎は手を引っ込めた。すると美禰子は石の上にある右の足に、からだの重みを託(たく)して、左の足でひ

らりとこちら側へ渡った。あまりに下駄をよごすまいと念を入れすぎたため、力が余って、腰が浮いた。のめりそうに胸が前へ出る。その勢いで美禰子の両手が三四郎の両腕の上へ落ちた。
「迷える子」と美禰子が口のうちで言った。三四郎はその呼吸を感ずることができた。

六

号鐘が鳴って、講師は教室から出て行った。三四郎は印気のついた洋筆を振って、帳面を伏せようとした。すると隣にいた与次郎が声をかけた。
「おいちょっと借せ。書き落としたところがある」
与次郎は三四郎の帳面を引き寄せて上からのぞき込んだ。stray sheep という字がむやみにかいてある。
「なんだこれは」
「講義を筆記するのがいやになったから、いたずらを書いていた」
「そう不勉強ではいかん。カントの超絶唯心論(1)がバークレー(2)の超絶実在論にどうだとか言ったな」
「どうだとか言った」
「聞いていなかったのか」

(1) 一七二四〜一八〇四、ドイツの哲学者。批判哲学を確立した近世哲学の祖。(2) 一六八五〜一七五三、イギリスの哲学者。物が存在するということは、単に知覚されているということにすぎないと主張した。

「いいや」
「まるで stray sheep だ。しかたがない」
与次郎は自分の帳面をかかえて立ち上がった。机の前を離れながら、三四郎に、
「おいちょっと来い」と言う。三四郎は与次郎について教室を出た。階子段を降りて、玄関前の草原へ来た。大きな桜がある。二人はその下にすわった。
ここは夏の初めになると苜蓿が一面にはえる。与次郎が入学願書を持って事務へ来た時に、この桜の下に二人の学生が寝ころんでいた。その一人が一人に向かって、口答試験を都々逸(1)で負けておいてくれると、いくらでも歌ってみせるがなと言うと、一人が小声で、粋なさばきの博士の前で、恋の試験がしてみたいと歌っていた。その時から与次郎はこの桜の木の下が好きになって、なにか事があると、三四郎をここへ引っ張り出す。三四郎はその歴史を与次郎から聞いた時に、なるほど与次郎は俗謡で pity's love を訳すはずだと思った。今日はしかし与次郎がことのほかまじめである。草の上にあぐらをかくやいなや、懐中から、文芸時評という雑誌を出してあけたままの一頁を逆に三四郎のほうへ向けた。
「どうだ」と言う。見ると標題に大きな活字で「偉大なる暗闇」とある。下には零余子と雅号を使っている。偉大なる暗闇とは与次郎がいつでも広田先生を評する語で、三四郎も二、三度聞かされたものである。しかし零余子はまったく知らん名である。どうだと言われた時に、三四郎は、返事をする前提としてひとまず与次郎の顔を見た。すると与次郎はなにも言わずにその扁平な顔を前へ

(1) 七七七五の歌詞、男女間の愛情をうたった俗曲の一種。

出して、右の人さし指の先で、自分の鼻の頭を押えてじっとしている。向こうに立っていた一人の学生が、この様子を見てにやにや笑い出した。それに気がついた与次郎はようやく指を鼻から放した。

「おれが書いたんだ」と言う。三四郎はなるほどそうかと悟った。

「僕らが菊細工を見に行く時書いていたのは、これか」

「いや、ありゃ、たった二、三日前じゃないか。そう早く活版になってたまるものか。あれは来月出る。これは、ずっと前に書いたものだ。なにを書いたものか標題でわかるだろう」

「広田先生のことか」

「うん。こうして輿論を喚起しておいてね。そうして、先生が大学へはいれる下地を作る……」

「その雑誌はそんなに勢力のある雑誌か」

三四郎は雑誌の名前さえ知らなかった。

「いや無勢力だから、実は困る」と与次郎は答えた。三四郎はわらわざるをえなかった。

「何部くらい売れるのか」

与次郎は何部売れるとも言わない。

「まあいいさ。書かんよりましだ」と弁解している。

だんだん聞いてみると、与次郎は従来からこの雑誌に関係があって、ひまさえあればほとんど毎号筆をとっているが、そのかわり雅名も毎号変えるから、二、三の同人のほか、だれも知らないんだと言う。なるほどそうだろう。三四郎は今はじめて与次郎と文壇との交渉を聞いたくらいのものである。しかし与次郎がなんのために、いたずらに等しい匿名を用いて、彼のいわゆる大論文をひ

そかに公(おおや)けにしつつあるか、そこが三四郎にはわからなかった。
幾分(いくぶん)か小遣い取りのつもりで、やっている仕事かと不遠慮に尋ねた時、与次郎は眼を丸くした。
「君は九州の田舎(いなか)から出たばかりだから、中央文壇の趨勢(すうせい)(1)を知らないために、そんなのんきなことを言うのだろう。今の思想界の中心にいて、その動揺のはげしいありさまを目撃しながら、考えのあるものが知らん顔をしていられるものか。実際今日(こんにち)の文権はまったくわれわれ青年の手にあるんだから、一言(いちごん)でも半句でも進んで言えるだけ言わなけりゃ損じゃないか。文壇は急転直下の勢いで目ざましい革命を受けている。すべてがことごとくうごいて、新気運に向かっていくんだから、取り残されちゃ大変だ。進んで自分からこの気運をこしらえあげなくちゃ、生きてるかいはない。文学文学って安っぽいようにいうが、そりゃ大学なんかで聞く文学のことだ。新しいわれわれのいわゆる文学は、人生そのものの大反射だ。文学の新気運は日本全社会の活動に影響しなければならない。また現にしつつある。彼らが昼寝をして夢を見ているあいだに、いつか影響しつつある。恐ろしいものだ。……」
三四郎は黙って聞いていた。少しほらのような気がする。しかしほらでも与次郎はなかなか熱心に吹いている。すくなくとも当人だけはしごくまじめらしくみえる。三四郎はだいぶ動かされた。
「そういう精神でやっているのか。では君は原稿料なんか、どうでもかまわんのだったな」
「いや、原稿料は取るよ。取れるだけ取る。しかし雑誌が売れないからなかなか寄こさない。どうかして、もう少し売れる工夫(くふう)をしないといけない。なにかいい趣向はないだろうか」と今度は三

(1) ありさま。なりゆき。

四郎に相談をかけた。話が急に実際問題に落ちてしまった。三四郎は妙な心持ちがする。与次郎は平気である。号鐘が激しく鳴り出した。

「ともかくこの雑誌を一部君にやるから読んでみてくれ。偉大なる暗闇という題がおもしろいだろう。この題なら人が驚くにきまっている。――おどろかせないと読まないからだめだ」

二人は玄関を上って、教室へはいって、机に着いた。やがて先生が来る。二人とも筆記を始めた。三四郎は「偉大なる暗闇」が気になるので、帳面のわきに文芸時評をあけたまま、筆記のあいまあいまに先生に知れないように読み出した。先生は幸い近眼である。のみならず自己の講義のうちにぜんぜん埋没している。三四郎の不心得にはまるで関係しない。三四郎はいい気になって、こっちを筆記したり、あっちを読んだりしていったが、もともと二人ですることを一人で兼ねる無理な芸だからしまいには「偉大なる暗闇」も講義の筆記も双方ともに関係がわからなくなった。ただ与次郎の文章が一句だけはっきり頭にはいった。

「自然は宝石を作るに幾年の星霜を費やしたか。またこの宝石が採掘の運に会うまでに、幾年の星霜を静かにかがやいていたか」という句である。その他は不得要領に終わった。そのかわりこの時間には stray sheep という字を一つも書かずにすんだ。

講義が終わるやいなや、与次郎は三四郎に向かって、

「どうだ」と聞いた。実はまだよく読まないと答えると、時間の経済を知らない男だといって非難した。ぜひ読めという。三四郎は家へ帰ってぜひ読むと約束した。やがて昼になった。二人は連れ立って門を出た。

「今晩出席するだろうな」と与次郎が西片町へはいる横町の角で立ちどまった。今夜は同級生の懇親会がある。三四郎は忘れていた。ようやく思い出して、行くつもりだと答えると、与次郎は、「出る前にちょっと誘ってくれ。君に話すことがある」と言う。耳のうしろに洋筆軸をはさんでいる。なんとなく得意である。三四郎は承知した。

下宿へ帰って、湯にはいって、いい心持ちになってあがってみると、机の上に絵はがきがある。小川を描いて、草をもじゃもじゃはやして、その縁に羊を二匹寝かして、その向こう側に大きな男が洋杖を持って立っているところを写したものである。男の顔がはなはだ獰猛にできている。まったく西洋の絵にある悪魔を模したもので、念のため、そばにちゃんとデヴィルと仮名がふってある。表は三四郎の宛名の下に、迷える子と小さく書いたばかりである。三四郎は迷える子の何者かをすぐ悟った。のみならず、はがきの裏に、迷える子を二匹書いて、その一匹を暗に自分に見立ててくれたのをはなはだうれしく思った。迷える子のなかには、美禰子のみではない、自分ももとよりはいっていたのである。それが美禰子の思わくであったとみえる。美禰子の使った stray sheep の意味がこれでようやく判然した。

与次郎に約束した「偉大なる暗闇」を読もうと思うが、ちょっと読む気にならない。しきりに絵はがきをながめて考えた。イソップ(1)にもないような滑稽趣味がある。無邪気にもみえる。洒落(2)でもある。そうしてすべての下に、三四郎の心を動かすものがある。

（1）前六世紀の人と伝えられる古代ギリシアの寓話作者。ここでは「イソップ物語」のこと。（2）心、ふるまいなどがさっぱりしていて、深く執着しないこと。

手ぎわから言っても敬服のいたりである。諸事明瞭にできあがっている。よし子のかいた柿の木の比ではない。――と三四郎には思われた。

しばらくしてから、三四郎はようやく「偉大なる暗闇」を読み出した。実はふわふわして読み出したのであるが、二、三頁来ると、次第に釣り込まれるように気が乗ってきて、知らず知らずの間に、五頁六頁と進んで、ついに二十七頁の長論文を苦もなく片づけた。最後の一句を読了した時、はじめてこれでしまいだなと気がついた。眼を雑誌から離して、ああ読んだなと思った。

しかし次の瞬間に、なにを読んだかと考えてみると、なんにもない。おかしいくらいなんにもない。ただ大いにかつさかんに読んだ気がする。三四郎は与次郎の技倆に感服した。

論文は現今の文学者の攻撃に始まって、広田先生の賛辞に終わっている。ことに大学文科の西洋人を手痛く罵倒している。早く適当の日本人を招聘して、大学相当の講義を開かなくっては、学問の最高府たる大学も昔の寺小屋同然のありさまになって、煉瓦石のミイラと選ぶところがないようになる。もっとも人がなければしかたがないが、ここに広田先生がある。先生は十年一日のごとく高等学校に教鞭をとって薄給と無名に甘んじている。しかし真正の学者である。学海[1]の新気運に貢献して、日本の活社会と交渉のある教授を担任すべき人物である。――煎じつめるとこれだけであるが、そのこれだけが、非常にもっともらしい口吻と燦爛たる警句とによって前後二十七頁に延長している。

その中には「禿を自慢にするものは老人に限る」とか「ヴィーナスは波から生まれたが、活眼の

(1) 学問の広大で限りない世界。

士は大学から生まれない」とか「博士を学界の名産と心得るのは、海月を田子の浦の名産と考えるようなものだ」とかいろいろおもしろい句がたくさんある。しかしそれよりほかになにもない。ことに妙なのは、広田先生を偉大なる暗闇にたとえたついでに、ほかの学者を丸行燈に比較して、たかだか方二尺ぐらいのところをぼんやり照らすにすぎないなどと、自分が広田から言われたとおりを書いている。そうして、丸行燈だの雁首(1)などはすべて旧時代の遺物でわれわれ青年にはまったく無用であると、このあいだのとおりわざわざ断わってある。

よく考えてみると、与次郎の論文には活気がある。いかにも自分一人で新日本を代表しているようであるから、読んでいるうちは、ついその気になる。けれどもまったく実がない。根拠地のない戦争のようなものである。のみならず悪く解釈すると、政略的の意味もあるかもしれない書き方である。田舎者の三四郎にはてっきりそこと気取ることはできなかったが、ただ読んだあとで、自分の心を探ってみてどこかに不満足があるように覚えた。また美禰子の絵はがきを取って、二匹の羊と例の悪魔をながめ出した。するとこっちのほうは万事が快感である。この快感につれて前の不満足はますますいちじるしくなった。それで論文のことはそれぎり考えなくなった。美禰子に返事をやろうと思う。不幸にして絵がかけない。文章にしようと思う。文章ならこの絵はがきに匹敵する文句でなくってはいけない。それは容易に思いつけない。ぐずぐずしているうちに四時過ぎになった。

袴を着けて、与次郎を誘いに、西片町へ行く。勝手口からはいると、茶の間に、広田先生が小さ

(1) キセルの頭部。

な食卓を控えて、晩食を食っていた。そばに与次郎がかしこまってお給仕をしている。
「先生どうですか」と聞いている。
先生はなにか硬いものを頬張ったらしい。食卓の上を見ると、袂時計ほどな大きさの、赤くって黒くって、焦げたものが十ばかり皿の中に並んでいる。
三四郎は座に着いた。礼をする。先生は口をもがもがさせる。
「おい君も一つ食ってみろ」と与次郎が箸で皿のものをつまんで出した。掌へ載せてみると、馬鹿貝の剝身の干したのをつけ焼きにしたのである。
「妙なものを食うな」と聞くと、
「妙なものって、うまいぜ食ってみろ。これはね、僕がわざわざ先生にみやげに買って来たんだ。先生はまだ、これを食ったことがないとおっしゃる」
「どこから」
「日本橋から」
三四郎はおかしくなった。こういうところになると、さっきの論文の調子とは少し違う。
「先生、どうです」
「硬いね」
「硬いけれどもうまいでしょう。よくかまなくっちゃいけません。かむと味が出る」
「味が出るまでかんでいちゃ、歯が疲れてしまう。なんでこんな古風なものを買って来たものかな」

「いけませんか。こりゃ、ことによると先生にはだめかもしれない。里見の美禰子さんならいいだろう」
「なぜ」と三四郎が聞いた。
「ああ落ちついていりゃ味の出るまできっとかんでるにちがいない」
「あの女は落ちついていて、乱暴だ」と広田が言った。
「ええ乱暴です。イプセン(1)の女のようなところがある」
「イブセンの女は露骨(ろこつ)だが、あの女は心(しん)が乱暴だ。もっとも乱暴と言っても、普通の乱暴とは意味が違うが。野々宮の妹のほうが、ちょっとみると乱暴のようで、やっぱり女らしい。妙なものだね」
「里見のは乱暴の内訌(ないこう)(2)ですか」
三四郎は黙って二人の批評を聞いていた。どっちの批評もふにおちない。乱暴という言葉が、どうして美禰子の上に使えるか、それからが第一不思議であった。
与次郎はやがて、袴(はかま)をはいて、改まって出て来て、
「ちょっと行ってまいります」と言う。先生は黙って茶を飲んでいる。二人は表へ出た。表はもう暗い。門を離れて二、三間来ると、三四郎はすぐ話しかけた。
「先生は里見のお嬢さんを乱暴だと言ったね」

(1) イブセン(一八二八―一九〇六)はノルウェーの劇作家で、近代劇の祖。「人形の家」のノラなどの強い近代女性を描いた。
(2) 外見はやさしそうであるが、心はあらあらしいこと。

「うん。先生は勝手なことをいう人だから、時と場合によるとなんでも言う。第一先生が女を評するのが滑稽だ。先生の女における知識はおそらく零だろう。ラップをしたことがないものに女がわかるものか」

「先生はそれでいいとして、君は先生の説に賛成したじゃないか」

「うん乱暴だと言った。なぜ」

「どういうところを乱暴と言うのか」

「どういうところも、こういうところもありゃしない。現代の女性はみんな乱暴にきまってる。あの女ばかりじゃない」

「君はあの人をイブセンの人物に似ていると言ったじゃないか」

「言った」

「イブセンのだれに似ているつもりなのか」

「だれって……似ているよ」

三四郎はむろん納得しない。しかし追究もしない。黙って一間ばかり歩いた。すると突然与次郎がこう言った。

「イブセンの人物に似ているのは里見のお嬢さんばかりじゃない。今の一般の女性はみんな似ている。女性ばかりじゃない。いやしくも新しい空気に触れた男はみんなイブセンの人物に似たところがある。ただ男も女もイブセンのように自由行動を取らないだけだ。腹のなかではたいていかぶれている」

「僕はあんまり、かぶれていない」
「いないとみずからあざむいているのだ。——どんな社会だって陥欠のない社会はあるまい」
「それはないだろう」
「ないとすれば、その中に生息している動物はどこかに不足を感じるわけだ。イプセンの人物は、現代社会制度の陥欠をもっとも明らかに感じたものだ。われわれもおいおいああなって来る」
「君はそう思うか」
「僕ばかりじゃない。具眼の士[1]はみんなそう思っている」
「君の家の先生もそんな考えか」
「うちの先生？　先生はわからない」
「だって、さっき里見さんを評して、落ちついていて乱暴だと言ったじゃないか。それを解釈してみると、周囲に調和して行けるから、落ちついていられるので、どこかに不足があるから、底のほうが乱暴だという意味じゃないのか」
「なるほど。——先生は偉いところがあるよ。ああいうところへ行くとやっぱり偉い」
と与次郎は急に広田先生をほめ出した。三四郎は美禰子の性格についてもう少し議論の歩を進めたかったのだが、与次郎のこの一言でまったくはぐらかされてしまった。すると与次郎が言った。
「実は今日君に用があると言ったのはね。——うん、それより前に、君あの偉大なる暗闇を読んだか。あれを読んでおかないと僕の用事が頭へはいりにくい」

(1) 事物を見る眼をもっている者。

「今日あれから家へ帰って読んだ」

「どうだ」

「先生はなんと言った」

「先生は読むものかね。まるで知りゃしない」

「そうさな。おもしろいことはおもしろいが、なんだか腹の足しにならない麦酒を飲んだようだね」

「それでたくさんだ。読んで景気がつきさえすればいい。だから匿名にしてある。どうせ今は準備時代だ。こうしておいて、ちょうどいい時分に、本名を名乗って出る。――それはそれとして、さっきの用事を話しておこう」

与次郎の用事というのはこうである。――今夜の会で自分たちの科の不振のことをしきりに慨嘆するから、三四郎もいっしょに慨嘆しなくってはいけないんだそうだ。不振は事実であるからほかのものも慨嘆するにきまっている。それから、大勢いっしょに挽回策を講ずることとなる。なにしろ適当な日本人を一人大学へ入れるのが急務だと言い出す。みんなが賛成する。当然だから賛成するのはむろんだ。次にだれがよかろうという相談に移る。その時広田先生の名を持ち出す。その時三四郎は与次郎に口を添えて極力先生を賞賛しろという話である。そうしないと、与次郎が広田の食客だということを知っているものが疑いを起こさないともかぎらない。自分は現に食客なんだから、どう思われてもかまわないが、万一わずらいが広田先生に及ぶようではすまんことになる。もっともほかに同志が三、四人はいるから、大丈夫だが、一人でも味方は多いほうが便利だから、三四郎

もなるべくしゃべるに若くはないとの意見である。さていよいよ衆議一決の暁は、総代を選んで学長のところへ行く、また総長のところへ行く。もっとも今夜中にそこまでは運ばないかもしれない。また運ぶ必要もない。その辺は臨機応変である。……

与次郎はすこぶる能弁である。惜しいことにその能弁がつるつるしているので重みがない。あるところへ行くと冗談をまじめに講釈しているかと疑われる。けれども本来が性質のいい運動だから、三四郎も大体の上において賛成の意を表した。ただその方法が少しく細工に落ちて[1]おもしろくないと言った。その時与次郎は往来のまん中へ立ちどまった。二人はちょうど森川町の神社の鳥居の前にいる。

「細工に落ちるというが、僕のやることは自然の手順が狂わないようにあらかじめ人力で装置するだけだ。自然にそむいた没分暁[2]のことを企てるのとは質が違う。細工だってかまわん。細工が悪いのではない。悪い細工が悪いのだ」

三四郎はぐうの音も出なかった。なんだか文句があるようだけれども、口へ出て来ない。与次郎の言い草のうちで、自分がまだ考えていなかった部分だけがはっきり頭へ映っている。三四郎はむしろそのほうに感服した。

「それもそうだ」とすこぶるあいまいな返事をして、また肩を並べて歩き出した。正門をはいると、急に眼の前が広くなる。大きな建物がところどころに黒く立っている。その屋根がはっきり尽きるところから明らかな空になる。星がおびただしく多い。

(1) 小細工にすぎて。あまりにたくらみすぎて。　(2) 道理(話)のわからないこと。

「うつくしい空だ」と三四郎が言った。与次郎も空を見ながら、一間ばかり歩いた。突然、
「おい、君」と三四郎を呼んだ。三四郎はまたさっきの話の続きかと思って「なんだ」と答えた。
「君、こういう空を見てどんな感じを起こす」
与次郎に似合わぬことを言った。無限とか永久とかいう持ち合わせの答えはいくらでもあるが、
そんなことを言うと与次郎に笑われると思って三四郎は黙っていた。
「つまらんなあ我々は。あしたから、こんな運動をするのはもうやめにしようかしら。偉大なる暗闇(くらやみ)を書いてもなんの役にも立ちそうにもない」
「なぜ急にそんなことを言い出したのか」
「この空を見ると、そういう考えになる。――君、女に惚(ほ)れたことがあるか」
三四郎は即答ができなかった。
「女は恐ろしいものだよ」と与次郎が言った。
「恐ろしいものだ、僕も知っている」と三四郎も言った。すると与次郎が大きな声で笑い出した。
静かな夜の中で大変高く聞こえる。
「知りもしないくせに。知りもしないくせに」
三四郎は憮然(ぶぜん)としていた。
「明日(あす)もいい天気だ。運動会はしあわせだ。きれいな女がたくさん来るぜひ見にくるがいい」
暗い中を二人は学生集会所の前まで来た。中には電燈が輝いている。
木造の廊下を回って、部屋(へや)へはいると、早々(そうそう)来たものは、もうかたまっている。そのかたまりが

大きいのと小さいのと合わせて三つほどある。中には無言で備えつけの雑誌や新聞を見ながら、わざと列を離れているものもある。話はほうぼうに聞こえる。話の数はかたまりの数より多いように思われる。しかし割合に落ちついて静かである。煙草の煙のほうが猛烈に立ち上る。

そのうちだんだん寄って来る。黒い影が闇の中から吹きさらしの廊下の上へ、ぽつりと現われると、それが一人一人に明るくなって、部屋の中へはいって来る。時には五、六人続けて、明るくなることもある。やがて人数はほぼそろった。

与次郎は、さっきから、煙草の煙の中を、しきりにあちこちと往来していた。行くところでなにか小声に話している。三四郎は、そろそろ運動を始めたなと思ってながめていた。

しばらくすると幹事が大きな声で、みんなに席へ着けと言う。食卓はむろん前から用意ができていた。みんな、ごたごたに席へ着いた。順序もなにもない。食事は始まった。

三四郎は熊本で赤酒(1)ばかり飲んでいた。赤酒というのは、所でできる下等な酒である。熊本の学生はみんな赤酒を飲む。それが当然と心得ている。たまたま飲食店へあがれば牛肉屋である。その牛肉屋の牛が馬肉かもしれないという嫌疑がある。学生は皿に盛った肉を手づかみにして、座敷の壁へたたきつける。落ちれば牛肉で、ひっつけば馬肉だという。まるで呪いみたようなことをしていた。その三四郎にとって、こういう紳士的な学生親睦会は珍らしい。喜んで肉刀と肉叉を動かしていた。そのあいだには麦酒をさかんに飲んだ。

「学生集会所の料理はまずいですね」と三四郎の隣にすわった男が話しかけた。この男は頭を坊

(1) 灰汁持酒とも言う、赤い色をした熊本県特産の酒。

主に刈って、金縁の眼鏡をかけたおとなしい学生であった。
「そうですな」と三四郎は生返事をした。相手が与次郎なら、僕のような田舎者には非常にうまいと正直なところをいうはずであったが、その正直がかえって皮肉に聞こえると悪いと思ってやめにした。するとその男が、
「君はどこの高等学校ですか」と聞き出した。
「熊本です」
「熊本ですか。熊本には僕の従弟もいたが、ずいぶんひどいところだそうですね」
「野蛮なところです」
二人が話していると、向こうのほうで、急に高い声がしだした。見ると与次郎が隣席の二、三人を相手に、しきりになにか弁じている。ときどきダーター・ファブラ(1)と言う。なんのことだかわからない。しかし与次郎の相手は、この言葉を聞くたびに笑い出す。与次郎はますます得意になって、ダーター・ファブラ我々新時代の青年は……とやっている。三四郎の筋向こうにすわっていた色の白い品のいい学生が、しばらく肉刀の手をやめて、与次郎の連中をながめていたが、やがて笑いながらIl a le diable au corps（悪魔が乗り移っている）と冗談半分に仏蘭西語を使った。向こうの連中にはまったく聞こえなかったとみえて、この時麦酒の洋盃が四つばかり一度に高く上がった。得意そうに祝盃をあげている。

(1) ローマの詩人、ホラチウス（紀元前六五〜八）の「諷刺詩」第一巻第一歌の一節「何をお前は笑う？ 名前を変えると、お前について (de te fabula) 話は語られているのだ。」の一節。

「あの人は大変にぎやかな人ですね」と三四郎の隣の金縁眼鏡をかけた学生が言った。
「ええ。よくしゃべります」
「僕はいつか、あの人に淀見軒でライスカレーをご馳走になった。まるで知らないのに、突然来て、君淀見軒へ行こうって、とうとう引っ張って行って……」
学生はハハハと笑った。三四郎は、淀見軒で与次郎からライスカレーをご馳走になったものは自分ばかりではないんだなと悟った。
やがて珈琲が出る。一人が椅子を離れて立った。与次郎が激しく手をたたくと、ほかのものもたちまち調子を合わせた。
立ったものは、新しい黒の制服を着て、鼻の下にもう髭をはやしている。背がすこぶる高い。立つにはかっこうのいい男である。演説めいたことを始めた。
我々が今夜ここへ寄って、懇親のために、一夕の歓をつくすのは、それ自身において愉快なことであるが、この懇親が単に社交上の意味ばかりでなく、それ以外に一種重要な影響を生じうると偶然ながら気がついたら自分は立ちたくなった。この会合は麦酒に始まって珈琲に終わっている。まったく普通の会合である。しかしこの麦酒を飲んで珈琲を飲んだ四十人近くの人間は普通の人間ではない。しかもその麦酒を飲み始めてから珈琲を飲み終わるまでのあいだにすでに自己の運命の膨脹を自覚しえた。
政治の自由を説いたのは昔のことである。言論の自由を説いたのも過去のことである。自由とは単にこれらの表面にあらわれやすい事実のために専有されべき言葉ではない。われら新時代の青年

は偉大なる心の自由を説かねばならぬ時運に際会したと信ずる。

我々は古き日本の圧迫にたええぬ青年である。同時に新しき西洋の圧迫にもたええぬ青年であるということを、世間に発表せねばいられぬ状況の下に生きている。新しき西洋の圧迫は社会の上においても文芸の上においても、われら新時代の青年にとっては古き日本の圧迫と同じく、苦痛である。

我々は西洋の文芸を研究するものである。しかし研究はどこまでも研究である。その文芸のもとに屈従するのとは根本的に相違がある。我々は西洋の文芸にとらわれんがために、これを研究するのではない。とらわれたる心を解脱せしめんがために、これを研究しているのである。この方便に合せざる文芸はいかなる威圧の下に強いらるるとも学ぶことをあえてせざるの自信と決心とを有している。

我々はこの自信と決心とを有するの点において普通の人間とは異なっている。文芸は技術でもない、事務でもない。より多く人生の根本義にふれた社会の原動力である。我々はこの意味において文芸を研究し、この意味において如上の自信と決心とを有し、この意味において今夕の会合に一般以上の重大なる影響を想見するのである。

社会は激しくうごきつつある。社会の産物たる文芸もまたうごきつつある。うごく勢いに乗じて、我々の理想どおりに文芸を導くためには、零砕なる個人を団結して、自己の運命を充実し発展し膨脹しなくてはならぬ。今夕の麦酒と珈琲は、かかる隠れたる目的を、一歩前に進めた点において、普通の麦酒と珈琲よりも百倍以上の価ある貴き麦酒と珈琲である。

演説の意味はざっとこんなものである。演説がすんだ時、席にあった学生はことごとく喝采(かっさい)した。三四郎はもっとも熱心なる喝采者の一人であった。すると与次郎が突然立った。

「ダーターファブラ、沙翁(シェクスピア)(1)の使った字数が何万字だの、イブセンの白髪(しらが)の数が何千本だのと言ったってしかたがない。もっともそんな馬鹿(ばか)げた講義を聞いたってとらわれる気づかいはないから大丈夫だが、大学に気の毒でいけない。どうしても新時代の青年を満足させるような人間を引っ張って来なくっちゃ。西洋人じゃだめだ。第一幅がきかない。……」

満堂はまたことごとく喝采した。そうしてことごとく笑った。与次郎の隣にいたものが、

「ダーターファブラのために祝盃をあげよう」と言い出した。さっき演説をした学生がすぐに賛成した。あいにく麦酒(ビール)がみな空(から)である。よろしいと言って与次郎はすぐ台所のほうへ駆けて行った。給仕が酒を持って出る。祝盃をあげるやいなや、

「もう一つ。今度は偉大なる暗闇(くらやみ)のために」と言ったものがある。与次郎の周囲にいたものは声を合わして、アハハと笑った。与次郎は頭をかいている。

散会の時刻が来て、若い男がみな暗い夜の中に散った時に、三四郎が与次郎に聞いた。

「ダーターファブラとはなんのことだ」

「希臘(ギリシャ)語だ」

与次郎はそれよりほかに答えなかった。三四郎もそれよりほかに聞かなかった。二人は美しい空

(1) ウイリアム・シェークスピア。一五六四〜一六一六、イギリスの劇作家・詩人。作に四大悲劇「ハムレット」「リア王」「マクベス」「オセロ」などがある。

をいただいて家に帰った。

あくる日は予想のごとく好天気である。今年は例年より気候がずっとゆるんでいる。ことさら今日は暖かい。三四郎は朝のうち湯に行った。閑人の少ない世の中だから、午前はすこぶるすいている。三四郎は板の間にかけてある三越呉服店の看板を見た。きれいな女がかいてある。その女の顔がどこか美禰子に似ている。よく見ると眼つきが違っている。歯並びがわからない。美禰子の顔でもっとも三四郎を驚かしたものは眼つきと歯並びである。与次郎の説によると、あの女は反っ歯の気味だから、ああ始終歯が出るんだそうだが、三四郎には決してそうは思えない。……

三四郎は湯につかってこんなことを考えていたので、からだのほうはあまり洗わずに出た。ゆうべから急に新時代の青年という自覚が強くなったけれども、強いのは自覚だけで、からだのほうはもとのままである。休みになるとほかのものよりずっと楽にしている。きょうは昼から大学の陸上運動会を見に行く気である。

三四郎は元来あまり運動好きではない。国にいるとき兎狩りを二、三度したことがある。それから高等学校の端艇競漕のときに旗振りの役を勤めたことがある。その時青と赤と間違えて振って大変苦情が出た。もっとも決勝の鉄砲を打つかかりの教授が鉄砲を打ち損なった。打つには打ったが音がしなかった。これが三四郎のあわてた原因である。それより以来三四郎は運動会へ近づかなかった。しかし今日は上京以来はじめての競技会だからぜひ行って見るつもりである。与次郎もぜひ行って見ろと勧めた。与次郎の言うところによると競技より女のほうが見に行く価値があるのだそうだ。女のうちには野々宮さんの妹がいるだろう。野々宮さんの妹といっしょに美禰子もいるだ

ろう。そこへ行って、今日はとかなんとか挨拶をしてみたい。
昼過ぎになったから出かけた。会場の入口は運動場の南のすみにある。大きな日の丸と英吉利の国旗が交叉してある。日の丸は合点がいくが、英吉利の国旗はなんのためだかわからない。三四郎は日英同盟[1]のせいかとも考えた。けれども日英同盟と大学の陸上運動会とはどういう関係があるか、とんと見当がつかなかった。
運動場は長方形の芝生である。秋が深いので芝の色がだいぶさめている。競技を見るところは西側にある。うしろに大きな築山をいっぱいに控えて、前は運動場の柵で仕切られた中へ、みんなを追い込むしかけになっている。狭い割に見物人が多いのではなはだ窮屈である。幸い日和がいいので寒くはない。しかし外套を着ているものがだいぶある。そのかわり傘をさして来た女もある。
三四郎が失望したのは婦人席が別になっていて、普通の人間には近寄れないことであった。それからフロックコートやなにか着た偉そうな男がたくさん集まって、自分が存外幅のきかないように見えたことであった。新時代の青年をもってみずからおる三四郎は少し小さくなっていた。それでも人のあいだから婦人席のほうを見渡すことは忘れなかった。横からだからよく見えないが、ここはさすがにきれいである。ことごとく着飾っている。そのうえ遠距離だから顔がみんな美しい。そのかわりだれが目立って美しいということもない。ただ総体が総体として美しい。女が男を征服する色である。甲の女が乙の女にうち勝つ色ではなかった。そこで三四郎はまた失望した。しかし注意したら、どこかにいるだろうと思って、よく見渡すと、はたして前列のいちばん柵に近いところ

(1) 明治三十五年、日本とイギリスのあいだに結ばれた同盟条約。大正十一年廃止。

に二人並んでいた。

三四郎は目のつけどころがようやくわかったので、まず一段落告げたような気で、安心していると、たちまち五、六人の男が眼の前に飛んで出た。二百メートルの競走がすんだのである。決勝点は美禰子とよし子がすわっている真正面で、しかも鼻の先だから、二人を見つめていた三四郎の視線のうちにはぜひともこれらの壮漢がはいって来る。五、六人はやがて十二、三人にふえた。みんな呼吸をはずませているように見える。三四郎はこれらの学生の態度と自分の態度とを比べてみて、その相違に驚いた。どうして、ああ無分別に駆ける気になれたものだろうと思った。しかし婦人連はことごとく熱心に見ている。そのうちでも美禰子とよし子はもっとも熱心らしい。三四郎は自分も無分別に駆けてみたくなった。一番に到着したものが、紫の猿股をはいて婦人席のほうを向いて立っている。よく見るとゆうべの親睦会で演説をした学生に似ている。ああ背が高くては一番になるはずである。計測掛りが黒板に二十五秒七四と書いた。書き終わって、余りの白墨を向こうへなげて、こっちをむいたところを見ると野々宮さんであった。野々宮さんはいつになくまっ黒なフロックを着て、胸に掛り員の徽章をつけて、だいぶ人品がいい。半帛を出して、洋服の袖を二、三度はたいたが、やがて黒板を離れて、芝生の上を横切って来た。ちょうど美禰子とよし子のすわっているまん前のところへ出た。低い柵の向こう側から首を婦人席の中へ延ばして、なにか言っている。美禰子は立った。野々宮さんのところまで歩いて行く。柵の向こうとこちらで話を始めたように見える。美禰子は急に振り返った。うれしそうな笑いにみちた顔である。三四郎は遠くから一生懸命に二人を見守っていた。すると、よし子が立った。また柵のそばへ寄って行く。二人が三人に

なった。芝生の中では砲丸投げが始まった。
砲丸投げほど腕の力のいるものはなかろう。力のいるわりにこれほどおもしろくないものも沢山ない。ただ文字どおり砲丸を投げるのである。芸でもなんでもない。野々宮さんは柵のところで、ちょっとこの様子を見て笑っていた。けれども見物のじゃまになると悪いと思ったのであろう。柵を離れて芝生の中へ引き取った。二人の女ももとの席へ復した。砲丸はときどき投げられている。第一どのくらい遠くまで行くんだかほとんど三四郎にはわからない。三四郎は馬鹿馬鹿しくなった。それでもがまんして立っていた。ようやくのことで片がついたとみえて、野々宮さんはまた黒板へ十一メートル三八と書いた。

それからまた競走があって、長飛び(1)があって、その次には槌投げ(2)が始まった。三四郎はこの槌投げにいたって、とうとう辛抱がしきれなくなった。運動会はめいめい勝手に開くべきものである。人に見せるべきものではない。あんなものを熱心に見物する女はことごとく間違っているとまで思い込んで、会場を抜け出して、裏の築山のところまで来た。幕が張ってあって通れない。引き返して砂利の敷いてあるところを少し来ると、会場から逃げた人がちらほら歩いている。盛装した婦人も見える。三四郎はまた右へ折れて、爪先上りを岡の頂点まで来た。道は頂点で尽きている。大きな石がある。三四郎はその上へ腰をかけて、高い崖の下にある池をながめた。下の運動場でわあという多勢の声がする。

三四郎はおよそ五分ばかり石へ腰をかけたままぼんやりしていた。やがてまた動く気になったの

(1) 走幅跳。(2) ハンマー投げ。

で腰を上げて、立ちながら靴の踵を向け直すと、岡の上りぎわの、薄く色づいた紅葉のあいだに、さっきの女の影が見えた。並んで岡の裾を通る。
三四郎は上から、二人を見下ろしていた。二人は枝の隙から明らかな日向へ出て来た。黙っていると、前を通り抜けてしまう。三四郎は声をかけようかと考えた。距離があまり遠すぎる。急いで二、三歩芝の上を裾のほうへ下りた。下り出すといいぐあいに女の一人がこっちを向いてくれた。三四郎はそれでとまった。実はこちらからあまりご機嫌をとりたくない。運動会が少し癪にさわっている。
「あんなところに……」とよし子が言い出した。驚いて笑っている。この女はどんな陳腐なものを見ても珍らしそうな眼つきをするように思われる。そのかわり、いかな珍らしいものに出会っても、やはり待ち受けていたような眼つきで迎えるかと想像される。だからこの女に会うと重苦しいところが少しもなくなって、しかも落ちついた感じが起こる。三四郎は立ったまま、これはまったく、この大きな、常に濡れている、黒い眸のおかげだと考えた。
美禰子もとまった。三四郎を見た。しかしその眼はこの時にかぎってなにものをも訴えていなかった。まるで高い木をながめるような眼であった。三四郎は心のうちで、火の消えた洋燈を見る心持ちがした。もとのところに立ちすくんでいる。美禰子も動かない。
「なぜ競技をごらんにならないの」とよし子が下から聞いた。
「今まで見ていたんですが、つまらないからやめて来たのです」
よし子は美禰子を顧みた。美禰子はやはり顔色を動かさない。三四郎は、

〽あんな
ところに、、、
とし
よし子が

「それより、あなたがたこそなぜ出て来たんです。大変熱心に見ていたじゃありませんか」と当てたような当てないようなことを大きな声で言った。美禰子はこの時はじめて、少し笑った。三四郎にはその笑いの意味がよくわからない。二歩ばかり女のほうに近づいた。
「もう宅へ帰るんですか」
女は二人とも答えなかった。三四郎はまた二歩ばかり女のほうへ近づいた。
「どこかへ行くんですか」
「ええ、ちょっと」と美禰子が小さな声で言う。よく聞こえない。三四郎はとうとう女の前まで下りて来た。しかしどこへ行くとも追究もしないで立っている。会場のほうで喝采の声が聞こえる。
「高飛び(1)よ」とよし子が言う。「今度は何メートルになったでしょう」
美禰子は軽く笑ったばかりである。三四郎も黙っている。三四郎は高飛びに口を出すのをいさぎよしとしない(2)つもりである。すると美禰子が聞いた。
「この上にはなにかおもしろいものがあって?」
この上には石があって、崖があるばかりである。おもしろいものがありようはずがない。
「なにもないです」
「そう」と疑いを残したように言った。
「ちょいとあがって見ましょうか」とよし子が、快く言う。
「あなた、まだここをご存じないの」と相手の女は落ちついて出た。

(1) 走高跳。 (2) それでよいと自分で認めない。

「いいからいらっしゃいよ」

よし子は先へ上(のぼ)る。二人はまたついて行った。よし子は足を芝生(しばふ)の端まで出して、振り向きながら、

「絶壁ね」と大げさな言葉を使った。「サッフォー(1)でも飛び込みそうなところじゃありませんか」

美禰子と三四郎は声を出して笑った。そのくせ三四郎はサッフォーがどんなところから飛び込んだかよくわからなかった。

「あなたも飛び込んでごらんなさい」と美禰子が言う。

「わたくし? 飛び込みましょうか。でもあんまり水がきたないわね」と言いながら、こっちへ帰って来た。

やがて女二人のあいだに用談が始まった。

「あなた、いらしって」と美禰子がいう。

「ええ。あなたは」とよし子がいう。

「どうしましょう」

「どうでも。なんならわたくしちょっと行ってくるから、ここに待っていらっしゃい」

「そうね」

なかなか片づかない。三四郎が聞いてみると、よし子が病院の看護婦のところへ、ついでだから、ちょっと礼に行ってくるんだと言う。美禰子はこの夏自分の親戚が入院していた時近づきにな

(1) 前七世紀ごろのギリシアの女流抒情詩人。美少年パオンとの恋に破れ、レフカスの海岸から投身したと伝えられる。

った看護婦を訪ねれば訪ねるのだが、これは必要でもなんでもないのだそうだ。

よし子は、素直に気の軽い(1)女だから、しまいに、すぐ帰って来ますと言い捨てて、早足に一人丘を下りて行った。止めるほどの必要もなし、いっしょに行くほどの事件でもないので、二人は自然あとにのこるわけになった。二人の消極な態度からいえば、のこるというより、のこされたかたちにもなる。

三四郎はまた石に腰をかけた。女は立っている。秋の日は鏡のように濁った池の上に落ちた。中には小さな島がある。島にはただ二本の木がはえている。青い松と薄い紅葉がぐあいよく枝を交し合って、箱庭の趣がある。島を越して向こう側の突き当たりがこんもりとどす黒く光っている。女は丘の上からその暗い木陰を指さした。

「あの木を知っていらしって」という。

「あれは椎」

女は笑い出した。

「よく覚えていらっしゃること」

「あの時の看護婦ですか、あなたが今訪ねようと言ったのは」

「ええ」

「よし子さんの看護婦とは違うんですか」

「違います。これは椎——といった看護婦です」

(1) 物事をつきつめて考えず、もったいぶらない。きさくな。

今度は三四郎が笑い出した。
「あすこですね。あなたがあの看護婦といっしょに団扇(うちわ)を持って立っていたのは」
二人のいるところは高く池の中に突き出している。この丘とはまるで縁のない小山が一段低く、右側を走っている。大きな松と御殿の一角(ひとかど)と、運動会の幕の一部と、なだらな芝生(しばふ)が見える。
「熱い日でしたね。病院があんまり暑いものだから、とうとうこらえきれないで出て来たの。――あなたはまたなんであんなところにしゃがんでいらしったんです」
「熱いからです。あの日ははじめて野々宮さんに会って、それから、あすこへ来てぼんやりしていたのです。なんだか心細くなって」
「野々宮さんにお会いになってから、心細くおなりになったの」
「いいえ、そういうわけじゃない」と言いかけて、美禰子の顔を見たが、急に話頭を転じた。
「野々宮さんといえば、今日は大変働いていますね」
「ええ、珍らしくフロックコートをお着になって――ずいぶんご迷惑でしょう。朝から晩までですから」
「だってだいぶ得意のようじゃありませんか」
「だれが、野々宮さんが。――あなたもずいぶんね」
「なぜですか」
「だって、まさか運動会の計測掛りになって得意になるような方(かた)でもないでしょう」
三四郎はまた話頭を転じた。

「さっきあなたのところへ来てなにか話していましたね」
「会場で？」
「ええ、運動場の柵のところで」と言ったが、三四郎はこの問いを急に撤回したくなった。女は「ええ」と言ったまま男の顔をじっと見ている。少し下唇をそらして笑いかけている。三四郎はたまらなくなった。なにか言ってまぎらかそうとした時に、女は口を開いた。
「あなたはまだこのあいだの絵はがきの返事をくださらないのね」
三四郎はまごつきながら「あげます」と答えた。女はくれともなんとも言わない。
「あなた、原口さんという画工をご存じ？」と聞き直した。
「知りません」
「そう」
「どうかしましたか」
「なに、その原口さんが、きょう見に来ていらしってね。みんなを写生しているから、わたくしたちも用心しないと、ポンチにかかれるからって、野々宮さんがわざわざ注意してくだすったんです」
美禰子はそばへ来て腰をかけた。三四郎は自分がいかにも愚物のような気がした。
「よし子さんは兄さんといっしょに帰らないんですか」
「いっしょに帰ろうたって帰れないわ。よし子さんは、きのうからわたくしの家にいるんですもの」
三四郎はその時はじめて美禰子から野々宮のおっかさんが国へ帰ったということを聞いた。おっ

かさんが帰ると同時に、大久保を引き払って、野々宮さんは下宿をする、よし子は当分美禰子の宅から学校へ通うことに、相談がきまったんだそうである。

三四郎はむしろ野々宮さんの気楽なのに驚いた。そうたやすく下宿生活にもどるくらいなら、始めから家を持たないほうがよかろう。第一鍋、釜、手桶などという世帯道具のしまつはどうつけたろうとよけいなことまで考えたが、口に出して言うほどのことでもないから、別段の批評は加えなかった。そのうえ、野々宮さんが一家の主人から、あともどりをして、ふたたび純書生と同様な生活状態に復するのは、とりもなおさず家族制度から一歩遠のいたと同じことで、自分にとっては、目前の迷惑を少し長距離へ引き移したような好都合にもなる。そのかわりよし子が美禰子の家へ同居してしまった。この兄妹は絶えず往来していないと治まらないようにできあがっている。絶えず往来しているうちには野々宮さんと美禰子との関係もしだいしだいに移って来る。すると野々宮さんがまたいつ何時下宿生活を永久にやめる時機が来ないともかぎらない。

三四郎は頭の中に、こういう疑いある未来を、描きながら、美禰子と応対をしている。いっこうに気が乗らない。それを外部の態度だけでも普通のごとく繕おうとすると苦痛になって来る。そこへうまいぐあいによし子が帰って来てくれた。女同志のあいだには、もういっぺん競技を見に行こうかという相談があったが、短くなりかけた秋の日がだいぶ回ったのと、回るにつれて、広い戸外の肌寒がようやく増してくるので、帰ることに話がきまる。

三四郎も女連に別れて下宿へもどろうと思ったが、三人が話しながら、ずるずるべったりに歩き出したものだから、きわ立った挨拶をする機会がない。二人は自分を引っ張って行くようにみえ

る。自分もまた引っ張られて行きたいような気がある。それで二人にくっついて池の端を図書館の横から、方角違いの赤門のほうへ向いて来た。その時三四郎は、よし子に向かって、

「お兄いさんは下宿をなすったそうですね」と聞いたら、よし子は、すぐ、

「ええ。とうとう。ひとを美禰子さんのとこへ押しつけておいて。ひどいでしょう」と同意を求めるように言った。三四郎はなにか返事をしようとした。その前に美禰子が口を開いた。

「宗八さんのような方は、我々の考えじゃわかりませんよ。ずっと高いところにいて、大きなことを考えていらっしゃるんだから」と大いに野々宮さんをほめ出した。よし子は黙って聞いている。学問をする人がうるさい俗用を避けて、なるべく単純な生活にがまんするのは、みんな研究のためやむをえないんだからしかたがない。野々宮のような外国にまで聞こえるほどの仕事をする人が、普通の学生同様な下宿にはいっているのも畢竟[1]野々宮が偉いからのことで、下宿がきたなければきたないほど尊敬しなくってはならない。――美禰子の野々宮に対する賛辞のつづきは、ざっとこうである。

三四郎は赤門のところで二人に別れた。追分のほうへ足を向けながら考えだした。――なるほど美禰子の言ったとおりである。自分と野々宮を比較してみるとだいぶ段が違う。自分は田舎から出て大学へはいったばかりである。学問という学問もなければ、見識という見識もない。自分が、野々宮に対するほどな尊敬を美禰子から受けえないのは当然である。そういえばなんだか、あの女から馬鹿にされているようでもある。さっき、運動会はつまらないから、ここにいると、丘の上で

(1) つまるところ。けっきょく。

答えた時に、美禰子はまじめな顔をして、この上にはなにかおもしろいものがありますかと聞いた。あの時は気がつかなかったが、今解釈してみると、故意に自分を愚弄した言葉かもしれない。——三四郎は気がついて、今日まで美禰子の自分に対する態度や言語をいちいちくり返してみると、どれもこれもみんな悪い意味がつけられる。三四郎は往来のまん中でまっ赤になって俯向いた。ふと、顔を上げると向こうから、与次郎とゆうべの会で演説をした学生が並んで来た。与次郎は首を竪に振ったぎり黙っている。学生は帽子をとって礼をしながら、
「昨夜は。どうですか。とらわれちゃいけませんよ」と笑って行き過ぎた。

七

裏から回って婆さんに聞くと、婆さんが小さな声で、与次郎さんはきのうからお帰りなさらないと言う。三四郎は勝手口に立って考えた。婆さんは気をきかして、まあおはいりなさい。先生は書斎においでですからと言いながら、手を休めずに、膳椀を洗っている。今晩食がすんだばかりのところらしい。
三四郎は茶の間を通り抜けて、廊下伝いに書斎の入口まで来た。戸があいている。中から「おい」と人を呼ぶ声がする。三四郎は敷居のうちへはいった。先生は机に向かっている。机の上にはなにがあるかわからない。高い背が研究を隠している。三四郎は入口に近くすわって、
「ご勉強ですか」と丁寧に聞いた。先生は顔をうしろへねじ向けた。髭の影が不明瞭にもじゃも

じゃしている。写真版で見ただれかの肖像に似ている。

「やあ、与次郎かと思ったら、君ですか、失敬した」と言って、席を立った。机の上には筆と紙がある。先生はなにか書いていた。与次郎の話に、うちの先生はときどきなにか書いている。しかしなにを書いているんだか、ほかの者が読んでもちっともわからない。生きているうちに、大著述にでもまとめられれば結構だが、あれで死んでしまっちゃあ、反古(1)がたまるばかりだ。実につまらない。と嘆息していたことがある。三四郎は広田の机の上を見て、すぐ与次郎の話を思い出した。

「おじゃまなら帰ります。別段の用事でもありません」

「いや、帰ってもらうほどじゃまでもありません。こっちの用事も別段のことでもないんだから。そう急に片づける性質のものをやっていたんじゃない」

三四郎はちょっと挨拶ができなかった。しかし腹のうちでは、この人のような気分になれたら、勉強も楽にできてよかろうと思った。しばらくしてから、こう言った。

「実は佐々木君のところへ来たんですが、いなかったものですから……」

「ああ。与次郎はなんでもゆうべから帰らないようだ。ときどき漂泊して困る」

「なにか急に用事でもできたんですか」

「用事は決してできる男じゃない。ただ用事をこしらえる男でね。ああいう馬鹿は少ない」

三四郎はしかたがないから、

「なかなか気楽ですな」と言った。

(1) 書き損じたりして、不明になった紙。役に立たないもの。

「気楽ならいいけれども、与次郎のは気楽なのじゃない。気が移るので――たとえば田の中を流れている小川のようなものと思っていればまちがいはない。浅くて狭い。しかし水だけは始終変わっている。だから、することが、ちっとも締りがない。縁日へひやかしになど行くと、急に思い出したように、先生松を一鉢お買いなさいなんて妙なことを言う。そうして買うともなんとも言わないうちに値切って買ってしまう。そのかわり縁日のものを買うことなんぞは上手でね。あいつに買わせると大変安く買える。そうかと思うと、夏になってみんなが家を留守にするときなんか、松を座敷へ入れたまんま雨戸を閉てて錠をおろしてしまう。帰って見ると、松が温気[1]で蒸れてまっ赤になっている。万事そういうふうでまことに困る」

実を言うと三四郎はこのあいだ与次郎に二十円借した。二週間後には文芸時評社から原稿料が取れるはずだから、それまで立て替えてくれろと言う。わけを聞いてみると、気の毒であったから、国から送って来たばかりの為替を五円引いて、余りはことごとく貸してしまった。まだ返す期限ではないが、広田の話を聞いてみると少々心配になる。しかし先生にそんなことはうちあけられないから、反対に、

「でも佐々木君は、大いに先生を敬服して、陰では先生のためになかなか尽力しています」と言うと、先生はまじめになって、

「どんな尽力をしているんですか」と聞き出した。ところが「偉大なる暗闇」その他すべて広田先生に関する与次郎の所為は、先生に話してはならないと、当人から封じられている。やりかけた

（1）むしあつさ。暑気。

途中でそんなことが知れると先生にしかられるにきまってるから黙っているべきだという。話していい時にはおれが話すと明言しているんだからしかたがない。三四郎は話をそらしてしまった。

三四郎が広田の家へ来るにはいろいろな意味がある。一つは、この人の生活その他が普通のものと変わっている。ことに自分の性情とはまったくいれないようなところがある。そこで三四郎はどうしたらああなるだろうという好奇心から参考のため研究に来る。次にこの人の前に出るとのんきになる。世の中の競争があまり苦にならない。野々宮さんも広田先生と同じく世外の趣はあるが、世外の功名心のために、流俗の嗜欲を遠ざけているかのように思われる。[1]だから野々宮さんを相手に二人ぎりで話していると、自分も早く一人前の仕事をして、学海に貢献しなくてはすまないような気が起こる。いらついてたまらない。そこへいくと広田先生は太平である。先生は高等学校でただ語学を教えるだけで、ほかになんの芸もない——と言っては失礼だが、ほかになんらの研究も公けにしない。——しかも泰然ととりすましている。そこに、こののんきの源は伏在しているのだろうと思う。三四郎は近ごろ女にとらわれた。恋人にとらわれたのなら、かえっておもしろいが、惚れられているんだか、馬鹿にされているんだか、こわがっていいんだか、蔑んでいいんだか、よすべきだか、続けべきだかわけのわからないとらわれ方である。三四郎はいまいましくなった。そういう時は広田さんに限る。三十分ほど先生と相対していると心持ちが悠揚になる。女の一人や二人どうなってもかまわないと思う。実を言うと、三四郎が今夜出かけて来たのは七分方この意味である。

(1) 世俗をはなれたところでの功名心のために、一般の俗人のむさぼり好む心を遠ざけている。

訪問理由の第三はだいぶ矛盾している。自分は美禰子に苦しんでいる。美禰子のそばに野々宮さんを置くとなお苦しんでくる。その野々宮さんにもっとも近いものはこの先生である。だから先生のところへ来ると、野々宮さんと美禰子との関係がおのずから明瞭になってくるだろうと思う。これが明瞭になりさえすれば、自分の態度も判然きわめることができる。そのくせ二人のことをいまだかつて先生に聞いたことがない。今夜は一つ聞いてみようかしらと、心を動かした。

「野々宮さんは下宿をなすったそうですね」

「ええ、下宿したそうです」

「家を持ったものが、また下宿をしたら不便だろうと思いますが、野々宮さんはよく……」

「ええ、そんなことにはいっこう無頓着なほうでね。あの服装を見てもわかる。家庭的な人じゃない。そのかわり学問にかけると非常に神経質だ」

「当分ああやっておいでのつもりなんでしょうか」

「わからない。また突然家を持つかもしれない」

「奥さんでもおもらいになるお考えはないんでしょうか」

「あるかもしれない。いいのを周旋してやりたまえ」

三四郎は苦笑いをして、よけいなことを言ったと思った。すると広田さんが、

「君はどうです」と聞いた。

「わたくしは……」

「まだ早いですね。今から細君を持っちゃあ大変だ」

「国のものは勧めますが」
「国のだれが」
「母です」
「おっかさんの言うとおり持つ気になりますか」
「なかなかなりません」
広田さんは髭の下から歯を出して笑った。割合にきれいな歯を持っている。三四郎はその時急になつかしい心持ちがした。けれどもそのなつかしさは美禰子を離れている。野々宮を離れている。三四郎の眼前の利害には超絶したなつかしさであった。三四郎はこれで、野々宮などのことを聞くのが恥ずかしい気がし出して、質問をやめてしまった。すると広田先生がまた話し出した。――
「おっかさんの言うことはなるべく聞いてあげるがよい。近ごろの青年は我々時代の青年と違って自我の意識が強すぎていけない。我々の書生をしているころには、することなすこと一としてひとを離れたことはなかった。すべてが、君とか、親とか、国とか、社会とか、みんなひと本位であった。それを一口にいうと教育を受けるものがことごとく偽善家(1)であった。その偽善が社会の変化で、とうとう張り通せなくなった結果、ぜんぜん自己本位を思想行為の上に輸入すると、こんどは我意識が非常に発展しすぎてしまった。むかしの偽善家に対して、今は露悪家ばかりの状態にある。――君、露悪家という言葉を聞いたことがありますか」
「いいえ」

(1) 本心からでなく、うわべをつくろって善いことをする人。――

「今僕が即席に作った言葉だ。君もその露悪家の一人——だかどうだか、まあたぶんそうだろう。与次郎のごときにいたるとその最たるものだ。あの君の知ってる里見という女があるでしょう。あれも一種の露悪家で、それから野々宮の妹ね。あれはまた、あれなりに露悪家だからおもしろい。昔は殿様と親父だけが露悪家ですんでいたが、今日ではめいめい同等の権利で露悪家になりたがる。もっとも悪いことでもなんでもない。臭いものの蓋をとれば肥桶で、みごとな形式を剝ぐとたいていは露悪になるのは知れきっている。形式だけみごとだってめんどうなばかりだから、みんな節約して木地だけで用を足している。はなはだ痛快である。天醜爛漫(1)としている。ところがこの爛漫が度を越すと、露悪家同志がお互いに不便を感じて来る。その不便がだんだん高じて極端に達した時利他主義がまた復活する。それがまた形式に流れて腐敗するとまた利己主義に帰参する。つまり際限はない。我々はそういうふうにして暮らして行くものと思えばさしつかえない。そうして行くうちに進歩する。英国を見たまえ。この両主義が昔からうまく平衡がとれている。だから動かない。だから進歩しない。イブセンも出なければニイチエ(2)も出ない。気の毒なものだ。自分だけは得意のようだが、はたから見れば堅くなって、化石しかかっている。……」

三四郎は内心感心したようなものの、話がそれてとんだところへ曲がって、曲がりなりに太くなっていくので、少し驚いていた。すると広田さんもようやく気がついた。

(1)「天真爛漫」(うまれつきのすなおな心を言動にあらわして、つつみかくしのないこと)をもじったもの。生まれつきの醜い心をそのまま言動にあらわして、つつみかくしのないこと。(2)一八四四～一九〇〇、ドイツの哲学者。キリスト教的・民主主義的倫理思想を弱者の奴隷道徳とし、強者の自律的道徳である君主道徳を説き、この道徳の人を「超人」と称し、これを宇宙の本体たる権力意志の権化とみた。

「いったいなにを話していたのかな」
「結婚のことです」
「結婚？」
「ええ、わたくしが母の言うことを聞いて……」
「うん、そうそう。なるべくおっかさんの言うことを聞かなければいけない」と言ってにこにこしている。まるで子供に対するようである。三四郎は別に腹も立たなかった。
「我々が露悪家なのは、いいですが、先生時代の人が偽善家なのは、どういう意味ですか」
「君、人から親切にされて愉快ですか」
「ええ、まあ愉快です」
「きっと？　僕はそうでない、大変親切にされて不愉快なことがある」
「どんな場合ですか」
「形式だけは親切にかなっている。しかし親切自身が目的でない場合」
「そんな場合があるでしょうか」
「君、元日におめでとうと言われて、実際おめでたい気がしますか」
「そりゃ……」
「しないだろう。それと同じく腹をかかえて笑うだの、ころげかえって笑うだのというやつに、一人だって実際笑ってるやつはない。親切もそのとおり。お役目に親切をしてくれるのがある。僕が学校で教師をしているようなものでね。実際の目的は衣食にあるんだから、生徒からみたら定め

て不愉快だろう。これに反して与次郎のごときは露悪党の領袖(1)だけに、たびたび僕に迷惑をかけて、しまつにおえぬいたずらものだが、悪気がない。かわいらしいところがある。ちょうど亜米利加人の金銭に対して露骨なのと一般だ。それ自身が目的である。それ自身が目的である行為ほど正直なものはなくって、正直ほど厭味のないものはないんだから、万事正直に出られないような我々時代のこむずかしい教育を受けたものはみんな気障だ」

ここまでの理屈は三四郎にもわかっている。けれども三四郎にとって、目下痛切な問題は、大体にわたっての理屈ではない。実際に交渉のある或格段な相手が、正直か正直でないかを知りたいのである。三四郎は腹の中で美禰子の自分に対する素振りをもう一ぺん考えてみた。ところが気障か気障でないかほとんど判断ができない。三四郎は自分の感受性が人一倍鈍いのではなかろうかと疑い出した。

その時広田さんは急にうんと言って、なにか思い出したようである。

「うん、まだある。この二十世紀になってから妙なのがはやる。利他本位の内容を利己本位でみたすというむずかしいやり口なんだが、君そんな人に出会ったですか」

「どんなのです」

「ほかの言葉で言うと、偽善を行なうに露悪をもってする。まだわからないだろうな。ちと説明しかたが悪いようだ。――昔の偽善家はね、なんでも人に善く思われたいが先に立つんでしょう。ところがその反対で、人の感触を害するために、わざわざ偽善をやる。横から見ても縦から見て

(1) かしら。おもだった人。

も、相手には偽善としか思われないようにしむけていく。相手はむろんいやな心持ちがする。そこで本人の目的は達せられる。偽善を偽善そのままで先方に通用させようとする正直なところが露悪家の特色で、しかも表面上の行為言語はあくまでも善にちがいないから、――そら、二位一体というようなことになる。この方法を巧妙に用いるものが近来だいぶふえて来たようだ。きわめて神経の鋭敏になった文明人種が、もっとも優美に露悪家になろうとすると、これが一番いい方法になる。血を出さなければ人が殺せないというのはずいぶん野蛮な話だからな君、だんだんはやらなくなる」

広田先生の話し方は、ちょうど案内者が古戦場を説明するようなもので、実際を遠くからながめた地位にみずからを置いている。それがすこぶる楽天の趣がある。あたかも教場で講義を聞くと一般の感を起こさせる。しかし三四郎にはこたえた。念頭に美禰子という女があって、この理論をすぐ適用できるからである。三四郎は頭の中にこの標準を置いて、美禰子のすべてを測ってみた。しかし測りきれないところが大変ある。先生は口を閉じて、例のごとく鼻から哲学の煙を吐き始めた。

ところへ玄関に足音がした。案内も乞わずに廊下伝いにはいってくる。たちまち与次郎が書斎の入口にすわって、「原口さんがおいでになりました」と言う。ただいま帰りましたという挨拶をはぶいている。わざとはぶいたのかもしれない。三四郎にはぞんざいな目礼をしたばかりですぐに出て行った。

与次郎と敷居ぎわですれ違って、原口さんがはいって来た。原口さんは仏蘭西式の髭をはやし

て、頭を五分刈りにした、脂肪の多い男である。野々宮さんより年が二つ三つ上に見える。広田先生よりずっときれいな和服を着ている。

「やあ、しばらく。今まで佐々木が宅へ来ていてね。いっしょに飯を食ったりなにかして――それから、とうとう引っ張り出されて……」とだいぶ楽天的な口調である。そばにいると自然陽気になるような声を出す。三四郎は原口という名前を聞いた時から、大方あの画工だろうと思っていた。それにしても与次郎は交際家だ。大抵な先輩とはみんな知り合いになっているから偉いと感心してかたくなった。三四郎は年長者の前へ出るとかたくなる。九州流の教育を受けた結果だと自分では解釈している。

やがて主人が原口に紹介してくれる。三四郎は丁寧に頭を下げた。向こうは軽く会釈した。三四郎はそれから黙って二人の談話を承っていた。

原口さんはまず用談から片づけると言って、近いうちに会をするから出てくれと頼んでいる。会員と名のつくほどの立派なものはこしらえないつもりだが、通知を出すものは、文学者とか芸術家とか、大学の教授とか、わずかな人数に限っておくからさしつかえはない。しかもたいてい知り合いのあいだだから、形式はまったく不必要である。目的はただ大勢寄って晩餐を食う。それから文芸上有益な談話を交換する。そんなものである。

広田先生は一口「出よう」と言った。用事はそれですんでしまったが、それからあとの原口さんと広田先生の会話がすこぶるおもしろかった。

広田先生が「君近ごろなにをしているかね」と原口さんに聞くと、原口さんがこんなことを言う。

「やっぱり一中節(1)を稽古している。もう五つほど上げた。花紅葉吉原八景(2)だの、小稲半兵衛唐崎心中(3)だのってなかなかおもしろいのがあるよ。君も少しやってみないか。もっともありゃ、あまり大きな声を出しちゃいけないんだってね。本来が四畳半の座敷(4)に限ったものだそうだ。ところが僕がこのとおり大きな声だろう。それに節回しがあれでなかなか込み入っているんで、どうしてもうまくいかん。今度一つやるから聞いてくれたまえ」

広田先生は笑っていた。すると原口さんは続きをこういうふうに述べた。

「それでも僕はまだいいんだが、里見恭助と来たら、まるで片なしだからね。どういうものかしらん。妹はあんなに器用だのに。このあいだはとうとう降参して、もう唄はやめる、そのかわりなにか楽器を習おうと言い出したところが、馬鹿囃(5)をお習いなさらないかと勧めたものがあってね。大笑いさ」

「そりゃ本当かい」

「本当とも。現に里見が僕に、君がやるならやってもいいと言ったくらいだもの。あれで馬鹿囃には八とおりはやしかたがあるんだそうだ」

「君、やっちゃどうだ。あれなら普通の人間にでもできそうだ」

「いや馬鹿囃はいやだ。それよりか鼓が打ってみたくってね。なぜだか鼓の音を聞いていると、まったく二十世紀の気がしなくなるからいい。どうして今の世にああ間が抜けていられるだろうと

(1) 浄瑠璃節の一つ。江戸中期に、京都の都一中が始めたもの。(2) 普通「吉原八景」という。吉原の全盛を近江八景に見立てたもの。(3) 普通「唐崎心中」という。稲野屋半兵衛と芸妓小いなとの心中を扱ったもの。(4) 待合などのいきな小部屋。(5) 神社の祭礼の山車などで演ずるはやし。

思うと、それだけで大変な薬になる。いくら僕がのんきでも、鼓の音のような絵はとても描けないから」

「描こうともしないんじゃないか」

「描けないんだもの。今の東京にいるものに悠揚な絵ができるものか。もっとも絵に限るまいけれども。——絵といえば、このあいだ大学の運動会へ行って、里見と野々宮さんの妹のカリカチュアー(1)を描いてやろうと思ったら、とうとう逃げられてしまった。こんだ一つ本当の肖像画を描いて展覧会にでも出そうかと思って」

「だれの」

「里見の妹の。どうも普通の日本の女の顔は歌麿式(2)やなにかばかりで、西洋の画布には移りが悪くっていけないが、あの女や野々宮さんはいい。両方ともに絵になる。あの女が団扇をかざして、木立をうしろに、明るいほうを向いているところを等身に写してみようかしらと思ってる。西洋の扇は厭味でいけないが、日本の団扇は新しくっておもしろいだろう。とにかく早くしないとだめだ。今に嫁にでも行かれようものなら、そうこっちの自由にいかなくなるかもしれないから」

三四郎は多大な興味をもって原口の話を聞いていた。ことに美禰子が団扇をかざしている構図は非常な感動を三四郎に与えた。不思議の因縁が二人のあいだに存在しているのではないかと思うほどであった。すると広田先生が、「そんな図はそうおもしろいこともないじゃないか」と無遠慮なことを言い出した。

(1) 戯画。漫画。 (2) 歌麿の書いた瓜実顔の美人に似た顔。

「でも当人の希望なんだもの。団扇をかざしているところは、どうでしょうと言うから、すこぶる妙でしょうと言って承知したのさ。なにわるい図どりではないよ。描きようにもよるが」
「あんまり美しく描くと、結婚の申し込みが多くなって困るぜ」
「ハハハじゃ中ぐらいに描いておこう。結婚といえば、あの女も、もう嫁に行く時期だね。どうだろう、どこかいい口はないだろうか。里見にも頼まれているんだが」
「君もらっちゃどうだ」
「僕か。僕でよければもらうが、どうもあの女には信用がなくってね」
「なぜ」
「原口さんは洋行する時には大変な気込みで、わざわざ鰹節を買い込んで、これで巴里の下宿に籠城するなんて大威張りだったが、巴里へ着くやいなや、たちまち豹変したそうですねって笑うんだからしまつがわるい。大方兄からでも聞いたんだろう」
「あの女は自分の行きたいところでなくっちゃ行きっこない。勧めたってだめだ。好きな人があるまで独身でおくがいい」
「まったく西洋流だね。もっともこれからの女はみんなそうなるんだから、それもよかろう」
それから二人のあいだに長い絵画談があった。三四郎は広田先生の西洋の画工の名をたくさん知っているのに驚いた。帰るとき勝手口で下駄を探していると、先生が階子段の下へ来て「おい佐々木ちょっと降りて来い」と言っていた。
戸外は寒い。空は高く晴れて、どこから露が降るかと思うくらいである。手が着物にさわると、

さわったところだけが冷りとする。人通りの少ない小路を二、三度折れたり曲がったりして行くうちに、突然辻占屋(1)に会った。大きな丸い提灯をつけて、腰から下をまっ赤にしている。三四郎は辻占が買ってみたくなった。しかしあえて買わなかった。杉垣に羽織の肩がさわるほどに、赤い提灯をよけて通した。しばらくして、暗いところをはすに抜けると、追分の通りへ出た。角に蕎麦屋がある。三四郎は今度は思いきって暖簾をくぐった。少し酒を飲むためである。

高等学校の生徒が三人いる。近ごろ学校の先生が昼の弁当に蕎麦を食うものが多くなったと話している。蕎麦屋の担夫が午砲が鳴ると、蒸籠(2)や種もの(3)を山のように肩へ載せて、急いで校門をはいってくる。ここの蕎麦屋はあれでだいぶもうかるだろうと話している。なんとかいう先生は夏でも釜揚げうどん(4)を食うが、どういうものだろうと言っている。大方胃が悪いんだろうと言っている。そのほかいろいろのことを言っている。教師の名はたいてい呼びすてにする。なかに一人広田さんと言ったものがある。それからなぜ広田さんは独身でいるかという議論を始めた。広田さんのところへ行くと女の裸体画がかけてあるから、女がきらいなんじゃなかろうという説である。もっともその裸体画は西洋人だからあてにならない。日本の女はきらいかもしれないという説である。いや失恋の結果にちがいないという説も出た。失恋してあんな変人になったのかと質問したものもあった。しかし若い美人が出入するといううわさがあるが本当かと聞きただしたものもあった。

だんだん聞いているうちに、要するに広田先生は偉い人だということになった。なぜ偉いか三四

（1）吉凶のうらないをする。種々の文句を書いた紙きれを、巻煎餅などにはさんで売る男。（2）底が簀の子になっている、食物をむす道具。もりやざるをさす。（3）肉・てんぷら・かまぼこ等の材料がはいっている汁そば・汁うどん。（4）ゆでたうどんを釜からあげ、熱湯と共に器に入れて食べるもの。

んでいる。現にあれを読んでから、急に広田さんが好きになったと言っている。ときどきは「偉大なる暗闇」のなかにある警句などを引用してくる。そうしてさかんに与次郎の文章をほめている。零余子とはだれだろうと不思議がっている。なにしろよほどよく広田さんを知っている男に相違ないということには三人とも同意した。

三四郎はそばにいてなるほどと感心した。与次郎が「偉大なる暗闇」を書くはずである。文芸時評の売れ高の少ないのは当人の自白したとおりであるのに、麗々しく彼のいわゆる大論文を掲げて得意がるのは、虚栄心の満足以外になんのためになるだろうと疑っていたが、これでみると活版の勢力はやはりたいしたものである。与次郎の主張するとおり、一言でも半句でも言わないほうが損になる。人の評判はこんなところから揚がり、またこんなところから落ちると思うと、筆をとるものの責任が恐ろしくなって、三四郎は蕎麦屋を出た。

下宿へ帰ると、酒はもうさめてしまった。なんだかつまらなくっていけない。机の前にすわって、ぼんやりしていると、下女が下から湯沸しに熱い湯を入れて持って来たついでに、封書を一通置いて行った。また母の手紙である。三四郎はすぐ封を切った。今日は母の手蹟を見るのがはなはだうれしい。

手紙はかなり長いものであったが、別段のことも書いてない。ことに三輪田のお光さんについては一口も述べてないので大いにありがたかった。けれどもなかに妙な助言がある。

お前は子供の時から度胸がなくっていけない。度胸の悪いのは大変な損で、試験の時なぞにはど

のくらい困るかしれない。興津の高さんは、あんなに学問ができて、中学校の先生をしているが、検定試験を受けるたびに、からだがふるえて、うまく答案ができないんで、気の毒なことにいまだに月給があがらずにいる。友だちの医学士とかに頼んでふるえのとまる丸薬をこしらえてもらって、試験前に飲んで出たがやっぱりふるえたそうである。お前のはぶるぶるふるえるほどでもないようだから、平生から治薬に度胸のすわる薬を東京の医者にこしらえてもらって飲んでみろ。癒らないこともなかろうというのである。

三四郎は馬鹿馬鹿しいと思った。けれども馬鹿馬鹿しいうちに大いなる慰藉を見出した。母は本当に親切なものであると、つくづく感心した。その晩一時ごろまでかかって長い返事を母にやった。そのなかには東京はあまりおもしろいところではないという一句があった。

八

三四郎が与次郎に金を貸した顛末は、こうである。

このあいだの晩九時ごろになって、与次郎が雨の中を突然やって来て、冒頭から大いに弱ったと言う。見ると、いつになく顔の色が悪い。始めは秋雨にぬれた冷たい空気に吹かれすぎたからのことと思っていたが、座についてみると、悪いのは顔色ばかりではない。珍らしく消沈している。三四郎が「ぐあいでもよくないのか」と尋ねると、与次郎は鹿のような眼を二度ほどぱちつかせて、こう答えた。

「実は金をなくなしてね。困っちまった」

そこで、ちょっと心配そうな顔をして、煙草の煙を二、三本鼻から吐いた。三四郎は黙って待っているわけにもいかない。どういう種類の金を、どこでなくなしたのかとだんだん聞いてみると、すぐわかった。与次郎は煙草の煙の、二、三本鼻から出きるあいだだけ控えていたばかりで、そのあとは、一部始終をわけもなくすらすら話してしまった。

与次郎のなくした金は、額で二十円、ただし人のものである。去年広田先生がこの前の家を借りる時分に、三か月の敷金に窮して、足りないところを一時野々宮さんから用達ってもらったことがある。しかるにその金は野々宮さんが、妹にヴァイオリンを買ってやらなくてはならないとかで、わざわざ国もとの親父さんから送らせたものだそうだ。それだから今日が今日必要というほどでないかわりに、延びれば延びるほどよし子が困る。よし子は現に今でもヴァイオリンを買わずにすましている。広田先生が返さないからである。先生だって返せればとうに返すんだろうが、月々余裕が一文も出ないうえに、月給以外に決してかせがない男だから、ついそれなりにしてあった。ところがこの夏高等学校の受験生の答案調べを引き受けた時の手当が六十円このごろになってようやく受け取れた。それでようやく義理をすますことになって、与次郎がその使いを言いつかった。

「その金をなくなしたんだからすまない」と与次郎が言っている。実際すまないような顔つきでもある。どこへ落としたんだと聞くと、なに落としたんじゃない。馬券を何枚とか買って、みんななくなしてしまったのだと言う。三四郎もこれにはあきれかえった。あまり無分別の度をとおり越しているので意見をする気にもならない。そのうえ本人が悄然としている。これもいつもの活発発地

と比べると与次郎なるものが二人いるとしか思われない。その対照が激しすぎる。だからおかしいのと気の毒なのとがいっしょになって三四郎を襲って来た。三四郎は笑い出した。すると与次郎も笑い出した。

「まあいいや、どうかなるだろう」と言う。

「先生はまだ知らないのか」と聞くと、

「まだ知らない」

「野々宮さんは」

「むろん、まだ知らない」

「金はいつ受け取ったのか」

「金はこの月始まりだから、今日でちょうど二週間ほどになる」

「馬券を買ったのは」

「受け取ったあくる日だ」

「それから今日までそのままにしておいたのか」

「いろいろ奔走したができないんだからしかたがない。やむをえなければ今月末までこのままにしておこう」

「今月末になればできる見込みでもあるのか」

「文芸時評社から、どうかなるだろう」

三四郎は立って、机の抽出をあけた。きのう母から来たばかりの手紙の中をのぞいて、

「金はここにある。今月は国から早く送って来た」と言った。与次郎は、
「ありがたい。親愛なる小川君」と急に元気のいい声で落語家のようなことを言った。
二人は十時すぎ雨をおかして、追分の通りへ出て、角の蕎麦屋へはいった。三四郎が蕎麦屋で酒を飲むことを覚えたのはこの時である。その晩は二人とも愉快に飲んだ。勘定は与次郎が払った。与次郎はなかなか人に払わせない男である。

それから今日に至るまで与次郎は金を返さない。三四郎は正直だから下宿屋の払いを気にしている。さいそくはしないけれども、どうかしてくれればいいがと思って、日を過ごすうちに晦日近くなった。もう一日二日しか余っていない。間違ったら下宿の勘定を延ばしておこうなどという考えはまだ三四郎の頭に上らない。必ず与次郎が持って来てくれる——とまではむろん彼を信用していないのだが、まあどうか工面してみようくらいの親切気はあるだろうと考えている。広田先生の評によると与次郎の頭は浅瀬の水のように始終移っているのだそうだが、むやみに移るばかりで責任を忘れるようでは困る。まさかそれほどのこともあるまい。

三四郎は二階の窓から往来をながめていた。すると向こうから与次郎が足早にやって来た。窓の下まで来て仰向いて、三四郎の顔を見上げて、「おい、おるか」と言う。三四郎は上から、与次郎を見下ろして、「うん、おる」と言う。この馬鹿みたような挨拶が上下で一句交換されると、三四郎は部屋の中へ首を引っ込める。与次郎は階子段をとんとん上がって来た。

「待っていやしないか。君のことだから下宿の勘定を心配しているだろうと思って、だいぶ奔走した。馬鹿げている」

三四郎は
上から
与次郎を
見下ろして

「文芸時評から原稿料をくれたか」
「原稿料って、原稿料はみんな取ってしまった」
「だってこのあいだは月末に取るように言っていたじゃないか」
「そうかな、それは聞き違いだろう。もう一文も取るのはない」
「おかしいな。だって君はたしかにそう言ったぜ」
「なに、前借りをしようと言ったのだ。ところがなかなか貸さない。僕に貸すと返さないと思っている。けしからん。わずか二十円ばかりの金だのに。いくら偉大なる暗闇を書いてやっても信用しない。つまらない。いやになっちまった」
「じゃ金はできないのか」
「いやほかでこしらえたよ。君が困るだろうと思って」
「そうか。それは気の毒だ」
「ところが困ったことができた。金はここにはない。君が取りに行かなくっちゃ」
「どこへ」
「実は文芸時評がいけないから、原口だのなんだの二、三軒歩いたが、どこも月末で都合がつかない。それから最後に里見のところへ行って——里見というのは知らないかね。里見恭助。法学士だ。美禰子さんの兄さんだ。あすこへ行ったところが、今度は留守でやっぱり要領を得ない。そのうち腹が減って歩くのがめんどうになったから、とうとう美禰子さんに会って話をした」
「野々宮さんの妹がいやしないか」

「なに昼少しすぎだから学校に行ってる時分だ。それに応接間だからいたってかまやしない」
「そうか」
「それで美禰子さんが、引き受けてくれて、ご用立て申しますと言うんだがね」
「あの女は自分の金があるのかい」
「そりゃ、どうだか知らない。しかしとにかく大丈夫だよ。引き受けたんだから。ありゃ妙な女で、年の行かないくせに姉さんじみたことをするのが好きな性質なんだから、引き受けさえすれば、安心だ。心配しないでもいい。よろしく願っておけばかまわない。ところが一番しまいになって、お金はここにありますが、あなたには渡せませんと言うんだから、驚いたね。僕はそんなに不信用なんですかと聞くと、ええと言って笑っている。いやになっちまった。じゃ小川をよこしますかなとまた聞いたら、え、小川さんにお手渡しいたしましょうと言われた。どうでも勝手にするがいい。君取りに行けるかい」
「取りに行かなければ、国へ電報でもかけるんだな」
「電報はよそう。馬鹿げている。いくら君だって借りに行けるだろう」
「行ける」
これでようやく二十円のらちがあいた。それがすむと、与次郎はすぐ広田先生に関する事件の報告を始めた。
運動は着々歩を進めつつある。暇さえあれば下宿へ出かけて行って、一人一人に相談する。相談は一人一人にかぎる。大勢寄ると、めいめいが自分の存在を主張しようとして、ややともすれば異

をたてる。それでなければ、自分の存在を閑却された心持ちになって、初手から冷淡に構える。相談はどうしても一人一人にかぎる。そのかわり暇はいる。金もいる。それを苦にしていては運動はできない。それから相談中には広田先生の名前をあまり出さないことにする。我々のための相談でなくって、広田先生のための相談だと思われると、事がまとまらなくなる。

与次郎はこの方法で運動の歩を進めているのだそうだ。それで今日までのところはうまくいった。西洋人ばかりではいけないから、ぜひとも日本人を入れてもらおうというところまで話はきた。これから先はもう一ぺん寄って、委員を選んで、学長なり、総長なりに、我々の希望を述べにやるばかりである。もっとも会合だけはほんの形式だから略してもいい。委員になるべき学生も大体は知れている。みんな広田先生に同情を持っている連中だから、談判の模様によっては、こっちから先生の名を当局者へ持ち出すかもしれない。……

聞いていると、与次郎一人で天下が自由になるように思われる。三四郎はすくなからず与次郎の手腕に感服した。与次郎はまたこのあいだの晩、原口さんを先生のところへ連れて来たことについて、弁じ出した。

「あの晩、原口さんが、先生に文芸家の会をやるから出ろと、勧めていたろう」と言う。三四郎はむろん覚えている。与次郎の話によると、実はあれも自身の発起にかかるものだそうだ。その理由はいろいろあるが、まず第一に手近なところをいえば、あの会員のうちには、大学の文科で有力な教授がいる。その男と広田先生を接触させるのは、この際先生にとって、大変な便利である。先生は変人だから、求めてだれとも交際しない。しかしこっちで相当の機会を作って、接触させれ

ば、変人なりに付き合って行く。……
「そういう意味があるのか、ちっとも知らなかった。それで君が発起人だというんだが、会をやる時、君の名前で通知を出して、そういう偉い人たちがみんな寄って来るのかな」
与次郎は、しばらくまじめに、三四郎を見ていたが、やがて苦笑いをしてわきを向いた。
「馬鹿言っちゃいけない。発起人って、表向きの発起人じゃない。ただ僕がそういう会を企てたのだ。つまり僕が原口さんを勧めて、万事原口さんが周旋するようにこしらえたのだ」
「そうか」
「そうかは田臭だね。時に君もあの会へ出るがいい。もう近いうちにあるはずだから」
「そんな偉い人ばかり出るところへ行ったってしかたがない。僕はよそう」
「また田臭を放った。偉い人も偉くない人も社会へ頭を出した順序が違うだけだ。なにあんな連中、博士とか学士とか言ったって、会って話してみるとなんでもないものだよ。第一向こうがそう偉いともなんとも思ってやしない。ぜひ出ておくがいい。君の将来のためだから」
「どこであるのか」
「たぶん上野の精養軒になるだろう」
「僕はあんなところへはいったことがない。高い会費を取るんだろう」
「まあ二円ぐらいだろう。なに会費なんか、心配しなくってもいい。なければ僕が出しておくから」

(1) 野暮な返事をいったもの。

三四郎はたちまちさきの二十円の件を思い出した。けれども不思議におかしくならなかった。与次郎はそのうえ銀座のどことかへ天麩羅を食いに行こうと言い出した。金はあると言う。不思議な男である。言いなりしだいになる三四郎もこれは断わった。そのかわりいっしょに散歩に出た。帰りに岡野へ寄って、与次郎は栗饅頭をたくさん買った。これを先生にみやげに持って行くんだと言って袋を抱えて帰っていった。

三四郎はその晩与次郎の性格を考えた。長く東京にいるとあんなになるものかと思った。それから里見へ金を借りに行くことを考えた。美禰子のところへ行く用事ができたのはうれしいような気がする。しかし頭を下げて金を借りるのはありがたくない。三四郎は生まれてから今日にいたるまで、人に金を借りた経験のない男である。そのうえ貸すという当人が娘である。独立した人間ではない。たとい金が自由になるとしても、兄の許諾を得ない内証の金を借りたとなると、借りる自分はとにかく、あとで、貸した人の迷惑になるかもしれない。あるいはあの女のことだから、迷惑にならないように始めからできているかとも思える。なにしろ会ってみよう。会ったうえで、借りるのがおもしろくない様子だったら、断わって、しばらく下宿の払いを延ばしておいて、国から取り寄せれば事はすむ。――当用はここまで考えて句切りをつけた。あとは散漫に美禰子のことが頭に浮かんでくる。美禰子の顔や手や、襟や、帯や、着物やらを、想像にまかせて、乗けたり除ったりしていた。ことにあした会う時に、どんな態度で、どんなことを言うだろうとその光景が十とおりにも二十とおりにもなって、いろいろに出てくる。三四郎は本来からこんな男である。用談があって人と会見の約束などをする時には、先方がどう出るだろうということばかり想像する。自分が、こ

んな顔をして、こんなことを、こんな声で言ってやろうなどとは決して考えない。しかも会見がすむとあとからきっとそのほうを考える。そうして後悔する。

ことに今夜は自分のほうを想像する余地がない。三四郎はこのあいだから美禰子を疑っている。しかし疑うばかりでいっこうらちがあかない。そうかといって面と向かって、聞きただすべき事件は一つもないのだから、一刀両断の解決などは思いも寄らぬことである。もし三四郎の安心のために解決が必要なら、それはただ美禰子に接触する機会を利用して、先方の様子から、いいかげんに最後の判決を自分に与えてしまうだけである。明日の会見はこの判決に欠くべからざる材料である。だから、いろいろに向こうを想像してみる。しかし、どう想像しても、自分に都合(つごう)のいい光景ばかり出てくる。それでいて、実際ははなはだ疑わしい。ちょうどきたないところをきれいな写真にとってながめているような気がする。写真は写真としてどこまでも本当にちがいないが、実物のきたないことも争われないと一般で、同じでなければならぬはずの二つが決して一致しない。

最後にうれしいことを思いついた。美禰子は与次郎に金を貸すと言った。けれども与次郎には渡さないと言った。実際与次郎は金銭の上においては、信用しにくい男かもしれない。しかしその意味で美禰子が渡さないのか、どうだか疑わしい。もしその意味でないとすると、自分にははなはだたのもしいことになる。ただ金を貸してくれるだけでも充分の好意である。自分に会って手渡しにしたいと言うのは——三四郎はここまで己惚(おのぼ)れてみたが、たちまち、

「やっぱり愚弄(ぐろう)じゃないか」と考え出して、急に赤くなった。もし、ある人があって、その女はなんのために君を愚弄するのかと聞いたら、三四郎はおそらく答ええなかったろう。強(し)いて考えて

みろと言われたら、三四郎は愚弄そのものに興味をもっている女だからとまでは答えたかもしれない。自分の己惚れを罰するためとはまったく考ええなかったにちがいない。――三四郎は美禰子のために己惚れしめられたんだと信じている。

翌日は幸い教師が二人欠席して、昼からの授業が休みになった。下宿へ帰るのもめんどうだから、途中で一品料理(1)の腹をこしらえて、美禰子の家へ行った。前を通ったことはなんべんでもある。けれどもはいるのははじめてである。瓦葺きの門の柱に里見恭助という標札が出ている。三四郎はここを通るたびに、里見恭助という人はどんな男だろうと思う。まだ会ったことがない。門は締っている。潜りからはいると玄関までの距離は存外短い。長方形の御影石が飛び飛びに敷いてある。玄関は細いきれいな格子で閉てきってある。電鈴を押す。取り次ぎの下女に、「美禰子さんはお宅ですか」と言ったとき、三四郎は自分ながら気恥ずかしいような妙な心持ちがした。ひとの玄関で、妙齢の女の在否を尋ねたことはまだない。はなはだ尋ねにくい気がする。下女のほうはあんがいまじめである。しかもうやうやしい。いったん奥へはいって、また出て来て、丁寧にお辞儀をして、どうぞと言うからついてあがると応接間へ通した。重い窓掛けのかかっている西洋室である。少し暗い。

下女はまた、「しばらく、どうか……」と挨拶をして出て行った。三四郎は静かな室の中に席を占めた。正面に壁を切り抜いた小さな暖炉がある。その上が横に長い鏡になっていて前に蠟燭立てが二本ある。三四郎は左右の蠟燭立てのまん中に自分の顔を写してみて、またすわった。

(1) ひとさらだけの手軽な料理。

すると奥のほうでヴァイオリンの音がした。それがどこからか、風が持って来て捨てて行ったように、すぐ消えてしまった。三四郎は惜しい気がする。厚く張った椅子の背によりかかって、もう少しやればいいがと思って耳をすましていたが、音はそれぎりでやんだ。約一分もたつうちに、三四郎はヴァイオリンのことを忘れた。向こうにある鏡と蠟燭立てをながめている。妙に西洋のにおいがする。それから加徒力の連想がある。なぜ加徒力だか三四郎にもわからない。その時ヴァイオリンがまた鳴った。今度は高い音と低い音が二、三度急に続いて響いた。それでぱったり消えてしまった。三四郎はまったく西洋の音楽を知らない。しかし今の音は、決して、まとまったものの一部分を弾いたとは受け取れない。ただ鳴らしただけである。その無作法にただ鳴らしたところが三四郎の情緒によく合った。不意に天から二、三粒落ちて来た、でたらめの雹のようである。

三四郎は半ば感覚を失った眼を鏡の中に移すと、鏡の中に美禰子がいつの間にか立っている。下女が閉てたと思った戸があいている。戸のうしろにかけてある幕を片手で押し分けた美禰子の胸から上が明らかに写っている。美禰子は鏡の中で三四郎を見た。三四郎は鏡の中の美禰子を見た。美禰子はにこりと笑った。

「いらっしゃい」

女の声はうしろで聞こえた。三四郎は振り向かなければならなかった。女と男はじかに顔を見合わせた。その時女は廂の広い髪をちょっと前に動かして礼をした。礼をするには及ばないくらいに親しい態度であった。男のほうはかえって椅子から腰を浮かして頭を下げた。女は知らぬふうをして、向こうへ回って、鏡を背に、三四郎の正面に腰をおろした。

「とうとういらしった」

同じような親しい調子である。三四郎にはこの一言が非常にうれしく聞こえた。女は光る絹を着ている。さっきからだいぶ待たしたところをもってみると、応接間へ出るためにわざわざきれいなのに着換えたのかもしれない。それで端然とすわっている。眼と口に笑みを帯びて無言のまま三四郎を見守った姿に、男はむしろ甘い苦しみを感じた。じっとして見らるるにたえない心の起こったのは、そのくせ女の腰をおろすやいなやである。三四郎はすぐ口を開いた。ほとんど発作に近い。

「佐々木が」

「佐々木さんが、あなたのところへいらしったでしょう」と言って例の白い歯をあらわした。女のうしろにはさきの蠟燭立てが暖炉台の左右に並んでいる。金で細工をした妙な形の台である。これを蠟燭立てと見たのは三四郎の臆断で、実はなんだかわからない。この不可思議の蠟燭立てのうしろに明らかな鏡がある。光線は厚い窓掛けにさえぎられて、十分にはいらない。そのうえ天気は曇っている。三四郎はこのあいだに美禰子の白い歯を見た。

「佐々木が来ました」

「なんと言っていらっしゃいました」

「僕にあなたのところへ行けと言って来ました」

「そうでしょう。——それでいらしったの」とわざわざ聞いた。

「ええ」と言って少し躊躇した。あとから「まあ、そうです」と答えた。女はまったく歯を隠した。静かに席を立って、窓のところへ行って、外面をながめ出した。

「曇りましたね。寒いでしょう、戸外は」
「いいえ、ぞんがい暖かい。風はまるでありません」
「そう」と言いながら席へ帰って来た。
「実は佐々木が金を……」と三四郎から言い出した。
「わかってるの」と中途でとめた。三四郎も黙った。すると、
「どうしておなくしになったの」と聞いた。
「馬券を買ったのです」
女は「まあ」と言った。まあと言った割に顔は驚いていない。かえって笑っている。すこしたって、「悪い方ね」とつけ加えた。三四郎は答えずにいた。
「馬券であてるのは、人の心をあてるよりむずかしいじゃありませんか。あなたは索引のついている人の心さえあててみようとなさらないのんきな方だのに」
「僕が馬券を買ったんじゃありません」
「あら。だれが買ったの」
「佐々木が買ったのです」
女は急に笑い出した。三四郎もおかしくなった。
「じゃ、あなたがお金がお入用じゃなかったのね。馬鹿馬鹿しい」
「いることは僕がいるのです」
「本当に？」

「本当に」
「だってそれじゃおかしいわね」
「だから借りなくってもいいんです」
「なぜ。おいやなの？」
「いやじゃないが、お兄いさんに黙って、あなたから借りちゃ、よくないからです」
「どういうわけで？　でも兄は承知しているんですもの」
「そうですか。じゃ借りてもいい。――しかし借りないでもいい。家へそう言ってやりさえすれば、一週間ぐらいすると来ますから」
「ご迷惑なら、強いて……」
美禰子は急に冷淡になった。今までそばにいたものが一町ばかり遠のいた気がする。三四郎は借りておけばよかったと思った。けれども、もうしかたがない。蠟燭立てを見てすましている。三四郎は自分から進んで、ひとの機嫌をとったことのない男である。女も遠ざかったきり近づいて来ない。しばらくするとまた立ち上がった。窓から戸外をすかして見て、
「降りそうもありませんね」と言う。三四郎も同じ調子で、「降りそうもありません」と答えた。
「降らなければ、わたくしちょっと出て来ようかしら」と窓のところで立ったまま言う。三四郎は帰ってくれという意味に解釈した。光る絹を着換えたのも自分のためではなかった。
「もう帰りましょう」と立ちあがった。美禰子は玄関まで送って来た。沓脱ぎへ降りて、靴をはいていると、上から美禰子が、

「そこまでごいっしょに出ましょう。いいでしょう」と言った。三四郎は靴の紐を結びながら、「ええ、どうでも」と答えた。女はいつの間にか、和土の上へ下りた。下りながら三四郎の耳のそばへ口を持って来て、「怒っていらっしゃるの」とささやいた。ところへ下女があわてながら、送りに出て来た。

二人は半町ほど無言のまま連れ立って来た。そのあいだ三四郎は始終美禰子のことを考えている。この女はわがままに育ったにちがいない。それから家庭にいて、普通の女性以上の自由を有して、万事意のごとくふるまうにちがいない。こうして、だれの許諾も経ずに、自分といっしょに、往来を歩くのでもわかる。年寄りの親がなくって、若い兄が放任主義だから、こうもできるのだろうが、これが田舎であったらさぞ困ることだろう。この女に三輪田のお光さんのような生活を送れと言ったら、どうする気かしらん。東京は田舎と違って、万事が明け放しだから、こちらの女は、大抵こうなのかもわからないが、遠くから想像してみると、もう少しは旧式のようでもある。すると与次郎が美禰子をイプセン流と評したのもなるほどと思い当たる。ただし、俗礼にかかわらないところだけがイプセン流なのか、あるいは腹の底の思想までも、そうなのか。そこはわからない。

そのうち本郷の通りへ出た。いっしょに歩いている二人は、いっしょに歩いていながら、相手がどこへ行くのだか、まったく知らない。今までに横町を三つばかり曲がった。曲がるたびに、二人の足は申し合わせたように無言のまま同じ方角へ曲がった。本郷の通りを四丁目の角へ来る途中で、女が聞いた。

「どこへいらっしゃるの」

「あなたはどこへ行くんです」
二人はちょっと顔を見合わせた。三四郎はしごくまじめである。女はこらえきれずにまた白い歯をあらわした。
「いっしょにいらっしゃい」
二人は四丁目の角の切通しのほうへ折れた。三十間ほど行くと、右側に大きな西洋館がある。美禰子はその前にとまった。帯のあいだから薄い帳面と、印形を出して、
「お願い」と言った。
「なんですか」
「これでお金を取ってちょうだい」
三四郎は手を出して、帳面を受け取った。まん中に小口当座預金通帳とあって、横に里見美禰子殿と書いてある。三四郎は帳面と印形を持ったまま、女の顔を見て立った。
「三十円」と女が金高を言った。あたかも毎日銀行へ金を取りに行きつけた者に対する口振りである。幸い、三四郎は国にいる時分、こういう帳面を持ってたびたび豊津まで出かけたことがある。すぐ石段を上って、戸をあけて、銀行の中へはいった。帳面と印形を係りのものに渡して、必要の金額を受け取って出てみると、美禰子は待っていない。もう切通しのほうへ二十間ばかり歩き出している。三四郎は急いで追いついた。すぐ受け取ったものを渡そうとして、隠袋へ手を入れると、美禰子が、
「丹青会の展覧会をごらんになって」と聞いた。

「まだ覧(み)ません」
「招待券(しょうたいけん)を二枚もらったんですけれども、ついひまがなかったものだから、まだ行かずにいたんですが行ってみましょうか」
「行ってもいいです」
「行きましょう。もうじき閉会になりますから。わたくし、一ぺんは見ておかないと原口さんにすまないのです」
「原口さんが招待券をくれたんですか」
「ええ。あなた原口さんをご存じなの？」
「広田先生のところで一度会いました」
「おもしろい方(かた)でしょう。馬鹿囃(ばかばやし)を稽古(けいこ)なさるんですって」
「このあいだは鼓(つづみ)をならいたいと言っていました。それから――」
「それから？」
「それから、あなたの肖像を描(か)くとか言っていました。本当ですか」
「ええ、高等モデルなの」と言った。男はこれより以上に気のきいたことが言えない性質(たち)である。それで黙ってしまった。女はなんとか言ってもらいたかったらしい。
三四郎はまた隠袋(かくし)へ手を入れた。銀行の通帳(かよいちょう)と印形(いんぎょう)を出して、女に渡した。金は帳面のあいだにはさんでおいたはずである。しかるに女が、
「お金は」と言った。見ると、あいだにはない。三四郎はまた衣嚢(ポケット)を探(さぐ)った。中から手ずれのし

た札をつかみ出した。女は手を出さない。

「預かっておいてちょうだい」と言った。三四郎はいささか迷惑のような気がした。しかしこんな時に争うことを好まぬ男である。そのうえ往来だからなおさら遠慮をした。せっかく握った札をまたもとのところへ収めて、妙な女だと思った。

学生が多く通る。すれ違う時にきっと二人を見る。なかには遠くから眼をつけて来るものもある。三四郎は池の端へ出るまでの道をすこぶる長く感じた。それでも電車に乗る気にはならない。二人ともものそのそ歩いている。会場へ着いたのはほとんど三時近くである。妙な看板が出ている。丹青会という字も、字の周囲についている図案も、三四郎の眼にはことごとく新しい。しかし熊本では見ることのできない意味で新しいので、むしろ一種異様の感がある。なかはなおさらである。三四郎の眼にはただ油絵と水彩画の区別が判然と映ずるくらいのものにすぎない。

それでも好悪はある。買ってもいいと思うのもある。しかし巧拙はまったくわからない。したがって鑑別力のないものと、初手からあきらめた三四郎は、いっこう口を開かない。

美禰子がこれはどうですかと言うと、そうですなという。これはおもしろいじゃありませんかと言うと、おもしろそうですなという。まるで張り合いがない。話のできない馬鹿か、こっちを相手にしない偉い男か、どっちかに見える。馬鹿とすればてらわないところに愛嬌がある。偉いとすれば、相手にならないところがにくらしい。

長いあいだ外国を旅行して歩いた兄妹の絵がたくさんある。双方とも同じ姓で、しかも一つところに並べてかけてある。美禰子はその一枚の前にとまった。

「ヴェニスでしょう」
これは三四郎にもわかった。なんだかヴェニスらしい。画舫(ゴンドラ)[1]にでも乗ってみたい心持ちがする。三四郎は高等学校にいる時分画舫という字を覚えた。それからこの字が好(す)きになった。画舫というと、女といっしょに乗らなければすまないような気がする。黙って蒼(あお)い水と、水の左右の高い家と、さかさに映(うつ)る家の影と、影の中にちらちらする赤い片(きれ)とをながめていた。すると、
「兄(あに)さんのほうがよほどうまいようですね」と美禰子が言った。三四郎にはこの意味が通じなかった。
「兄(あに)さんとは……」
「この絵は兄(あに)さんのほうでしょう」
「だれの?」
美禰子は不思議そうな顔をして、三四郎を見た。
「だって、あっちのほうが妹さんので、こっちのほうが兄(あに)さんのじゃありませんか」
三四郎は一歩退いて、今通って来た道の片側を振り返ってみた。同じように外国の景色(けしき)を描(か)いたものが幾点となくかかっている。
「違うんですか」
「一人と思っていらしったの」
「ええ」と言って、ぼんやりしている。やがて二人が顔を見合わした。そうして一度に笑い出し

(1) ベニスの名物の小舟。

た。美禰子は、驚いたように、わざと大きな眼をして、しかも一段と調子を落とした小声になって、
「ずいぶんね」と言いながら、一間ばかり、ずんずん先へ行ってしまった。三四郎は立ちどまったまま、もう一ぺんヴェニスの掘割をながめ出した。先へ抜けた女は、この時振り返った。三四郎は自分のほうを見ていない。女は先へ行く足をぴたりととめた。向こうから三四郎の横顔を熟視していた。

「里見さん」

出し抜けにだれか大きな声で呼んだ者がある。

美禰子も三四郎も等しく顔を向け直した。事務室と書いた入口を一間ばかり離れて、原口さんが立っている。原口さんのうしろに、少し重なり合って、野々宮さんが立っている。美禰子は呼ばれた原口よりは、原口より遠くの野々宮を見た。見るやいなや、二、三歩あともどりをして三四郎のそばへ来た。人に目立たぬくらいに、自分の口を三四郎の耳へ近寄せた。そうしてなにかささやいた。三四郎にはなにを言ったのか、少しもわからない。聞き直そうとするうちに、美禰子は二人のほうへ引き返して行った。もう挨拶をしている。野々宮は三四郎に向かって、

「妙な連と来ましたね」と言った。三四郎がなにか答えようとするうちに、美禰子が、

「似合うでしょう」と言った。野々宮さんはなんとも言わなかった。くるりとうしろを向いた。うしろには畳一枚ほどの大きな絵がある。その絵は肖像画である。そうして一面に黒い。着物も帽子も背景から区別のできないほど光線を受けていない中に、顔ばかり白い。顔は瘠せて、頬の肉が落ちている。

「模写ですね」と野々宮さんが原口さんに言った。原口は今しきりに美禰子になにか話している。――もう閉会である。来観者もだいぶ減った。開会の初めには毎日事務所へ来ていたが、このごろはめったに顔を出さない。今日は久しぶりに、こっちへ用があって、野々宮さんを引っ張って来たところだ。うまく出っくわしたものだ。この会をしまうと、すぐ来年の準備にかからなければならないから、非常にいそがしい。いつもは花の時分に開くのだが、来年は少し会員の都合で早くするつもりだから、ちょうど会を二つ続けて開くと同じことになる。必死の勉強をやらなければならない。それまでにぜひ美禰子の肖像を描きあげてしまうつもりである。迷惑だろうが大晦日でも描かしてくれ。

「そのかわりここんところへかけるつもりです」

原口さんはこの時はじめて、黒い絵のほうを向いた。野々宮さんはそのあいだぽかんとして同じ絵をながめていた。

「どうです。ヴェラスケス(1)は。もっとも模写ですがね。しかしあまり上出来ではない」と原口がはじめて説明する。野々宮さんはなんにも言う必要がなくなった。

「どなたがお写しになったの」と女が聞いた。

「三井です。三井はもっとうまいんですがね。この絵はあまり感服できない」と一、二歩さがって見た。「どうも、原画が技巧の極点に達した人のものだから、うまく行かないね」

原口は首を曲げた。三四郎は原口の首を曲げたところを見ていた。

（1）一五九九～一六六〇、スペインの画家。豊富華麗な色彩でおもに王侯の生活を描いた。

「もう、みんな見たんですか」と画工が美禰子に聞いた。原口は美禰子にばかり話しかける。

「まだ」

「どうです。もうよして、いっしょに出ちゃ。精養軒でお茶でもあげます。なにわたしは用があるから、どうせちょっと行かなければならない。——会のことでね、マネジャーに相談しておきたいことがある。懇意の男だから。——今ちょうどお茶にいい時分です。もう少しするとね、お茶には遅し晩餐には早し、中途半端になる。どうです。いっしょにいらっしゃいな」

美禰子は三四郎を見た。三四郎はどうでもいい顔をしている。野々宮は立ったまま関係しない。

「せっかく来たものだから、みんな見て行きましょう。ねえ、小川さん」

三四郎はええと言った。

「じゃ、こうなさい。この奥の別室にね。深見さんの遺画があるから、それだけ見て、帰りに精養軒へいらっしゃい。先へ行って待っていますから」

「ありがとう」

「深見さんの水彩は普通の水彩のつもりで見ちゃいけませんよ。どこまでも深見さんの水彩なんだから。実物を見る気にならないで、深見さんの気韻を見る気(1)になっていると、なかなかおもしろいところがでてきます」と注意して、原口は野々宮と出て行った。美禰子は礼を言ってそのうしろ影を見送った。二人は振り返らなかった。

女は歩をめぐらして、別室へはいった。男は一足あとから続いた。光線の乏しい暗い部屋である。

(1) 品の高いおもむきを見る。

細長い壁に一列にかかっている深見先生の遺画を見ると、なるほど原口さんの注意したごとくほとんど水彩ばかりである。三四郎がいちじるしく感じたのは、その水彩の色が、どれもこれも薄くて、数が少なくって、対照に乏しくって、日向(ひなた)へでも出さないと引き立たないと思うほど地味に描(か)いてあるということである。そのかわり筆がちっともとどこおっていない。ほとんど一気呵成(いっきかせい)(1)に仕上げた趣がある。絵の具の下に鉛筆の輪廓が明らかに透(す)いて見えるのでも、洒落(しゃらく)な画風がわかる。人間などになると、細くて長くて、まるで殻竿(からさお)(2)のようである。ここにもヴェニスが一枚ある。

「これもヴェニスですね」と女が寄って来た。

「ええ」と言ったが、ヴェニスで急に思い出した。

「さっきなにを言ったんですか」

女は「さっき？」と聞き返した。

「さっき、僕が立って、あっちのヴェニスを見ている時です」

女はまたまっ白な歯をあらわした。けれどもなんとも言わない。

「用でなければ聞かなくってもいいです」

「用じゃないのよ」

三四郎はまだ変な顔をしている。曇った秋の日はもう四時を越した。部屋は薄暗(うすぐら)くなってくる。観覧人はきわめて少ない。別室のうちには、ただ男女(なんにょ)二人の影があるのみである。女は絵を離れて、三四郎の真正面に立った。

(1) 物事を一気になしとげること。　(2) 豆や粟(あわ)などの脱穀にもちいる農具。

「野々宮さん。ね、ね」
「野々宮さん……」
「わかったでしょう」
美禰子の意味は、大波のくずれるごとく一度に三四郎の胸を浸した。
「野々宮さんを愚弄したのですか」
「なんで？」
女の語気はまったく無邪気である。三四郎は忽然として、あとを言う勇気がなくなった。無言のまま二、三歩動き出した。女はすがるようについて来た。
「あなたを愚弄したんじゃないのよ」
三四郎はまた立ちどまった。三四郎は背の高い男である。上から美禰子を見おろした。
「それでいいです」
「なぜ悪いの？」
「だからいいです」
女は顔をそむけた。二人とも戸口のほうへ歩いて来た。戸口を出る拍子に互いの肩がふれた。男は急に汽車で乗り合わした女を思い出した。美禰子の肉に触れたところが、夢にうずくような心持ちがした。
「本当にいいの？」と美禰子が小さい声で聞いた。向こうから二、三人連れの観覧者が来る。
「ともかく出ましょう」と三四郎が言った。下足を受け取って、出ると戸外は雨だ。

「精養軒へ行きますか」

美禰子は答えなかった。雨の中を濡れながら、博物館前の広い原の中に立った。幸い雨は今降り出したばかりである。そのうえ激しくはない。女は雨の中に立って、見回しながら、向こうの森をさした。

「あの樹の陰へはいりましょう」

少し待てばやみそうである。二人は大きな杉の下にはいった。雨を防ぐには都合のよくない樹である。けれども二人とも動かない。濡れても立っている。二人とも寒くなった。女が「小川さん」と言う。男は八の字を寄せて、空を見ていた顔を女のほうへ向けた。

「悪くって？　さっきのこと」

「いいです」

「だって」と言いながら寄って来た。「わたくし、なぜだか、ああしたかったんですもの。野々宮さんに失礼するつもりじゃないんですけれども」

女は瞳を定めて、三四郎を見た。三四郎はその瞳の中に言葉よりも深き訴えを認めた。――必竟あなたのためにしたことじゃありませんかと、二重瞼の奥で訴えている。三四郎は、もういっぺん、

「だから、いいです」と答えた。

雨はだんだん濃くなった。雫の落ちない場所はわずかしかない。二人はだんだん一つのところへかたまって来た。肩と肩とすれ合うくらいにして立ちすくんでいた。雨の音の中で、美禰子が、

「さっきのお金をおつかいなさい」と言った。

「借りましょう。いるだけ」と答えた。
「みんな、おつかいなさい」と言った。

九

与次郎が勧めるので、三四郎はとうとう精養軒の会へ出た。その時三四郎は黒い紬(1)の羽織を着た。この羽織は、三輪田のお光さんのおっかさんが織ってくれたのを、紋付に染めて、お光さんが縫いあげたものだと、母の手紙に長い説明がある。小包が届いた時、一応着てみて、おもしろくないから戸棚へ入れておいた。それを与次郎が、もったいないからぜひ着ろ着ろと言う。三四郎が着なければ、自分が持って行って着そうな勢いであったから、つい着る気になった。着てみると悪くはないようだ。

三四郎はこのいでたちで、与次郎と二人で精養軒の玄関に立っていた。与次郎の説によると、お客はこうして迎えべきものだそうだ。三四郎はそんなこととは知らなかった。第一自分がお客のつもりでいた。こうなると、紬の羽織ではなんだか安っぽい受付の気がする。制服を着て来ればよかったと思った。そのうち会員がだんだん来る。与次郎は来る人を捕まえてきっとなんとか話をする。ことごとく旧知のようにあしらっている。お客が帽子と外套を給仕に渡して、広い階子段の横を、暗い廊下のほうへ折れると、三四郎に向かって、今のは誰某だと教えてくれる。三四郎は

(1) 紬糸をもちいて織った絹織物。大島紬・白山紬・結城紬など。

着てみると悪くはないようだ

おかげで知名な人の顔をだいぶ覚えた。

そのうちお客はほぼ集まった。約三十人足らずである。広田先生もいる。野々宮さんもいる。――これは理学者だけれども、絵や文学が好きだからというので、原口さんが、無理に引っ張り出したのだそうだ。原口さんはむろんいる。一番先へ来て、世話を焼いたり、愛嬌を振りまいたり、仏蘭西式の髯をつまんで見たり、万事忙しそうである。

やがて着席となった。めいめい勝手なところへすわる。譲るものもなければ、争うものもない。そのうちでも広田先生はのろいにも似合わず一番に腰をおろしてしまった。ただ与次郎と三四郎だけがいっしょになって、入口に近く座を占めた。その他はことごとく偶然の向かい合せ、隣どうしであった。

野々宮さんと広田先生のあいだに縞の羽織を着た批評家がすわった。向こうには庄司という博士が座に着いた。これは与次郎のいわゆる文科で有力な教授である。フロックを着た品格のある男であった。髪を普通の倍以上長くしている。それが電燈の光で、黒く渦をまいて見える。広田先生の坊主頭とくらべるとだいぶ相違がある。原口さんはだいぶ離れて席を取った。あちらの角だから、遠く三四郎とま向かいになる。折襟に、幅の広い黒繻子を結んだ先がぱっと開いて胸いっぱいになっている。与次郎が、仏蘭西の画工は、みんなああいう襟飾りをつけるものだと教えてくれた。三四郎は肉汁(1)を吸いながら、まるで兵児帯の結び目のようだと考えた。そのうち談話がだんだん始まった。与次郎は麦酒を飲む。いつものように口をきかない。さすがの男も今日は少々謹んでいるとみ

(1) スープのオランダ語。

える。三四郎が、小さな声で、
「ちと、ダーター・ファブラをやらないか」と言うと、「今日はいけない」と答えたが、すぐ横を向いて、隣の男と話を始めた。あなたの、あの論文を拝見して、大いに利益を得ましたとかなんとか礼を述べている。ところがその論文は、彼が自分の前で、さかんに罵倒したものだから、三四郎にはすこぶる不思議の思いがある。与次郎はまたこっちを向いた。
「その羽織はなかなか立派だ。よく似合う」と白い紋をことさら注意してながめている。その時向こうの端から、原口さんが、野々宮に話しかけた。元来が大きな声の人だから、遠くで対応するには都合がいい。今まで向かい合わせに言葉をかわしていた広田先生と庄司という教授は、二人の応答を途中でさえぎることをおそれて、談話をやめた。その他の人もみんな黙った。会の中心点がはじめてできあがった。
「野々宮さん光線の圧力の試験はもうすみましたか」
「いや、まだなかなかだ」
「ずいぶん手数がかかるもんだね。我々の職業も根気仕事だが、君のほうはもっとはげしいようだ」
「絵はインスピレーションですぐ描けるからいいが、物理の実験はそううまくはいかない」
「インスピレーションには辟易する。[1]この夏あるところを通ったら婆さんが二人で問答していた。聞いてみると梅雨はもう明けたんだろうか、どうだろうかという研究なんだが、一人の婆さんが、

(1) 勢いや困難におされて、しりごみする。たじろぐ。

昔は雷さえ鳴れば梅雨は明けるにきまっていたが、近ごろじゃそうはいかないとこぼしている。すると一人がどうしてどうして、雷ぐらいで明けることじゃありゃしないと憤慨していた。――絵もそのとおり今の絵はインスピレーションぐらいで描けることじゃありゃしない。ねえ田村さん、小説だって、そうだろう」

　隣に田村という小説家がすわっていた。この男が自分のインスピレーションは原稿の催促以外になにもないと答えたので、大笑いになった。田村は、それからあらたまって、野々宮さんに、光線に圧力があるものか、あれば、どうして試験するかと聞き出した。野々宮さんの答えはおもしろかった。――

　雲母かなにかで、十六武蔵[1]ぐらいの大きさの薄い円盤を作って、水晶の糸でつるして、真空のうちに置いて、この円盤の面へ弧光燈[2]の光を直角にあてると、この円盤が光に圧されて動く。というのである。

　一座は耳を傾けて聞いていた。中にも三四郎は腹の中で、あの福神漬の罐のなかに、そんな装置がしてあるのだろうと、上京の際、望遠鏡で驚かされた昔を思い出した。

「君、水晶の糸があるのか」と小さな声で与次郎に聞いてみた。与次郎は頭を振っている。

「野々宮さん、水晶の糸がありますか」

「ええ、水晶の粉をね。酸水素吹管[3]の焔で溶かしておいて、両方の手で、左右へ引っ張ると細い

（1）四角と三角とからなる特殊な罫線上で、中央に親石を一個、外側に子石を十六個ならべ、親石を追いつめて遊ぶ遊戯。（2）炭素棒二本に電流を通じ、白熱光を出させる電燈。（3）水素の炎の中に酸素の管をさし入れて完全燃焼させ、三〇〇〇度の高温を得る管。

糸ができるのです」

三四郎は「そうですか」と言ったぎり、引っ込んだ。こんどは野々宮さんの隣にいる縞の羽織の批評家が口を出した。

「我々はそういう方面へかけると、ぜんぜん無学なんですが、始めはどうして気がついたものでしょうな」

「理論上はマクスエル[1]以来予想されていたのですが、それをレベデフ[2]という人がはじめて実験で証明したのです。近ごろあの彗星（すいせい）の尾が、太陽のほうへ引きつけられべきはずであるのに、出るたびにいつでも反対の方角になびくのは光の圧力で吹き飛ばされるんじゃなかろうかと思いついた人もあるくらいです」

批評家はだいぶ感心したらしい。

「思いつきもおもしろいが、第一大きくていいですね」と言った。

「大きいばかりじゃない、罪がなくって愉快だ」と広田先生が言った。

「それでその思いつきがはずれたらなお罪がなくっていい」と原口さんが笑っている。

「いや、どうもあたっているらしい。光線の圧力は半径の二乗（じじょう）に比例するが、引力のほうは半径の三乗に比例するんだから、物が小さくなればなるほど引力のほうが負けて、光線の圧力が強くなる。もし彗星の尾が非常に細かい小片（パーチクル）からできているとすれば、どうしても太陽とは反対のほうへ吹き飛ばされるわけだ」

（1）一八三一〜七九、イギリスの物理学者。　（2）一八六六〜一九一二、ロシアの物理学者。

野々宮は、ついまじめになった。すると原口が例の調子で、
「罪がないかわりに、大変計算がめんどうになって来た。やっぱり一利一害だ」と言った。この一言で、人々はもとのとおり麦酒の気分に復した。広田先生が、こんなことを言う。
「どうも物理学者は自然派(1)じゃだめのようだね」
物理学者と自然派の二字は少なからず満場の興味を刺激した。
「それはどういう意味ですか」と本人の野々宮さんが聞き出した。広田先生は説明しなければならなくなった。
「だって、光線の圧力を試験するために、眼だけあけて、自然を観察していたって、だめだから。自然の献立のうちに、光線の圧力という事実は印刷されていないようじゃないか。だから人工的に、水晶の糸だの、真空だの、雲母だのという装置をして、その圧力が物理学者の眼に見えるようにしかけるのだろう。だから自然派じゃないよ」
「しかし浪漫派でもないだろう」と原口さんがまぜ返した。
「いや浪漫派だ」と広田先生がもったいらしく弁解した。「光線と、光線を受けるものとを、普通の自然界においては見出せないような位地関係に置くところがまったく浪漫派じゃないか」
「しかし、いったんそういう位地関係に置いた以上は、光線固有の圧力を観察するだけだから、それからあとは自然派でしょう」と野々宮さんが言った。
「すると、物理学者は浪漫的自然派ですね。文学のほうでいうと、イブセンのようなものじゃな

(1) 自然主義を主張する一派。

いか」と筋向こうの博士が比較を持ち出した。
「さよう、イプセンの劇は野々宮君と同じくらいな装置があるが、その装置の下に働く人物は、光線のように自然の法則に従っているか疑わしい」これは縞の羽織の批評家の言葉であった。
「そうかもしれないが、こういうことは人間の研究上記憶しておくべきことだと思う。――すなわち、ある状況のもとに置かれた人間は、反対の方向に働きうる能力と権利とを有している。ということなんだが。――ところが妙な習慣で、人間も光線も同じように器械的の法則に従って活動すると思うものだから、ときどきとんだ間違いができる。怒らせようと思って装置をすると、笑ったり、笑わせようともくろんでかかると、怒ったり、まるで反対だ。しかしどちらにしても人間にちがいない」と広田先生がまた問題を大きくしてしまった。
「じゃ、ある状況のもとに、ある人間が、どんな所作をしても自然だということになりますね」と向こうの小説家が質問した。広田先生は、すぐ、
「ええ、ええ。どんな人間を、どう描いても世界に一人くらいはいるようじゃないですか」と答えた。「実際人間たる我々は、人間らしからざる行為動作を、どうしたって想像できるものじゃない。ただ下手に書くから人間と思われないのじゃないですか」
小説家はそれで黙った。こんどは博士がまた口をきいた。
「物理学者でも、ガリレオ(1)が寺院の釣り洋燈の一振動の時間が、振動の大小にかかわらず同じであ

(1) 一五六四～一六四二、イタリアの物理学者・天文学者。ピサの聖堂の釣りランプを見て、振子の等時性を発見したのは一五八三年である。

ることに気がついたり、ニュートン[1]が林檎が引力で落ちるのを発見したりするのは、始めから自然派ですね」

「そういう自然派なら、文学のほうでも結構でしょう。原口さん、絵のほうでも自然派がありますか」と野々宮さんが聞いた。

「あるとも。恐るべきクールベエ[2]という奴がいる。vérité vraie.[3] なんでも事実でなければ承知しない。しかしそう猖獗[4]をきわめているものじゃない。ただ一派として存在を認められるだけさ。またそうでなくちゃ困るからね。小説だって同じことだろう、ねえ君。やっぱりモロー[5]や、シャヴァンヌ[6]のようなのもいるはずだろうじゃないか」

「いるはずだ」と隣の小説家が答えた。

食後には卓上演説もなにもなかった。ただ原口さんが、しきりに九段の上の銅像[7]の悪口を言っていた。あんな銅像をむやみに立てられては、東京市民が迷惑する。それより、美しい芸者の銅像でもこしらえるほうが気がきいているという説であった。与次郎は三四郎に九段の銅像は原口さんと仲の悪い人が作ったんだと教えた。

会がすんで、外へ出るといい月であった。今夜の広田先生は庄司博士にいい印象を与えたろうか

（1）一六四二～一七二七、イギリスの物理学者・天文学者・数学者。引力の説明に成功したのは一六八五年。（2）一八一九～七七、フランスの画家。自分の目で見た現実のありのままを芸術に表現しようとした。（3）フランス語。本当の真実。（4）勢いが盛んである。（5）一八二六～九八、フランスの画家。画壇の外にあって、文学的・幻想的・神秘的な絵を描く。弟子にマチス、ルオーがある。（6）一八二四～九八、フランスの画家・壁画家。当時の情熱的浪漫派と合わず、時流に超然として、瞑想的な沈静な絵を描いた。（7）九段の靖国神社境内にある大熊氏広作の大村益次郎の銅像。

と与次郎は聞いた。三四郎は与えたろうと答えた。与次郎は共同水道栓のそばに立って、この夏、夜散歩に来て、あまり暑いからここで水を浴びていたら、巡査に見つかって、擂鉢山へ駆け上がったと話した。二人は擂鉢山の上で月を見て帰った。

帰り道に与次郎が三四郎に向かって、突然借金の言いわけをし出した。月の冴えた比較的寒い晩である。三四郎はほとんど金のことなどは考えていなかった。言いわけを聞くのでさえ本気ではない。どうせ返すことはあるまいと思っている。与次郎も決して返すとは言わない。ただ返せない事情をいろいろ話す。その話し方のほうが三四郎にはよほどおもしろい。――自分の知っている男が、失恋の結果、世の中がいやになって、とうとう自殺をしようと決心したが、海もいや河もいや、噴火口はなおいや、首を縊るのはもっといやというわけで、やむをえず短銃を買って来た。買って来て、まだ目的を遂行しないうちに、友だちが金を借りに来た。金はないと断わったが、ぜひどうかしてくれと訴えるので、しかたなしに、大事の短銃を借してやった。友だちはそれを質に入れて一時をしのいだ。都合がついて、質を受け出して返しに来た時は、肝心の短銃の主はもう死ぬ気がなくなっていた。だからこの男の命は金を借りに来られたために助かったと同じことである。

「そういうこともあるからなあ」と与次郎が言った。三四郎にはただおかしいだけである。そのほかにはなんらの意味もない。高い月を仰いで大きな声を出して笑った。金を返されないでも愉快である。与次郎は、

「笑っちゃいかん」と注意した。三四郎はなおおかしくなった。

「笑わないで、よく考えてみろ。おれが金を返さなければこそ、君が美禰子さんから金を借りる

ことができたんだろう」
三四郎は笑うのをやめた。
「それで？」
「それだけでたくさんじゃないか。——君、あの女を愛しているんだろう」
与次郎はよく知っている。三四郎はふんと言って、また高い月を見た。月のそばに白い雲が出た。
「君、あの女には、もう返したのか」
「いいや」
「いつまでも借りておいてやれ」
のんきなことを言う。三四郎はなんとも答えなかった。しかしいつまでも借りておく気はむろんなかった。実は必要な二十円を下宿へ払って、残りの十円をそのあくる日すぐ里見の家へ届けようと思ったが、今返してはかえって、好意にそむいて、よくないと考え直して、せっかく門内にはいられる機会を犠牲にしてまでも引き返した。その時なにかの拍子で、気がゆるんで、その十円をくずしてしまった。実は今夜の会費もそのうちから出ている。自分のばかりではない。与次郎のもそのうちから出ている。あとには、ようやく二、三円残っている。三四郎はそれで冬襯衣を買おうと思った。
実は与次郎がとうてい返しそうもないから、三四郎は思いきって、このあいだ国もとへ三十円の不足を請求した。十分な学資を月々もらっていながら、ただ不足だからと言って請求するわけにはいかない。三四郎はあまり嘘をついたことのない男だから、請求の理由にいたって困却した。しかたがないからただ友だちが金をなくして弱っていたから、つい気の毒になって貸してやった。その

結果として、こんどはこっちが弱るようになった。どうか送ってくれと書いた。すぐ返事を出してくれれば、もう届く時分であるのにまだ来ない。今夜あたりはことによると来ているかもしれぬくらいに考えて、下宿へ帰ってみると、はたして、母の手蹟で書いた封筒がちゃんと机の上に乗っている。不思議なことに、いつも必ず書留で来るのが、今日は三銭切手一枚ですましてある。開いてみると、中はいつになく短い。母としては不親切なくらい、用事だけで申し納めてしまった。依頼の金は野々宮さんのほうへ送ったから、野々宮さんから受け取れというさしずにすぎない。三四郎は床を取って寝た。

翌日もその翌日も三四郎は野々宮さんのところへ行かなかった。野々宮さんのほうでもなんとも言って来なかった。そうしているうちに一週間ほどたった。しまいに野々宮さんから、下宿の下女を使いに手紙をよこした。おっかさんから頼まれものがあるから、ちょっと来てくれろとある。三四郎は講義のすきをみて、また理科大学の穴倉へ降りて行った。そこで立談のあいだに事をすませようと思ったところが、そううまくは行かなかった。この夏は野々宮さんだけで専領していた部屋に髭のはえた人が二、三人いる。制服を着た学生も二、三人いる。それが、みんな熱心に、静粛に、頭の上の日の当たる世界をよそにして、研究をやっている。そのうちで野々宮さんはもっとも多忙にみえた。部屋の入口に顔を出した三四郎をちょっと見て、無言のまま近寄って来た。

「国から、金が届いたから、取りに来てくれたまえ。今ここに持っていないから。それからまだほかに話すこともある」

三四郎ははあと答えた。今夜でもいいかと尋ねた。野々宮は少しく考えていたが、しまいに思い

きってよろしいと言った。三四郎はそれで穴倉を出た。出ながら、さすがに理学者は根気のいいものだと感心した。この夏見た福神漬の罐と、望遠鏡が依然としてもとのとおりの位地に備えつけてあった。
次の講義の時間に与次郎に会ってこれこれだと話すと、与次郎は馬鹿だと言わないばかりに三四郎をながめて、
「だからいつまでも借りておいてやれと言ったのに。よけいなことをして年寄りには心配をかける。宗八さんにはお談義をされる。これくらい愚なことはない」とまるで自分から事が起こったとは認めていない申し分である。三四郎もこの問題に関しては、もう与次郎の責任を忘れてしまった。したがって与次郎の頭にかかってこない返事をした。
「いつまでも借りておくのは、いやだから、家へそう言ってやったんだ」
「君はいやでも、向こうでは喜ぶよ」
「なぜ」
このなぜが三四郎自身にはいくぶんか虚偽の響きらしく聞こえた。しかし相手にはなんらの影響も与えなかったらしい。
「当たりまえじゃないか。僕を人にしたって、同じことだ。僕に金が余っているとするぜ。そうすれば、その金を君から返してもらうよりも、君に貸しておくほうがいい心持ちだ。人間はね、自分が困らない程度内で、なるべく人に親切がしてみたいものだ」
三四郎は返事をしないで、講義を筆記し始めた。二、三行書き出すと、与次郎がまた、耳のそば

へ口を持って来た。

「おれだって、金のある時はたびたび人に貸したことがある。しかしだれも返したものがない。それだからおれはこのとおり愉快だ」

三四郎はまさか、そうかとも言えなかった。薄笑いをしただけで、また洋筆を走らし始めた。与次郎もそれからは落ちついて、時間の終わるまで口をきかなかった。

号鐘が鳴って、二人肩を並べて教場を出るとき、与次郎が突然聞いた。

「あの女は君に惚れているのか」

二人のあとからぞくぞく聴講生が出てくる。三四郎はやむをえず無言のまま階子段を降りて横手の玄関から、図書館わきの空地へ出て、はじめて与次郎を顧みた。

「よくわからない」

与次郎はしばらく三四郎を見ていた。

「そういうこともある。しかしよくわかったとして、君、あの女の夫になれるか」

三四郎はいまだかつてこの問題を考えたことがなかった。美禰子に愛せられるという事実そのものが、かの女の夫たる唯一の資格のような気がしていた。言われてみると、なるほど疑問である。三四郎は首を傾けた。

「野々宮さんならなれる」と与次郎が言った。

「野々宮さんと、あの人とはなにか今までに関係があるのか」

三四郎の顔は彫りつけたようにまじめであった。与次郎は一口、

「知らん」と言った。三四郎は黙っている。

「まあ野々宮さんのところへ行って、お談義を聞いて来い」と言いすてて、相手は池のほうへ行きかけた。三四郎は愚劣の看板のごとく突ッ立った。与次郎は五、六歩行ったが、また笑いながら帰って来た。

「君、いっそ、よし子さんをもらわないか」と言いながら、三四郎を引っ張って、池のほうへ連れて行った。歩きながら、あれならいい、あれならいいと、二度ほどくり返した。そのうちまた号鐘が鳴った。

三四郎はその夕方野々宮さんのところへ出かけたが、時間がまだ少し早すぎるので、散歩かたがた四丁目まで来て、襯衣を買いに大きな唐物屋へはいった。小僧が奥からいろいろ持って来たのをなでてみたり、広げてみたりして、容易に買わない。わけもなく鷹揚にかまえていると、偶然美禰子とよし子が連れ立って香水を買いに来た。あらと言って挨拶をしたあとで、美禰子が、

「先だってはありがとう」と礼を述べた。三四郎にはこのお礼の意味が明らかにわかった。美禰子から金を借りたあくる日もう一ぺん訪問して余分をすぐに返すべきところを、ひとまず見合わせたかわりに、二日ばかり待って、三四郎は丁寧な礼状を美禰子に送った。

手紙の文句は、書いた人の、書いた当時の気分をすなおに表わしたものではあるが、むろん書きすぎている。三四郎はできるだけの言葉を層々と排列して感謝の意を熱烈にいたした。普通のものからみればほとんど借金の礼状とは思われないくらいに、湯気の立ったものである。しかし感謝以外には、なにも書いていない。それだから、自然の勢い、感謝が感謝以上になったのでもある。三

四郎はこの手紙を郵函に入れるとき、時を移さぬ美禰子の返事を予期していた。ところがせっかくの封書はただ行ったままである。それから美禰子に会う機会は今日までなかった。三四郎はこの微弱なる「このあいだはありがとう」という反響に対して、はっきりした返事をする勇気も出なかった。大きな襯衣を両手で眼の先へ広げてながめながら、よし子がいるからああ冷淡なんだろうかと考えた。それからこの襯衣もこの女の金で買うんだなと考えた。小僧はどれになさいますと催促した。

二人の女は笑いながらそばへ来て、いっしょに襯衣を見てくれた。しまいに、よし子が「これになさい」と言った。三四郎はそれにした。こんどは三四郎のほうが香水の相談を受けた。いっこうわからない。ヘリオトロープ(1)と書いてある罎を持って、いいかげんに、これはどうですと言うと、美禰子が、「それにしましょう」とすぐきめた。三四郎は気の毒なくらいであった。

表へ出て別れようとすると、女のほうが互いにお辞儀を始めた。よし子が「じゃ行って来てよ」と言うと、美禰子が、「お早く……」と言っている。聞いてみて、妹が兄の下宿へ行くところだということがわかった。三四郎はまたきれいな女と二人づれで追分のほうへ歩くべき宵となった。日はまだまったく落ちていない。

三四郎はよし子といっしょに歩くよりは、よし子といっしょに野々宮の下宿で落ち合わねばならぬ機会をいささか迷惑に感じた。いっそのこと今夜は家へ帰って、また出直そうかと考えた。しかし、与次郎のいわゆるお談義を聞くには、よし子がそばにいてくれるほうが便利かもしれない。まさか人の前で、母から、こういう依頼があったと、遠慮なしの注意を与えるわけはなかろう。こと

（1）ペルー原産のむらさき科のヘリオトロープの花から取った香水。

によると、ただ金を受け取るだけですむかもわからない。――三四郎は腹の中で、ちょっとずるい決心をした。
「僕も野々宮さんのところへ行くところです」
「そう、お遊びに？」
「いえ、少し用があるんです。あなたは遊びですか」
「いいえ、私もご用なの」
両方が同じようなことを聞いて、同じような答えを得た。しかし両方とも迷惑を感じている気色（けしき）がさらにない。三四郎は念のため、じゃまじゃないかと尋ねてみた。ちっともじゃまにはならないそうである。女は言葉でじゃまを否定したばかりではない。顔ではむしろなぜそんなことを質問するかと驚いている。三四郎は店先の瓦斯（ガス）の光で、女の黒い眼のなかに、その驚きを認めたと思った。事実としては、ただ大きく黒く見えたばかりである。
「ヴァイオリンを買いましたか」
「どうしてご存じ」
三四郎は返答に窮した。女は頓着（とんじゃく）なく、すぐ、こう言った。
「いくら兄（にい）さんにそう言っても、ただ買ってやる、買ってやると言うばかりで、ちっとも買ってくれなかったんですの」
三四郎は腹の中で、野々宮よりも広田よりも、むしろ与次郎を非難した。
二人は追分（おいわけ）の通りを細い露路（ろじ）に折れた。折れると中に家がたくさんある。暗い道を戸ごとの軒燈

が照らしている。その軒燈の一つの前にとまった。野々宮はこの奥にいる。

三四郎の下宿とはほとんど一丁ほどの距離である。野々宮がここへ移ってから、三四郎は二、三度訪問したことがある。野々宮の部屋は広い廊下を突き当たって、二段ばかりまっすぐに上ると、左手に離れた二間である。南向きによその広い庭をほとんど縁の下に控えて、昼も夜もしごく静かである。この離れ座敷に立てこもった野々宮さんを見た時、なるほど家をたたんで下宿をするのも悪い思いつきではなかったと、はじめて来た時から、感心したくらい、居心地のいいところである。その野々宮さんは廊下へ降りて、下から自分の部屋の軒を見上げて、ちょっと見たまえ藁葺きだと言った。なるほど珍らしく屋根に瓦を置いてなかった。

今日は夜だから、屋根はむろん見えないが、部屋の中には電燈がついている。三四郎は電燈を見るやいなや藁葺きを思い出した。そうしておかしくなった。

「妙なお客が落ち合ったな。入口で会ったのか」と野々宮さんが妹に聞いている。妹はしからざる旨を説明している。ついでに三四郎のような襯衣を買ったらよかろうと助言している。それから、このあいだのヴァイオリンは和製で音が悪くっていけない。買うのをこれまで延期したのだから、もう少しいいのと買いかえてくれと頼んでいる。せめて美禰子さんくらいのならがまんすると言っている。そのほか似たり寄ったりのだだをしきりにこねている。野々宮さんは別段こわい顔もせず、といって、優しい言葉もかけず、ただそうかそうかと聞いている。

三四郎はこのあいだなにも言わずにいた。よし子は愚なことばかり述べる。かつ少しも遠慮をしない。それが馬鹿とも思えなければ、わがままとも受け取れない。兄との応対をそばにいて聞いて

いると、広い日当たりのいい畠へ出たような心持ちがする。三四郎はきたるべきお談義のことをまるで忘れてしまった。その時突然驚かされた。

「ああ、わたし忘れていた。美禰子さんのお言伝があってよ」

「そうか」

「うれしいでしょう。うれしくなくって？」

野々宮さんはかゆいような顔をした。そうして、三四郎のほうを向いた。

「僕の妹は馬鹿ですね」と言った。三四郎はしかたなしに、ただ笑っていた。

「馬鹿じゃないわ。ねえ、小川さん」

三四郎はまた笑っていた。腹の中ではもう笑うのがいやになった。

「美禰子さんがね、兄さんに文芸協会[1]の演芸会に連れて行ってちょうだいって」

「里見さんといっしょに行ったらよかろう」

「ご用があるんですって」

「お前も行くのか」

「むろんだわ」

野々宮さんは行くとも行かないとも答えなかった。また三四郎のほうを向いて、今夜妹を呼んだのは、まじめの用があるんだのに、あんなのんきばかり言っていて困ると話した。聞いてみると、学者だけあって、存外淡泊である。よし子に縁談の口がある。国へそう言ってやったら、両親も異

(1) 明治三十九年、坪内逍遙が島村抱月らと作ったわが国最初の演劇団体。

三四郎は
まじめに
「お気の毒です」と
言ったばかりである

存はないと返事をして来た。それについて本人の意見をよく確かめる必要が起こったのだと言う。三四郎はただ結構ですと答えて、なるべく早く自分のほうを片づけて帰ろうとした。そこで、

「母からあなたにごめんどうを願ったそうで」と切り出した。野々宮さんは、

「なに、たいしてめんどうでもありませんがね」とすぐに机の引出しから、預かったものを出して、三四郎に渡した。

「おっかさんが心配して、長い手紙を書いてよこしましたよ。三四郎は余儀ない事情で月々の学資を友だちに貸したと言うが、いくら友だちだって、そうむやみに金を借りるものじゃあるまいし、よし借りたって返すはずだろうって。田舎のものは正直だから、そう思うのも無理はない。それからね、三四郎が貸すにしても、あまり貸し方が大げさだ。親から月々学資を送ってもらう身分でいながら、一度に二十円の三十円のと、人に用立てるなんて、いかにも無分別だとあるんですがね――なんだか僕に責任があるように書いてあるから困る。……」

野々宮さんは三四郎を見て、にやにや笑っている。三四郎はまじめに、「お気の毒です」と言ったばかりである。野々宮さんは、若いものを、きめつけるつもりで言ったんでないとみえて、少し調子を変えた。

「なに、心配することはありませんよ。なんでもないことなんだから。ただおっかさんは、田舎の相場で、金の価値をつけるから、三十円が大変重くなるんだね。なんでも三十円あると、四人の家族が半年食って行けると書いてあったが、そんなものかな、君」と聞いた。よし子は大きな声を出して笑った。三四郎にも馬鹿げているところがすこぶるおかしいんだが、母の言い条が、まった

く事実を離れた作り話でないのだから、そこに気がついた時には、なるほど軽率なことをして悪かったと少しく後悔した。
「そうすると、月に五円の割だから、一人前一円二十五銭に当たる。それを三十日に割りつけると、四銭ばかりだが――いくら田舎でも少し安すぎるようだな」と野々宮さんが計算を立てた。
「なにを食べたら、そのくらいで生きていられるでしょう」とよし子がまじめに聞き出した。三四郎も後悔する暇がなくなって、自分の知っている田舎生活のありさまをいろいろ話して聞かした。その中には宮籠りという慣例もあった。三四郎の家では、年に一度ずつ村全体へ十円寄付することになっている。その時には六十戸から一人ずつ出て、その六十人が、仕事を休んで、村のお宮へ寄って、朝から晩まで、酒を飲みつづけに飲んで、ご馳走を食いつづけに食うんだという。
「それで十円」とよし子が驚いていた。お談義はこれでどこかへいったらしい。それから少し雑談をして一段落ついた時に、野々宮さんが改めて、こう言った。
「なにしろ、おっかさんのほうではね。僕が一応事情を調べて、不都合がないと認めたら、金を渡してくれろ。そうしてめんどうでもその事情を知らせてもらいたいというんだが、金は事情もなにも聞かないうちに、もう渡してしまったしと、――どうするかね。君たしか佐々木に貸したんですね」
三四郎は美禰子からもれて、よし子に伝わって、それが野々宮さんに知れているんだと判じた。しかしその金がめぐりめぐってヴァイオリンに変形したものとは兄妹とも気がつかないから一種妙な感じがした。ただ「そうです」と答えておいた。

「佐々木が馬券を買って、自分の金をなくなしたんだってね」
「ええ」
よし子はまた大きな声を出して笑った。
「じゃ、いいかげんにおっかさんのところへそう言ってあげよう。しかしこんどから、そんな金はもう貸さないことにしたらいいでしょう」
三四郎は貸さないことにする旨を答えて、挨拶（あいさつ）をして、立ちかけると、よし子も、もう帰ろうと言い出した。
「さっきの話をしなくちゃ」と兄が注意した。
「よくってよ」と妹が拒絶した。
「よくはないよ」
「よくってよ。知らないわ」
兄は妹の顔を見て黙っている。妹は、またこう言った。
「だってしかたがないじゃ、ありませんか。知りもしない人のところへ、行くか行かないかって、聞いたって。好きでもきらいでもないんだから、なにも言いようはありゃしないわ。だから知らないわ」
三四郎は知らないわの本意をようやく会得（えとく）した。兄妹をそのままにして急いで表へ出た。
人の通らない軒燈ばかり明らかな露路（ろじ）を抜けて表へ出ると、風が吹く。北へ向き直ると、まともに顔へ当たる。時を切って、自分の下宿のほうから吹いてくる。その時三四郎は考えた。この風の

なかを、野々宮さんは、妹を送って里見まで連れて行ってやるだろう。
下宿の二階へ上がって、自分の室へはいって、すわってみると、やっぱり風の音がする。三四郎はこういう風の音を聞くたびに、運命という字を思い出す。ごうと鳴ってくるたびにすくみたくなる。自分ながら決して強い男とは思っていない。考えると、上京以来自分の運命はたいがい与次郎のためにこしらえられている。しかも多少の程度において、和気靄然たる翻弄(1)を受けるようにこしらえられている。与次郎は愛すべき悪戯ものである。向後もこの愛すべき悪戯もののために、自分の運命を握られていそうに思う。風がしきりに吹く。たしかに与次郎以上の風である。
三四郎は母から来た三十円を枕もとへ置いて寝た。この三十円も運命の翻弄が産んだものである。この三十円がこれから先どんな働きをするか、まるでわからない。自分はこれを美禰子に返しに行く。美禰子がこれを受け取る時に、また一煽り来るにきまっている。三四郎はなるべく大きく来ればいいと思った。
三四郎はそれなり寝ついた。運命も与次郎も手をくだしようのないくらいすこやかな眠りにはいった。すると半鐘の音で眼がさめた。どこかで人声がする。東京の火事はこれで二へんめである。三四郎は寝巻の上へ羽織を引っかけて、窓をあけた。風はだいぶ落ちている。向こうの二階屋が風の鳴るなかに、まっ黒に見える。家が黒いほど、家のうしろの空は赤かった。
三四郎は寒いのをがまんして、しばらくこの赤いものを見つめていた。その時三四郎の頭には運命がありありと赤く映った。三四郎はまた暖かい布団のなかにもぐり込んだ。そうして、赤い運命

(1) なごやかでむつまじい気分でもてあそばれている。

のなかで狂い回る多くの人の身の上を忘れた。

夜が明ければ常の人である。制服を着けて、帳面を持って、学校へ出た。ただ三十円を懐にすることだけは忘れなかった。あいにく時間割の都合が悪い。三時までぎっしり詰まっている。三時過ぎに行けば、よし子も学校から帰って来ているだろう。ことによれば里見恭助という兄も在宅かもしれない。人がいては、金を返すのが、まったくだめのような気がする。

また与次郎が話しかけた。

「ゆうべはお談義を聞いたか」

「なにお談義というほどでもない」

「そうだろう、野々宮さんは、あれで理由のわかった人だからな」と言ってどこかへ行ってしまった。二時間後の講義のときにまた出会った。

「広田先生のことは大丈夫うまくいきそうだ」と言う。どこまで事が運んだかと聞いてみると、

「いや心配しないでもいい。いずれゆっくり話す。先生が君がしばらく来ないと言って、聞いていたぜ。ときどき行くがいい。先生は一人ものだからな。我々が慰めてやらんと、いかん。今度なにか買って来い」と言いっぱなして、それなり消えてしまった。すると、次の時間にまたどこから か現われた。こんどはなんと思ったか、講義の最中に、突然、

「金受け取りたりや」と電報のようなものを白紙へ書いて出した。三四郎は返事を書こうと思って、教師のほうを見ると、教師がちゃんとこっちを見ている。白紙を丸めて足の下へなげた。講義が終わるのを待って、はじめて返事をした。

「金は受け取った、ここにある」
「そうかそれはよかった。返すつもりか」
「むろん返すさ」
「それがよかろう。早く返すがいい」
「今日返そうと思う」
「うん昼過ぎ遅くならいるかもしれない」
「どこかへ行くのか」
「行くとも、毎日毎日絵に描(か)かれに行く。もうよっぽどできたろう」
「原口さんのところか」
「うん」
三四郎は与次郎から原口さんの宿所を聞き取った。

十

広田先生が病気だというから、三四郎が見舞に来た。門をはいると、玄関に靴が一足そろえてある。医者かもしれないと思った。いつものとおり勝手口へ回るとだれもいない。のそのそ上がり込んで茶の間へ来ると、座敷で話し声がする。三四郎はしばらくたたずんでいた。手にかなり大きな風呂敷包みをさげている。中には樽柿(たるがき)がいっぱいはいっている。こんど来る時は、なにか買ってこい

と、与次郎の注意があったから、追分の通りで買って来た。すると座敷のうちで、突然どたりばたりという音がした。だれか組み打ちを始めたらしい。三四郎は必定(1)喧嘩と思い込んだ。風呂敷包みをさげたまま、仕切りの唐紙をするどく一尺ばかりあけてきっとのぞき込んだ。広田先生が茶の袴をはいた大きな男に組み敷かれている。先生は俯伏しの顔をきわどく畳から上げて、三四郎を見たが、にやりと笑いながら、

「やあ、おいで」と言った。上の男はちょっと振り返ったままである。

「先生、失礼ですが、起きてごらんなさい」と言う。なんでも先生の手を逆に取って、肘の関節を表から、膝頭で圧さえているらしい。先生は下から、とうてい起きられない旨を答えた。上の男は、それで、手を離して、膝を立てて、袴の襞を正しく、居住居を直した。見れば立派な男である。先生もすぐ起き直った。

「なるほど」と言っている。

「あの流で行くと、無理に逆らったら、腕を折るおそれがあるから、危険です」

三四郎はこの問答で、はじめて、この両人の今なにをしていたかを悟った。

「ご病気だそうですが、もうよろしいんですか」

「ええ、もうよろしい」

三四郎は風呂敷包みを解いて、中にあるものを、二人のあいだに広げた。

「柿を買って来ました」

(1) きっと。

広田先生は書斎へ行って、小刀を取って来る。三四郎は台所から庖丁を持って来た。三人で柿を食い出した。食いながら、先生と知らぬ男はしきりに地方の中学の話を始めた。生活難のこと、紛擾のこと(1)、一つのところに長くとまっていられぬこと、学科以外に柔術の教師をしたこと、ある教師は、下駄の台を買って、鼻緒は古いのを、すげかえて、用いられるだけ用いるぐらいにしていること、こんど辞職した以上は、容易に口が見つかりそうもないこと、やむをえず、それまで妻を国もとへ預けたこと――なかなか尽きそうもない。

三四郎は柿の核を吐き出しながら、この男の顔を見ていて、情けなくなった。今の自分と、この男と比較してみると、まるで人種が違うような気がする。この男の言葉のうちには、もう一ぺん学生生活がしてみたい。学生生活ほど気楽なものはないという文句がなんどもくり返された。三四郎はこの文句を聞くたびに、自分の寿命もわずか二、三年のあいだなのかしらんと、ぼんやり考え始めた。与次郎と蕎麦などを食う時のように、気が冴えない。

広田先生はまた立って書斎にはいった。帰った時は、手に一巻の書物を持っていた。表紙が赤黒くって、切り口の埃でよごれたものである。

「これがこのあいだ話したハイドリオタフヒア(2)。退屈なら見ていたまえ」

三四郎は礼を述べて書物を受け取った。

「寂寞(3)の罌粟花を散らすや頻りなり。人の記念に対しては、永劫に価すると否とを問うことなし」

(1) ごたごた。(2) イギリスの医者で作家だったトマス・ブラウン(一六〇五～八二)が一六五八年に書いた、「壺葬論」という有名な本。文章がすぐれている。(3) ひっそりとしていること。

という句が眼についた。先生は安心して柔術の学士と談話をつづける。――中学教師などの生活状態を聞いてみると、みな気の毒なものばかりのようだが、真に気の毒と思うのは当人だけである。なぜというと、現代人は事実を好むが、事実に伴う情操は切りすてる習慣である。切りすてなければならないほど世間が切迫しているのだからしかたがない。その証拠には新聞を見るとわかる。新聞の社会記事は十の九まで悲劇である。けれども我々はこの悲劇を悲劇として味わう余裕がない。ただ事実の報道として読むだけである。自分の取る新聞などは、死人十何人と題して、一日に変死した人間の年齢、戸籍、死因を六号活字で一行ずつに書くことがある。簡潔明瞭の極である。また泥棒早見という欄があって、どこへどんな泥棒がはいったか、一目にわかるように泥棒がかたまっている。これもしごく便利である。すべてが、この調子と思わなくっちゃいけない。辞職もそのとおり。当人には悲劇に近い出来事かもしれないが、他人にはそれほど痛切な感じを与えないと覚悟しなければなるまい。そのつもりで運動したらよかろう。

「だって先生くらい余裕があるなら、少しは痛切に感じてもよさそうなものだが」と柔術の男がまじめな顔をして言った。この時は広田先生も三四郎も、そう言った当人も一度に笑った。この男がなかなか帰りそうもないので三四郎は、書物を借りて、勝手から表へ出た。

「朽(く)ちざる墓に眠り、伝わることに生き、知らるる名に残り、しからずば滄桑(そうそう)(1)の変にまかせて、後の世に存せんと思うこと、昔より人の願いなり。この願いのかなえるとき、人は天国にあり。されども真(まこと)なる信仰の教法よりみれば、この願いもこの満足もなきがごとくにはかなきものなり。生

(1) むかし、桑畑(くわばたけ)であった所が海となり、海の底が干(ひ)上がって桑畑になる。世の中の移り変わりがはげしいことをいう。

きるとは、ふたたびの我に帰るの意にして、ふたたびの我に帰るとは、願いにもあらず、望みにもあらず、気高き信者の見たるあからさまなる事実なれば、聖徒イノセント(1)の墓地に横たわるはなお埃及(エジプト)の砂中にうずまるがごとし。常住のわが身を観じ喜べば、六尺の狭きもアドリエーナスの大廟(たいびょう)(2)と異なるところあらず。なるがままになるとのみ覚悟せよ」

これはハイドリオタフヒアの末節である。三四郎はぶらぶら白山(はくさん)のほうへ歩きながら、往来のなかで、この一節を読んだ。広田先生から聞くところによると、この著者は有名な名文家で、この一篇(ぺん)は名文家の書いたうちの名文であるそうだ。広田先生はその話をした時に、笑いながら、もっともこれはわたしの説じゃないよと断わられた。なるほど三四郎にもどこが名文だかよくわからない。ただ句切りが悪くって、字づかいが異様で、言葉の運び方が重苦しくって、まるで古いお寺を見るような心持ちがしただけである。この一節だけ読むにも道程(みちのり)にすると、三、四町もかかった。しかもはっきりとはしない。

贏(か)ち得たところは物寂(ものさ)びている。奈良の大仏の鐘を撞(つ)いて、そのなごりの響きが、東京にいる自分の耳にかすかに届いたと同じことである。三四郎はこの一節のもたらす意味よりも、その意味の上に這(は)いかかる情緒の影をうれしがった。三四郎は切実に生死の問題を考えたことのない男である。考えるには、青春の血が、あまりに暖かすぎる。眼の前には眉(まゆ)をこがすほどな大きな火が燃(も)えている。その感じが、真の自分である。三四郎はこれから曙町(あけぼのちょう)の原口のところへ行く。

(1) 十三人のローマ法王の名であるが、イノセント三世(一一六〇〜一二一六)をさす。(2) ローマ皇帝ハドリアヌス(七六〜一三八)が生前自分で建てた霊廟。現存ローマ建築の代表。

子供の葬式が来た。羽織を着た男がたった二人ついている。小さい棺はまっ白な布で巻いてある。そのそばにきれいな風車を結いつけた。車がしきりに回る。車の羽弁が五色に塗ってある。それが一色になって回る。白い棺はきれいな風車をたえ間なくうごかして、三四郎の横を通り越した。三四郎は美しい葬いだと思った。

三四郎はひとの文章と、ひとの葬式をよそから見た。もしだれか来て、ついでに美禰子をよそから見ろと注意したら、三四郎は驚いたにちがいない。三四郎は美禰子をよそから見ることができないような眼になっている。第一よそもよそでないもそんな区別はまるで意識していない。ただ事実として、ひとの死に対しては、美しい穏やかな味わいがあるとともに、生きている美禰子に対しては、美しい享楽の底に、一種の苦悶がある。三四郎はこの苦悶を払おうとして、まっすぐに進んで行く。進んで行けば苦悶が除れるように思う。苦悶を除るために一歩わきへ退くことは夢にも案じえない。これを案じえない三四郎は、現に遠くから、寂滅の会[1]を文字の上にながめて、夭折[2]の憐れを、三尺の外に感じたのである。しかも、悲しいはずのところを、快くながめて、美しく感じたのである。

曙町へ曲がると大きな松がある。この松を目標に来いと教わった。松の下へ来ると、家が違っている。向こうを見るとまた松がある。その先にも松がある。松がたくさんある。三四郎はいいところだと思った。多くの松を通り越して左へ折れると、生垣にきれいな門がある。はたして原口という標札が出ていた。その標札は木理の込んだ黒っぽい板に、緑の油で名前をはでに書いたものであ

(1) 死をとむらう集会。葬儀。 (2) 若死。

る。字だか模様だかわからないくらい凝っている。門から玄関まではからりとしてなにもない。左右に芝が植えてある。

玄関には美禰子の下駄がそろえてあった。鼻緒の二本が右左で色が違う。それでよく覚えている。今仕事中だが、よければあがれという小女の取り次ぎについて、画室(1)へはいった。広い部屋である。細長く南北に延びた床の上は、画家らしく、取り乱れている。まず一部分には絨毯が敷いてある。それが部屋の大きさにくらべると、まるでつり合いが取れないから、敷物として敷いたというよりは、色のいい、模様の雅な織物としてほうりだしたようにみえる。離れて向こうに置いた大きな虎の皮もそのとおり、すわるための、設けの座とは受け取れない。絨毯とは不調和な位置に筋かいに尾を長くひいている。砂を練り固めたような大きな甕がある。その中から矢が二本出ている。鼠色の羽根と羽根のあいだが金箔で強く光る。そのそばに鎧もあった。三四郎は卯の花縅し(2)というのだろうと思った。向こう側のすみにぱっと眼を射るものがある。紫の裾模様の小袖(3)に金糸の刺繡が見える。袖から袖へ幔幕の綱を通して、虫干しの時のようにつるした。袖は丸くて短い。これが元禄(4)かと三四郎も気がついた。そのほかには絵がたくさんある。壁にかけたのばかりでも大小合わせるとよほどになる。額縁をつけない下画というようなものは、重ねて巻いた端が、巻きくずれて、小口をしだらなく(5)あらわした。

描かれつつある人の肖像は、この彩色の眼を乱すあいだにある。描かれつつある人は、突き当た

(1) 橋口五葉の画室がモデルという。(2) 白糸と萌葱糸とで段々に縅した鎧。(3) 小さい袖のふだん着。(4) たもとが丸くて短い元禄袖。(5) しまりがなく。だらしなく。

りの正面に団扇をかざして立った。描く男は丸い背をぐるりと返して、調色板を持ったまま、三四郎に向かった。口に太い煙管をくわえている。

「やって来たね」と言って煙管を口から取って、小さい丸卓の上に置いた。燐寸と灰皿が載っている。椅子もある。

「かけたまえ。――あれだ」と言って、描きかけた画布のほうを見た。長さは六尺もある。三四郎はただ、

「なるほど大きなものですな」と言った。原口さんは、耳にもとめないふうで、

「うん、なかなか」とひとりごとのように、髪の毛と、背景の境のところを塗り始めた。三四郎はこの時ようやく美禰子のほうを見た。すると女のかざした団扇の陰で、白い歯がかすかに光った。

それから二、三分はまったく静かになった。部屋は暖炉で温めてある。今日はそとでも、そう寒くはない。風は死につくした。枯れた樹が音なく冬の日に包まれて立っている。三四郎は画室へ導かれた時、霞の中へはいったような気がした。丸卓に肱を持たして、この静かさの夜にまさる境に、はばかりなき精神を溺れしめた。この静かさのうちに、美禰子がいる。美禰子の影が次第にできあがりつつある。肥った画工の画筆だけが動く。それも眼に動くだけで、耳には静かである。肥った画工も動くことがある。しかし足音はしない。

静かなものに封じ込められた美禰子はまったく動かない。団扇をかざして立った姿そのままがすでに絵である。三四郎から見ると、原口さんは、美禰子を写しているのではない。不思議に奥行きのある絵から、精出して、その奥行きだけを落として、普通の絵に美禰子を描き直しているのであ

口に太い
煙管を
パイプ
くわえて

る。にもかかわらず第二の美禰子は、この静かさのうちに、次第と第一に近づいて来る。三四郎には、この二人の美禰子のあいだに、時計の音に触れない、静かな長い時間が含まれているように思われた。その時間が画家の意識にさえ上らないほどおとなしくたつにしたがって、第二の美禰子がようやく追いついて来る。もう少しで双方がぴたりと出合って一つに収まるというところで、時の流れが急に向きをかえて永久の中に注いでしまう。原口さんの画筆はそれより先には進めない。三四郎はそこまでついて行って、気がついて、ふと美禰子を見た。美禰子は依然として動かずにいる。三四郎の頭はこの静かな空気のうちで覚えず動いていた。酔った心持ちである。すると突然原口さんが笑い出した。

「また苦しくなったようですね」

女はなにも言わずに、すぐ姿勢をくずして、そばに置いた安楽椅子へ落ちるようにとんと腰をおろした。その時白い歯がまた光った。そうして動く時の袖とともに三四郎を見た。その眼は流星のように三四郎の眉間を通り越して行った。

原口さんは丸卓のそばまで来て、三四郎に、

「どうです」と言いながら、燐寸をすってさっきの煙管に火をつけて、ふたたび口にくわえた。大きな木の雁首を指で抑えて、二吹きばかり濃い煙を髭の中から出したが、やがてまた丸い背中を向けて絵に近づいた。勝手なところを自由に塗っている。

絵はむろんしあがっていないものだろう。けれどもどこもかしこも万遍なく絵の具が塗ってあるから、素人の三四郎が見ると、なかなか立派である。うまいかまずいかむろんわからない。技巧の

批評のできない三四郎には、ただ技巧のもたらす感じだけがある。それすら、経験がないから、すこぶる正鵠を失しているらしい。(1) 芸術の影響にぜんぜん無頓着な人間でないとみずからを証拠立てるだけでも三四郎は風流人である。

三四郎が見ると、この絵は一体にぱっとしている。なんだか一面に粉が吹いて、光沢のない日光に当たったように思われる。影のところでも黒くはない。むしろ薄い紫が射している。三四郎はこの絵を見て、なんとなく軽快な感じがした。浮いた調子は猪牙船(2)に乗った心持ちがある。それでもどこか落ちついている。剣呑でない。苦ったところ、渋ったところ、毒々しいところはむろんない。三四郎は原口さんらしい絵だと思った。すると原口さんは無雑作に画筆を使いながら、こんなことを言う。

「小川さんおもしろい話がある。僕の知った男にね、細君がいやになって離縁を請求したものがある。ところが細君が承知をしないで、私は縁あって、この家へかたづいたものですから、たといあなたがおいやでもわたくしは決して出てまいりません」

原口さんはそこでちょっと絵を離れて、画筆の結果をながめていたが、こんどは、美禰子に向かって、

「里見さん。あなたが単衣(3)を着てくれないものだから、着物が描きにくくって困る。まるでいいかげんにやるんだから、少し大胆すぎますね」

「お気の毒さま」と美禰子が言った。

(1) ピントがはずれていること。正鵠は、的の中央の黒ぼし。(2) 江戸時代に隅田川を上下した速力の早い遊船。山谷船ともいう。(3) 裏のない一重の衣服。

原口さんは返事もせずにまた画面へ近寄った。「それでね、細君のお尻が離縁するにはあまり重くあったものだから、友人が細君に向かって、こう言ったんだとさ。出るのがいやなら、出ないでもいい。いつまでも家にいるがいい。そのかわりおれのほうが出るから。――里見さんちょっと立ってみてください。団扇（うちわ）はどうでもいい。ただ立てば。そう。ありがとう。――細君が、私が家におっても、あなたが出ておしまいになれば、あとが困るじゃありませんかと言うと、なにかまわないさ、お前は勝手に入夫[1]でもしたらよかろうと答えたんだって」

「それから、どうなりました」と三四郎が聞いた。原口さんは、語るに足りないと思ったものか、まだあとをつけた。

「どうもならないのさ。だから結婚は考えものだよ。離合聚散（しゅうさん）、共に自由にならない。広田先生を見たまえ、野々宮さんを見たまえ、里見恭助君を見たまえ、ついでに僕を見たまえ。みんな結婚をしていない。女が偉くなると、こういう独身ものがたくさんできてくる。だから社会の原則は、独身ものが、できえない程度内において、女が偉くならなくっちゃだめだね」

「でも兄は近々結婚いたしますよ」

「おや、そうですか。するとあなたはどうなります」

「存じません」

三四郎は美禰子を見た。美禰子も三四郎を見て笑った。原口さんだけは絵に向いている。「存じません。存じません――じゃ」と画筆（ブラッシ）を動かした。

(1) 女戸主と結婚して、その夫となること。

三四郎はこの機会を利用して、丸卓のわきを離れて、美禰子のそばへ近寄った。美禰子は椅子の背に、油気のない頭を、無雑作に持たせて、疲れた人の、身づくろいに心なきなげやりの姿である。あからさまに襦袢の襟から咽喉頸が出ている。椅子には脱ぎ捨てた羽織をかけた。廂髪(1)の上にきれいな裏が見える。

三四郎は懐に三十円入れている。この三十円が二人のあいだにある、説明しにくいものを代表している。――と三四郎は信じた。返そうと思って、返さなかったのもこれがためである。思いきって、今返そうとするのもこれがためである。返すと用がなくなって、遠ざかるか、用がなくなっても、いっそう近づいてくるか、――普通の人から見ると、三四郎は少し迷信家の調子を帯びている。

「里見さん」と言った。

「なに」と答えた。仰向いて下から三四郎を見た。顔をもとのごとくに落ちつけている。眼だけは動いた。それも三四郎の真正面で穏やかにとまった。三四郎は女を多少疲れていると判じた。

「ちょうどついでだから、ここで返しましょう」と言いながら、釦を一つはずして、内懐へ手を入れた。

女はまた、

「なに」とくり返した。もとのとおり、刺激のない調子である。内懐へ手を入れながら、三四郎はどうしようと考えた。やがて思いきった。

「このあいだの金です」

(1) 前髪を前へつき出すようにゆった、当時流行の髪。

「今くだすってもしかたがないわ」
女は下から見上げたままである。手も出さない。からだも動かさない。顔ももとのところに落ちつけている。男は女の返事さえよくは解しかねた。その時、
「もう少しだから、どうです」と言う声がうしろで聞こえた。見ると、原口さんがこっちを向いて立っている。画筆を指の股にはさんだまま、三角に刈り込んだ髯の先を引っ張って笑った。美禰子は両手を椅子の肘にかけて、腰をおろしたなり、頭と背をまっすぐに延ばした。三四郎は小さな声で、
「まだよほどかかりますか」と聞いた。
「もう一時間ばかり」と美禰子も小さな声で答えた。三四郎はまた丸卓に帰った。女はもう描かるべき姿勢をとった。原口さんはまた煙管をつけた。画筆はまた動き出す。背を向けながら、原口さんがこう言った。
「小川さん。里見さんの眼を見てごらん」
三四郎は言われたとおりにした。美禰子は突然額から団扇を放して、静かな姿勢をくずした。横を向いて硝子越しに庭をながめている。
「いけない。横を向いてしまっちゃ、いけない。今描き出したばかりだのに」
「なぜよけいなことをおっしゃる」と女は正面に帰った。原口さんは弁解をする。
「ひやかしたんじゃない。小川さんに話すことがあったんです」
「なにを」
「これから話すから、まあもとのとおりの姿勢に復してください。そう。もう少し肱を前へ出し

て。それで小川さん、僕の描（か）いた眼が、実物の表情どおりできているかね」

「どうもよくわからんですが。いったいこうやって、毎日毎日描いているのに、描かれる人の眼の表情がいつも変わらずにいるものでしょうか」

「それは変わるだろう。本人が変わるばかりじゃない、画工（えかき）のほうの気分も毎日変わるんだから、本当をいうと、肖像画が何枚でもできあがらなくっちゃならないわけだが、そうは行かない。またたった一枚でかなりまとまったものができるから不思議だ。なぜと言って見たまえ……」

原口さんはこのあいだ始終筆を使っている。美禰子のほうも見ている。三四郎は原口さんの諸機関が一度に働くのを目撃しておそれいった。

「こうやって毎日描いていると、毎日の量が積り積って、しばらくするうちに、描いている絵に一定の気分ができてくる。だから、たといほかの気分でそとから帰って来ても、画室へはいって、絵に向かいさえすれば、じきに一種一定の気分になれる。つまり絵の中の気分が、こっちへ乗り移るのだね。里見さんだって同じことだ。自然のままにほうっておけばいろいろの刺激でいろいろの表情になるにきまっているんだが、それが実際絵の上へたいした影響を及ぼさないのは、ああいう姿勢や、こういう乱雑な鼓（つつみ）だとか、鎧（よろい）だとか、虎の皮だとかいう周囲（まわり）のものが、自然に一種一定の表情を引き起こすようになって来て、その習慣が次第にほかの表情を圧迫するほど強くなるから、まあ大抵なら、この眼つきをこのままでしあげて行けばいいんだね。それに表情と言ったって……」

原口さんは突然黙った。どこかむずかしいところへ来たとみえる。二歩（ふたあし）ばかり立ちのいて、美禰子と絵をしきりに見くらべている。

「里見さん、どうかしましたか」と聞いた。
「いいえ」
この答えは美禰子の口から出たとは思えなかった。美禰子はそれほど静かに姿勢をくずさずにいる。
「それに表情と言ったって」と原口さんがまた始めた。「画工はね、心を描くんじゃない。心がそとへ見世を出しているところを描くんだから、見世さえ手落ちなく観察すれば、身代はおのずからわかるもの[1]と、まあ、そうしておくんだね。見世でうかがえない身代は画工の担任区域以外とあきらめべきものだよ。だから我々は肉ばかり描いている。どんな肉を描いたって、霊がこもらなければ、死肉だから、絵として通用しないだけだ。そこでこの里見さんの眼もね。里見さんの心を写すつもりで描いているんじゃない。ただ眼として描いている。この眼が気に入ったから描いている。この眼の恰好だの、二重瞼の影だの、眸の深さだの、なんでも僕に見えるところだけを残りなく描いて行く。すると偶然の結果として、一種の表情が出て来る。もし出て来なければ、僕の色の出しぐあいが悪かったか、恰好の取り方が間違っていたか、どっちかになる。現にあの色あの形そのものが一種の表情なんだからしかたがない」
原口さんは、この時また二歩ばかりあとへさがって、美禰子と絵とを見くらべた。
「どうも、今日はどうかしているね。疲れたんでしょう。疲れたら、もうよしましょう。――疲

（1）人の表情さえ完全に観察すれば、その人の心は自然と表われる、の意。表情を見世（店）に、心を身代（財産）にたとえたもの。

れましたか」

「いいえ」

原口さんはまた絵へ近寄った。

「それで、僕がなぜ里見さんの眼を選んだかというとね。まあ話すから聞きたまえ。西洋画の女の顔を見ると、だれの描いた美人でも、きっと大きな眼をしている。おかしいくらい大きな眼ばかりだ。ところが日本では観音様を始めとして、お多福[1]、能の面、もっとも著しいのは浮世絵にあらわれた美人、ことごとく細い。みんな象に似ている。なぜ東西で美の標準がこれほど違うかと思うと、ちょっと不思議だろう。ところが実はなんでもない。西洋には眼の大きい奴ばかりいるから、大きい眼のうちで、美的淘汰が行なわれる。日本は鯨の系統ばかりだから――ピエルロチー[2]という男は、日本人の眼は、あれでどうしてあけるだろうなんて冷かしている。――そら、そういう国柄だから、どうしたって材料のすくない大きな眼に対する審美眼が発達しようがない。そこで選択の自由のきく細い眼のうちで、理想ができてしまったのが、歌麿になったり、祐信[3]になったりして珍重がられている。しかしいくら日本的でも、西洋画には、ああ細いのは盲目を描いたようでみともなくっていけない。と言って、ラファエルの聖母[4]のようなのは、てんでありゃしないし、あったところが日本人とは言われないから、そこで里見さんをわずらわすことになったのさ。里見さんもう少しですよ」

(1) おかめ。丸顔で、ほおが高く鼻の低い女の面。(2) 一八五〇～一九二三、フランスの小説家・海軍将校。芥川龍之介の「舞踏会」に出てくる人物。日本の印象記「日本の秋」のほか、小説「お菊さん」など。(3) 西川祐信。一六七一～一七五一、江戸中期の上方の浮世絵師。(4) イタリア・ルネッサンス最大の画家、ラファエルの描いた優美温雅な聖母画。

答えはなかった。美禰子はじっとしている。

三四郎はこの画家の話をはなはだおもしろく感じた。とくに話だけ聞きに来たのならばなお幾倍の興味を添えたろうにと思った。三四郎の注意の焦点は、今、原口さんの話のうえにもない、原口さんの絵のうえにもない。むろん向こうに立っている美禰子に集まっている。三四郎は画家の話に耳を傾けながら、眼だけはついに美禰子を離れなかった。彼の眼に映じた女の姿勢は、自然の経過を、もっとも美しい刹那に、捕虜にして動けなくしたようである。変わらないところに、長い慰藉がある。しかるに原口さんが突然首をひねって、女にどうかしましたかと聞いた。その時三四郎は、少し恐ろしくなったくらいである。移りやすい美しさを、移さずに据えておく手段が、もう尽きたと画家から注意されたように聞こえたからである。

なるほどそう思って見ると、どうかしているらしくもある。色光沢がよくない、眼尻にたえがたいものうさが見える。三四郎はこの活人画(1)から受ける安慰の念を失った。同時にもしや自分がこの変化の原因ではなかろうかと考えついた。たちまち強烈な個性的の刺激が三四郎の心をおそって来た。移り行く美をはかなむという共通性の情緒はまるで影をひそめてしまった。——自分はそれほどの影響をこの女の上に有しておる。——三四郎はこの自覚のもとにいっさいのおのれを意識した。けれどもその影響が自分にとって、利益か不利益かは未決の問題である。

その時原口さんが、とうとう筆をおいて、

「もうよそう。今日はどうしてもだめだ」と言い出した。美禰子は持っていた団扇を、立ちなが

(1) 扮装した人が、適当な背景の中に動かずにいて、一つの人物画に見せかけるもの。

ら床(ゆか)の上に落とした。椅子(いす)にかけた羽織を取って着ながら、こちらへ寄って来た。

「今日は疲れていますね」

「わたくし？」と羽織の裄(ゆき)(1)を揃(そろ)えて、紐(ひも)を結んだ。

「いや実は僕も疲れた。またあした元気のいい時にやりましょう。まあお茶でも飲んでゆっくりなさい」

夕暮れには、まだ間(ま)があった。けれども美禰子は少し用があるから帰るという。三四郎もとめられたが、わざと断わって、美禰子といっしょに表へ出た。日本の社会状態で、こういう機会を、随意につくることは、三四郎にとって困難である。三四郎はなるべくこの機会を長く引き延ばして利用しようと試みた。それで比較的人の通らない、閑静な曙(あけぼの)町を一回り散歩しようじゃないかと女をいざなってみた。ところが相手は案外にも応じなかった。一直線に生垣(いけがき)のあいだを横切って、大通りへ出た。三四郎は、並んで歩きながら、

「原口さんもそう言っていたが、本当にどうかしたんですか」と聞いた。

「わたくし？」と美禰子がまた言った。原口さんに答えたと同じことである。三四郎が美禰子を知ってから、美禰子はかつて、長い言葉を使ったことがない。たいていの応対は一句か二句ですましている。しかもはなはだ簡単なものにすぎない。それでいて、三四郎の耳には一種の深い響きを与える。ほとんどほかの人からは、聞きうることのできない色が出る。三四郎はそれに敬服した。それを不思議がった。

(1) 着物の背縫いから袖口まで。

「わたくし？」と言った時、女は顔を半分ほど三四郎のほうへ向けた。そうして二重瞼（ふたえまぶた）の切れ目から男を見た。その眼には暈（かさ）がかかっているように思われた。いつになく感じがなまぬるく来た。頬（ほお）の色も少し蒼（あお）い。

「色が少し悪いようです」

「そうですか」

二人は五、六歩無言であるいた。三四郎はどうともして、二人のあいだにかかった薄い幕のようなものを裂き破りたくなった。しかしなんと言ったら破れるか、まるで分別（ふんべつ）が出なかった。小説などにある甘い言葉はつかいたくない。趣味のうえから言っても、社交上若い男女（なんにょ）の習慣としても、つかいたくない。三四郎は事実上不可能のことを望んでいる。望んでいるばかりではない。歩きながら工夫（くふう）している。

やがて、女のほうから口をきき出した。

「今日なにか原口さんにご用がおありだったの」

「いいえ、用事はなかったです」

「じゃ、ただ遊びにいらしったの」

「いいえ、遊びに行ったんじゃありません」

「じゃ、なんでいらしったの」

三四郎はこの瞬間を捕えた。

「あなたに会いに行ったんです」

三四郎はこれで言えるだけのことをことごとく言ったつもりである。すると、女はすこしも刺激に感じない、しかも、いつものごとく男を酔わせる調子で、
「お金は、あすこじゃいただけないのよ」と言った。三四郎はがっかりした。
二人はまた無言で五、六間来た。三四郎は突然口を開いた。
「本当は金を返しに行ったのじゃありません」
美禰子はしばらく返事をしなかった。やがて、静かに言った。
「お金はわたくしもいりません。持っていらっしゃい」
三四郎はたえられなくなった。急に、
「ただ、あなたに会いたいから行ったのです」と言って、横に女の顔をのぞき込んだ。女は三四郎を見なかった。その時三四郎の耳に、女の口をもれたかすかな溜息（ためいき）が聞こえた。
「お金は……」
「金なんぞ……」
二人の会話は双方とも意味をなさないで、途中で切れた。それなりで、また小半町ほど来た。こんどは女から話しかけた。
「原口さんの絵をごらんになって、どうお思いなすって」
答え方がいろいろあるので、三四郎は返事をせずに少しのあいだ歩いた。
「あんまりできかたが早いのでお驚きなさりゃしなくって」
「ええ」と言ったが、実ははじめて気がついた。考えると、原口が広田先生のところへ来て、美

禰子の肖像を描く意志をもらしてから、まだ一か月ぐらいにしかならない。展覧会で直接に美禰子に依頼していたのは、それより後のことである。三四郎は絵の道に暗いから、あんな大きな額が、どのくらいな速度でしあげられるものか、ほとんど想像のほかにあったが、美禰子から注意されてみると、あまり早くできすぎているように思われる。

「いつから取りかかったんです」

「本当に取りかかったのは、ついこのあいだですけれども、その前から少しずつ描いていただいていたんです」

「その前って、いつごろからですか」

「あの服装でわかるでしょう」

三四郎は突然として、はじめて池の周囲で美禰子に会った暑い昔を思い出した。

「そら、あなた、椎の木の下にしゃがんでいらしったじゃありませんか」

「あなたは団扇をかざして、高いところに立っていた」

「あの絵のとおりでしょう」

「ええ。あのとおりです」

二人は顔を見合わした。もう少しで白山の坂の上へ出る。

向こうから車がかけて来た。黒い帽子をかぶって、金縁の眼鏡をかけて、遠くから見ても色光沢のいい男が乗っている。この車が三四郎の眼にはいった時から、車の上の若い紳士は美禰子のほうを見つめているらしく思われた。二、三間先へ来ると、車を急にとめた。前掛けを器用に跳ねのけ

て、蹴込[1]みから飛び下りたところをみると、背のすらりと高い細面の立派な人であった。髭をきれいに剃っている。それでいて、まったく男らしい。
「今まで待っていたけれども、あんまり遅いから迎えに来た」と美禰子のまん前に立った。見おろして笑っている。
「そう、ありがとう」と美禰子も笑って、男の顔を見返したが、その眼をすぐ三四郎のほうへ向けた。
「どなた」と男が聞いた。
「大学の小川さん」と美禰子が答えた。
男は軽く帽子を取って、向こうから挨拶をした。
「早く行こう。兄さんも待っている」
いいぐあいに三四郎は追分へ曲がるべき横町の角に立っていた。金はとうとう返さずに別れた。

十一

このごろ与次郎が学校で文芸協会の切符を売って回っている。二、三日かかって、知ったものへはほぼ売りつけた様子である。与次郎はそれから知らないものを捕まえることにした。大抵は廊下で捕まえる。するとなかなか放さない。どうか、こうか買わせてしまう。時には談判中に号鐘が鳴

(1) 人力車で客が足をおく所。

って取り逃がすこともある。与次郎はこれを時利あらずと号している。時には相手が笑っていて、いつまでも要領を得ないことがある。与次郎はこれを人利あらずと号している。ある時便所から出て来た教授を捕まえた。その教授は手帛で手を拭きながら、今ちょっとと言ったまま急いで図書館へはいってしまった。それぎり決して出て来ない。与次郎はこれを――なんとも号しなかった。後影を見送って、あれは腸加答児にちがいないと三四郎に教えてくれた。

与次郎に切符の販売方を何枚たのまれたのかと聞くと、何枚でも売れるだけたのまれたのだと言う。あまり売れすぎて演芸場にはいりきれない恐れはないかと聞くと、少しはあると言う。それでは売ったあとで困るだろうと念をおすと、なに大丈夫だ、中には義理で買うものもあるし、事故で来ないのもあるし、それから腸加答児も少しはできるだろうと言って、すましている。

与次郎が切符を売るところを見ていると、引きかえに金を渡すものからはむろん即座に受け取るが、そうでない学生にはただ切符だけ渡している。気の小さい三四郎がみると、心配になるくらい渡して歩く。あとから思うとおり金が寄るかと聞いてみると、むろん寄らないという答えだ。几帳面にわずか売るよりも、だらしなくたくさん売るほうが、大体の上において利益だからこうすると言っている。与次郎はこれをタイムス社(1)が日本で百科全書を売った方法に比較している。比較だけは立派に聞こえたが、三四郎はなんだか心もとなく思った。そこで一応与次郎に注意した時に、与次郎の返事はおもしろかった。

「相手は東京帝国大学学生だよ」

(1) ロンドン・タイムス社。

「いくら学生だって、君のように金にかけるとのんきなのが多いだろう」
「なに善意に払わないのは、文芸協会のほうでもやかましくは言わないはずだ。どうせいくら切符が売れたって、とどのつまりは協会の借金になることは明らかだから」
三四郎は念のため、それは君の意見か、協会の意見かとただしてみた。与次郎は、むろん僕の意見であって、協会の意見であると都合のいいことを答えた。
与次郎の説を聞くと、こんどの演芸会を見ないものは、まるで馬鹿のような気がする。馬鹿のような気がするまで与次郎は講釈をする。それが切符を売るためだか、実際演芸会を信仰しているためだか、あるいはただ自分の景気をつけ、かねて相手の景気をつけ、ついでは演芸会の景気をつけて、世上一般の空気をできるだけにぎやかにするためだか、そこのところがちょっと明晰に区別がたたないものだから、相手は馬鹿のような気がするにもかかわらず、あまり与次郎の感化をこうむらない。
与次郎は第一に会員の練習に骨を折っている話をする。話どおりに聞いていると、会員の多数は、練習の結果として、当日前に役に立たなくなりそうだ。それから背景の話をする。その背景がたいしたもので、東京にいる有為の青年画家をことごとく引き上げて、ことごとく応分の技倆を振わしたようなことになる。次に服装の話をする。その服装が頭から足の先まで故実ずくめにできあがっている。[1]次に脚本の話をする。それが、みんな新作で、みんなおもしろい。そのほかいくらでもある。

(1) 故実は、昔の服装などのならわし。頭から足の先まで旧式な服装づくめである。

与次郎は広田先生と原口さんに招待券を送ったと言っている。野々宮兄妹と里見兄妹には上等の切符を買わせたと言っている。万事が好都合だと言っている。三四郎は与次郎のために演芸会万歳を唱えた。

万歳を唱える晩、与次郎が三四郎の下宿へ来た。昼間とはうって変わっている。堅くなって火鉢のそばへすわって寒い寒いと言う。その顔がただ寒いのではないらしい。始めは火鉢へ乗りかかるように手をかざしていたが、やがて懐手になった。三四郎は与次郎の顔を陽気にするために、机の上の洋燈を端から端へ移した。ところが与次郎は顎をがっくり落として、大きな坊主頭だけを黒く灯に照らしている。いっこう冴えない。どうかしたかと聞いた時に、首をあげて洋燈を見た。

「この家ではまだ電気を引かないのか」と顔つきにはまったく縁のないことを聞いた。

「まだ引かない。そのうち電気にするつもりだそうだ。洋燈は暗くていかんね」と答えていると、急に、洋燈のことは忘れたとみえて、

「おい、小川、大変なことができてしまった」と言い出した。

一応理由を聞いてみる。与次郎は懐から皺だらけの新聞を出した。二枚重なっている。その一枚を剝がして、新しくたたみ直して、ここを読んでみろとさしつけた。読むところを指の頭で押えている。三四郎は眼を洋燈のそばへ寄せた。見出しに大学の純文科とある。

大学の外国文学科は従来西洋人の担当で、当事者はいっさいの授業を外国教師に依頼していたが時勢の進歩と多数学生の希望にうながされて、今度いよいよ本邦人の講義も必須課目として認めるにいたった。そこでこのあいだ中から適当の人物を人選中であったが、ようやく某氏に決定して、

近々発表になるそうだ。某氏は近き過去において、海外留学の命を受けたことのある秀才だからしごく適任だろうという内容である。

「広田先生じゃなかったんだな」と三四郎が与次郎をかえりみた。与次郎はやっぱり新聞の上を見ている。

「これはたしかなのか」と三四郎がまた聞いた。

「どうも」と首を曲げたが、「大抵大丈夫だろうと思っていたんだがな。やり損なった。もっともこの男がだいぶ運動をしているという話は聞いたこともあるが」と言う。

「しかしこれだけじゃ、まだ風説じゃないか。いよいよ発表になってみなければわからないのだから」

「いや、それだけならむろんかまわない。先生の関係したことじゃないから、しかし」と言って、また残りの新聞をたたみ直して、標題を指の頭で押えて、三四郎の眼の下へ出した。

こんどの新聞にもほぼ同様のことが載っている。そこだけは別段に新しい印象を起こしようもないが、そのあとへ来て、三四郎は驚かされた。広田先生が大変な不徳義漢のように書いてある。十年間語学の教師をして、世間には杳として聞こえない(1)凡材のくせに、大学で本邦人の外国文学講師を入れると聞くやいなや、急にこそこそ運動を始めて、自分の評判記を学生間に流布した。のみならずその門下生をして「偉大なる暗闇」などという論文を小雑誌に草せしめた。この論文は零余子なる匿名のもとにあらわれたが、実は広田の家に出入する文科大学生小川三四郎なるものの筆であるこ

(1) はっきりと認められない。

とまでわかっている。と、とうとう三四郎の名前が出て来た。

三四郎は妙な顔をして与次郎を見た。与次郎は前から三四郎の顔を見ている。二人ともしばらく黙っていた。やがて、三四郎が、

「困るなあ」と言った。少し与次郎を恨んでいる。与次郎は、そこはあまりかまっていない。

「君、これをどう思う」と言う。

「どう思うとは」

「投書をそのまま出したにちがいない。決して社のほうで調べたものじゃない。文芸時評の六号活字の投書にこんなのが、いくらでも来る。六号活字はほとんど罪悪のかたまりだ。よくよく探ってみると嘘が多い。目に見えた嘘をついているのもある。なぜそんな愚なことをやるかと言うとね、君。みんな利害問題が動機になっているらしい。それで僕が六号活字を受け持っている時には、性質のよくないのは、たいてい屑籠へ放り込んだ。この記事もまったくそれだね。反対運動の結果だ」

「なぜ、君の名が出ないで、僕の名が出たものだろうな」

与次郎は「そうさ」と言っている。しばらくしてから、

「やっぱりなんだろう。君は本科生で僕は選科生だからだろう」と説明した。けれども三四郎には、これが説明にもなにもならなかった。三四郎は依然として迷惑である。

「ぜんたい僕が零余子なんてけちな号を使わずに、堂々と佐々木与次郎と署名しておけばよかった。実際あの論文は佐々木与次郎以外に書ける者は一人もないんだからなあ」

与次郎はまじめである。三四郎に「偉大なる暗闇」の著作権を奪われて、かえって迷惑しているのかもしれない。三四郎は馬鹿馬鹿しくなった。

「君、先生に話したか」と聞いた。

「さあ、そこだ。偉大なる暗闇の作者なんか、君だって、僕だって、どちらだってかまわないが、こと先生の人格に関係してくる以上は、話さずにはいられない。ああいう先生だから、いっこう知りません、なにか間違いでしょう、偉大なる暗闇という論文は雑誌に出ましたが、匿名です、先生の崇拝者が書いたものですからご安心なさいくらいに言っておけば、そうかですぐすんでしまうわけだが、この際そうはいかん。どうしたって僕が責任を明らかにしなくっちゃ。事がうまくいって、知らん顔をしているのは、心持ちがいいが、やり損なって黙っているのは不愉快でたまらない。第一自分が事を起こしておいて、ああいう善良な人を迷惑な状態に陥らして、それで平気に見物がしておられるものじゃない。正邪曲直なんてむずかしい問題は別として、ただ気の毒で、痛わしくっていけない」

三四郎ははじめて与次郎を感心な男だと思った。

「先生は新聞を読んだんだろうか」

「家へ来る新聞にゃない。だから僕も知らなかった。しかし先生は学校へ行っていろいろな新聞を見るからね。よし先生が見なくってもだれか話すだろう」

「すると、もう知ってるな」

「むろん知ってるだろう」

「君にはなんとも言わないか」
「言わない。もっともろくに話をする暇もないんだから、言わないはずだが。このあいだから演芸会のことで始終奔走しているものだから――ああ演芸会も、もういやになった。やめてしまおうかしらん。お白粉をつけて、芝居なんかやったって、なにがおもしろいものか」
「先生に話したら、君、しかられるだろう」
「しかられるだろう。しかられるのはしかたがないが、いかにも気の毒でね。よけいなことをして迷惑をかけてるんだから。――先生は道楽のない人でね。酒は飲まず、煙草は」と言いかけたが途中でやめてしまった。先生の哲学を鼻から煙にして吹き出す量は月につもると、莫大なものである。
「煙草だけはかなりのむが、そのほかはなにもないぜ。釣りをするじゃなし、碁を打つじゃなし、家庭の楽しみがあるじゃなし。あれがいちばんいけない。子供でもあるといいんだけれども。実に枯淡だからなあ」
与次郎はそれで腕組みをした。
「たまに、慰めようと思って、少し奔走すると、こんなことになるし。君も先生のところへ行ってやれ」
「行ってやるどころじゃない。僕にも多少責任があるから、あやまって来る」
「君はあやまる必要はない」
「じゃ弁解して来る」

与次郎はそれで帰った。三四郎は床にはいってからたびたび寝返りを打った。国にいるほうが寝やすい心持ちがする。いつわりの記事――広田先生――美禰子――美禰子を迎えに来て連れて行った立派な男――いろいろの刺激がある。

夜中からぐっすり寝た。いつものように起きるのが、ひどくつらかった。顔を洗うところで、同じ文科の学生に会った。顔だけは互いに見知り合いである。失敬という挨拶のうちに、この男は例の記事を読んでいるらしく推した。しかし先方ではむろん話頭を避けた。三四郎も弁解を試みなかった。

暖かい汁の香をかいでいる時に、また故里の母からの書信に接した。また例のごとく長かりそうだ。洋服を着かえるのがめんどうだから、着たままの上へ袴をはいて、懐へ手紙を入れて、出る。戸外は薄い霜で光った。

通りへ出ると、ほとんど学生ばかり歩いている。それが、みな同じ方向へ行く。ことごとく急いで行く。寒い往来は若い男の活気でいっぱいになる。その中に霜降(1)の外套を着た広田先生の長い影が見えた。この青年の隊伍にまぎれ込んだ先生は、歩調においてすでに時代錯誤である。左右前後に比較するとすこぶる緩漫に見える。先生の影は校門のうちに隠れた。門内に大きな松がある。巨人のからかさのように枝を拡げて玄関をふさいでいる。三四郎の足が門前まで来た時は先生の影が、すでに消えて、正面に見えるものは、松と、松の上にある時計台ばかりであった。この時計台の時計は常に狂っている。もしくはとまっている。

（1）霜がおりたように、白い斑点があるもの。

門内をちょっとのぞき込んだ三四郎は、口のうちで「ハイドリオタフヒア」という字を二度くり返した。この字は三四郎の覚えた外国語のうちで、もっとも長い、またもっともむずかしい言葉の一つであった。意味はまだわからない。広田先生に聞いてみるつもりでいる。かつて与次郎に尋ねたら、おそらくダーターファブラの類だろうと言っていた。けれども三四郎からみると二つのあいだには大変な違いがある。ダーターファブラはおどるべき性質のものと思える。ハイドリオタフヒアは覚えるのにさえ暇がいる。二へんくり返すと歩調がおのずから緩漫になる。広田先生の使うために古人が作っておいたような音がする。

学校へ行ったら、「偉大なる暗闇」の作者として、衆人の注意を一身に集めている気色がした。そとへ出ようとしたが、そとは存外寒いから廊下にいた。そうして講義のあいだに懐から母の手紙を出して読んだ。

この冬休みには帰って来いと、まるで熊本にいた当時と同様な命令がある。実は熊本にいた時分こんなことがあった。学校が休みになるか、ならないのに、帰れという電報がかかった。母の病気にちがいないと思い込んで、驚いて飛んで帰ると、母のほうではこっちに変がなくって、まあ結構だったと言わぬばかりに喜んでいる。わけを聞くと、いつまで待っていても帰らないから、お稲荷さまへうかがいを立てたら、こりゃ、もう熊本を立っているというご託宣(1)であったので、途中でどうかしはせぬだろうかと非常に心配していたのだと言う。三四郎はその当時を思い出して、こんどもまたうかがいを立てられることかと思った。しかし手紙にはお稲荷さまのことは書いてない。ただ

(1) 神が人にのりうつり告げること。

三輪田のお光さんも待っていると割注みたようなものがついている。お光さんは豊津の女学校をやめて、家へ帰ったそうだ。またお光さんに縫ってもらった綿入れが小包で来るそうだ。大工の角三が山で賭博を打って九十八円取られたそうだ。――その顚末がくわしく書いてある。めんどうだからいいかげんに読んだ。なんでも山を買いたいという男が三人連れで入り込んで来たのを、角三が案内をして、山を回ってあるいてるあいだに取られてしまったのだそうだ。角三はうちへ帰って、女房にいつの間に取られたかわからないと弁解した。すると、女房がそれじゃお前さん眠り薬でもかがされたんだろうと言ったら、角三が、うんそういえばなんだかかいだようだと答えたそうだ。けれども村のものはみんな賭博をしてまきあげられたと評判している。田舎でもこうだから、東京にいるお前なぞは、本当によく気をつけなくてはいけないという訓誡がついている。

長い手紙を巻き収めていると、与次郎がそばへ来て、「やあ女の手紙だな」と言った。ゆうべよりは冗談をいうだけ元気がいい。三四郎は、

「なに母からだ」と、少しつまらなそうに答えて、封筒ごと懐へ入れた。

「里見のお嬢さんからじゃないのか」

「いいや」

「君、里見のお嬢さんのことを聞いたか」

「なにを」と問い返しているところへ、一人の学生が、与次郎に、演芸会の切符を欲しいという人が階下に待っていると教えに来てくれた。与次郎はすぐ降りて行った。

(1) 本文の途中に二行に小さく書き加えられた注。

与次郎はそれなり消えてなくなった。いくら捕まえようと思っても出て来ない。三四郎はやむをえず精出して講義を筆記していた。講義がすんでから、ゆうべの約束どおり広田先生の家へ寄る。相変わらず静かである。先生は茶の間に長くなって寝ていた。婆さんに、どうかなすったのかと聞くと、そうじゃないのでしょう、ゆうべあまり遅くなったので、眠いと言って、さっきお帰りになると、すぐ横におなりなすったのだと言う。長いからだの上に小夜着[1]がかけてある。三四郎は小さな声で、また婆さんに、どうして、そう遅くなったのかと聞いた。なにいつでも遅いのだが、ゆうべのは勉強じゃなくって、佐々木さんと久しくお話をしておいでだったのだという答えである。勉強が佐々木にかわったから、昼寝をする説明にはならないが、与次郎が、ゆうべ先生に例の話をしたことだけはこれで明瞭になった。ついでに与次郎が、どうしかられたか聞いておきたいのだが、それは婆さんが知ろうはずがないし、肝心の与次郎は学校で取り逃がしてしまったからしかたがない。今日の元気のいいところをみると、たいした事件にはならずにすんだのだろう。もっとも与次郎の心理現象はとうてい三四郎にはわからないのだから、実際どんなことがあったか想像はできない。

三四郎は長火鉢の前へすわった。鉄瓶がちんちん鳴っている。婆さんは遠慮をして下女部屋へ引き取った。三四郎はあぐらをかいて、鉄瓶に手をかざして、先生の起きるのを待っている。先生は熟睡している。三四郎は静かでいい心持ちになった。爪で鉄瓶をたたいてみた。熱い湯を茶碗についでふうふう吹いて飲んだ。先生は向こうをむいて寝ている。二、三日前に頭を刈ったとみえて、髪がはなはだ短い。髭の端が濃く出ている。鼻も向こうを向いている。鼻の穴がすうすう言う。安眠だ。

（1） 小形の夜着。

三四郎は返そうと思って、持って来たハイドリオタフヒアを出して読み始めた。ぽつぽつ拾い読みをする。なかなかわからない。墓の中に花を投げることが書いてある。羅馬人は薔薇を affect[1] すると書いてある。なんの意味だかよく知らないが、おおかた好むとでも訳するんだろうと思った。希臘人は Amaranth[2] を用いると書いてある。これも明瞭でない。しかし花の名にはちがいない。それから少し先へ行くと、まるでわからなくなった。頁から眼を離して先生を見た。まだ寝ている。なんでこんなむずかしい書物を自分に貸したものだろうと思った。それから、このむずかしい書物が、なぜわからないながらも、自分の興味を惹くのだろうと思った。最後に広田先生は畢竟ハイドリオタフヒアだと思った。

そうすると、広田先生がむくりと起きた。首だけ持ち上げて、三四郎を見た。

「いつ来たの」と聞いた。三四郎はもっと寝ておいでなさいと勧めた。実際退屈ではなかったのである。先生は、

「いや起きる」と言って起きた。それから例のごとく哲学の煙を吹き始めた。煙が沈黙のあいだに、棒になって出る。

「ありがとう。書物を返します」

「ああ。——読んだの」

「読んだけれどもよくわからんです。第一標題がわからんです」

(1) 好む。用いたがる。　(2) はげいとう。ひゆ科の観賞植物。葉はケイトウに似て楕円形、黄・紅・紫の斑紋をもち非常に美しい。

「ハイドリオタフヒア」
「なんのことですか」
三四郎はあとを尋ねる勇気が抜けてしまった。先生はあくびを一つした。
「ああ眠かった。いい心持ちに寝た。おもしろい夢を見てね」
先生は女の夢だと言っている。それを話すのかと思ったら、湯に行かないかと言い出した。二人は手拭をさげて出かけた。
湯から上がって、二人が板の間に据えてある器械の上に乗って、身長を測ってみた。広田先生は五尺六寸ある。三四郎は四寸五分しかない。
「まだ延びるかもしれない」と広田先生が三四郎に言った。
「もうだめです。三年来このとおりです」と三四郎が答えた。
「そうかな」と先生が言った。自分をよっぽど子供のように考えているのだと三四郎は思った。家へ帰った時、先生が、用がなければ話して行ってもかまわないと、書斎の戸をあけて、自分が先へはいった。三四郎はとにかく、例の用事を片づける義務があるから、続いてはいった。
「佐々木は、まだ帰らないようですな」
「今日は遅くなるとか言って断わっていた。このあいだから演芸会のことでだいぶ奔走しているようだが、世話好きなんだか、駆け回ることが好きなんだか、いっこう要領を得ない男だ」
「親切なんですよ」

「目的だけは親切なところも少しあるんだが、なにしろ、頭のできがはなはだ不親切だものだから、ろくなことはしでかさない。ちょっとみると、要領を得ている。むしろ得すぎている。けれども終局へ行くと、なんのために要領を得てきたのだか、まるでめちゃくちゃになってしまう。いくら言っても直さないからほうっておく。あれはいたずらをしに世の中へ生まれて来た男だね」

三四郎はなんとか弁護の道がありそうなものだと思ったが、現に結果の悪い実例があるんだから、しようがない。話を転じた。

「あの新聞の記事をごらんでしたか」

「ええ、見た」

「新聞に出るまではちっともご存じなかったのですか」

「いいえ」

「お驚きなすったでしょう」

「驚くって——それはまったく驚かないこともない。けれども世の中のことはみんな、あんなものだと思ってるから、若い人ほど正直に驚きはしない」

「ご迷惑でしょう」

「迷惑でないこともない。けれども僕くらい世の中に住み古るした年配の人間なら、あの記事を見て、すぐ事実だと思い込む人ばかりもないから、やっぱり若い人ほど正直に迷惑とは感じない。与次郎は社員に知ったものがあるから、その男に頼んで真相を書いてもらうの、あの投書の出所を探して制裁を加えるの、自分の雑誌で十分反駁をいたしますのと、善後策の了見でくだらないこと

をいろいろ言うが、そんな手数をするならば、始めからよけいなことを起こさないほうが、いくらいいかわかりゃしない」

「まったく先生のためを思ったからです。悪気じゃないです」

「悪気でやられてたまるものか。第一僕のために運動をするものがさ、僕の意向も聞かないで、勝手な方法を講じたり勝手な方針を立てた日には、最初から僕の存在を愚弄していると同じことじゃないか。存在を無視されているほうが、どのくらい体面を保つに都合がよいかしれやしない」

三四郎はしかたなしに黙っていた。

「そうして、偉大なる暗闇なんて愚にもつかないものを書いて。――新聞には君が書いたとしてあるが実際は佐々木が書いたんだってね」

「そうです」

「ゆうべ佐々木が自白した。君こそ迷惑だろう。あんな馬鹿な文章は佐々木よりほかに書くものはありゃしない。僕も読んでみた。実質もなければ、品位もない、まるで救世軍の太鼓のようなもの[1]だ。読者の悪感情を引き起こすために、書いてるとしか思われやしない。徹頭徹尾故意だけで成り立っている。常識のあるものが見れば、どうしても為にするところがあって起稿したものだと判定がつく。あれじゃ僕が門下生に書かしたと言われるはずだ。あれを読んだ時には、なるほど新聞の記事はもっともだと思った」

広田先生はそれで話を切った。鼻から例によって煙を吐く。与次郎はこの煙の出方で、先生の気

(1) 軍隊的組織のもとに、楽隊を用いて民衆伝道と社会事業を行なうキリスト教の一派の太鼓のような。

与次郎の言ったような
判然たる煙は
ちっとも出て来ない

分をうかがうことができると言っている。濃くまっすぐにほとばしる時は、哲学の絶高頂に達した際で、ゆるくくずれる時は、心気(1)平穏、ことによるとひやかされるおそれがある。煙が、鼻の下に低徊して、髭に未練があるように見える時は、冥想に入る。もしくは詩的感興がある。もっとも恐るべきは孔の先の渦である。渦が出ると、大変にしかられる。与次郎の言うことだから、三四郎はむろんあてにはしない。しかしこの際だから気をつけて煙のかたちをながめていた。すると与次郎の言ったような判然たる煙はちっとも出て来ない。そのかわり出るものは、大抵な資格をみんなそなえている。

三四郎がいつまでたっても、恐れ入ったように控えているので、先生はまた話し始めた。

「すんだことは、もうやめよう。佐々木もゆうべことごとくあやまってしまったから、今日あたりはまた晴々して例のごとく飛んで歩いているだろう。いくら陰で不心得を責めたって、当人が平気で切符なんぞ売って歩いていてはしかたがない。それよりもっとおもしろい話をしよう」

「ええ」

「僕がさっき昼寝をしている時、おもしろい夢を見た。それはね、僕が生涯にたった一ぺん会った女に、突然夢の中で再会したという小説じみたお話だが、そのほうが、新聞の記事より聞いていても愉快だよ」

「ええ。どんな女ですか」

「十二、三のきれいな女だ。顔に黒子がある」

(1) 気持ち。心。

三四郎は十二、三と聞いて少し失望した。

「いつごろお会いになったのですか」

「二十年ばかり前」

三四郎はまた驚いた。

「よくその女ということがわかりましたね」

「夢だよ。夢だからわかるさ。そうして夢だから不思議でいい。僕がなんでも大きな森の中を歩いている。あの色のさめた夏の洋服を着てね、あの古い帽子をかぶって。――そうその時はなんでも、むずかしいことを考えていた。すべて宇宙の法則は変わらないが、法則に支配されるすべて宇宙のものは必ず変わる。するとその法則は、物のほかに存在していなくてはならない。――さめてみるとつまらないが夢の中だからまじめにそんなことを考えて森の下を通って行くと、突然その女に会った。行き会ったのではない。向こうはじっと立っていた。見ると、昔のとおりの顔をしている。昔のとおりの服装（なり）をしている。髪も昔の髪である。黒子（ほくろ）もむろんあった。つまり二十年前見た時と少しも変わらない十二、三の女である。僕がその女に、あなたは少しも変わらないというと、その女は僕に大変年をおとりなすったと言う。次に僕が、あなたはどうして、そう変わらずにいるのかと聞くと、この顔の年、この服装（なり）の月、この髪の日がいちばん好きだから、こうしていると言う。それはいつのことかと聞くと、二十年前、あなたにお目にかかった時だという。それなら僕は、なぜこう年をとったんだろうと、自分で不思議がると、女が、あなたは、その時よりも、もっと美しいほうへほうへとお移りなさりたがるからだと教えてくれた。その時僕が女に、あなたは絵だと

言うと、女が僕に、あなたは詩だと言った」

「それからどうしました」と三四郎が聞いた。

「それから君が来たのさ」と言う。

「二十年前に会ったというのは夢じゃない、本当の事実なんですか」

「本当の事実なんだからおもしろい」

「どこでお会いになったんですか」

先生の鼻はまた煙を吹き出した。その煙をながめて、当分黙っている。やがてこう言った。

「憲法発布は明治二十二年だったね。その時森文部大臣(1)が殺された。君は覚えていまい。いくつな君は。そう、それじゃ、まだ赤ん坊の時分だ。僕は高等学校の生徒であった。大臣の葬式に参列するのだと言って、大勢鉄砲をかついで出た。墓地へ行くのだと思ったら、そうではない。体操の教師が竹橋内へ引っ張って行って、道ばたへ整列さした。我々はそこへ立ったなり、大臣の柩を送ることになった。名は送るのだけれども、実は見物したのも同然だった(2)。その日は寒い日でね、今でも覚えている。動かずに立っていると、靴の下で足が痛む。隣の男が僕の鼻を見ては赤い赤いと言った。やがて行列が来た。なんでも長いものだった。寒い眼の前を静かな馬車や俥が何台となく通る。そのうちに今話した小さな娘がいた。今、その時の模様を思い出そうとしても、ぼうとしてとても明瞭に浮かんで来ない。ただこの女だけは覚えている。それも年をたつにしたがってだんだ

(1) 森有礼。一八四七〜八九、明治の政治家・教育家。文教改革を図って欧化主義者と目され、憲法発布式に臨む途中、西野文太郎に刺殺された。(2) 名目は送るのであるが、実際は見物した。

ん薄らいで来た。今では思い出すこともめったにない。今日夢を見る前までは、まるで忘れていた。けれどもその当時は頭の中へ焼きつけられたように熱い印象を持っていた。——妙なものだ」
「それからその女にはまるで会わないんですか」
「まるで会わない」
「じゃ、どこのだれだかまったくわからないんですか」
「むろんわからない」
「尋ねてみなかったですか」
「いいや」
「先生はそれで……」と言ったが急につかえた。
「それで？」
「それで結婚をなさらないんですか」
先生は笑い出した。
「それほど浪漫的(ロマンチック)な人間じゃない。僕は君よりもはるかに散文的(1)にできている」
「しかし、もしその女が来たらおもらいになったでしょう」
「そうさね」と一度考えたうえで、「もらったろうね」と言った。三四郎は気の毒なような顔をしている。すると先生がまた話し出した。
「そのために独身を余儀なくされたというと、僕がその女のために不具にされたと同じことにな

（1）詩情に乏しいこと。平凡でおもしろみがないこと。

る。けれども人間には生まれついて、結婚できない不具もあるし。そのほかいろいろ結婚のしにくい事情を持っている者がある」

「そんなに結婚を妨げる事情が世の中にたくさんあるでしょうか」

先生は煙のあいだから、じっと三四郎を見ていた。

「ハムレット[1]は結婚したくなかったんだろう。ハムレットは一人しかいないかもしれないが、あれに似た人はたくさんいる」

「たとえばどんな人です」

「たとえば」と言って、先生は黙った。煙がしきりに出る。「たとえば、ここに一人の男がいる。父は早く死んで、母一人を頼りに育ったとする。その母がまた病気にかかって、いよいよ息を引き取るという、間ぎわに、自分が死んだら誰某の世話になれという。子供が会ったこともない、知りもしない人を指名する。わけを聞くと、母がなんとも答えない。強いて聞くと実は誰某がお前の本当のお父だとかすかな声で言った。――まあ話だが、そういう母を持った子がいたとする。すると、その子が結婚に信仰をおかなくなるのはむろんだろう」

「そんな人はめったにないでしょう」

「めったにはないだろうが、いることはいる」

「しかし先生のは、そんなのじゃないでしょう」

先生はハハハハと笑った。

(1) シェークスピア作「ハムレット」の主人公。「ハムレット」は彼の四大悲劇の一つ。

「君はたしかおっかさんがいたね」
「ええ」
「お父さんは」
「死にました」
「僕の母は憲法発布の翌年に死んだ」

十二

演芸会は比較的寒い時に開かれた。年はようやく押し詰まって来る。人は二十日足らずの眼の先に春を控えた。市に生きるものは、忙しからんとしている。越年の計は貧者の頭に落ちた。(1) 演芸会はこのあいだにあって、すべてののどかなるものと、余裕あるものと、春と暮れの差別を知らぬものとを迎えた。

それが、いくらでもいる。大抵は若い男女である。一日目に与次郎が、三四郎に向かって大成功と叫んだ。三四郎は二日目の切符を持っていた。与次郎が広田先生を誘って行けと言う。切符が違うだろうと聞けば、むろん違うと言う。しかし一人で放っておくと、決して行く気づかいがないから、君が寄って引っ張り出すのだとわけを説明して聞かせた。三四郎は承知した。

夕刻に行ってみると、先生は明るい洋燈の下に大きな本を拡げていた。

(1) 貧乏人は、どうやってこの年を越そうかとあれこれ考え始める。

「おいでになりませんか」と聞くと、先生は少し笑いながら、無言のまま首を横に振った。子供のような所作をする。しかし三四郎には、それが学者らしく思われた。口をきかないところがゆかしく思われたのだろう。三四郎は中腰になって、ぼんやりしていた。先生は断わったのが気の毒になった。

「君行くなら、いっしょに出よう。僕も散歩ながら、そこまで行くから」

先生は黒い廻套を着て出た。懐手らしいがわからない。空が低く垂れている。星の見えない寒さである。

「雨になるかもしれない」

「降ると困るでしょう」

「出入りにね。日本の芝居小屋は下足があるから、天気のいい時ですら大変な不便だ。それで小屋の中は、空気が通わなくって、煙草が煙って、頭痛がして、——よく、みんな、あれでがまんができるものだ」

「ですけれども、まさか戸外でやるわけにも行かないからでしょう」

「お神楽はいつでも外でやっている。寒い時でも外でやる」

三四郎は、こりゃ議論にならないと思って、答えをみあわせてしまった。

「僕は戸外がいい。暑くも寒くもない、きれいな空の下で、美しい空気を呼吸して、美しい芝居が見たい。透明な空気のような、純粋で単簡な芝居ができそうなものだ」

「先生のごらんになった夢でも、芝居にしたらそんなものができるでしょう」

「君希臘の芝居を知っているか」
「よく知りません。たしか戸外でやったんですね」
「戸外。真昼間。さぞいい心持ちだったろうと思う。席は天然の石だ。堂々としている。与次郎のようなものは、そういうところへ連れて行って、少し見せてやるといい」
また与次郎の悪口が出た。その与次郎は今ごろ窮屈な会場のなかで、一生懸命に、奔走しかつ斡旋して大得意なのだからおもしろい。もし先生を連れて行かなかろうものなら、先生果たして来ない。たまにはこういうところへ来てみるのが、先生のためにはどのくらいいいかわからないのだのに、いくら僕が言っても聞かない。困ったものだなあ。と嘆息するにきまっているからなおおもしろい。
先生はそれから希臘の劇場の構造をくわしく話してくれた。三四郎はこの時先生から、Theatron(1), Orchêstra(2), Skênê(3), Proskênion(4) などという字の講釈を聞いた。なんとかいう独逸人の説によると亜典(5)の劇場は一万七千人をいれる席があったということも聞いた。それは小さいほうである。もっとも大きいのは、五万人をいれたということも聞いた。入場券は象牙と鉛と二とおりあって、いずれも賞牌みたようなかっこうで、表に模様がうち出してあったり、彫刻がほどこしてあるということも聞いた。先生はその入場券の価まで知っていた。一日だけの小芝居は十二銭で、三日続きの大芝居は三十五銭だと言った。三四郎がへえ、へえと感心しているうちに、演芸会場の前へ出た。
さかんに電燈がついている。入場者はぞくぞく寄って来る。与次郎の言ったよりも以上の景気で

(1) ギリシア語。観覧席。 (2) 合唱団席。 (3) 舞台。 (4) スケーネ(本来は楽屋の意)の前、すなわち舞台。
(5) ギリシアの都市アテネ。

ある。

「どうです、せっかくだからおはいりになりませんか」

「いやはいらない」

先生はまた暗いほうへ向いて行った。

三四郎は、しばらく先生の後影を見送っていたが、あとから、車で乗りつける人が、下足札を受け取る手間も惜しそうに、急いではいって行くのを見て、自分も足早に入場した。前へ押されたと同じことである。

入口に四、五人用のない人が立っている。そのうちの袴を着けた男が入場券を受け取った。その男の肩の上から場内をのぞいて見ると、中は急に広くなっている。かつははなはだ明るい。三四郎は眉に手を加えないばかりにして、導かれた席に着いた。狭いところに割り込みながら、四方を見回すと、人間の持って来た色[1]で眼がちらちらする。自分の眼を動かすからばかりではない。無数の人間に付着した色が、広い空間で、たえずめいめいに、かつ勝手に、動くからである。

舞台ではもう始まっている。出て来る人物が、みんな冠をかむって、沓をはいていた。そこへ長い輿をかついで来た。それを舞台のまん中でとめたものがある。輿をおろすと、中からまた一人あらわれた。その男が刀を抜いて、輿を突き返したのと斬り合いを始めた。――三四郎にはなんのことかまるでわからない。もっとも与次郎から梗概を聞いたことはある。けれどもいいかげんに聞いていた。見ればわかるだろうと考えて、うんなるほどと言っていた。ところが見れば毫もその意

(1) 観客の着物の色をいう。

を得ない。三四郎の記憶にはただ入鹿の大臣(1)という名前が残っている。三四郎はどれが入鹿だろうかと考えた。それはとうてい見込みがつかない。そこで舞台全体を入鹿のつもりでながめていた。すると冠でも、沓でも、筒袖の衣服でも、使う言葉でも、なんとなく入鹿くさくなって来た。実を言うと三四郎には確然たる入鹿の観念がない。日本歴史を習ったのが、あまりに遠い過去であるから、古い入鹿のこともつい忘れてしまった。推古天皇の時(2)のようでもある。欽明天皇の御代(3)でもさしつかえない気がする。応神天皇(4)や聖武天皇(5)では決してないと思う。三四郎はただ入鹿じみた心持ちを持っているだけである。芝居を見るにはそれでたくさんだと考えて、唐めいた装束(6)や背景をながめていた。しかし筋はちっともわからなかった。そのうち幕になった。

　幕になる少し前に、隣の男が、そのまた隣の男に、登場人物の声が、六畳敷で、親子さしむかいの談話のようだ。まるで訓練がないと非難していた。そっち隣の男は登場人物の腰がすわらない。ことごとくひょろひょろしていると訴えていた。二人は登場人物の本名をみんな暗んじている。三四郎は耳を傾けて二人の談話を聞いていた。二人とも立派な服装をしている。おおかた有名な人だろうと思った。けれどももし与次郎にこの談話を聞かせたら定めし反対するだろうと思った。その時うしろのほうでうまいうまいなかなかうまいと大きな声を出したものがある。隣の男は二人ともうしろを振り返った。それぎり話をやめてしまった。そこで幕が下りた。

（1）蘇我入鹿。？～六四五、飛鳥時代の逆臣。蝦夷の子。第三十五代皇極天皇の時、聖徳太子の子、山背大兄を殺したが、中大兄皇子（後の天智天皇）らに殺された。（2）第三十三代の天皇。五九二～六二八年まで在位。（3）第二十九代。五三九～七一年まで在位。（4）第十五代。二七〇～三一〇年まで在位。（5）第四十五代。七二四～四九年まで在位。
（6）中国ふうの服装。

あすこ、ここに席を立つものがある。花道[1]から出口へかけて、人の影がすこぶる忙しい。三四郎は中腰になって、四方をぐるりと見回した。来ているはずの人はどこにも見えない。本当をいうと演芸中にもできるだけは気をつけていた。それで知れないから、幕になったらばと内々心当てにしていたのである。三四郎は少し失望した。やむをえず眼を正面に帰した。

隣の連中はよほど世間が広い男たちとみえて、右左を顧みて、あすこにはだれがいる。ここにはだれがいるとしきりに知名の人の名を口にする。なかには離れながら、互いに挨拶をしたのも一、二人ある。三四郎はおかげでこれら知名な人の細君を少し覚えた。その中には新婚したばかりのものもあった。これは隣の一人にも珍らしかったとみえて、その男はわざわざ眼鏡を拭き直して、なるほどなるほどと言って見ていた。

すると、幕の下りた舞台の前を、向こうの端からこっちへ向けて、小走りに与次郎が駆けて来た。三分の二ほどのところでとまった。少し及び腰になって、土間の中をのぞき込みながら、なにか話している。三四郎はそれを見当にねらいをつけた。——舞台の端に立った与次郎から一直線に二、三間隔てて美禰子の横顔が見えた。

そのそばにいる男は背中を三四郎に向けている。三四郎は心のうちに、この男がなにかのひょうしに、どうかしてこっちを向いてくれればいいと念じていた。うまいぐあいにその男は立った。すわりくたびれたとみえて、桝の仕切りに腰をかけて、場内を見回し始めた。その時三四郎は明らかに野々宮さんの広い額と大きな眼を認めることができた。野々宮さんが立つとともに、美禰子のう

〔1〕舞台に観客席を貫いて設けた、俳優の出入りする通路。

しろにいたよし子の姿も見えた。三四郎はこの三人のほかに、まだ連れがいるかいないかを確かめようとした。けれども遠くから見ると、ただ人がぎっしり詰まっているだけで、連れといえば土間全体が連れと見えるまでだからしかたがない。美禰子と与次郎のあいだには、ときどき談話が交換されつつあるらしい。野々宮さんもおりおり口を出すと思われる。

　すると突然原口さんが幕のあいだから出て来た。与次郎と並んでしきりに土間の中をのぞき込む。口はむろん動かしているのだろう。野々宮さんは合い図のような首を竪に振った。その時原口さんはうしろから、平手で、与次郎の背中をたたいた。与次郎はくるりと引っくり返って、幕の裾をもぐってどこかへ消え失せた。原口さんは、舞台を降りて、人と人とのあいだを伝わって、野々宮さんのそばまで来た。野々宮さんは、腰を立てて原口さんを通した。原口さんはぽかりと人の中へ飛び込んだ。美禰子とよし子のいるあたりで見えなくなった。

　この連中の一挙一動を演芸以上の興味をもって注意していた三四郎は、この時急に原口流の所作がうらやましくなった。ああいう便利な方法で人のそばへ寄ることができようとは毫も思いつかなかった。自分も一つまねて見ようかしらと思った。しかしまねるという自覚が、すでに実行の勇気をくじいたうえに、もうはいる席は、いくら詰めても、むずかしかろうという遠慮が手伝って、三四郎の尻は依然として、もとの席を去りえなかった。

　そのうち幕があいて、ハムレットが始まった。三四郎は広田先生のうちで西洋のなんとかいう名優のふんしたハムレットの写真を見たことがある。今三四郎の眼の前にあらわれたハムレットは、これとほぼ同様の服装をしている。服装ばかりではない。顔まで似ている。両方とも八の字を寄せ

ている。

このハムレットは動作がまったく軽快で、心持ちがいい。舞台の上を大いに動いて、また大いに動かせる。能掛り(1)の入鹿とは大変趣を異にしている。ことに、ある時、ある場合に、舞台のまん中に立って、手を拡げてみたり、空をにらんでみたりするときは、観客の眼中にほかのものはいっさい入り込む余地のないくらい強烈な刺激を与える。

そのかわり台詞は日本語である。西洋語を日本語に訳した日本語である。口調には抑揚がある。節奏(2)もある。あるところは能弁すぎると思われるくらい流暢に出る。文章も立派である。それでいて、気が乗らない。三四郎はハムレットがもう少し日本人じみたことを言ってくれればいいと思った。おっかさん、それじゃお父さんにすまないじゃありませんかと言いそうなところで、急にアポロ(3)などを引き合いに出して、のんきにやってしまう。それでいて顔つきは親子とも泣き出しそうである。しかし三四郎はこの矛盾をただおぼろげに感じたのみである。決してつまらないと思いきるほどの勇気は出なかった。

したがって、ハムレットにあきた時は、美禰子のほうを見ていた。美禰子が人の影に隠れて見えなくなる時は、ハムレットを見ていた。

ハムレットがオフェリヤ(4)に向かって、尼寺へ行け尼寺へ行けと言うところへ来た時、三四郎はふと広田先生のことを考え出した。広田先生は言った。——ハムレットのようなものに結婚ができる

(1) 能のようなゆっくりした。 (2) ふし。リズム。 (3) ギリシア神話の医術・音楽・弓術・予言の神。 (4) ハムレットの恋人。

か。――なるほど本で読むとそうらしい。けれども、芝居では結婚してもよさそうである。よく思案してみると、尼寺へ行けとの言い方が悪いのだろう。その証拠には尼寺へ行けと言われたオフェリヤがちっとも気の毒にならない。

幕がまた下りた。美禰子とよし子が席を立った。三四郎もつづいて立った。廊下まで来てみると、二人は廊下の中ほどで、男と話をしている。男は廊下から出入りのできる左側の席の戸口に半分からだを出した。男の横顔を見た時、三四郎はあとへ引き返した。席へ返らずに下足をとって表へ出た。

本来は暗い夜である。人の力で明るくしたところを通り越すと、雨が落ちているように思う。風が枝を鳴らす。三四郎は急いで下宿に帰った。

夜半から降り出した。三四郎は床の中で、雨の音を聞きながら、尼寺へ行けという一句を柱にして、その周囲にぐるぐる低徊した。広田先生も起きているかもしれない。先生はどんな柱を抱いているだろう。与次郎は偉大なる暗闇の中に正体なく埋っているにちがいない。……

あくる日は少し熱がする。頭が重いから寝ていた。昼飯は床の上に起き直って食った。また一寝入りするとこんどは汗が出た。気がうとくなる。そこへ威勢よく与次郎がはいって来た。ゆうべも見えず、けさも講義に出ないようだからどうしたかと思ってたずねたと言う。三四郎は礼を述べた。

「なに、ゆうべは行ったんだ。行ったんだ。君が舞台の上に出て来て、美禰子さんと、遠くで話をしていたのも、ちゃんと知っている」

三四郎は少し酔ったような心持ちである。口をきき出すと、つるつると出る。与次郎は手を出し

て、三四郎の額をおさえた。
「だいぶ熱がある。薬を飲まなくっちゃいけない。風邪をひいたんだ」
「演芸場があまり暑すぎて、明るすぎて、そうして外へ出ると、急に寒すぎて、暗すぎるからだ。あれはよくない」
「いけないったって、しかたがないじゃないか」
「しかたがないったって、いけない」
三四郎の言葉はだんだん短くなる、与次郎がいいかげんにあしらっているうちに、すうすう寝てしまった。一時間ほどしてまた眼をあけた。与次郎を見て、
「君、そこにいるのか」と言う。こんどは平生の三四郎のようである。気分はどうかと聞くと、頭が重いと答えただけである。
「風邪だろう」
「風邪だろう」
両方で同じことを言った。しばらくしてから、三四郎が与次郎に聞いた。
「君、このあいだ美禰子さんのことを知ってるかと僕に尋ねたね」
「美禰子さんのことを？　どこで？」
「学校で」
「学校で？　いつ」
与次郎はまだ思い出せない様子である。三四郎はやむをえず、その前後の当時をくわしく説明し

た。与次郎は、
「なるほどそんなことがあったかもしれない」と言っている。三四郎はずいぶん無責任だと思った。与次郎も少し気の毒になって、考え出そうとした。やがてこう言った。
「じゃ、なんじゃないか。美禰子さんが嫁に行くという話じゃないか」
「きまったのか」
「きまったように聞いたが、よくわからない」
「野々宮さんのところか」
「いや、野々宮さんじゃない」
「じゃ……」と言いかけてやめた。
「君、知ってるのか」
「知らない」と言いきった。すると与次郎が少し前へ乗り出して来た。
「どうもよくわからない。不思議なことがあるんだが。もう少したたないと、どうなるんだか見当がつかない」
三四郎は、その不思議なことを、すぐ話せばいいと思うのに、与次郎は平気なもので、一人でのみ込んで、一人で不思議がっている。三四郎はしばらくがまんしていたが、とうとうじれったくなって、与次郎に、美禰子に関するすべての事実を隠さずに話してくれと請求した。与次郎は笑い出した。そうして慰藉のためかなんだか、とんだところへ話頭を持っていってしまった。
「馬鹿だなあ、あんな女を思って。思ったってしかたがないよ。第一、君と同年ぐらいじゃない

か。同年ぐらいの男に惚れるのは昔のことだ。八百屋お七(1)時代の恋だ」

三四郎は黙っていた。けれども与次郎の意味はよくわからなかった。

「なぜと言うに。二十前後の同じ年の男女を二人並べてみろ。女のほうが万事上手だあね。男は馬鹿にされるばかりだ。女だって、自分の軽蔑する男のところへ嫁に行く気は出ないやね。もっとも自分が世界でいちばん偉いと思ってる女は例外だ。軽蔑するところへ行かなければ独身で暮らすよりほかに方法はないんだから。よく金持ちの娘やなにかにそんなのがあるじゃないか、望んで嫁に来ておきながら、亭主を軽蔑しているのが。美禰子さんはそれよりずっと偉い。そのかわり、夫として尊敬のできない人のところへは始めから行く気はないんだから、相手になるものはその気でいなくっちゃいけない。そういう点で君だの僕だのは、あの女の夫になる資格はないんだよ」

三四郎はとうとう与次郎といっしょにされてしまった。しかし依然として黙っていた。

「そりゃ君だって、僕だって、あの女よりはるかに偉いさ。お互いにこれでも、なあ。けれども、もう五、六年たたなくっちゃ、その偉さかげんがかの女の眼に映って来ない。しかして、かの女は五、六年じっとしている気づかいはない。したがって、君があの女と結婚することは風馬牛(2)だ」

与次郎は風馬牛という熟字を妙なところへ使った。そうして一人で笑っている。

「なに、もう五、六年もすると、あれより、ずっと上等なのが、あらわれてくるよ。日本じゃ今

(1) 元和二年の江戸大火に本郷追分で類焼した八百屋市右衛門の娘。その時あずけられた寺の小姓を見そめ、恋しさのあまり、火事になればまた会えると思い放火、翌年十六歳で火刑に処せられたという。(2) 無関係なこと。「風する馬牛も相及ばず」がもとの形。したいあう馬や牛も会うことができぬほど遠く離れていること。

女のほうが余っているんだから。風邪なんかひいて熱を出したって始まらない。――なに世の中は広いから、心配するがものはない。実は僕にもいろいろあるんだが、僕のほうであんまりうるさいから、ご用で長崎へ出張すると言ってね」

「なんだ、それは」

「なんだって、僕の関係した女さ」

三四郎は驚いた。

「なに、女だって、君なんぞのかつて近寄ったことのない種類の女だよ。それをね、長崎へ黴菌の試験に出張するから当分だめだって断わっちまった。ところがその女が林檎を持って停車場まで送りに行くと言い出したんで、僕は弱ったね」

三四郎はますます驚いた。驚きながら聞いた。

「それで、どうした」

「どうしたか知らない。林檎を持って、停車場に待っていたんだろう」

「ひどい男だ。よく、そんな悪いことができるね」

「悪いことで、かわいそうなことだとは知ってるけれども、しかたがない。始めからしだいしだいに、そこまで運命に持って行かれるんだから。実はとうの前から僕が医科の学生になっていたんだからなあ」

「なんで、そんなよけいな嘘をつくんだ」

「そりゃ、またそれぞれ事情のあることなのさ。それで、女が病気の時に、診断を頼まれて困っ

たこともある」

三四郎はおかしくなった。

「その時は舌を見て、胸をたたいて、いいかげんにごまかしたが、その次に病院へ行って、見てもらいたいがいいかと聞かれたには閉口した」

三四郎はとうとう笑い出した。与次郎は、

「そういうこともたくさんあるから、まあ安心するがよかろう」と言った。なんのことだかわからない。しかし愉快になった。

与次郎はその時はじめて、美禰子に関する不思議を説明した。与次郎の言うところによると、よし子にも結婚の話がある。それから美禰子にもある。それだけならばいいが、よし子の行くところと、美禰子の行くところが、同じ人らしい。だから不思議なのだそうだ。

三四郎も少し馬鹿にされたような気がした。しかしよし子の結婚だけはたしかである。現に自分がその話をそばで聞いていた。ことによるとその話を美禰子のと取り違えたのかもしれない。けれども美禰子の結婚も、まったく嘘ではないらしい。三四郎ははっきりしたところが知りたくなった。ついでだから、与次郎に教えてくれと頼んだ。与次郎はわけなく承知した。よし子を見舞に来るようにしてやるから、じかに聞いてみろという。うまいことを考えた。

「だから、薬を飲んで、待っていなくってはいけない」

「病気がなおっても、寝て待っている」

二人は笑って別れた。帰りがけに与次郎が、近所の医者に来てもらう手続きをした。

晩になって、医者が来た。三四郎は自分で医者を迎えたおぼえがないんだから、始めは少し狼狽した。そのうち脈をとられたのでようやく気がついた。年の若い丁寧な男である。三四郎は代診(1)と鑑定した。五分ののち病症はインフルエンザときまった。今夜頓服を飲んで、なるべく風に当たらないようにしろという注意である。

翌日眼がさめると、頭がだいぶ軽くなっている。寝ていれば、ほとんど常体に近い。ただ枕を離れると、ふらふらする。下女が来て、だいぶ部屋の中が熱くさいと言った。三四郎は飯も食わずに、仰向けに天井をながめていた。ときどきうとうと眠くなる。明らかに熱と疲れとにとらわれたありさまである。三四郎は、とらわれたまま、逆らわずに、寝たりさめたりするあいだに、自然に従う一種の快感を得た。病症が軽いからだと思った。

四時間、五時間とたつうちに、そろそろ退屈を感じ出した。しきりに寝返りを打つ。外はいい天気である。障子に当たる日が、次第に影を移して行く。雀が鳴く。三四郎は今日も与次郎が遊びに来てくれればいいと思った。

ところへ下女が障子をあけて、女のお客様だと言う。よし子が、そう早く来ようとは待ち設けなかった。与次郎だけに敏捷な働きをした。寝たまま、あけ放しの入口に眼をつけていると、やがて高い姿が敷居の上へあらわれた。今日は紫の袴をはいている。足は両方とも廊下にある。ちょっとはいるのを躊躇した様子が見える。三四郎は肩を床から上げて、「いらっしゃい」と言った。

よし子は障子を閉てて、枕元へすわった。六畳の座敷が、取り乱してあるうえに、けさは掃除を

（1）主なる医者に代わって診察する人。

しないから、なお狭苦しい。女は、三四郎に、
「寝ていらっしゃい」と言った。三四郎はまた頭を枕へつけた。自分だけは穏やかである。
「くさくはないですか」と聞いた。
「ええ、少し」と言ったが、別段くさい顔もしなかった。「熱がおありなの。なんなんでしょう、ご病気は。お医者はいらしって」
「医者はゆうべ来ました。インフルエンザだそうです」
「けさ早く佐々木さんがおいでになって、小川が病気だから見舞に行ってやってください。なに病だかわからないが、なんでも軽くはないようだっておっしゃるものだから、わたくしも美禰子さんもびっくりしたの」
与次郎がまた少しほらを吹いた。悪くいえば、よし子を釣り出したようなものである。三四郎は人がいいから、気の毒でならない。「どうもありがとう」と言って寝ている。よし子は風呂敷包みの中から、蜜柑(みかん)の籃(かご)を出した。
「美禰子さんのご注意があったから買って来ました」と正直なことを言う。どっちのお見舞(みやげ)だかわからない。三四郎はよし子に対して礼を述べておいた。
「美禰子さんもあがるはずですが、このごろ少し忙しいものですから――どうぞよろしくって……」
「なにか特別に忙しいことができたのですか」
「ええ。できたの」と言った。大きな黒い眼が、枕についた三四郎の顔の上に落ちている。三四

三四郎は下から
よし子の青白い
額を見上げた

郎は下から、よし子の蒼白い額を見上げた。はじめてこの女に病院で会った昔を思い出した。今でもものの憂げに見える。同時に快活である。頼りになるべきすべての慰藉を三四郎の枕の上にもたらして来た。

「蜜柑をむいてあげましょうか」

女は青い葉のあいだから、果物を取り出した。かわいた人は、香にほとばしる甘い露を、したたかに飲んだ。

「おいしいでしょう。美禰子さんのお見舞よ」

「もうたくさん」

女は袂から白い手帛を出して手を拭いた。

「野々宮さん、あなたのご縁談はどうなりました」

「あれぎりです」

「美禰子さんにも縁談の口があるそうじゃありませんか」

「ええ、もうまとまりました」

「だれですか、先は」

「わたくしをもらうと言った方なの。ほほほおかしいでしょう。美禰子さんのお兄いさんのお友だちよ。わたくし近いうちにまた兄といっしょに家を持ちますの。美禰子さんが行ってしまうと、もうごやっかいになってるわけに行かないから」

「あなたはお嫁には行かないんですか」

「行きたいところがありさえすれば行きますわ」
女はこう言いすてて心持ちよく笑った。まだ行きたいところがないにきまっている。
三四郎はその日から四日ほど床を離れなかった。五日目にこわごわながら湯にはいって、鏡を見た。亡者の相がある。思いきって床屋へ行った。そのあくる日は日曜である。
朝食後、襯衣を重ねて、外套を着て、寒くないようにして、美禰子の家へ行った。玄関によし子が立って、今沓脱ぎ(1)へ降りようとしている。今兄のところへ行くところだと言う。美禰子はいない。三四郎はいっしょに表へ出た。
「もうすっかりいいんですか」
「ありがとう。もうなおりました。——里見さんはどこへ行ったんですか」
「兄さん」
「いいえ、美禰子さんです」
「美禰子さんは会堂」
美禰子の会堂へ行くことははじめて聞いた。どこの会堂か教えてもらって、三四郎はよし子に別れた。横町を三つほど曲がると、すぐ前へ出た。三四郎はまったく耶蘇教に縁のない男である。会堂の中はのぞいて見たこともない。前へ立って、建物をながめた。説教の掲示を読んだ。鉄柵のところをいったり来たりした。ある時は寄りかかってみた。三四郎はともかくもして、美禰子の出てくるのを待つつもりである。

(1) 玄関などのはきものをぬぐ平たい石。

やがて唱歌の声が聞こえた。讃美歌というものだろうと考えた。しめきった高い窓のうちの出来事である。音量から察するとよほどの人数らしい。美禰子の声もそのうちにある。三四郎は耳を傾けた。歌はやんだ。風が吹く。三四郎は外套の襟を立てた。空に美禰子の好きな雲が出た。

かつて美禰子といっしょに秋の空を見たこともあった。ところは広田先生の二階であった。田端の小川の縁にすわったこともあった。その時も一人ではなかった。迷羊。迷羊。雲が羊の形をしている。

忽然として会堂の戸があいた。中から人が出る。人は天国から浮世へ帰る。美禰子は終わりから四番目であった。縞の吾妻コート(1)を着て、俯向いて、上がり口の階段を降りて来た。寒いとみえて、肩をすぼめて、両手を前で重ねて、できるだけ外界との交渉を少なくしている。美禰子はこのすべてにあがらざる態度を門ぎわまで持続した。その時、往来の忙しさに、はじめて気がついたように顔をあげた。三四郎の脱いだ帽子の影が、女の眼に映った。二人は説教の掲示のあるところで、互いに近寄った。

「どうなすって」

「今お宅までちょっと出たところです」

「そう、じゃいらっしゃい」

女は半ば歩を回らしかけた。相変わらず低い下駄をはいている。男はわざと会堂の垣に身を寄せた。

(1) 主に羅紗やセルで作られた、たけの長い婦人の和服用外套。明治の中頃から流行した。

「ここでお目にかかればそれでいい。さっきから、あなたの出て来るのを待っていた」
「おはいりになればいいのに。寒かったでしょう」
「寒かった」
「お風邪はもういいの。大事になさらないと、ぶり返しますよ。まだ顔色がよくないようね」
男は返事をしずに、外套の隠袋から半紙に包んだものを出した。
「拝借した金です。ながながありがとう。返そう返そうと思って、つい遅くなった」
美禰子はちょっと三四郎の顔を見たが、そのまま逆らわずに、紙包みを受け取った。しかし手に持ったなり、しまわずにながめている。三四郎もそれをながめている。言葉が少しのあいだ切れた。やがて、美禰子が言った。
「あなた、ご不自由じゃなくって」
「いいえ、このあいだからそのつもりで国から取り寄せておいたのだから、どうか取ってください」
「そう。じゃいただいておきましょう」
女は紙包みを懐へ入れた。その手を吾妻コートから出した時、白い手帛を持っていた。鼻のところへあてて、三四郎を見ている。手帛をかぐ様子でもある。やがて、その手を不意に延ばした。手帛が三四郎の顔の前へ来た。鋭い香がぷんとする。
「ヘリオトロープ」と女が静かに言った。三四郎は思わず顔をあとへ引いた。ヘリオトロープの罎。四丁目の夕暮れ。迷羊。迷羊。空には高い日が明らかにかかる。

「結婚なさるそうですね」

美禰子は白い手帛(ハンケチ)を袂(たもと)へ落とした。

「ご存じなの」と言いながら、二重瞼(ふたえまぶた)を細目にして、男の顔を見た。三四郎を遠くに置いて、かえって遠くにいるのを気づかいすぎた眼つきである。そのくせ眉(まゆ)だけははっきり落ちついている。三四郎の舌が上顎(うわあご)へひっついてしまった。

女はややしばらく三四郎をながめた後、聞きかねるほどのため息をかすかにもらした。やがて細い手を濃い眉の上に加えて言った。

「われは我が愆(とが)を知る。我が罪は常に我が前にあり」(1)

聞き取れないくらいな声であった。それを三四郎は明らかに聞き取った。三四郎と美禰子はかようにして別れた。下宿へ帰ったら母からの電報が来ていた。あけて見ると、いつ立つとある。

十三

原口さんの絵はできあがった。丹青会(たんせいかい)はこれを一室の正面にかけた。そうしてその前に長い腰掛けを置いた。休むためでもある。絵を見るためでもある。休みかつ味わうためでもある。丹青会はこうして、この大作に低徊(ていかい)する多くの観覧者に便利を与えた。特別の待遇である。絵が特別のできだからと言う。あるいは人の目を惹(ひ)く題だからとも言う。少数のものは、あの女を描(か)いたからだと

(1) 聖書の「詩篇」五十一篇の三行目にある句。

言った。会員の一、二はまったく大きいからだと弁解した。大きいにはちがいない。幅五寸にあまる金の縁をつけてみると、見違えるように大きくなった。

原口さんは開会の前日検分のためちょっと来た。腰掛けに腰をおろして、久しいあいだ煙管をくわえてながめていた。やがて、ぬっと立って、場内を一順丁寧に回った。それからまたもとの腰掛けへ帰って、第二の煙管をゆっくり吹かした。

「森の女」の前には開会の当日から人がいっぱいたかった。せっかくの腰掛けは無用の長物となった。ただ疲れたものが、絵を見ないために休んでいた。それでも休みながら「森の女」の評をしていたものがある。

美禰子は夫に連れられて二日目に来た。原口さんが案内をした。「森の女」の前へ出た時、原口さんは「どうです」と二人を見た。夫は「結構です」と言って、眼鏡の奥からじっと眸をこらした。

「この団扇をかざして立った姿勢がいい。さすが専門家は違いますね。よくここに気がついたものだ。光線が顔へあたるぐあいがうまい。陰と日向の段落がかっきりして――顔だけでも非常におもしろい変化がある」

「いやみなご当人のお好みだから。僕のてがらじゃない」

「おかげさまで」と美禰子が礼を述べた。

「私も、おかげさまで」とこんどは原口さんが礼を述べた。

夫は細君のてがらだと聞いてさもうれしそうである。三人のうちで一番丁重な礼を述べたのは夫である。

開会後第一の土曜の昼過ぎには大勢いっしょに来た。——広田先生と野々宮さんと与次郎と三四郎と。四人はよそをあと回しにして、第一に「森の女」の部屋にはいった。与次郎が「あれだ、あれだ」と言う。人がたくさんたかっている。三四郎は入口でちょっと躊躇した。野々宮さんは超然としてはいった。

大勢のうしろから、のぞき込んだだけで、三四郎は退いた。腰掛けによってみんなを待ち合わしていた。

「すてきに大きなもの描いたな」と与次郎が言った。

「佐々木に買ってもらうつもりだそうだ」と広田先生が言った。

「僕より」と言いかけて、見ると、三四郎はむずかしい顔をして腰掛けにもたれている。与次郎は黙ってしまった。

「色の出し方がなかなか洒落ていますね。むしろ意気(1)な絵だ」と野々宮さんが評した。

「少し気がききすぎているくらいだ。これじゃ鼓の音のように ぽんぽんする 絵は描けないと自白するはずだ」と広田先生が評した。

「何ですぽんぽんする絵というのは」

「鼓の音のように間が抜けていて、おもしろい絵のことさ」

二人は笑った。二人は技巧の評ばかりする。与次郎が異をたてた。

「里見さんを描いちゃ、だれが描いたって、間が抜けてるようには描けませんよ」

(1) 粋とも書く。さっぱりとあかぬけしていて、色気のあるさま。

野々宮さんは目録へ記号（しるし）をつけるために、隠袋（かくし）へ手を入れて鉛筆を探（さが）した。鉛筆がなくって、一枚の活版摺（かっぱんずり）のはがきが出て来た。見ると、美禰子の結婚披露（ひろう）の招待状であった。披露はとうにすんだ。野々宮さんは広田先生といっしょにフロックコートで出席した。三四郎は帰京の当日この招待状を下宿の机の上に見た。時期はすでにすぎていた。

野々宮さんは、招待状を引きちぎって床（ゆか）の上にすてた。やがて先生とともにほかの絵の評に取りかかる。与次郎だけが三四郎のそばへ来た。

「どうだ森の女は」

「森の女という題が悪い」

「じゃ、なんとすればいいんだ」

三四郎はなんとも答えなかった。ただ口のうちで、迷羊（ストレイシープ）、迷羊（ストレイシープ）とくり返した。

落第

そのころ東京には中学[1]というものが一つしかなかった。学校の名もよくは覚えていないが、今の高等商業[2]の横あたりにあって、僕のはいったのは十二、三のころかしら。なんでも今の中学生などよりはよほど小さかったような気がする。学校は正則と変則とに分かれていて、正則のほうは一般の普通学をやり、変則のほうでは英語をおもにやった。そのころ変則のほうにはこんど京都の文科大学[3]の学長になった狩野だの、岡田良平などもおって、僕は正則のほうにいたのだが、柳谷卯三郎、中川小十郎[4]などもいっしょだった。で大学予備門（今の高等学校）へはいるには変則のほうだと英語をよけいやっていたから容易にはいれたけれど、正則のほうでは英語をやらなかったから卒業して後さらに英語を勉強しなければ予備門へはいれなかったのである。おもしろくもないし、二、三年で僕はこの中学を止めてしまって、三島中州先生[5]の二松学舎[6]へ転じたのであるが、その時分ここにいて今知られている人は京都大学の田島錦治[7]、井上密[8]などで、このあいだの戦争にロシアへ捕虜になって行った内務省の小城[9]などもおったと思う。学舎のごときは実に不完全なもので、講堂などのきたなさときたら今の人にはとても想像できないほどだった。まっ黒になった腸の出た畳が敷いてあって

（1）一ツ橋尋常中学（のちの府立一中）。明治十一年創設、神田区表神保町（現在の千代田区神田一ツ橋）にあった。（3）京都大学文学部の旧称。（2）現在の一ツ橋大学。明治八年創設された東京商法講習所が改称され、当時神田区表神保町にあった。（4）一八六六～一九四四、京都法政学校（立命館大学の前身）の創設者。立命館学長・貴族院議員。（5）一八三〇～一九一九、漢学者・文学博士。名は毅。東京高師・東大教授・東宮侍講となった。明治五年二松学舎を創設、漢学塾として名声をうたわれ、文章にもすぐれていた。（6）漢学専門の私立学校で、麴町区（現在の千代田区）にあり、漱石は明治十三、四年ごろ通学した。（7）一八六七～一九三四、経済学者・法学博士。京都帝大教授ののち、立命館大学学長となった。（8）一八六七～一九一六、法律学者・法学博士。京都帝大教授ののち、同大学学長になり、京都市長になった。（9）小城斉。官吏。漱石は満韓を旅行したさい、平壌でこの人の官舎に世話になった。

机などはさらにない。そこへ順序もなくすわり込んで講義を聞くのであったが、輪講の時などはちょうどカルタでも取るようなぐあいにしてやったものである。輪講の順番を定めるには、竹筒の中へ細長い札のはいっているのを振って、生徒はその中から一本あて抜いてそれに書いてある番号できめたものであるが、その番号は単に一二三とは書いてなくて、一東、二冬、三江、四支、五微、六魚、七虞、八斉、九佳、十灰(1)といったようにどこまでも漢学的であった。中には一、二、三の数字を抜いてただ東、冬、江と韻ばかり書いてあるのもあって、虞を取れば七番、微を取れば五番ということがただちにわかるのだから、それで定めるのもあった。講義は朝の六時か七時ごろから始めるので、むかしの寺小屋をそのまま、学校らしいところなどはちっともなかったが、そのころはまた寄宿料などもきわめてやすく——僕は家から通っていたけれど——たしか一か月二円くらいだったと覚えている。

元来僕は漢学が好きでずいぶん興味をもって漢籍はたくさん読んだものである。今は英文学などをやっているが、そのころは英語ときたら大きらいで手にとるのもいやなような気がした。兄が英語をやっていたから家では少しずつ教えられたけれど、教える兄はかんしゃく持ち、教わる僕は大きらいときているからとうてい長く続くはずもなく、ナショナルの二(2)くらいでおしまいになってしまったが、考えてみると漢籍ばかり読んでこの文明開化の世の中に漢学者になったところがしかたなし、別にこれという目的があったわけでもなかったけれど、このままで過ごすのはつまらないと

（1）漢字を平・上・去・入の四声（韻の四種）、一百六韻に類別したうちの上平十五韻（中国語の発音で、音やや高く、初めから終わりまで高さの変わらないもの）の初めの十韻。（2）英語の教科書として、当時最もよく用いられた「ナショナル・リーダー」の第二巻のこと。

思うところから、とにかく大学へはいってなにか勉強しようと決心した。そのころ地方には各県に一つずつくらい中学校があって、これを卒業してきた者はほとんど無試験で大学予備門へはいれたものであるが、東京には一つしか中学はなし、それに変則のほうをやった者は容易にはいれたけれど、正則のほうをやったものだとさらに英語をやらなければならないので、予備門へはいるものは多く成立学舎、共立学舎、進文学舎、(1)——これは坪内さん(2)などがやっていたので本郷壱岐殿坂の上あたりにあった——そのほかこれに類する二、三の予備校で入学試験の準備をしたものである。そこで僕も大いに発心して大学予備門へはいるために成立学舎——駿河台にあったが、たしか今の曽我祐準の隣だったと思う——へ入学して、ほとんど一年ばかり一生懸命に英語を勉強した。ナショナルの二くらいしか読めないのが急に上の級へはいって、頭からスウイントンの万国史(3)などを読んだので、初めのうちは少しもわからなかったが、その時は好きな漢籍さえ一冊残らず売ってしまい夢中になって勉強したから、しまいにはだんだんわかるようになって、その年(明治十七年)の夏は運よく大学予備門へはいることができた。同じ中学におっても狩野、岡田などは変則のほうにいたから早く予備門へはいって進んで行ったのだが、僕などが予備門へはいるとしては二松学舎や成立学舎などにまごついていただけ遅れたのである。

なんとかかんとかして予備門へはいるにははいったが、なまけているのははなはだ好きで少しも

(1) ともに、明治の初めころに東京に開かれた英語の私塾。予備門への予備校として有名であった。(2) 坪内逍遙。一八五九～一九三五、英文学者・劇作家・評論家・文学博士。シェークスピアの研究のほか、劇文学改良に努力した。明治十四年から二十年まで、進文学舎で英語を教えた。(3) イギリスの歴史家スウイントン(一七〇三～七七)が、ジョージ・セイルらと共同執筆したもの。

勉強なんかしなかった。水野錬太郎、(1)今美術学校の校長をしている正木直彦、芳賀矢一なども同じ級だったが、これらはみな勉強家で、みずから僕らのなまけ者の仲間とは違っていて、そのあいだにかけへだてがあったから、さらに近づいて交際するようなこともなくまるで離れておったので、むこうでも僕らのようななまけ者の連中はだめなやつらだと軽蔑していたろうと思うが、ここでもまた試験の点ばかり取りたがっているような連中はともに談ずるに足らずと観じて、僕らはただ遊んでいるのをえらいことのごとく思ってなまけていたものである。予備門は五年で、その中に予科が三年本科が二年となっていた。予科では中学へ毛のはえたようなこと(2)をするので、数学などもずいぶんたくさんあり、生理学だの動物植物鉱物など皆英語の本でやったものである。だから読むほうの力は今の人たちより進んでいたように思われるが、しかし生徒の気風にいたっては実に乱暴なもので、それからみると今の生徒は非常におとなしい。みないたずらばかりしていたものでストーブ攻めなどといって、教室の教師のそばにあるストーブへまきをいっぱいくべ、ストーブがまっかになるとともに漢学の先生などのまじめな顔が熱いのでやはりストーブのごとくまっかになるのを見て、クスクス笑って喜んでいた。数学の先生がボールドに向かって一生懸命説明していると、うしろから白墨をもってその背中へあやしげな字や絵を描いたり、また授業の始まる前にことごとく教室の窓をしめてまっ暗な所に静まりかえっていて、はいって来る先生を驚かしたり、そんなことばかりうれしがっていた。予科のほうは三級、二級、一級となっていて、最初の三級は平均点の六十五点も

(1) 一八六八〜一九四九、政治家。内務大臣・文部大臣などを歴任した。「私の経過した学生時代」に出てくる水野繁太郎と同一人物か。 (2) わずかにきまったこと。

もらってやっとこさとおるにはとおったが、やはりなまけているからなにもできない。ちょうど僕が二級の時に工部大学[1]と外国語学校[2]が予備門へ合併したので、学校は非常にゴタゴタしてずいぶん大騒ぎだった。それがだんだん進歩して現今の高等学校[3]になったのであるが、僕はその時腹膜炎をやってとうとう二級の学年試験を受けることができなかった。追試験を願ったけれど、合併の混雑やなんかで忙しかったとみえ、教務係の人は少しも取り合ってくれないので、そこで僕は大いに考えたのである。学課のほうはちっともできないし、教務係の人が追試験を受けさせてくれないのも、忙しいためもあろうが、第一自分に信用がないからだ。信用がなければ、世の中へ立ったところで何事もできないから、まず人の信用を得なければならない。信用を得るにはどうしても勉強する必要がある。と、こう考えたので、今までのようにうっかりしていてはだめだから、いっそ初めからやり直したほうがいいと思って、友だちなどが待っていて追試験を受けろとしきりにすすめるのも聞かず、自分から落第して再び二級をくり返すことにしたのである。人間というものは考え直すと妙なもので、まじめになって勉強すれば、今まで少しもわからなかったものもはっきりわかるようになる。前にはできなかった数学なども非常にできるようになって、ある日親睦会の席上でだれは何科へ行くだろうだれは何科へ行くだろうと投票をした時に、僕は理科へ行く者として投票されたくらいであった。元来僕は訥弁[4]で自分の思っていることがいえないたちだから、英語などを訳してもわかっていながらそれをいうことができない。けれども考えてみるとわかっていることがい

(1) 東京大学工学部の前身。明治四年に創設され、十九年に予備門へ合併された。(2) 開成学校（東京大学の前身）の予備校として明治七年に創設され、十九年、工部大学校と共に予備門に合併された。(3) 旧制第一高等学校。三年制で東京市本郷区向ケ丘弥生町にあった。(4) 口が重いこと。口べた。

えないというわけはないのだから、なんでも思いきっていうにかぎると決心して、その後はまずくてもかまわずどしどしいうようにすると、今までは教場などでいえなかったこともずんずんいうことができる。こんなふうに落第を機としていろんな改革をして勉強したのであるが、僕の一身にとってこの落第は非常に薬になったように思われる。もしその時落第せず、ただごまかしてばかりとおってきたら今ごろはどんな者になっていたかしれないと思う。

　前にいったようにみずから落第して二級をくり返し、そして一級へ移ったのであるが、一級になるともう専門によってやるものも違うので、僕は二部のフランス語をえらんだ。二部は工科で僕はまた建築科をえらんだがその主意がなかなかおもしろい。子供心に異なことを考えたもので、その主意というのはまずこうである。自分は元来変人だから、このままでは世の中にいれられない。世の中に立ってやって行くにはどうしても根底からこれを改めなければならないが、職業をえらんで日常欠くべからざる必要な仕事をすれば、しいて変人を改めずにやって行くことができる。こっちが変人でもぜひやってもらわなければならない仕事さえしていれば、自然と人が頭を下げて頼みに来るにちがいない。そうすれば飯の食いはずれはないから安心だというのが、建築科をえらんだ一つの理由。それと元来僕は美術的なことが好きであるから、実用と共に建築を美術的にしてみようと思ったのが、もう一つの理由であった。僕は落第したのだから水野、正木などの連中は一つ先へ進んで行ってしまったのであるが、僕の残った級には松本亦太郎[1]などもおって、それに文学士で死

(1) 一八六五～一九四三、心理学者・文学博士。東大文科哲学科を卒業、心理学研究のため、アメリカ・ドイツに留学。わが国心理学開拓の先駆者である。

んだ米山(1)という男がおった。これは非常な秀才で哲学科にいたが、だいぶ懇意にしていたので僕の建築科にいるのを見てしきりに忠告してくれた。僕はそのころピラミッドでも建てるようなつもりでいたのであるが、米山はなかなか盛んなことをいうて、君は建築をやるというが、今の日本のありさまでは君の思っているような美術的の建築をして後代にのこすなどということはとても不可能な話だ、それよりも文学をやれ、文学ならば勉強しだいで幾百年幾千年の後に伝えるべき大作もできるじゃないか。と米山はこういうのである。僕の建築科をえらんだのは自分一身の利害から打算したのであるが、米山の論は天下を標準としているのだ。こういわれてみるとなるほどそうだと思われるので、また決心をし直して、僕は文学をやることに定めたのであるが、国文や漢文なら別に研究する必要もないような気がしたから、そこで英文学を専攻することにした。その後は変化もなく今日までやって来ているが、やってみればあまりおもしろくもないので、このごろはまた、商売替えをしたいと思うけれど、今じゃもうしかたがない。初めはずいぶんとっぴなことを考えていたもので、英文学を研究して英文で大文学を書こうなどと考えていたんだったが……。

（1）米山保三郎。この落第した年（明治十九年）からの漱石の親友。東大哲学科を出て、大学院に進み「空間論」を研究したが、明治三十年六月夭逝した。漱石は「吾輩は猫である」でも彼を追慕している。

解説

吉田精一

漱石の人と文学

〔出生〕 慶応三年（一八六七）はふしぎな年で、生まれた順序にいうと、夏目漱石、幸田露伴、正岡子規、尾崎紅葉の四人の文豪がそろって生まれている。その前後の年を見まわしても、こんなに文学上の巨星が、一度に出たことはない。もちろん彼らの才能もあるが、一つには彼らの自己形成の時期のよろしきを得たということもあろう。元気に満ちた創成の時代に、彼らは生い立ったのだ。

夏目漱石（大正元年9月）

四人の身分をしらべてみると子規と露伴は士分の出で、紅葉は職人の子、漱石は名主の末子である。紅葉と露伴は若くして知りあい、お互い他を意識しつつ創作の上ではげみあった。芸術上の好敵手がいるということはいいことである。昔からそのために大成した例が多い。それから子規と漱石は親友で、漱石は子規によって俳句の道にひきこまれ、それが彼の作家として出発するきっかけとなった。子規がなければ、学者としての漱石はあっても、作家漱石はなかったかもしれ

ない。四文豪が一対(カップル)をなしつつ、お互いの道を歩んだということはおもしろい。

〔学業〕　もう一つおもしろいことは、紅葉・漱石・子規はほとんど時を同じくして、大学予備門（のちの第一高等学校）に学んだことである。漱石と子規はともに明治十七年の入学、紅葉は十六年の入学である。そして三人ともそろって落第している。子規と紅葉は十八年に落第し、漱石は十九年に落第している。文豪になるには落第せねばならぬという条件があるかのようだ。

その上、大学を無事に卒業したのは漱石一人で、紅葉は法科大学に入り、一年を修了せずして文科大学の国文科に転じたものの、結局学年試験に落第して退学、子規も文科大学国文科に入りはしたが、これまた一年の課程を修了せずして退学している。彼らはきわめて優秀な頭脳のもち主であったことは疑いないが、自分の仕事が学業以外にあると信じて、その好むところに熱中しており、紅葉などは在学中から読売新聞社に入社しているほどで、大学卒業の意志はなかったのであろう。

ひとり漱石は文科大学の英文科に入ると、すぐ特待生になり、優秀な成績で卒業している。漱石の大学入学は明治二十三年であって、英文科創設の第三年目である。漱石の同学の先輩は、第一回卒業生にただ一人いるのみ、第二回は一人もなく、第三回は漱石がただ一人いるのみであった。そうして第一回卒業生は英語英文学で身を立てることをやめにしてしまったので、純粋な英文学をおさめた文学士として世に出たのは漱石が日本で最初であった。

もちろん彼以前に、坪内逍遙のようなすぐれた英文学の研究家はいたが、この人は文学部といっても政治学の専攻で、英文学は趣味から出発している。大学の英文学科出身の専門家は漱石をもってはじめとする。ある漱石年譜を見ると、漱石が大学入学以来首席を通したとあるが、首席にもどりにも学生は漱石一人だったのである。

彼は明治二十六年東大卒業後すぐ東京高等師範学校の英語教師となり、つづいて月給がいいので松山中学校に行った。これが「坊っちゃん」の舞台である。月給をためて洋行しようというのも一つの目的だったらしいが、当時は稀少価値だった文学士が、学問に便利な東京をすてて わざわざ四国に行った彼の気持ちはほんとうのところわかりにくい。あるいは失恋のためというが、そうかもしれない。やがて熊本の第五高等学校の教授となり、ここから英語教授法の研究という名目でイギリスにわたった。これまた英文学者としては最初であったが、それも彼がこの方面の一番の先輩だったからにほかならない。熊本の生活からは「草枕」や「二百十日」が生まれた。

〔**海外生活**〕 漱石は明治三十三年から三十五年までイギリスにおり、三十六年一月帰朝した。この海外生活を彼は非常に不愉快だといっている。それはそうだろう。文部省の留学費は少ないし、ことばだってはじめは通じにくい。日本人として外国の文学を研究するのだし、それも明治三十年という西洋学の未開の時限でやるのだから、今日とは留学生としても知識の程度に差がある。向こうの学者がおもしろいというところが自分にはおもしろくない。やることが外国の文学だとすると、これは場合によっては致命的な欠陥である。それで彼は非常に煩悶した。しかし正直な漱石は自分にはどうしてもそう思えないことを思ったような顔をすることができない。いろいろと考え、苦しんだ末に到着したのが「自己本位」という立場である。

人が何と言おうと、自分で感じることを正直にのべ、自分の道を行くより仕方がない。こう悟った彼は外国人の説にかまわず、自分の信念と感覚に従って、イギリス文学を学問的に研究しようとした。それが「文学論」や「文学評論」という東京帝大の講義となったのである。この意味の「自己本位」は個性のつよい学者や芸術家には欠くべからざる根底である。このような個性は漱石に生

まれながらにそなわっていたため、彼は変人、偏人あつかいされていたが、社交の上ではともかく、学問、芸術の上ではこの個性がもっとも肝要な背骨（バックボーン）なのである。以後の漱石は妥協することなく、「自己本位」をつらぬき通そうとした。

しかし彼は日本に帰って、東京帝大及び第一高等学校で英文学や英語を教え、名実ともにその方面の第一人者になったものの、当時の帝大は、外国文学はすべて外国人を教授とすることに限っており、いくらよくできても異国人である日本人にはまだ歯が立たぬものと考えられていた。漱石の位置は講師であった。大学のこの考え方自体には理由があるとしても、漱石は不服だったであろう。彼が明治四十年、教職をすてて、朝日新聞社に入った一つの理由はここにあると考えられる。

〔作家生活〕　漱石がはじめて小説を書いたのは、人も知るように明治三十八年一月以後、つづいて発表された、「吾輩は猫である」からである。これは漱石が積極的に書きたくて書いたというよりも、友人の高浜虚子にすすめられて書いたものである。書いたところが大評判になった。猫が主人公になって人間世界に皮肉な観察を下すという筋からして奇想天外のものと見えたからである。じつはこうした構想はイギリス文学には多く、漱石の専攻した十八世紀のスイフトなどに先例があった。日本にも逍遥や内田魯庵などが、先鞭をつけている。

しかしそれらの日本作家のものにくらべて漱石の作品は一そう軽妙で、一そう深い文明批評をふくみ、またずっしりとした学識の重さがものをいっている。それと彼が東京帝国大学の先生であるということも、読む方に敬意をもたせた。今とちがって、当時の東大の先生は、非常に権威あるものと仰がれていたからである。

漱石としては、書き出してみるまで、自分に創作の才があるなどと思ってはいなかったろう。書

いてみると、いくらでも書ける。あとからあとから空想がわいてくる。書いてみて、はじめて自分の才能を発見したわけである。

漱石が死んだ時、解剖上の所見として、脳の連想中枢が異常に発達していることが証明された。事実漱石はきわめてゆたかな連想力のもち主で、一見日常ふつうの出来事のうちに余人の見得ぬ意味を発見し、内面的にぐいぐいと追求してゆく非凡な能力のもち主である。漱石はしばしば強度の神経衰弱におちいり、病的な神経の発作になやまされた。そういう常人としてはマイナスの性格や体質が作家としては独自な分析能力、追跡精神となって、漱石文学の特色となったのである。

〔**漱石文学の偉大さ**〕 漱石の作品は近代文学といわず、日本文学全体を通じて、もっとも広い読者層をもっている。全集ですらも昭和四十一年現在において、十二回も出ている。このことは漱石文学が大衆的であり、それだけ通俗的であると考えられやすい。そして、漱石はある時期そのように見られていた。

漱石小説の大半は文壇を直接の相手にせず、新聞に連載されて、教養ある一般読者のために書かれた。しかしそれが通俗的な理由にはならない。彼の作品は、決してはでな事件がならんでいるわけではなく、たいしたスリルがあるのでもない。題材は平凡な家庭の日常生活である。書き方でも、筋を追う読者をあきさせないような飛躍や、サスペンスがあるわけではない。一般読者にとっては、漱石のしつこい心理分析は、かえってうるさいだけだったろう。

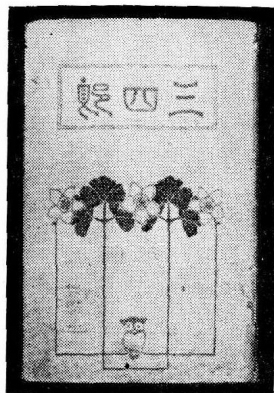
漱石晩年の書

もっとも漱石の作品は口あたりのよいところがある。ことに初期の「坊っちゃん」や「猫」はユーモアでさそって、年の若い読者をよろこばせる。しかしくみしやすいと思わせるのは表面だけで、一歩奥には、作者の社会に対する不平や不満のしかめっ面がのぞいている。それにたとえば「猫」をささえるずっしりとした学殖や知識の重さは、とうてい青少年のうかがい知りうる程度のものではない。

漱石はすぐれて倫理的な作家であった。ということは、彼が自己本位をモットオとしながら、「自己への誠実」と「社会への誠実」とのつながりをつねににらみ、その連帯性と釣合いを重視して、常に複数の人間の世界を意識していた、ということである。

ふつうの小説家には、人間として純粋であっても、自己の本能の満足のみをもとめたり、また性格破産者として、家族や周囲の指弾をまねき、社会人としてコンマ以下の場合があり得る。そういう人達は、自己や自己の生活にのみ閉鎖的にとじこもり、自己の趣味以外に興味を示さず、エゴイストもしくは唯美主義者としてのみ生きる。彼らが、異常にはなやかな作品をうみ出すことはしばしばある。しかし彼らは、社会に対する自己と自己の創作の責任を考えない。

漱石はその種の人々と反対に、矛盾する自我の諸要素を、一定に秩序づけることで、調和的な生活者として、社会とともに生きようとした。そのために芸術至上主義者からは、常識的だと評されもした。しかし一般の市民は健全な家庭人であり、秩序をまもる社会人だから、道義を人生の第一義とする漱石の清潔な行き方に喝采をおくる。それが彼の一般家庭や社会に広くうけ入れられる理由である。

もう一つ、彼の作品は時期によって多少ずつ基調の変化があり、比較的年少な読者をも、高級な

読者をも満足させる作風のはばの広さがある。彼の小説は、多くが長編で、組み立てもしっかりとしていて、たとえば堅固な鉄筋コンクリートの建物を思わせる。元来建築家を希望したという彼は、構成力にすぐれている。そうした土台に、じっさいあった事実とは全然別の、架空の事件や人物をあんばいして、根強い真実性を注入したのが彼の作品である。日本の近代小説に多い私小説とはまったく別種の本格的なこしらえ物のおもしろさがある。まれに見る創造的な作風のもち主なのである。たのしいとともにためになるのが文芸作品の理想であるが、漱石の作品はまさにその種のものであった。

「三四郎」について

「三四郎」初版本

〔成立の背景と経過〕「三四郎」は「虞美人草」「坑夫」についで、漱石が朝日新聞に入社してのち、三度目の新聞小説である。明治四十一年八月十九日の紙上に予告を出し、九月一日～十二月二十九日間連載、四十二年五月出版した。

「三四郎」の予告で漱石は、「田舎の高等学校を卒業して東京の大学にはいった三四郎が新しい空気にふれる、そうして同輩だの先輩だの若い女だのに接触していろいろに動いてくる、手間はこの空気のうちに、これらの人間を放すだけである（略）」といっている。つまり東京の大学生生活という空間を設定して、その

中での青年の生き方を追うのが目的である。漱石は経歴上、学生として、また教師として、大学の生活をよく知っているし、青年学徒たちも彼の家に出入りしていた。だから漱石にとっては、「三四郎」の世界は手に入ったものであった。

ところで漱石は「文学雑話」（明、四一「早稲田文学」）という談話の中で、ドイツの作家ズーデルマンの「アンダイィングパスト」（原名「エス・ワール」の英訳名）について次のようにいっている。

これは女が男を追っかけるのだが、その女のフェリシタスというのには夫がある、有夫姦になるので男の方で終始逃げようとする。それを――フィジカリーに追っかけるのではないが――追っかけて追っかけてキャプティベートする仕方がいかにも巧妙に、どうしてああいうふうに想像がつくかと驚かるるくらいに書いてある。誰もあんなデヴェロプメントをクリエートすることはできない。そうしてこの女が非常にサットルなデリケートな性質でね、私はこの女を評して「無(アン)意識な偽善家(コンシャス・ヒポクリット)」――偽善家と訳しては悪いが――と言ったことがある。その巧言令色(こうげんれいしょく)が、努(つと)めてするのではなく、ほとんど無意識に天性の発露のままで男を擒(とりこ)にするところ、もちろん善とか悪とかの道徳的観念も無いで、やっているかと思われるようなものですが、こんな性質をあれほどに書いたものは他に何かありますかね。

このフェリシタスの「無意識な偽善家」ぶりを、女主人公の美禰子(みねこ)に適用しようと考えたのである。漱石はそのような性格を描いてみようという約束を弟子の森田草平にした。もちろん美禰子は人妻でもなく、教養のある処女だから、猛烈なフェリシタスとはだいぶんがら行きがちがうが、ともかく女性の中にある、男にとって魅力があるが、またたえがたくもある特有の偽瞞(ぎまん)性とコケット

リイを具体化しようとこころみたのである。

〔構成〕　漱石の初期の作品は、「猫」でも「草枕」でもそうであるが、「坊っちゃん」その他一、二をのぞくと、みないわゆる「余裕のある小説」である。漱石の造語でいうと「低徊趣味」が濃い。「三四郎」の主人公三四郎を、作者自身が作中で説明して「低徊家」といっている。その意味は、「ある掬すべき情景に会うと、なんべんもこれを頭の中で新たにして喜んでいる。そのほうが命に奥行きがあるような気がする」と説明している。そのような性格をさすのである。いいかえれば、「眼前焦眉の事件以外何にも目に入らないような作風と反対である。だから、そこが世界が一本筋になる、平面になる、寝返りもできないように窮屈になる」自然主義系統とはちがうのである。

「三四郎」の世界を構成するものは、若い学生と同年輩の女性たち、静かな生活を送っている学者たち、といった、物質的にも精神的にも余裕をもった人たちである。事件も生死に関係するようなキワどいものも、深刻なものもない。「よくまあこんな刺激の軽い事がらばかり寄せ」（森田草平評）たと思われるような、ふんわりとした雰囲気の中で、ことがはこんで行く。

中心をなすのは三四郎の美禰子に対する恋愛である。三四郎が謎のような美禰子のことばや挙動にひきまわされているうちに、だんだん自分の恋愛感情を自覚して行く。逆にいえば彼女はさしたる意識なくして、女性のもちまえのフラーテーションで、三四郎を自分の方にさそって行くのである。そして三四郎は彼女にキャプティベートされ、思い切って、彼女に対する恋の告白をしたとき、彼女にはすでに三四郎とは比較にならぬ社会的地位をもった婚約者があり、三四郎はみじめにつっぱなされる。

これが話の中心だが、「三四郎」の世界を統一するものは、若い学生たる三四郎の心理や感情で

ある。世なれない、純真な学生の、ウブな感覚や心情を通じて、人物も事件も知覚され、表現されている。田舎出の人間が、はじめて東京に出て来て、いろいろなものに出会い、おどろきつつ、認識をすすめて行く、その過程が描かれている。おぼろげな霧に包まれたような特殊の雰囲気から、半意識に、やがて意識に到着するというこの作の書き方は、かなり特色をもっている。

「三四郎」に登場する各人物のモデルは、もちろんそのままではないにしても、漱石の周囲にあつまった門下生たちを、多少ともなぞっているらしい。漱石が書斎の人であって、現実的な体験はあまりなかっただけに、読んだり、あるいは近くの人からはなしをきいたものを土台にして、想像をはたらかせたことが多いようである。漱石の弟子たちの中には自分がモデルにされたと信じて得意になっていたが、途中からその人物がへんな方向にそれ出したので、あわてて辞任したいと申し出た人さえある。小説家の鈴木三重吉がそれで、彼は「三四郎」中の与次郎のモデルといううわさが立っていた。じっさい与次郎の中には三重吉のとった行動や、性癖の一部がとり入れられていたのである。ところが与次郎が恩師の金を費消して馬券を買ったので、彼はあわてて「今後与次郎のモデル辞任」をしたいと申し出ている。

森田草平によると、美禰子のモデルは、彼と一時恋仲で、心中までしかけた女性（草平の著「煤煙」の女主人公）だと自ら種明かしをしている。漱石はこの女性には直接会っていない。草平のはなしをきき、先にいったフェリシタスを重ね合わせて、自分では識らないで別の人になる、無意識の偽善者を作り上げたのであろう。野々宮理学士が寺田寅彦を多少とも匂わしていることは疑えない。漱石の周囲にあって、多少とも物理学の消息を伝えた人物は、この人を措いてないのである。

〔文学史的位置〕 先にも言ったように「三四郎」は、漱石の新聞小説として三番目のものであ

る。漱石は「猫」によって作家的出発をした。「猫」は非常な傑作かどうかは別として、漱石でなければ書けない、どくとくの小説であった。はじめは小説というよりも「写生文」として書き出したもので、元来筋や構想を考えたものではなく、一回読み切りのつもりであった。それが読者の歓迎をうけ、彼自身も筆に油がのって、とうとうあんな大長編になった。しかしもともとそういうものだから、独立した幾つかの場面が重なりあったままの、随筆的な、統一的構想のないものとなっている。

これに対して「虞美人草」には、本筋と関係のない低徊的な部分が多くはさまっていて、「写生文」のおもかげをまだ残しているとはいえ、はじめから一貫した構想をもった、リアリスチックな力作であった。しかし出来栄えはといえば、「猫」とちがって、失敗作というほかはない。作りものの匂いがぷんぷんとしている。第二作の「坑夫」は伝聞をもとにして書いたもので、方法上の冒険をしている。すなわち、すべてを「意識の流れ」ふうな世界に変造して、一人称の私小説ふうな書きかたをし、意識の生起と連続による自己分析に終始している。しかし主人公の境遇や、心理は、坑夫になろうというようなせっぱつまったものであるのに、行動そのものよりも、この書き方では、自然行動に出るまでの経緯や動機づけを解釈したり分析したりすることが主になるから、主題と方法との矛盾が強く、迫真性に欠けた。これまた失敗作となったのである。

第三作の「三四郎」は、主人公がもやもやした自分の心理や感情にとまどいしつつ、彼を招き、彼に指示する標識にすがって行こうという経路を主にしている。依然として低徊的であり、写生文ふうの余裕をのこしているが、こんどの場合は、それが青春の多くの可能性を秘めた学生生活が中心であるだけに、前の二つとはちがって、内容と描写方法とはマッチしている。学生を主人公とす

るのみではなく、学生生活それ自体を大うつしにして長編を作ることは、左翼運動というようなきびしい事件を介在させるならいざ知らず、ふつうはどうしてものんびりとしていて、小説的な緊張感にとぼしく、なかなか困難なしごとである。近代文学でも「三四郎」に先立っては坪内逍遙の「書生気質（かたぎ）」があるくらいで、外国でも戯曲の「アルト・ハイデルベルヒ」あたりをのぞくと、たくさんはあるまい。その点この作は困難な企画を、よくのり切ったものといえるだろう。
　漱石も「三四郎」の出来栄えには多少の自信をもっていたに相違ない。それなればこそ、三四郎の後身といえる代助を主人公とした「それから」を次に書き、さらに代助の延長というべき宗助の失意の生活を中心にした「門」を出すというふうに、いわゆる第一の三部作も思いついたのであろう。漱石は恋愛らしい恋愛を書かなかった人である。漱石の、人生における恋愛の意味や価値づけは比較的に低かった。彼の全作中で失恋に終わるとはいえ、「三四郎」がもっとも恋愛らしい恋愛を、はじめから終わりまで描いているのである。
　学生生活も時代によって変動がある。今日の学生、たとえば東京大学の学生は、自分たちの先輩というべき三四郎や与次郎たちの生活をこの作品を通してうかがって、あまりにものんびりとしているのに、夢のような感じをもつかもしれない。あるいは余裕のある「古きよき時代」に対して、羨望の眼を投げるかもしれない。
　しかしこれはある時代の現実であった。本郷あたりの学生街の空気を、実によく写し出している。だから連載中、その種の学生たちから異常な反響を得たのである。人間では重厚な三四郎と軽敏な与次郎との対照もドン・キホーテとサンチョ・パンザのようによい。美禰子という女性は、当時のハイカラ娘だが、これまたおだやかなよし子とのとり合わせで、男性側のカップルに対応して

いる。漱石の低徊趣味と、するどい文明批評と、社会人生に対する腰のすわった態度とが、適度にミックスされている意味で、もっとも漱石的な作品の一つといえよう。ほのぼのとした青春の恋愛小説としても、日本では類の少ないもので、永遠に学生たちの愛読に堪えるだろうと思う。

「三四郎」の鑑賞

〔思想〕　文明批評は、やはりこの作品の中核である。漱石はすぐれた文明批評家であった。それはまず広田先生の口を借りて、日露戦争後の日本に対する批判をさせている。「日本もだんだん発展するでしょう」という三四郎のことばに対して、「亡びるね」というしんらつな答えはその一つである。同じく広田先生や三四郎の目を借りて、古いものと新しいものとが隣合って住んでいる日本の状態を眺めさせている。西洋化の一途をいそぐ都会と、旧態のままの田舎との対立や、生活程度の懸絶が指摘されている。さらに文科の学生にしても西洋の文芸を学びながら、西洋の文芸にとらわれまいとする覚悟を、学生の口から説かせている。文学論としては、環境を決定論的なものと考える自然主義文学に対する批判がある。

すべての物が破壊されつつあるように見える。そうしてすべての物がまた同時に建設されつつあるように見える。大変な動き方である。

作中のことばによれば、「明治の思想は西洋の歴史にあらわれた三百年の活動を四十年で繰り返している」このような動揺の中で、三四郎の目の前には、母の象徴する家族制度の古い世界と、静かな月日を重ねてつもった貴い塵にまみれている学問の世界と、若い女性でまばゆい現実の世界とがある。それを彼が過不足なく満足させることに、将来の期待をもたせている。彼らの仲間の青年

たちは、「古き日本の圧迫」にも「新しき西洋の圧迫」にも、どちらにも堪え得ぬ苦痛を感じて、「とらわれたる心を解脱せしめんがために」文芸を研究し、理想どおり文芸をみちびこうとしているのである。

それらはいずれもそのまま漱石自身の文明批評でないまでも、この作品の文明批評ではある。明治末期は、すべての方面で欧州文明の外形を模倣しようとし、西洋化をいそいだ時代である。――外面的にも内面的にも。識者にはそれは浅薄にうつったことであろう――ことに西洋を実地に知った人間にとっては。その一人である漱石自身は「現代日本の開化」の中で、この時代にまじめに生きる文化人の苦悩を語っている。しかし彼はそうした自分や社会を嘲笑しようとはしていない。多少とも絶望的な口ぶりではあるが、日本の運命を自己の責任としてひきうけようとしているのである。

〔**恋愛観と女性観**〕　「三四郎」はほのぼのとした恋愛を巧みに描いている。青春時代の感じやすく、何かにひきつけられやすい気分のうちに、はじめて経験する恋愛をたくみにとかして見、主人公が不案内ながら、おどおどとたどって行く過程は、よく出ているのである。

伊藤整は、この作品が、人間の本能的・動物的な衝動を、なまの姿で描いておらず、道義でおさえているので、実在感がうすい、という意味の批評をしている。むしろそういう点が、この時代の青年の恋愛心理を処理したものとして、正しいというべきだろう。潔癖な生き方をのぞむ青年としては、恋愛における倫理的要素は、本能や動物的衝動をおさえる力をもっているものである。漱石の小説は「無恋愛」の作品といわれたほどに、恋愛の本能的、衝動的な面を描かなかった。官能的描写は強いて避けている。それが彼の趣味であったかどうかは別として、漱石は男女の精神的交渉

においては、男性は女性によって苦しみ、傷つくと考えた。彼のあつかった男女関係はそうした見方で要約されるのである。

宮本百合子は、漱石の女性観を、「女の救いがたい非条理性と、男にとってたえがたい欺瞞性」といういい方で指摘している。この非条理性と欺瞞性が、フェリシタスの、そして美禰子の、「無意識の偽善者」と、そっくりと重なりあうかどうかは、なお問題かもしれない。百合子は漱石の女性一般の特色をいっているのであり、「無意識の偽善者」はとくに美禰子のみの個性と考えられる。それに欺瞞性は、必ずしもつねに無意識的とはいえないからである。

しかし、三四郎が結果として美禰子の「無意識の偽善者」的性格によってもてあそばれ、苦しんだことは事実である。美禰子から見た三四郎は、おっとりとしていて、「索引のついている人の心さえあててみようとなさらないのんき」な人間であった。「索引のついている人の心」とは何を意味するのだろう。美禰子自身の心かもしれない。美禰子は三四郎に対する愛情を自覚し、それをひき出そうとはしない三四郎にもどかしさを感じたのであろうか。

三四郎は、最初に出て来る汽車で知りあった職工の細君によって、さそいをかけられた。ということはいや応なしに索引をひかされた。しかし彼はあててみようともしなかった。それは彼が潔癖で小心で、また純真な性格だからであった。

美禰子の場合は、必ずしもこの女とは同じではない。しかし彼女は、それが無意識にせよ、三四郎に自分の「索引」をひかせようとした。彼女が、誠実な三四郎の人間性に、自分にないものを見いだし、好意を感じていたことはまちがいない。大学の池のほとりで初対面の時の「あれは椎」ということばを記憶していたこと、菊人形の集団の中から、偶然ながら二人だけでぬけ出したこと

は、それを証明する。彼女の三四郎に無意識のうちにひきつけられるとともに、彼を自分の方にひきつけようとするいとなみはしばしばくり返えされる。

こうして彼女は、謎のようなことばとしぐさで三四郎をひきまわす。愚弄されるような思いをしながら、三四郎はその魅力にひきずられている。そしてようやく彼が自己の感情を意識し、彼女にその思いをうちあけた時、彼は彼女からかすかなため息をきくのみだった。

彼女は三四郎を自分に恋させることで目的を達した。しかし、彼女の口をついて出るものは、ため息とともに、「われは我が愆を知る、我が罪は常に我が前にあり」ということばであった。それは彼女の中の「無意識の偽善者」に対する反省でもあれば、その及ぼした結果に対する謝罪でもあった。

この作中に出る「迷える子」ということばは象徴的である。三四郎は疑いなく「迷える子」の一匹である。美禰子はどうであろう。少なくとも一時は三四郎とともに「迷える子」であった彼女は、最初に三四郎にあった時の姿を永遠の象徴としてとどめたまま、おそらく迷わざる道に行きついたであろう。しかし三四郎の方は、美禰子という「囚われ」から解放されたとしても、女は「謎」だという「囚われ」からは解放されたとは思われない。相変わらず「迷える子」として、女性の中にある「無意識の偽善者」からひきまわされずにはいられないかもしれない。たとえばのちの作だが、「行人」の二郎が、兄嫁のお直から翻弄されているような気もちがしながら、それを不愉快に感じないのは、多少とも三四郎と美禰子の関係に似ているのである。

〔**手法について**〕　技巧の上では、「虞美人草」や「坑夫」より、よほど自然にでき上がっているので、作家的技倆の上達をみとめざるを得ない。いちばん最後で、出来事がほとんど片づいたの

ち、でき上がった美禰子の肖像の前に、関係のある人物がみんな集まって幕を閉じる。この行き方は「虞美人草」の場合と同じで、十八・九世紀のイギリスの長編小説の型を追ったものといえよう。

広田先生、原口、野々宮理学士、与次郎などは、いずれもタイプとして描かれている。よし子にしてもそうだろう。広田先生には漱石自身の性癖の一部が投影されているらしい。美禰子の造型はいちばんおもしろく、森田草平の評するように、この小説のわくからはみ出しているところがある。いちばん描けてないのは美禰子の許婚で、急に結婚する夫である。同じく森田の評に、

　末尾に至って、ゆえもなく美禰子を奪って行く妙な男があるが、実際彼何者ぞやである。あの男はただ小説の結末をつけるために、不意に追剝のごとく顕われたように見える。

と彼のあらわれ方の不自然さを指摘しているが、その通りだと思う。

しかしこれも最初から漱石の構想にあったのかもしれない。漱石がこの作品を書くに際して意識したズーデルマンの「アンダイィングパスト」では、女主人公のフェリシタスが、男を思う存分ひきつけ、ともに死ぬ約束をしながら、急にこわくなってあらぬことを夫に誹謗し、背負い投げを食わして逐電してしまう。この最後のどでん返しを食わせるところが、美禰子の急に婚約し、たちまち結婚して、三四郎をすててしまうところと似ている。くらべれば「三四郎」の方がまだしも自然である。この急転は、あるいは漱石の最初から考えたものだったのかもしれない。

とにかく「三四郎」はこのましい青春小説である。後期の作品のように厳粛でないという理由から、この作品を高く評価しない人も多いが、また久米正雄、佐藤春夫、佐々木茂策のようにこの作品を愛する人もある。私もまたその一人である。そして先にあげたような理由から、もっとも漱石的なものの一つ、漱石でなければ書けないものとして、これを推すに躊躇しない。

「落第」について

「落第」は明治三十九年六月「中学文芸」の記者に語ったものの筆記で、彼の中学時代から大学予備門時代の思い出を語った貴重なものである。漱石にもこのような少、青年時代があったと思うとほほえましい。漱石の落第については前にもふれたが、落第が人間をつくったという話はなかなかおもしろい。前にものべたように、当時は落第がひんぱんにあり、相当の秀才たちが落ちているのである。

ものが漱石の談話筆記で、自分で筆をとって書いたものではないから、文字通り正確とはいえない。いまのようにテープレコーダーがあったわけではなく、耳できぎながら書きとって行くので、必ずしも彼のことばどおり、そのくせをもそのままうつしたものとはいえまい。しかしどことなく率直で、ぶること、飾ることのきらいな、漱石の面目が出ていて、なかなかたのしい読みものになっている。

著者紹介――東京教育大学教授。文学博士。明治四一（一九〇八）年東京生まれ、東大国文科卒。フランス語にも堪能で、その語学力をかってフランス文学史の方法論を身につけ日本文学史に鋭いメスを加えている。編著「現代文学論大系」で毎日出版文化賞・文部大臣賞（芸術選奨）、「自然主義の研究」で芸術院賞を受賞。他に「現代評論集」（旺文社）、「現代国語の研究」（同）などで学生にもなじみ深い。

三四郎の後輩

森（もり）末（すえ）義（よし）彰（あき）

漱石が「三四郎」を書いたのは明治四十一年、私が熊本の第五高等学校を卒業したのは大正十四年であるから、私は三四郎より十七、八年も後輩に当たるわけである。「三四郎」を読んでいると、いつもこの二十年に近いへだたりを感じさせられることが多い。まず開巻第一にそうしたことにいき当たる。三四郎は九州から上京するのに、山陽線の汽車に乗り換えるが、これは名古屋止まりなので、ここで一泊し、翌朝新橋行きに乗り継いでいる。私が高等学校を卒業して上京した時は、九州から下関に渡るのに関門連絡船に乗らなければならなかったが、それでも下関始発の急行に乗ると、二十四時間で東京に着いたものである。二十四時間というと、今では長崎から東京に来られ、しかも途中に連絡船などというやっかいなものもない。

また三四郎の頃は、大学の学年初めは九月で、三四郎と同じ汽車に乗り合わせた爺さんは、発車間際に駆け込んで来たので、汗を拭いているほどであるが、私が大学に入学するため上京したのは四月の初めで、東京に着いた朝は珍らしく大雪で、中野あたりでは道がひどくぬかるんでいたのを覚えている。ちょうどこの頃から数年前に学制が変わり、大学の学年初めが、九月から四月に改められたからである。

上京して大学に入学した三四郎の生活を読んでいくと、東京の町の描写などに、今日では想像もできないような文章に出会うことがある。三四郎が、広田先生や野々宮さん、美禰子たちと、団子坂の菊人形見物に行って迷子になり、美禰子から「迷える子（ストレイシープ）——わかって？」と、なぞのような言

息吹きを、まのあたりに生き生きと感じたものである。また熊本が舞台になったものではないが、五高の先輩としての「三四郎」の主人公に、自分の分身ででもあるかのような親近感を抱いたのも、私一人ではなかったことと思う。私が漱石の作品に心を惹かれたのは、ただそれだけではなく、漱石の作品を通じて流れている一つの精神にふれたからではないだろうか。人生に理想を求め、その理想の探求を目ざす漱石の心は、それぞれの作品の主人公の口や行動をかりて語られているが、それが感じ易い私たちの若い心を捉えたのではなかろうか。

漱石の作品の中でも、「三四郎」「それから」「門」の三つは、明治四十一年から四十三年の三年間にわたって書かれ、それについで、明治四十五年から大正三年にかけて、「彼岸過迄」「行人」「こころ」が書かれ、ともに二つの三部作の形を成しているといわれる。この六つの作品は、それぞれ独立はしているが、一貫した一つの長編にも成るように構想されたものと考えられている。しかし私などは、若い日の思い出につながる「草枕」「二百十日」と「三四郎」の三作品に、より深い感興と親しみを覚える。

筆者紹介――明治大学、白百合女子大学教授。一九〇四（明治37）年香川県生まれ。旧制五高から東大にすすまれ、昭和3年文学部国史学科卒。東大教授時代には東大史料編纂所長として、膨大な「大日本史料」「大日本古文書」等の整理刊行にあたられた。主著「中世の社寺と芸術」「東山時代とその文化」「日本史の研究」（旺文社）など。

息吹きを、まのあたりに生き生きと感じたものである。また熊本が舞台になったものではないが、五高の先輩としての「三四郎」の主人公に、自分の分身でもあるかのような親近感を抱いたのも、私一人ではなかったことと思う。私が漱石の作品に心を惹かれたのは、ただそれだけではなく、漱石の作品を通じて流れている一つの精神にふれたからではないだろうか。人生に理想を求め、その理想の探求を目ざす漱石の心は、それぞれの作品の主人公の口や行動をかりて語られているが、それが感じ易い私たちの若い心を捉えたのではなかろうか。

漱石の作品の中でも、「三四郎」「それから」「門」の三つは、明治四十一年から四十三年の三年間にわたって書かれ、それについで、明治四十五年から大正三年にかけて、「彼岸過迄」「行人」「こころ」が書かれ、ともに二つの三部作の形を成しているといわれる。この六つの作品は、それぞれ独立はしているが、一貫した一つの長編にも成るように構想されたものと考えられている。しかし私などは、若い日の思い出につながる「草枕」「二百十日」と「三四郎」の三作品に、より深い感興と親しみを覚える。

筆者紹介――明治大学、白百合女子大学教授。一九〇四（明治37）年香川県生まれ。旧制五高から東大にすすまれ、昭和3年文学部国史学科卒。東大教授時代には東大史料編纂所長として、膨大な「大日本史料」「大日本古文書」等の整理刊行にあたられた。主著「中世の社寺と芸術」「東山時代とその文化」「日本史の研究」（旺文社）など。

漱石先生の来訪

内田百閒

漱石先生が私の家を訪ねられて、二階へ上がり、私の部屋に坐り込んで辺りを見廻した。随分昔の事だから、はっきりした事は覚えてゐないけれど、別に用事があって来られたのではなく、何処かの帰りか、或は私の近所に津田青楓氏がゐたので、津田さんの所へ来た序に寄られたのかも知れない。初めて大先生の御来訪を受けたので、私は畏まってゐたが、先生はそこいらを見廻して、少し曲がった鼻の辺りで変な顔をした。

先生の坐って居られる向ひ側の壁には、画仙紙半折ぐらゐの大きさの洋紙にかいた和洋折衷の絵が掛かってゐる。それは先生が絵をかき始めた初期の手習ひの一つであって、真中辺りに大きな岩が描いてあるが、その岩は柔らかさうで、大きな餅の様でもあり、津田さんは女のお尻ではないかと云ったと云ふ事を聞いた事がある。

北窓の長押の上には、潮来天地青と云ふ書の額が、懸かってゐたが、それも先生の筆であって、私は同じ文句の先生の書を二枚持ってゐたけれど、一枚の方は郷里の家に懸けておいたので、後で話す様な難を免れた。

先生が振り向いて見ると、後の床の間には、「智に働けば角が立つ、情に棹させば流される、意地を通せば窮屈だ、と云ふ草枕の冒頭の句を望まれて、漱石」と云ふ先生の半折の軸が懸かってゐる。

その外、一方の柱の短冊掛には先生の俳句が懸かって居り、もう一つの柱には先生が「土左衛門

の賛」を矢張り短冊に小さな字で書いてくれたのが懸かってゐる。どっちを向いて見ても先生の筆蹟ばかりで、漱石展覧会の様な真中に御本人の先生が坐って、面白くなささうな顔をしてゐるので、私の方が少し恥かしい気持がした。

先生が来ると思ったら、しまっておくのであったと、後になってから考へた。

二三日すると先生から手紙が来て、ああ云ふまづい物を懸けておかれると気持が悪いから、自分の所へ持って来て、破かせろ、代りには新しい物を書いてやるとあった。

新しいのを貰ふのは有り難いけれど、今まで私が大事にしてゐた物を破ると云ふのは面白くない。私は先生の許に出かけて行って、勘弁して貰ふ様に頼んだが頑固で私の云ふ事をきいてくれない。

「僕のいやな物を懸けておいたって仕様がないではないか」と云はれたので観念した。

二十何年もたった今になって考へて見ると、矢っ張り先生は津田さんを訪ねた帰りであって、その時津田さんが、内田のところには先生のまづい書や画が一面に懸けめぐらしてあると云ったものだから、先生が気にして見に来たのではないかと云ふ邪推を催す。

その次に行く時、私は自分の部屋に懸かってゐる先生の書や画の中から、先生の気にした物を持って行って、先生に破かせた。

その代りに書いて貰った額は非常にいい出来で、今でも私の手許に残ってゐるが、しかし餅の様な岩の絵や、草枕の文句の軸の事を思ひ出すと残念である。

又しかし考へて見ると、それから後の二十何年の間に、私はいろいろな目に会って、何度も差押へを受けたり、身を切られる様な思ひのする大事な物を手離さなければならぬ様な羽目に陥ったの

で、若しその岩や草枕の軸があったとしても、今日まで無事に私の手に残ってゐたか、どうかわからない。先生が人に見られるのがいやだと思ったさう云ふ書や画が、私の不始末から、見も知らぬ人の手に渡る様な事があったら、誠に申し訳ない。矢っ張り先生の云ふ通りにして、先生の手で破かせてよかったと、今ではさう思ってゐる。

（かなづかい、原文のまま）

筆者紹介――作家。一八八九（明治22）年、岡山生まれ、東大文学部独逸文学科卒。東大在学中に漱石山房の木曜会に出席されていた。短編に秀れ、『百鬼園随筆』は著名。他に主著『冥途』『阿房列車』『無伴奏』『ノラや』など。

代表作品解題

〔吾輩は猫である〕（明治38年1月〜39年8月、雑誌「ホトトギス」）

「吾輩」なる猫が、自分のことや飼主の教師苦沙弥先生を中心に、その家族や出入りする人たちを通して、人間を語ったり、社会を批判したりする風刺小説である。猫の眼を通して人間社会を批判する奇抜な形式と、全体に横溢するユーモアと風刺とが、世に迎えられ、漱石は一躍文壇に登場した。

〔坊っちゃん〕（明治39年4月、雑誌「ホトトギス」）

主人公は、「坊っちゃん」の気質そのままの四国の中学校の数学教師。学校を出たばかりの、生一本で純粋な江戸っ子の青年が、田舎の教師となって、周囲の愚劣さや俗悪さ、正直だけでは通らない汚れた社会の現実としゃにむに戦ってゆく姿を描いている。人間としての誠実さ、すなおさ、純粋さを尊重する漱石の代表作である。

〔虞美人草〕（明治40年6月〜10月、「朝日新聞」）

「紫の女」とよばれる、自我の強い高慢な女性藤尾を中心に、若い男女が、東京、京都を舞台に恋愛と友情をくりひろげる長編小説。漱石が東京帝国大学などの教職をやめて、朝日新聞に入社して書いた最初の新聞小説で、第二の処女作ともいえる。詩的な絢爛たる文章に、哲学的・人生的な批評を加え、戯曲的な構成で表現されている。

〔それから〕（明治42年6月〜10月、「朝日新聞」）

「三四郎」「門」と三部作をなしている。主人公長井代助は、かつて友情のため愛する女性三千代を、友人の平岡にゆずったが、彼女への愛は深まる一方で、三千代の不幸をみかねて、ついに三千代を奪いかえすという、恋愛小説である。鋭敏な感受性と透徹した知性とを持ち、世俗に抵抗して生きる知識人の苦しみを心理的に分析していく。

〔門〕（明治43年3月〜6月、「朝日新聞」）

「門」は「それから」の後日譚である。主人公の宗助は、社会から追われ、過去の罪を背負って、日の射さぬ崖下の借家に、妻のお米とひっそり暮らしている。家主の家でもとお米の夫であった安井の消息を聞き、会うのをおそれた宗助は、思い立って禅寺の門をくぐったが、罪の意識は消えなかった。宗助の罪悪感を除けば、平凡な市井人の生活が淡々とした文章で浮き彫りにされ、典型的な写実小説になっている。

〔行人〕（大正元年12月〜2年11月、「朝日新聞」）

「友達」「兄」「帰ってから」「塵労」の四編からなる。主人公長野一郎は、学者であるが、妻お直との生活はしっくり行かない。妻への不信からくる嫉妬や焦燥から、さらに進んで人間全体の不信に至り深刻な孤独感にさいなまれる。倫理的に過敏すぎる神経と強烈なエゴイズムをもつ知識人の痛ましい姿に、漱石自身の深刻な魂の苦闘が見られる作品。

〔こころ〕（大正3年4月〜8月、「朝日新聞」）

「先生と私」「両親と私」「先生の遺書」の三編からなる。主人公の先生は、叔父に財産を詐取されて他人に愛想をつかし、学生時代、下宿の娘をめぐって親友と争い、恋愛には勝ったが、友人を出しぬいて自殺に追いやり、自分にも絶望して、この罪から逃れようとついに自殺を決意する。エ

ゴイズムによる人間悪と人生苦とを描いた漱石の代表作である。

〔硝子戸の中〕（大正4年1月～2月、「朝日新聞」）

随筆。三九回の内容は、当時の漱石の周辺を書いたもの二四回と、幼時を追憶したもの一五回とに分かれる。周辺のことには、何らかの形で、死の問題を取り扱ったものが一一回の多きを数え、人生の底を流れる寂しさと悲しさとがにじみ出ていて、味わい深い文章となっている。追憶には、母への追慕と敬愛をはじめ、幼い日の夢のような思い出が語られている。

〔道草〕（大正4年6月～9月、「朝日新聞」）

漱石の唯一の自伝小説であり、その素材となっているのは、処女作「吾輩は猫である」を書いた当時の漱石の実生活である。主人公健三、お住の夫婦生活を中心に、養父母、姉夫婦、妻の父等と健三との家族関係が、片づかない運命的なものとして扱われ、知識人の思想と実生活との矛盾、ふるい倫理とエゴイズムの対立、夫婦生活の深淵などの問題が提出されていて、近代の傑作といわれている。

〔明暗〕（大正5年5月～12月、「朝日新聞」）

一八八回まで書かれ、漱石が胃潰瘍で倒れたため絶筆となった。主人公津田、妻お延はいずれも強いエゴイストで、この二人を中心に、人間のエゴイズムの種々相と、現実生活の真実を、完全な虚構の上に築いている。漱石は自分のエゴイズムを客観視し克服する境地を「則天去私」と名づけたが、この作品はその実践として、人間の生活を客観的に眺める一段と高い境地から書かれている。

参考文献

【入門的、総合的なもの】
夏目漱石　稲垣達郎　福村書店
夏目漱石の人と作品　福田清人　学習研究社
夏目漱石　近代文学鑑賞講座　角川書店
夏目漱石　荒　正人　五月書房
評伝夏目漱石　荒　正人　実業之日本社

【伝記的なもの】
夏目漱石　日本文学アルバム　筑摩書房
漱石・人とその文学　松岡　譲　潮文閣
夏目漱石(三冊)　小宮豊隆　岩波書店

【回想的なもの】
漱石の思ひ出(前・後)　夏目鏡子　角川文庫
父・夏目漱石　夏目伸六　角川文庫
猫の墓　夏目伸六　文芸春秋新社
父の法要　夏目伸六　新潮社
漱石氏と私　高浜虚子　アルス社
文章道と漱石先生　森田草平　春陽堂
漱石先生　松岡　譲　岩波書店
漱石襍記(ざつき)　小宮豊隆　角川文庫
漱石・寅彦・三重吉　小宮豊隆　角川文庫
知られざる漱石　小宮豊隆　弘文堂アテネ文庫
漱石山房の記　内田百閒　角川文庫

【思想的・作家論的なもの】
作家以前の漱石　吉田六郎　弘文堂
漱石と鷗外　岡崎義恵　要書房
夏目漱石　唐木順三　修道社
夏目漱石　江藤　淳　講談社
夏目漱石一　瀬沼茂樹　東京大学出版会

【作品論的なもの】
漱石の芸術　小宮豊隆　岩波書店
夏目漱石の作品　片岡良一　厚文堂
漱石文学の背景　板垣直子　鱒書房

年　譜

一八六七（慶応三）一月五日（新暦二月九日）、江戸牛込馬場下横町（現在、新宿区牛込喜久井町一）に、名主夏目小兵衛直克（五三歳）と後妻千枝（四〇歳）の五男末子として生まれ、金之助と名づけられた。生後まもなく、四谷の古道具屋に里子に出され、やがてつれもどされた。

一八六八（明治元）一歳。新宿二丁目に住む名主塩原昌之助（二八歳）の養子となり、同家に引きとられ塩原姓を名のった。

一八七四（明治七）七歳。一二月一日、浅草寿町に公立戸田小学校が開校され、下等小学第八級に入学した。

一八七六（明治九）九歳。養父母の離婚によって、塩原家に在籍のまま生家に帰った。市ケ谷柳町の公立市ケ谷小学校に転校。

一八七八（明治一一）一一歳。二月、「正成論」を書き、友人との回覧雑誌に発表。四月、市ケ谷小学校の上等小学第八級を卒業。一〇月、神田猿楽町の錦華小学校の小学尋常科二級後期を卒業。神田表神保町の一ツ橋尋常中学校（後の府立一中）に入学した。

一八八一（明治一四）一四歳。一月二一日、実母千枝死去。麹町の二松学舎に転校、漢学を学んだ。

一八八三（明治一六）一六歳。九月、大学予備門受験のため、神田駿河台の成立学舎に入学、好きな漢籍を売りはらって、英語を勉強した。

一八六七　大政奉還・王政復古　ノーベル、ダイナマイトを発明

一八六八　明治維新・東京遷都　西欧思想に基づく実学啓蒙思潮が盛ん

一八七四　板垣退助・江藤新平ら民選議院設立建白書を出す

一八七六　熊本神風連の乱・秋月の乱・萩の乱

一八七八　大久保利通暗殺さる　自由民権論おこる　翻訳小説出現、毒婦小説の流行「居酒屋」ゾラ

一八八一　明治二三年を期し国会開設の詔下る　自由党結成

一八八三　政治小説隆盛となる　鹿鳴館開く

一八八四（明治一七）一七歳。小石川極楽水際の新福寺の二階で、同級の橋本左五郎と自炊生活をしながら成立学舎に通った。九月、大学予備門予科に入学。同級に中村是公・芳賀矢一などがいた。入学直後、盲腸炎になった。

一八八五（明治一八）一八歳。このころ、中村是公・橋本左五郎ら約一〇人で、神田猿楽町の下宿末富屋に住んだ。

一八八六（明治一九）一九歳。七月、成績が低下し、腹膜炎をわずらって進級試験が受けられず、原級にとどまった。この落第以後は卒業まで首席を通した。このころ、自活を決意し、中村是公とともに本所の江東義塾の教師となり（月給五円）、その寄宿舎に移った。この年、予備門は第一高等中学校と改称。

一八八八（明治二一）二一歳。一月、夏目家に復籍。七月、第一高等中学校予科を卒業。級友米山保三郎のすすめで、九月、本科英文科に進学。

一八八九（明治二二）二二歳。一月、正岡子規を知った。五月、子規喀血。見舞いの手紙にはじめて俳句二つを記した。また子規の「七艸集」を漢文で批評し、それにはじめて漱石と署名した。八月、学友と房総を旅行、紀行漢詩文「木屑録」を書き子規に送った。

一八九〇（明治二三）二三歳。七月、第一高等中学校本科卒業。九月、帝国大学英文科に入学、文部省貸費生となった。

一八九一（明治二四）二四歳。七月、特待生となった。このころ駿河台の井上眼科で会った女性に初恋を覚えた。一二月、J・M・ディクソン

一八八四　群馬事件をはじめ、自由党の諸事件おこる　森鷗外、横浜を出帆、ドイツ留学の途に上る

一八八五　尾崎紅葉ら硯友社結成「小説神髄」坪内逍遙

一八八六　国学・和歌・演劇の改良主張おこる

一八八七　鹿鳴館舞踏会・欧化主義全盛　写実主義・言文一致の小説出現「浮雲」二葉亭四迷

一八八八　政教社結成「日本人」発刊　国粋主義盛んになる「東京朝日新聞」創刊

一八八九　大日本帝国憲法発布、文相森有礼暗殺さる　紅葉・露伴らの活躍が始まり、擬古典主義時代出現

一八九〇　「舞姫」森鷗外、以後盛んな活動を行なう

一八九一　紅葉・露伴文壇の制圧、逍遙・鷗外の没理想論争始まる

の依頼で「方丈記」を英訳した。

一八九二（明治二五）二五歳。五月、東京専門学校講師となった。夏、子規と京都から堺に遊び、松山の子規の家を訪れ、虚子と知りあった。

一八九三（明治二六）二六歳。一月、帝国大学文学談話会で「英国詩人の天地山川に対する観念」を講演、三月から「哲学雑誌」に発表。七月、大学院入学。一〇月、東京高等師範学校の英語教師となった。

一八九四（明治二七）二七歳。春、肺結核の疑いのため療養し、弓道を習った。一〇月、小石川表町七三の法蔵院に間借りした。一二月、鎌倉円覚寺で座禅した。極度の厭世主義におちいった。

一八九五（明治二八）二八歳。「ジャパン・メール」の記者を志願、不採用に終わった。四月、松山中学校の教諭となって松山に行った。八月、子規が漱石の下宿に二か月滞在した。子規の影響で俳句をさかんに作り、俳壇にもみとめられるようになった。一二月、中根鏡子（貴族院書記官長・中根重一長女）と見合いし、婚約した。

一八九六（明治二九）二九歳。四月、松山中学をやめ、第五高等学校講師となって、熊本に行った。六月、中根鏡子一九歳と結婚。七月、教授になった。九月、鏡子とともに北九州旅行をした。

一八九七（明治三〇）三〇歳。六月、父直克死去。七月、鏡子と上京。年末から正月にかけて、山川信次郎と小天温泉に旅行した。

一八九八（明治三一）三一歳。九月ころから、寺田寅彦ら五高生に俳句を教えた。また鏡子のつわりでみずから神経衰弱に悩まされた。

一八九九（明治三二）三二歳。元旦に、同僚の奥太一郎とともに旅立ち、宇

紅露逍鷗時代を出現

一八九二　「三人妻」尾崎紅葉「罪と罰」内田魯庵訳

一八九三　「文学界」創刊　浪漫主義文学おこる　「獺祭書屋俳話」正岡子規「サロメ」ワイルド

一八九四　日清戦争おこる　北村透谷自殺す　「桐一葉」坪内逍遥

一八九五　日清講和条約・三国干渉　「滝口入道」高山樗牛　「たけくらべ」「にごりえ」樋口一葉　観念小説・深刻小説流行　子規の日本派隆盛

一八九六　「今戸心中」広津柳浪　「照葉狂言」泉鏡花「多情多恨」尾崎紅葉

一八九七　「若菜集」島崎藤村　「金色夜叉」尾崎紅葉

一八九八　最初の政党内閣成立　社会小説出現　「不如帰」徳富蘆花

一八九九　家庭小説流行　写生文出現

佐・耶馬渓に遊び、日田から吉井、追分と徒歩旅行をした。五月、長女筆子出生。九月、山川信次郎と阿蘇山に登った。

一九〇〇（明治三三）三三歳。九月、英語研究のため、ドイツ船プロイセン号で横浜を出帆し、パリを経て、一〇月末ロンドンに到着した。

一九〇一（明治三四）三四歳。一月、次女恒子出生。五月、ベルリンから訪れた科学者・池田菊苗が二か月同宿し、大いに刺激されて「文学論」を書く決意を固め、七月から、下宿にとじこもって勉強した。不自由・孤独感などに苦しみ、神経衰弱におちいった。この年から、英詩を作りはじめた。

一九〇二（明治三五）三五歳。九月、強度の神経衰弱に悩み、他の留学生を通じて発狂のうわさが日本に伝えられた。気分転換のため自転車の稽古をした。一〇月、スコットランドを旅行。一二月、帰国のためロンドンを出発。その直前、子規の死（九月一五日没）を知った。

一九〇三（明治三六）三六歳。一月、帰国。中根家の離れに落ち着き、三月、本郷区駒込千駄木町に移転。四月、第一高等学校講師、東京帝国大学英文科講師に就任。九月、大学で「文学論」の講義をはじめたが評判が悪く、神経衰弱がさらに悪化した。一〇月末、三女栄子出生。水彩画をはじめ、書もよく書いた。

一九〇四（明治三七）三七歳。四月、明治大学講師を兼任。この夏、生まれてまもない黒猫がまぎれこみ、鏡子がかわいがり出した。一二月、高浜虚子にすすめられてはじめて創作の筆をとった。これは「吾輩は猫である」と題して、山会（河東碧梧桐・虚子・阪本四方太ら子

根岸短歌会・新詩社成立し、歌壇の主流となる

一九〇〇　義和団事件に出兵　「明星」創刊　「高野聖」泉鏡花

一九〇一　ニーチェ主義流行　「美的生活を論ず」高山樗牛　新詩社の浪漫主義短歌全盛　「みだれ髪」与謝野晶子　「武蔵野」国木田独歩

一九〇二　日英同盟締結　ゾライズム（前期自然主義）流行　「はやり唄」小杉天外

一九〇三　対露主戦論おこり、一方平民新聞を中心に非戦論思想ひろまる　社会主義文学成立「社会主義詩集」児玉花外「天うつ浪」幸田露伴　一高生藤村操自殺

一九〇四　日露戦争おこる「火の柱」「良人の自白」木下尚江「露骨なる描写」田山花袋「桜の園」チェホフ

規門下の文章会）で虚子に朗読され、好評をえた。

一九〇五（明治三八）三八歳。一月、「吾輩は猫である」が「ホトトギス」に発表され、評判をよんだ。また「倫敦塔」を「帝国文学」に、「カーライル博物館」を「学鐙」に発表。二月、好評にこたえて「吾輩は猫である・続」を「ホトトギス」に発表した。以後四、六、七、九月に続きを連載。四月、「幻影の盾」を「ホトトギス」に、五月、「琴のそら音」を「七人」に発表した。六月、大学での「文学論」の講義を終えた。九月から、「一八世紀英文学」（後の「文学評論」）の講義をはじめた。「一夜」を「中央公論」に発表。一〇月、『吾輩は猫である・上篇』が中村不折のさし絵で服部書店（後に大倉書店）から刊行され、二〇日間で初版は売り切れた。一一月、「薤露行」を「中央公論」に発表。一二月、四女愛子出生。

一九〇六（明治三九）三九歳。一月から、三、四、八月まで「吾輩は猫である」を連載。一月、「趣味の遺伝」を「帝国文学」に、四月、「坊っちゃん」を「ホトトギス」に発表。五月、『漾虚集』を大倉書店から刊行。九月、「草枕」を「新小説」に発表。義父中根重一死去。一〇月、「二百十日」を「中央公論」に発表。一一日（木曜日）以後、鈴木三重吉の提案で木曜日の午後三時以降を面会日と定め、これが「木曜会」の名前でよばれた。一一月、『吾輩は猫である・中篇』を大倉書店から刊行。一二月、本郷区西片町に移転した。

一九〇七（明治四〇）四〇歳。一月、『鶉籠』（「坊っちゃん」「草枕」「二百十日」収録）を春陽堂から刊行。「野分」を「ホトトギス」に発表。

一九〇五　日露講和条約締結　東北地方は七〇年来の大凶作のため大飢饉　島村抱月、イギリス・ドイツから帰朝　「独歩集」国木田独歩　「海潮音」上田敏訳　「二十五絃」薄田泣菫　「春鳥集」蒲原有明　象徴詩流行す　アインシュタイン特殊相対性理論などを発表

一九〇六　坪内逍遥・島村抱月の文芸協会設立　「破戒」島崎藤村　「運命」国木田独歩　「野菊の墓」伊藤左千夫　「千鳥」鈴木三重吉　「其面影」二葉亭四迷　「神秘的半獣主義」岩野泡鳴　自然主義文学が確立

一九〇七　足尾銅山に大ストライキおこる　金融恐慌　第一回文部省

三月一五日、東京朝日新聞社主筆・池辺三山の訪問をうけ、その人柄に感じ朝日新聞に入社を決意、四月入社した（月給二〇〇円）。五月、『文学論』、六月、『吾輩は猫である・下篇』を大倉書店から刊行。六月、長男純一出生。二三日から一〇月二九日まで、「虞美人草」を「東京朝日新聞」に連載した。九月二九日、牛込区早稲田南町七へ転居。以後大正二年まで、神経衰弱はおさまったが、胃病に悩むようになった。

一九〇八（明治四一）四一歳。一月から四月まで、「坑夫」を「朝日新聞」に連載。一月、『虞美人草』を春陽堂から刊行。三月、森田草平の「煤煙」事件で、草平を自宅に引きとった。六月「文鳥」を「大阪朝日新聞」に発表。七月から八月まで、「夢十夜」を「東京朝日新聞」に発表。九月から一二月まで、「三四郎」を「朝日新聞」に連載。九月、『草枕』を春陽堂から刊行。一二月、次男伸六出生。

一九〇九（明治四二）四二歳。一月から三月まで、「永日小品」を「東京朝日新聞」に発表。三月、『文学評論』を春陽堂から刊行。三月から一一月にかけて、養父塩原昌之助からまとまった金を無心された。五月、『三四郎』を春陽堂から刊行。六月、「太陽」の第二回名家投票に文芸家の最高点で当選したが、受賞を断わった。一〇月まで、「それから」を「朝日新聞」に連載した。七月、中村是公（当時満鉄総裁）に会い、満韓旅行に誘われたが、激しい胃カタルに苦しんで出発をのばし、九月二日から一〇月一四日まで、満州・朝鮮を旅行した。一一月、朝日新聞文芸欄が創設され主宰となった。

美術展覧会開催　「婦系図」泉鏡花　「風流懺法」高浜虚子　「南小泉村」真山青果　「蒲団」田山花袋　自然主義に私小説的傾向を与える「平凡」二葉亭四迷「母」ゴーリキー

一九〇八　社会主義団体の赤旗事件勃発「春」島崎藤村「生」田山花袋　「何処へ」正宗白鳥「新世帯」徳田秋声　自然主義隆盛・世紀末的頽唐思潮広がる

一九〇九　二葉亭四迷、インド洋上に客死　伊藤博文、ハルビンで暗殺さる　小山内薫の自由劇場創立　新劇運動盛んになる「スバル」創刊　耽美・享楽文学台頭せんとす　「ヰタ・セクスアリス」森鷗外　「煤煙」森田草平　「田舎教師」田山花袋　「邪宗門」北原白秋

一九一〇（明治四三）四三歳。一月、『それから』を春陽堂から刊行。三月から六月まで、「門」を「朝日新聞」に連載。三月二日、五女ひな子出生。六月、胃潰瘍のため、内幸町の長与胃腸病院に入院、七月三一日退院。八月六日、療養のため修善寺温泉に行ったが、その夜から病状が悪化し、二四日、多量の吐血のため人事不省となり、危篤状態になった。一〇月一一日、帰京、長与病院に再入院（翌年二月まで）。同二九日から翌年二月二〇日まで、「思ひ出す事など」を「朝日新聞」に載せた。

一九一一（明治四四）四四歳。一月、『門』を春陽堂から刊行。二月二〇日、文学博士号授与の通知を受け、辞退したが了承されず、結局物わかれとなった。八月、大阪朝日新聞社主催の講演会のため、明石・和歌山・堺・大阪を歴訪した。この直後、胃潰瘍が再発して、湯川胃腸病院に入院。九月帰京、神田区錦町の佐藤病院で痔を手術、翌年春まで通った。一一月、五女ひな子急死。

一九一二（明治四五・大正元）四五歳。一月から四月まで、「彼岸過迄」を「朝日新聞」に連載した。四月初め、胃の調子が悪く、神経がいらだった。九月、『彼岸過迄』を春陽堂から刊行。九月末、痔の再手術で佐藤病院に入院。一一月ごろから、孤独感が強まった。一二月六日から、「行人」を「朝日新聞」に連載。

一九一三（大正二）四六歳。一月ごろから、強度の神経衰弱が再発。三月末、胃潰瘍のため五月下旬まで病臥し、「行人」は中絶。九月一六日から一一月一五日まで、「行人」の続稿として「塵労」を「朝日新聞」

一九一〇　大逆事件発覚　日韓合併条約調印　「土」長塚節「青年」森鷗外「刺青」谷崎潤一郎「白樺」創刊　新理想主義文学勃興

一九一一　大逆事件判決・幸徳秋水ら死刑　東京・大阪に特高警察　社会主義文学はじめ文学一般への政治的圧力増大す「修禅寺物語」岡本綺堂

一九一二　天皇崩御・明治を大正と改元　米価騰貴・細民窮乏　「悲しき玩具」石川啄木　「悪魔」谷崎潤一郎　白樺派、文壇の中心に進出

一九一三　東京市内暴動・焼打ち　島崎藤村、渡仏　「赤光」斎藤茂吉「阿部一族」森鷗外　都会派